
名も無き小話（掌編／短編集）

ログ核人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名も無き小話（掌編／短編集）

【Zマーク】

N1986E

【作者名】

ログ核人

【あらすじ】

さつくり読める（はず）の、いろいろなお話がある“掌編／短編集。【毎週一話・更新】”

小話・其の壱

某日。

とある用事からの帰路の途中。

空気をジメジメとさせる雨が降り荒ぶ、傘をさしていても服が湿る、そんな苛立たしい気象の夕暮に、

私は一匹のセミと出会った。

正確に言つなれば、出会った、ではなく、発見しただらうか。

そのセミは、雨にうたれて、道路を這いつくばっていた。

死んではいなかつたが、もう死ぬのが秒読みだらうと推測できるほどに、そのセミは弱つていた。にもかかわらず、それは道路を這つていてる。

這つその先には、電信柱があつた。

そのセミは、電信柱を目指しているようである。

昆虫であるセミが、電信柱を目指すのは、木に止まって鳴くという行為を、細胞に埋め込まれた子孫を残すという、自然の法則にしたがつてのことである。所詮、脊髄反射で胴体を動かしているだけの、下等生命。

死にそこないのセミを相手にバカバカしいけれど。

あるいは、雨の日だから、心身ともに濡つぼくなつていたのかもしれないが。

なんでこのセミはこんなに必死なんだろうか、とか考えた。

約七日で死ぬセミである。

寿命がそれであったとしても、鳥に食われたり、人に捕まつたり、色々な理由で、七日間もたたずに死ぬだらう。

田の前で道路に這いつくばるセミは、寿命だらうか、雨に打ち落とされたのだろうか。

しかし、よくよく見れば、そのセミの尻は欠けていた。

鳥についばまれたのだろう。

だが、運がいいのか悪いのか、それ致命傷にならずに、そいつは道路を這いつくばっている。

鳥に食われて死んだ方が、幸せだったんじゃなかろうか、と考えた。

他の生き物に、自らと同じような思考、想い、思い、気持ち、をだぶつかせて、勝手に共感したり感動したりするのは、人の勝手だと思つけれども、しかし私はそのセミを見て思つ

そこまでして、鳴きたいのか。

そこまでして、存在を示したいのか。

どうして、そこまで頑張れるのだろうか。

どうして、そこまで諦めないのだろうか。

と。

尻を欠けさせてまで、身体の中身をはみ出させてまで、どうして電信柱を指すのか。

別にそのセミになにか思考があつて、その行動をしていたとは思わない。所詮、セミはどこままでいっても、セミと言つては昆虫でしかない。

自分が死にそうだという考えすらないだろつ。

死という未来を見るのは、人間の特権だ。サルだって、一日先くらいまでは、未来をイメージすることはできないのだから。だから、昆虫に死という概念は無いだろう。死を知らず、セミは目的の為に、死にそうになりながら地面を這つている。

それが死を知らないセミだとしても、死をイメージできる私から見れば、

そのセミは生きていた。

地べた這いつくばるその行動に、意味があるよつて思えた。
何故だか、自分がそのセミにもなるようと思えた。
何故だか、腹立たしくなつて、歩みを再開させてた。

雨が降っていたのがウソのよつなほど突き抜けた青空。

昨日の道を通った。

あのセミが居た。

アリに解体され、食われていた。

電信柱まで、小指の先っちょほどの距離だった。

私にとつてはどうという事のない距離でも、死にぞこなこのセミには致命的な距離だつたらしい。

このセミは、きっと自分が死んだことにも気づいていないだろ。だが、その屍体はアリの食事という意味を持つている。

昨日は生きていた。

今日は生きている。

今を生きているのか、生かされているのか、わからない自分は、果たして、死んで尚、このセミほど、その死に意味を持たせることが出来るのだろうか……

せめて意味のある死を願うのは、私の業だらうか……

小話・其の弐『ハッピーバーステイ（仮題）』

来る日は、僕の誕生日であった。

校内。図書室にて、なんとなく自らの誕生日を語った僕に、「なら、誕生日祝いに小旅行しないか」

腐れ縁も更に腐った仲の悪友が、唐突な申し出をしてきた。

「行くとして、だ。資金はどうするんだよ」

無料で満喫できる旅行など、今のご時勢、存在するとは思えない。

「そりゃあ、割り勘だろうよ。当然」

「二人で？ 割り勘」

なにが悲しくて、野郎と一人、旅行代金を折半して旅をせねばならんのだ。

「いや、俺だつてお前と二人きりなんて、斬新さのカケラもないからゴメンだ」

しつと真顔でぬかしてくれるが、「僕の誕生日祝いじゃないのかよ」

手段と目的が一致しない発言してくれるよ。まったく。

「ま、適当にメンバー見積もつておく。旅行計画もオレが立てる。お前は金を出すだけでいい。オレからの連絡を待ってるがいいさ。発狂しない程度に胸をドキドキさせてな」

言うと、友人は席をたつた。計画を立てるために旅行代理店を巡るのだという。

僕は、彼に同行するつもりはなかった。

彼ならそれなりに楽しい計画を立ててくれるであろうと確信していたから

そんなわけで僕は、友人が計画してくれた誕生日祝い小旅行へと向かう事になつた。

先に記しておこう。

今回の誕生日。

僕の人生という歴史において、絶対に忘れられないモノになつたと。

そして数日後。

今は移動するワゴン車のなかである。

彼はいつたいなにを考えたのか。僕の誕生日祝いは、人里離れた山岳部にある、天体観測を好む人々しか訪れない、老夫婦が営むと、いう小さな宿にてとり行われることとなつた。

僕を祝ってくれるらしいメンバーは、まあ予想通りに、いつもつるんでいる面々で。 僕を含めた男が三人に、女が一人の、合計五名である。

が、宿まで向かうワゴン車には、僕を含めた四人しか乗車していない。

一人はワゴン車を運転する宿の亭主で、他二名は女友人である。男友人の一人は都合により遅れてくるらしい。で、言いだしつべの男悪友は先行し、宿で祝いの準備をしてくれているそうだ。

いつたいどんな事を考えているのか、男悪友の考えている事は予想できないが、一つだけ彼を賞賛してもよいと思うことがある。

それは僕の隣に座る黒髪の乙女を、この小旅行に呼んでくれたということだ。いま彼女は、後部座席でダルそうに小さく横になつている長い茶髪の女友人へ気遣わしげな視線をくれているが、果たして僕がその眼差しの先に登場できる日はいつになるだろうか。

とか、そんな感じで僕が、黒髪の乙女に見ほれているうちに、気がつけば目的地に到着していた。

宿に到着して、僕は女将さんに案内されるがままに、部屋へ向かつた。

黒髪の乙女は、到着するなり胃の中身をリバースしそうになりお手洗いへと直行した長茶髪の女友人を気にしているようで、様子を

見てくることだつた。

僕も長茶髪の女友人を心配していないわけではないが、移動する車中にて、ガバガバとお酒をあおりまくつてある図を思い返すと、苦笑いを顔面に貼り付けたくなつてしまつ。まあつまり、自業自得だろうと。

「こちらです」

僕が思い返しに苦笑を浮かべていたら、部屋に到着したよつで、女将さんが一室の前で微笑んでいた。

「ご友人さまは、既にご到着されております」

そのご友人さまというのは、言いだしっぺの悪友である。開けてくれた扉とくぐり、ふすまの前へ。あいにくと荷物で両手がふさがっている僕なので、女将さんにふすまを開けてもらひそして僕は、荷物を取り落としてしまつた。

目の前に広がる部屋の、あまりの光景に。

手が、脚が、痙攣した。

心拍が異常をきたし、その心拍に狂わされたがよつに虫のような呼吸が乱れ、胸の辺りがイヤに苦しい。

僕に遅れて部屋の中を見た女将さんも、僕と同じような状態に陥る。

きっと、普通でいられる人間なんて存在しやしない。

それほどに、部屋は奇異で満たされていた。

悪友が、

腐れ縁も更に腐った仲の悪友が、

タタミの上で、大の字に寝転がつていた。

マヌケなほどに眼をむいて、口を半開きにして。

タタミを真っ赤に染め上げて

悪友は、首から血を流して横たわっていた。

反射的に、僕は悪友に駆け寄ろうとしたが、しかしそれは防衛本

能によつてはばかられた。

血を流して死んだように横たわる悪友を見下ろすよつて、その人物がいたからだ。

眼の部位だけ穴を開いた黒い目出し帽で顔を隠し、全身を黒いロングコートでおおつた人物。その黒い皮手袋で隠された右手には、不気味なヌメリをおびたサバイバルナイフが握られている。

僕は心臓をつかまれたような感覚におそわれた。

黒い目出し帽からのぞく狂気に満ちた瞳が、こちらへ向けられている。そして、その人物は動く。決して素早いわけではない。だが、見えない手に捕まっているような僕には、迫り来るソレから逃れ

数瞬の差で、僕は駆け出すことに成功した。

僕は老いた女将さんの背を無理矢理に押し、駆け足を強制しながら、その場から逃げだした。

幸いにして、狂気の人は、走つてこなかつた。しかし確實にこちらへ歩んできている。

逃げなければならない。この場から。この宿から。

僕と女将さんは玄関横にある談話場まで駆けた。

談話場にあるソファーには、長茶髪の女友人がダルそうに座つてゐる。そんな彼女に、宿のじ亭主がお茶を出していた。黒髪の乙女は長茶髪女友人へ薬でもやるつもりなのか、手持ちカバンの内部を探つてゐる。

僕は迫り来る危険を叫ぼうとしたが、あまりの事に気が動転していたのか、狂気に満ちた部屋の方角を指差したまま、息を詰らせてしまつた。

だが、僕の表情が雰囲気が、を読みとつてくれた談話室の面々は、なにかだならぬ事を僕が告げようとしていると理解してくれたようだ、「どう……したの？」

黒髪の乙女はいくぶんか当惑気味に、僕を見上げてきた。いまだ指差し姿勢で口をあうあう動かすだけの僕は、

「 つ！ にっ、逃げろっ！」

ツバを五回ほど飲み下したのに、どうにか言葉を告げる」として成功した。そして黒髪の乙女の手を取り、玄関口へ駆け出すが、黒髪の乙女はその場で踏ん張って、逃走を阻害する。

「ねえ、きゅ、急にどうしたの？ なにかへんだよう

詳しい説明を求める気持ちは、理解できないことはない。だが、今はそのヒマが惜しい。

「いいからっ！ 早く、速くみんな逃げてっ！」

わめき急かす僕を、頭のおかしくなった危ないヤツとでも判断したのか、黒髪の乙女はふるふると首を横に振り拒絶を表現する。真に、危ないヤツがもたらす危機が迫っているというのにっ！

「い、イタイよ

黒髪の乙女は痛みに顔を歪める。僕は苛立ちのあまり、手に必要以上の力を込めてしまっていたようだ。

だが、たとえ黒髪の乙女に嫌われたとしても、僕は手を離すわけにはいかなかつた。

失うくらいなら嫌われるほうが望ましい。当然の選択だろう。僕は三度、逃げるよう叫ぼうと、視線を黒髪の乙女から外したそこに、ヤツが居た。

手にしたサバイバルナイフを振り上げて。

狂気をたたえた眼は、柱にもたれてへたり込んだ女将さんへ向いている。

田出し帽に隠れているハズの口元が、薄笑みを浮かべていると思えてしまつのは、果たして僕の妄想だらうか。

「 つ！ 」

僕は女将さんに危機を伝えよつとしたが

僕は超人ヒーローではない。

救える数には、限りがある。
やれることには限界がある。

僕は最後まで見届けず、目を剥いて驚愕している黒髪の乙女を強引に引っ張り、玄関口へ。

まずは、逃げなければならぬ。

逃げ延びなければならぬ。

靴もはかずに、外へ駆け出した。

背後を振り仰ぐことなく、迅速に脚を駆動させ

その瞬間、聴覚からもたらされた情報が、僕の身体をピタリと起動停止させた。つられるように黒髪の乙女も立ち止まる。

怖くて、宿の方角を見れなかつた。

でも、確かに聞いたきがする。

地獄の底から噴火しているような、壮絶な

しばらく走つた。

その間、僕と黒髪の乙女は、一言も交わさない。そんな精神的余裕は、とうの昔になくしている。

掴んだ手に、ガクンと負荷がかかつた。

見てみると黒髪の乙女が、もう走れないと体で表していた。

そこでやつと、僕は背後を確認する。

ヤツは居なかつた。

どおつと全身から力が抜けた。へなへなと情けなく、僕はその場に尻をつく。黒髪の乙女も、息を切らして倒れこむ。どれほどへたり込んでいたのかは、わからない。

沈黙が場を支配する。だが、静寂はない。山が木々が野生動物が、自然が発する音が、静寂を与えてくれない。

木々の間から、視線のようなものを感じてしまう。
だがそこにいるのは小動物か、幻想か。

その時、壮絶な振動が僕を襲つた。

驚きで人は死ぬ。本気で僕はそう思った。心臓が止まり、息を詰らせ窒息すると、本気で思った。

しかしどうにか僕は死なかつた。呼吸を整え、ポケットに手を突つ込む。そして振動の原因を引っ張り出す。

ケイタイ電話である。

宿へ訪れる途中の車中では、圏外となつていたハズだが？ 疑問に思いつつ、僕は液晶画面を見る。そこには、遅れて到着することになつている男友人の名前があつた。好機だと思った。警察を呼んでもらおうと。異常事態だと、うつたえよう。そう心に決めて、通話ボタンを押す

「あーでたでた。おーい。お前なにしてんだよ。せつかく到着して、さあさあ楽しい宴だと思ったら、本日の主役が居ないつて。お前が居なけりや、ただの飲み会になつちまうじやないか。愛しい乙女と二人つきりになりたい、その気持ちまでは否定しないけどな。しかし俺らのことも頭の隅つこでいいから置いてくれやな。ああー、みんなもうすでに飲み始めちゃつたよ。というわけで早く戻つてこいや」

一方的に喋りまくつたあげく、

「あ、おいつ！」

僕が一言を発す間もなく、彼は通話を切つた。

信じられない。そういながらも、僕はリダイアルボタンを押し

た。

押した、のだが、通話が再開されることはなく。液晶画面を確認すると、そこには

圏外の文字が刻まれていた。

どういうことだ？

僕は不可解に思いながらも、通話相手が男友人であつたことを黒

髪の乙女に告げた。

「う、うそ……。だつて、だつて宿は……」

彼女は困惑したように、あるいは怯えたように、やう口から漏らした。

僕も彼女と同じ気分だった。不気味な怖さを感じている。

何事も無かつたかのように、宿では事が進行している。果たして

本当なのか？

夢を見ていたつもりはない。
どういうことなんだ……。

そして僕と黒髪の乙女は、小さな期待を懐きつつ、来た道を戻ることにした。

飲み会が始まっているなり、喜ばしい。

実際に喜ばしい。

そう思つ脳ミソとは裏腹に、足取りは慎重かつ懷疑的であった。

来た時の百倍は時を費やして、僕たちは宿を視界に捉えた。隠れているようにと、僕は黒髪の乙女に提案したが、一人でいるほうが恐ろしいと彼女はそれを拒んだ。

僕としても、拒んでくれてありがとうといつ心境であった。口でいかに言つたところで、一人では怖い。

玄関口をぐぐると、そこには

なにもなかつた。

変なところは、なにも。

談話場を見やつても、なにもない。長茶髪の女友人も、宿の『亭』主も、女将さんも、誰も居ない。

「ウソだ」

僕は、本来はウソであったことを喜びたいのに、喜べずにいた。

黒髪の乙女も、自らを抱きしめるようにして、理解し難い現状を

必死に飲み込もうとしている。

いや、いやしかし僕は実際に、長茶髪の女友人、宿の「亭主」、女将さん、がどうにかなる光景を目撃したわけではないのだ。過剰な妄想をしていただけかもしない。この三名に関しては、そう思い込むことは可能だ。

だがしかし

「部屋へ行つてみよ!」

あの怪異で満たされた部屋の光景が、僕の過大妄想であつたなんて、そんなわけあるはずがない。あれは、あれは否定したい現実だつた。

僕は黒髪の乙女の手をしっかりと握り、自分が宿泊するハズだった狂氣の部屋へ向かう。

開け放たれているはずの扉は閉まつており、その封印を解くには、ただならぬ覚悟と度胸を必要とし、僕はしばらく扉の前で立ちぬくしどうにか部屋の内部へ侵入し、これも開け放たれているはずのふすまを

開いたそのさきには、キレイな畳を敷き詰めた部屋があつた。

「そんな……」

ありえない目前の光景に、僕は畳に這いつぶばつて悪友の血痕をさがします。

黒髪の乙女は僕の行動を奇怪に思つたのか、なにをしているのか訊ねてきた。

僕はこの部屋で見たことを慎重に語る。

言つて僕は、この理解に苦しむ状況に、発狂寸前だつた。そこを狙つたかのように、振動が僕を現実に引き戻す。圏外であつたはずのケイタイ電話は、再びつながつたらしい。

ポケットから取り出し、液晶画面を見る。

またも男友人からであった。

僕は素早く通話ボタンを押し、

「おいつー、いまどこにいるんだ？」

彼が話し始める前に、一方的に喋りきられる前に、言葉を発した。

「な、なんだよ。いきなり怒鳴るなって」

男友人の声はいくぶん戸惑いを含んでいたが、

「宴会場だよ、宴会場。つたくさ、お前たちが遅いから、みんな顔

を真っ赤にして寝ちまつてるとぞ」

確かに、僕と黒髪の乙女が宿へ戻り来るまでは相当の時間を要したから、あまりお酒に強いとは言いがたい面々を思うと出来上がりてしまつても不思議ではない。が、いまはそんな事はどうでもいい。

「絶対に、電話を切るなよ

伝え、

「なんだよ、そんなに俺の声が聞きたいのか？」

男友人はとぼけつつも通話を切ららずにいる。

僕はケイタイ電話を片手片耳に、もう片方の手は黒髪の乙女としつかりとつなぎ、急ぎ足で部屋から出で、宴会場を田舎した。

この引き戸の奥でみんなが飲み騒いでいる、らしい。

だが、楽しくも騒がしい音は、目の前にいるのに聞こえてこいず。

「本当に宴会場にいるのか？」

僕はまだ通話を続けている男友人に訊いた。

「居なきやどこにいるんだよ、俺は」

彼はなかば呆れともとれる口調でつげてくる。

僕はツバをゴクリと飲み下し、黒髪の乙女へ視線をやり、お互に向きあつてから、引き戸に手をかけ、一気に引いた

そこに、

全身を黒いロングコートと田出し帽で隠した人物が、背を向けて居た。

右手にナイフを、左手は耳にあてている。

僕はその場で固まるしかなかった。

全身黒のヤツが振りかえる。ネバつこく、ゆつくじと、みせつけ
るよつこ。

耳にあててこるのは左手ではなくケイタイ電話のよつだ、といつ
のがわかつた。

「なあ、今も宴会場にいるのか？」

僕はケイタイの向こいづ側にいるはずの男友人に問いかけた。

「ああ、居る」

当然のように彼は返す。

「そつ……か。じつは僕も宴会場に居るんだ」

「ああ、知つてゐる」

田の前の黒ずくめは、ケイタイ電話を捨てた。
ナイフを構えて、こちらへと向かってくる。

「どう、して……。どうしてなんだ……？」

僕は固まつたまま、こまだにケイタイ電話の向こいづ側へ、すがり
つくように訊ねた。

「どうして？ 決まつてるだろつ」

ケイタイ電話の向こいづ側で、彼はことわり陽気に答えてくれる。

「 今日がお前の誕生日だから」

僕は、僕はいつたいなにをしたんだろう。

黒ずくめは、ナイフを構えて、ゆつくつとこひかへと歩んでくる。

僕は必死に過去を検索した。

これを“走馬灯のように”とこうのだろうか？

意図せずに犯す罪ほど恐ろしい。そんな言葉が脳裏をよぎる。

黒ずくめは、目と鼻の先で。

ナイフを握った手が腕が伸びてきて。
すべてがスローモーションに見えた。
僕は、殺されるんだ、と確信した。
ただ気がかりなことがある。

いつたい僕のなにが、彼を狂気にかりたてたのか。
そして願わくば、黒髪の乙女には手を上げないで欲しい。
そんなことを考えながら、僕はあきらめたよう目を閉じた。

死ぬという感覚を、僕は当然のように経験したことがない。だから、死がいかなものなのかわからず、それは案外、苦しみをともなわないのだなと思った。

「誕生日おめでとう」

死した悪友の声が聞こえた。

僕のせいでの殺されたのに、祝ってくれるとは。

腐れ縁も更に腐った仲の悪友 僕は泣きたくなつた。
ありがたく、申し訳なく、僕はどうしたらいいのだろう。
「それで、俺たちからの誕生日プレゼントはどうだったよ」
悪友の声の言つことば、しかしなんのことなのだろうか？

「おい、おーい」

という悪友の声とともに肩を揺らされて、僕は目を開けた。
黒ずくめのヤツが真正面に居た。

「ひつ！」

僕は思わずケイタイ電話を取り落とした。

「おいおい、そんなにビビらなくていいだろ」

悪友の声で、黒ずくめは言った

「はつあ？」

僕はわけがわからずマヌケな声を漏らす。
どういうことだ。どうして……？

「まあ、怖がられないよりはましか」

そう言って、黒ずくめは目出し帽を剥ぎ取った。

そこにあつたのは、部屋で首から血を流して横たわっていた、悪友の顔だった。

その瞬間、乾いた発破音が鳴り、

「「ハッピーバースデー」」

愉快そうな男女の声色と拍手の音が聞こえてきた。

なにが起きているのか。僕は全然わからず立ち尽くす。

「それで、危機的状況において、ご両人の恋の炎は燃えあつたのかな？」

悪友はしばいがかつた動作で言い。

「燃えてくれたら」

「お互いの気持ちに気づかない鈍感への」

「俺たちからの“起爆剤”ってなプレゼントは成功したことになるんだが」

素敵な笑顔を浮かべて、長茶髪女友人、男友人、悪友、が「どうなんだ？」と訊いてくる。

僕は呆けて、黒髪の乙女へ視線をやつた。
彼女も僕と同じようにこちらを見ていた。

数週間後

僕はとある喫茶店でそわそわしていた。

今日、はじめて友人らをともなわずに、一人きりで、黒髪の乙女と会つことになった。

五杯目の紅茶を注文したところで、扉が開く鈴の音か聞こえ、そちらへ視線をやると、彼女が素敵なコーディネイトの服装で居た。

イタズラを真面目に思考する樂しさで心が踊ってしまって思わず笑
みが浮かんだ。

僕と彼女が話すべくことは、実はもう決まっている。

今日は悪友の誕生日なのだ

小話・其の参くみけね』ハント(仮題)』

「三毛猫を狩りにいひみや。三毛猫のオスを返答する言葉を、僕はとつさに考えつかなかつた。

「じゃあ、駅で待つてゐからねん」

そうして通話は切れる。激しく一方的な意思表示を残して。僕はあつ氣にとられて、ワレカンセズとすまし顔な自分のケータイを見つめた。

沈黙を肯定と受け取るのは、横暴だらうと思つたが。

「といひより、なんぞ三毛猫を狩るつ……いや、捕まえよつと思いつくわけ?」

待ち合わせ場所な駅に到着した僕は、そんな当然たる疑問を彼女腐れ縁が更に腐つた仲の友に投げかけた。

ちなみに、僕はヒマな人生を過ごしているわけではない。が、偶然にもその日その時の予定は一切なかつたので、彼女の狂戯言に応える余裕があつた。だから、いま僕はここにいる。

「だつてさあ、三毛猫のオスつてさあ、もつすぐレアリティの高い、もつすぐイイお金になる、金のタマタマなんでしょう?」

公衆の面前で、「金のタマタマ」とか素敵な笑顔で言わないでね。僕が恥ずかしいから。

「珍しいつていう話なら聞くけど、お金になるかは別の話じゃないの?」

僕は、ある種の都市伝説だと思つている。

「えー そうなの?」

彼女はショートカットな黒髪のはしつこを、指先でいじくりながら、口を尖らせる。

「そもそも誰が買つのか。クローン家畜が肉のパックになつて売ら

れるいまだき、二毛猫のオスなんて

「買うひとは……、ネットオークションにかければ世界中に届そ

うだけれどう？」

名案でしょう、ほめてほめて、みたいな顔で見上げてくる彼女の頭頂部に、僕はグーの拳を一発見舞つた。

「いつ！……痛いよ！」

彼女は両手で頭を抱え、身悶える。

「生き物を軽々しくネットオークションにかけるなっ！」

「冗談だよう。じょうだん。そもそもネコはネットオークションにかけられないもん。そんなに怒らないでよう」

頭頂部をさすりながら、潤みの増した目で彼女は言つが、

「冗談でも、考え方が気に喰わない」

「だつて、『買い手は？』って訊くから、仮の答えとして言つてみただけだよう。売るつもりなんて、最初からないもん」

んーまあ、確かに訊いたのは僕だけね。あんまりな答えだったからね、つい。

「ホンモノを触つて見たいと思ったんだよう」

その眼は獲物を求める狩人のごとく。彼女はきょろきょろと周辺に注意深い眼差しを投げながらそういった。

駅から歩いて数分。僕たちは住宅街にやつてきていた。といつても、ただの「近所なわけ」で。日常の見慣れた風景なんだけども。僕が住まつご近所は、都心よりちょっと離れているが、ど田舎といつわけでもなく“ちょいと便利な田舎”と僕は評しているまあ何が言いたいかといふと、飼いも野良も混沌として周辺には多くのネコが住まつているというわけだ。

「その好奇心を否定するつもりはないけれど、思い立つのが唐突だね、ずいぶんと」

言いつつ、僕もテキトウに二毛猫探しの視線を周囲になげやる。

「なに?」とも思ひ立つたが吉田ひでよしよりへ

につ、と満足げな笑みを浮かべていう彼女を見ると、

「ギヤの前半はネコだらけ、きっと

自由気ままといふか、自由奔放といふか、憎めなしやの血口甘やは、天真爛漫なネコと評して間違いない。

なんてことを思つていたらば、ご近所最大の“ねこスポット”に到着していた。

ねこ専用階段

この場所において、最初に眼差しが向かうのはそれである。

「ザ・ボク

て、日向でふてふてしく寝転ぶボロ雑巾のよひな白猫をなでなし
ている。

ちなみに、“ザ・ボス”というのはこの白猫がご近所で呼ばれて
いる愛称で、僕は“化け猫”と評している。ボロ雑巾のほうがまだ

愛嬌ありそつなその見てくれもさることながら、軽く一十年以上その無愛想さを周辺住民にふりまいっているという事実から“化けている”と思って自然だらう。予備知識として、非常にどうでもいいことだが、“ザ・ボス”はこの周辺最強のメス猫であると記しておぐ。

「まあ、ネコだしね」

神出鬼没が、外界で生けるネコという存在だ。こちらの都合など、むこうさんには毛づくろいするヒマほどの興味もないことだらう。「ねえねえ、“ザ・ボス”。知り合いに、三毛猫のオスいない？」サバイバルのし過ぎでふにふに感がまったくない“ザ・ボス”的肉球をいじりながら、彼女はおつかがいをたててみるが、

「…………」

ちらりとバカにするよつた憎たらしい眼差しをくれてから、大あくびをかます。それが“ザ・ボス”的なことだつた。まったく興味がない。か、あるいは煮干しでも持つてこい。どちらにせよ、関心がないということは確実だ。

ネコからのもらいあくびを噛みしめつつ、僕は背筋をのばした。

「なんか眠くなつてきた」

まだ“ザ・ボス”をいじつている彼女を横目に見つつ、帰つて寝でもしたいなあー、と来た道の方角へと視線をやつた

「…………あつ

そこに、さり行く猫の後姿を発見した。そいつは、ピンつと立てた尻尾の根元にご立派なモノをこさえているオスであり、「みみみみつけたつ！」

三毛猫だつた。

「どうしたのう？ 突然みいみい言つて」

なにか触れてはいけないものにふれるような視線を“ザ・ボス”と共にくれる彼女が、ひじょうにもどかしいつ。

「どうしたのう？ ジゃないつ！ 見つけた、発見したんだよ、オスをつ！」

力みすぎでどこかの血管切れたんじゃなかろうか、と不意に自分

の身体が心配になる。

「……えつ？」

言いだしつペのくせにひどく怠慢な動作で、彼女は表情を強張らせた。

「えつ？ じゃない。えつ、じゃ」

というより、もつと喜ほうよ。せめてボロ雑巾風白猫をなでなでしていたときくらいの表情になろうつよ！

なんで僕がジダンダを踏まなければならぬのだろうか。

もう本当に、熱されるのも冷めるのも突然だよね。

煮え切らないといつかなんといふのか、彼女の微妙にノリ気じゃない態度に、僕は両手の指をワナワナさせた。と、気配を察したのオスか三毛猫はこちらを振り返り、ぐだらないモノを見たとでもいふうにブイと首を振ったのち駆けていってしまった。

「ああっ！ 行っちゃう！」

そして僕は彼女の手をとり、三毛猫の後姿を追つて駆け出した

再びオス三毛猫の後姿を発見することなく、田は暮れた。

帰り道。

なぜだか言いだしつペの彼女より熱してしまった僕のほうが、中途半端に後姿を見てしまったがゆえに気持ちが沈んでいた。

にもかかわらず、

「三毛猫には、見事に逃げられちゃったね」

彼女のほうは憎たらしくもある上機嫌である。

「んー」

僕はテキトウに応えておいた。

すると不意に、彼女は僕の首根っこをグワシッと掴み、

「捕まえたっ」

憎めない無邪気な笑顔を向けてきた。

「僕は二毛猫ですか……」

吾輩は猫でなく、

名前もすでにある んですけど。

共通項があるとしたら、性別だけで。

「捕まつたからこな、当分は私の二毛猫でいてもらひからねえっ

いたらの氣などおかまいなし。

自由気まま。

自由奔放。

憎めないその血「」中れせ、またじく天真爛漫なネコそのもの。

「前世はネコだらうね、絶対」

小話・其の四『 - Goodbye - Pooga - (仮題)』

こんな間違っている。

僕は帰り道、いつもそう思つ。

こんな現実、間違つていると。

しかし頭で考えたところで、なにも変わらぬわけがないといつゝ」と
も、同時にわかつてゐる。

「なんだかなあ……」

僕は気晴らしにと空を見上げてみた。

「気がきかない、お空だこと」

見事な曇天だった。僕の気持ちを代弁してくれないと、好意的に受け取ることもできるけれど。

曇天に一つだけイイところがあるとしたら、雲の切れ間から太陽の光が射し込む絵図らが幻想的で、なにかが降臨してくるんじゃなかろうかというファンタジックな思考に浸つて現実から少しのあいだ逃避させてくれるところか。

不意に

幻想的な空に妙なマッチングをした音色が聞こえてきた。

音楽の知識など、なんとなく耳にする程度しかないので、まったく曲目はわからないが、聞いた感じだと音源はバイオリンじゃなかうかと思う。

染み入るような、とでも言つのだらうか。

過度な主張をするわけでもなく、かといって存在感がないというわけでもなく、音色はただ身にスッと入り込んでくる。

その音に魅入られたのかなんなのか、気がつくと僕はこの音色がどこから聞こえてくるのか探していた。

どれほど歩き回ったのか、まったく記憶にないけれど

気づくと僕は公園の入り口に立っていた。

公園といつても簡素な遊具が配置された小規模なモノではなく、散歩やジョギングや日光浴など様々なことができる、緑豊かな広域な自然公園である。

音色は幸いなことにまだ聞こえており、僕はそれを求めて公園内へと歩みを進めた。

キレイに刈り整えられた芝生の広場。その中心にはぼつねんと独り佇む老いた桜の樹が居て、その根元にベンチが一つだけあった。魅惑的な音色は、老桜樹の下から聞こえてきている。僕は吸い寄せられるように、そむらへ向かった。

側へ行くと、ベンチに座るその人は演奏を止めてしまった。

「やあ

その女性は、

「こんちは」

唐突に現れた僕に、柔らかい微笑みをくれた。

僕は軽く首を上下運動させるという無礼にも程がある応えかたをしてしまった。とっさに言葉が出てこなかつたのだ。その包み込むような微笑に魅了されてしまつて。

バイオリン演奏に礼を尽くしているというような漆黒の燕尾服に身を包み、服と同色の黒髪をショートボブにした彼女は、泣きたくなるほどに優しい眼差しをこちらにくれる。

妙な間が生まれてしまつた。ただ単に僕が彼女に見惚れていた、とも言えるが。

「あ、あの、音が、演奏が聞こえてきて、それがとっても聞き心地が好くて、だから気づいたら足が勝手に動いていて、今ここにいるわけで」

普段から緊張しない僕だけれども、なんで今この瞬間に恥ずかしいほどシドロモドロになってしまったかな。

「そう、聞こえたの」

「言い、彼女はバイオリンをしまりてしまつ。」

「え、ええ。けつこう遠くまで聞こえてきました」

彼女は僕が現れたから演奏を止めてしまったのだろうか。応えつつ、僕はとても罪悪感に襲われた。あの音色を止めてしまつことは、とても罪深く思えるのだ。

「あの、もう演奏しないんですか？」

僕は恐るおそる訊ねた。

「うん、今日の演奏はおしまい」

彼女はバイオリンケースを膝の上に乗せる。帰る準備が整つてしまつたらしい。

僕は罪深い者になりたくなかつた。それに遠くからでも音色は聴ける。

「『めんなさい。邪魔してしまいましたよな。僕はもう行へので、このまま演奏してください』」

立ち去りうとする僕を、しかし彼女はあつ氣にうられたような表情で見て、最後に小さくクスリと笑つた。

どうこうことだらう?

「音楽は聴いてもらつて初めて意味を成すモノだから、邪魔なんかでないよ。むしろわざわざ聴きに来てくれてありがとう、と言つたいもの」

「ひりを氣づかうような言葉の後に、彼女はベンチから腰を上げる。立ち去るまで、本当にもう秒読み段階である。僕は焦つた。焦つたけれども、妙案が浮かばない。」

「そんな顔しないでおくれよ。別に、キミが来たからやめた、というわけないのだから。たださつきので、今日の演奏はおしまいといふだけさ」

僕はいつたいどんな顔をしていたのだらう。彼女は困つてこるよ

うな悲しんでいるような微笑の眼差しを浮かべる。

なにやつてゐんだ、僕は。迷惑をかけたくないと思つてゐるのに、元々結果的に彼女を困らせてしまった。

自分勝手にも、僕は情けなくてうつむいた。芝生の刈り目がよく見える。

そよ風が頬を撫でた。

「私は毎日この場所で演奏しているから、縁があつたらまた会おう」と意地悪に、はつとして顔を上げたが、そこに彼女の姿は無く、辺りを見回しても老いた桜の樹しか居なかつた。

翌日

例の如く“間違つて”いる”と思いながら道を歩いていた。大切な人と会つたあと、僕はいつもそう思わずにはいられないのだ。

だがしかし、思いつつも今日の僕は急ぎ足だつた。あの音色が風に乗つてささやかに耳へ届くと、心が踊り

気がつくと僕は、芝生の広場に居た。盲目的思考は驚異的な身体能力を生むことがあるようだ。

音色に誘われ視線をやると、独り佇む老いた桜樹の下は、昨日と違ひ静かなる賑わいを見せていた。

老若男女問わず人々の人々がベンチを囲み、旋律に聞き入つてゐる。当然だろうと思う。こんなに素敵なかつた音色なのだから。

僕も輪に加わり目を閉じて、しばし聞き惚れ

一瞬とも思えるほどに傳ぐ、演奏は終了した。

充実してゐる時ほど、体感時間はあつという間である。

よこんから覚めて、田を開く。と共に聴き入つていった老若男女の姿は幻のように無く、田の前にはバイオリンしまう彼女の姿だけがあつた。

「やあ

彼女は、

「また会つたね」

昨日と変わらぬ柔らかい微笑みをくれた。

「こ、こんにちは」

どもつてしまつたが、今度はまともに挨拶できた。

「あの、他の人たちは？」

この気持ちを共有してみたいと思つたのだが、

「ん？ 満足して逝つてくれたようだよ」

それはちょっと残念だ。聴いて即行去つてしまつとは、個々に事情はあるのだらうが残念でだなう。

「しかしキミには満足してもらえなかつたようだね。申し訳ない」

彼女はすまなそうな顔をするが、とても満足している僕としてはどうしてそんなことを言つのだらうかと、ちょっと腹立たしくさえ思つ。

「そんなことありません。とっても素敵でしたよつ

音楽をどう評価すべきであるのか、まったく知らないので、稚拙な言葉しか出でこないが、とても好い演奏であったことだけは間違いない。

「ありがとう」

彼女は申し訳なさそうなあるには泣いているような表情をする。

どうして彼女はそんな顔をするのだろう。

どうして僕はそんな顔をさせてしまうのだろう。

「今日はまだ時間があるから、少し話をしないかい？」

彼女の提案は唐突だったが、僕にその嬉しい申し出を断る理由はない。

次の日

結局、なにを話したのか憶えていなかつた。
あまりにも舞い上がっていたからなのか、なんなかさだかではないが、思い出せないのだからどうしようもない。

「まあいいか」

と思うことにして、僕は大切な人に会うため、とある場所へ向かつた。

朝は厳肅でありつつも、夜に訪れるときの悪い、あまり頻繁に人が訪れない、とても静かな所。そこが僕が大切な人と会える場所であつた。

僕に限らず、多くの人がココで大切な人と会つていることだろう。長方形に加工された御影石が乱立する 大切な人を寝かせる場所。

簡単な言い方をすれば、ここは墓地である。

僕はいつものように、とある御影石の前へと向かつた。
と、そこには先客がいた。

「どう、して？」

先客は、漆黒の燕尾服に身を包み、黒髪をショートボブにした女性の姿でそこに居た。

当惑して立ち尽くしていると、背後から歩いてきた別の人間が僕を素通りし、とある墓標の前に立つ漆黒の燕尾服に身を包んだ女性へと戸惑い気味に話しかけた。

僕を素通りした人こそ、僕の大切な人だつた。

「彼から貴女への伝言を」

漆黒の燕尾服に身を包んだ女性は、僕の大切な人へと語りかけた。いぶかしむように見聞きしていた僕の大切な人は、ある一線を堺に微笑みながら嗚咽を

本当は、昨日なにを話したのか憶えている。

それがただの愚痴でしかなく、それは同時に認めたくない現実を、否定しながら肯定したことでしかなく、憶えていないのではなく、忘れないだけの

僕は、生きたかったのだ。

大切な人と共に物語を紡ぎたかったのだ。

ただ側にいるというだけの幸福を実感していたかったのだ。

だから、

だからその望すべてを否定する

僕が死んでいる、という事実現実を受け入れたくなかつたのだ。

こんな現実、間違つている。

僕が死んでしまつてゐるなんて、こんな現実……

どうして死んだのか、なんて些細なことはどうでもよかつた。ただ、なにも成す前に死んでしまつたといふことが、悔しくてしかたがなく、なにより最後の最後で大切な人へ別れの挨拶をすらできなかつたことがもどかしかつた。

「それがキミをここに留めている理由だね」

漆黒の燕尾服の彼女が言つた。

「だからキミは毎日、大切な人へ会いに行つて告げようとしているんだね」

でもそれは叶わぬ行為なのだ。

「なら私がキミの口になろう」

漆黒の燕尾服の彼女は、そう約束してくれた。

ほんとうは姿を見てもらい話しをしてもらえるだけでも、嬉しいことであつたのに。

そして彼女は約束を果たしてくれた。

僕は自らの死に納得はしていないが、最後の言葉を伝えることができたとこ「事実には少なからず満足した。でも素朴な疑問があつた。

「あなたは何者なんですか？」

死者と平然と会話する漆黒の燕尾服の彼女はいったい何者なのか、不思議でしかたがなかつた。

「さあ」

彼女は小首をかしげる。

「さあつて、答えになつてないですよ」

「自分が何者なのかなんてわかりはしないよ。ただ私は、私にできうることをしたいと思い、そうしているだけだもの。だからキミの想いはちゃんと伝えたよ」

そして約束は果たされたが、僕にはワガママな一面があるようだとこまさら自覚した。

「最後に、あの音色を聴きたいんです」

そんな僕の願いを、彼女は快く承諾してくれて

そして僕は魅惑的な旋律に聴き惚れながら、

【『 - Goodbye - good - (仮題)』 - 終わり】

「彼から貴女への伝言を」

漆黒の燕尾服に身を包んだ女性は、彼の大切な人へと語りかけた。

「　生きて、幸せになつてほしい」

小話・其の五『想う気持ち』（仮題）』

神とは絶対的な傍観者／観測者であり、あらゆる事柄を静観し続ける無関心な存在である。

ゆえに“救いの神”とは、ヒトの心が産み出す“究極の逃げ道／救い”でしかない。

神は肯定も否定もせず、ただ静観し続ける

とある辺境の村に男と女がいました。

二人は将来を誓つていましたが、時代の流れは時に無情です。
戦争が始まりました。

戦況は過酷を極め、ついに辺境の村にまで徴兵の魔の手がのびました。

男は最前線に送られることになりました。彼と彼女は最後の日に約束を交わしました。

女は自分の父親の形見たる剣を男に手渡し、「これは私にとって大切なものです。必ず、必ず返してください」と聴いた男は一つの花の種を女に手渡し、「この種に花が咲く頃、私は約束を果たそう」と言い、男は戦場へ。

その日から女は毎日欠かさず花に手入れし、そして村の教会へも欠かさず祈りを捧げに足を運びました。

それから幾たびもの季節を越えて

ついに、あの種は花を咲かせました。

しかし、彼は帰ってきませんでした。

それでも彼女は彼を信じ、花の手入れと教会への祈りを続けました。

そしてまた、幾たびもの季節を越えて、あの種は花を咲かせました。

た。

彼女が教会で祈りを捧げている時です。ついに彼は約束を果たしました。

剣を必ず返す

その約束を。

女は三日三晩、教会で涙を流し続けました。
そして、神に問いました。

「何故、何故、あなたは私から大切な人を奪うのですか。父の時も彼の時も……。何故です、何故なのですか？」

神は彼女を不憫に思い、問い合わせました。

「いつの時もお前の大切を奪うのはヒトの手であろう。一度でも我がヒトの大切を奪つたことがあるか？」

「ああ神よ、あなたは偉大にして無情なのですね。私はもう生きてる意味など無いというのに」

「生きる意味など個々の認識でしかないのだがな。しかし、それほどまでにあの男に会いたいというのなら、一度だけ会わせてやろう」
神がいようと、彼女の剣が神々しい光を放ちました。
彼女はあまりの眩しさに眼を瞑ってしまいました。

そして、眼を開けられる程に光が弱まつた時、彼女は希望を見ました。

眼の前に、彼が居たのです。

彼女は思いの限りに彼の胸に飛び込みました。

そして、彼と一つになつたまま、彼女の時は止まりました。

誰かを想つ気持ちは、時に想像を超える強い力をうむ
不可能を可能に変えてしまうほどの
あるいは狂気的な理解し難いほどの

教会の神父が私用から戻つてくると、そこには
祈る姿勢のまま、白銀の装飾剣に胸を貫かれている一人の女が居

りました。

彼女はとてもとても幸せそうな表情で、最後の時を迎えたのでした。

あの戦争から八十年後の春の日の出来事でした。

小話・其の六『待ち惚け（仮題）』

自分の左腕を、そこにある腕時計を凝視する。秒針の動きがこんなにも怠惰だったとは、まったく苛立たしい新発見だわ。

緩慢な時の流れから、忙しないヒトの流れに視線を移す。目標発見と苛立ちまぎれと暇つぶしを兼ねて、人間観察なんてことをやってみる。

普段はあまり引いた視点から観察することのない駅の改札口という所は、改めて見ると、なかなかどうしてバラエティーにとんだ人々で溢れていた。

あきらかにカツラを装着しているだろ？と思われる不自然な髪のサラリーマンに、いつそいきよくバー「コード頭なアロハを着たチヤラいオッサン。

改札にバスモをタッチさせるとせがむ男の子に、バスモを握らせたはいいが、もたつく我が子が為に後ろが詰つて若干焦る母親。

改札になんの恨みがあるのか　IC　カードタッチパネルにカバンを叩きつけている　O　　カバンの底にバスモでも仕込んでいるのかしら？

きつぶ挿入口にバスモを突っ込むと苦戦するおばあちゃんに、その背後で苛立たしげにご老体を睨む学生服　睨むくらいなら助言してあげれば手っ取り早いのに。というか何故にこういう時つて隣の改札へ軌道を変えるという発想が瞬時にできないのだろう。隣はスッカスカなのにおばあちゃんの後だけ渋滞して大人気だ。

すると不人気なお隣の改札を通過しかけていたハードロックというかデスマタルな恰好の若者が、バスモの使い方をサクッとご老体にアドバイスする。おばあちゃんは明らかに若者の外見に引き気味だったが、助言を聞くと、自分の間違いを恥じるような笑みをたくさんの中のシワと一緒に顔へ浮かべてお礼を言い、手提げ袋からラップ

に包まれた紅白まんじゅうを取り出してデスマタな若者に手渡す。デスマタな彼は、見てるところの気分まで清々しくなるような素晴らしい笑顔でそれを受け取った。

ヒトはファーストインプレッショソノ外見で、他人の“ひとりなり”を九割がた決め付けてしまうらしいけれど、やはり人は外見だけで推し測れるほど単純ではないようだ。

見習うべくは見習い、改めるべくは改めよ。

そんな決意表明を、心の中でしてみると不意に、

「おつ……ん？」

視界の隅を、駅という場所において珍しいモノがすまし顔で横切った。

しつぽをピンと天に突き立てて、氣位の高い貴婦人のような足取りで改札口へと向かうのは、

「ねこ？」

それは果たして一匹の薄汚れた白猫だった。

ネコも人間文明の利器たる電車に乗つて遠出したりするものなのだろうか。

といふか、わがもの顔で改札を通過しているけれど、あれで電車に乗り込んだら、

「ねこでも無賃乗車になるのかしら？」

とても気になるところではあるけれど、きっと天上天下唯我独尊なネコ様には人間の法より毛づくろいの方が重要であろう。それとも実はちゃんと切符を買っていたりするのだろうか？

そのへんどうなの、と心の内で訊ねてみる。

すると白猫は改札を過ぎたあたりで立ち止まってこちらを振り返り、鬱陶しいとでも言いたげなぶつちよう面を見せてくれた。

何故だろう、むしょうに白猫の後を追いたくなつてきた。

この胸の高鳴りは、このソワソワした感じは、なにかこう……ジブリアニメ的な面白くて楽しいことに、あの薄汚い白猫が巻き込ん

でくれるような期待感というか予感というか。

つぎに来たか私のところへ！

みたいな根拠もなく意味もわからない、自分で謎なこの感覚は

しかし抑え込み断ち切らねばならない。

約束があるから。

待ち合わせをしているから。

両手を広げて極上の娯楽が私を迎えてくれているといつのに、それを無かつたことになんかければならないとは……

これは私を待たせる罪深き者に罰を下してやらねば

そんなわけで、

「けつ！」

と唾を吐き捨てるように向き直り、駅構内へと去り行く白猫へ、

「よい旅路を」

心の声で別れを告げつつ、私を待たせる愚か者にいつたいどんな刑罰を科してしんぜようかと思案を開始する。

そして暇つぶしにもあきたころ。

ヒトの流れを見やりつつ時風の経過に身をさらしていると、怒りは次第に不安へと形状を変えてゆく。

なにか事故にでも巻き込まれたのではないか、とか縁起でもないことが脳裏を過ぎる。

群集の流れから外れた形容し難い孤独感。

置いていかれるような言いようもない不安感。

その二つは私に、嫌な想像を真実であるかのように語りかけてきて、惑わし

なんかもう泣きそう な状態に私が陥り始めたころ、救いを求めるように改札の向こう側をさまよっていた我が眼差しが、気の抜けた炭酸飲料みたいな存在をとらえた。

向こうも私に気がついて、とけかけたアイスクリームのような緩

い微笑みを浮かべてこちらへと歩んでくる。

不覚にもつられて顔面の筋肉が弛緩してしまった。
いけない。私は速やかに氣を引き締め、怒髪天を突くような表情を作った。

そして目前へと満を持して登場しおつた“頼りない”という単語を寄せ集めて産まれたに違いない私を待たせし罪人へ、

「お・そ・いっ！」

ビシッ！ と心臓を串刺す勢いで人差し指を突きつけてやる。
我が憤怒を目の当たりにした彼は、

「えつ……」

と背後にある駅の据え付け時計を見やり、

「一応、約束の十分前だけど」

ナマイキなことに言い訳なんかしてきた。

「なにが十 分前だけ、よつ！ 私は一時間十六分
腕時計で改めて時分秒の精確さを確認してから、

「二十三秒も立ちっぱなし だつたんだからねつ！」

どれほど重くて深い罪状かを宣告してやる。いろいろな想いを込めた眼光のオマケ付きで。

なにか物申したそう表情で、しかし「それは、申し訳ない」と眉尻をガックリ下げる罪人の腕をとり、

「まったく、本当はおんぶして欲しいくらい脚が棒だよ
歩みを開始しつつ、

「 それでさつ」

と、私を待たせた制裁措置として“質問攻めの刑”を執行することにした。

とくと困り顔を見せるがいい。

「好き」と一言聞かせてくれるまで、やめてあげないから。

小説・其の七『愛國者の喜劇（仮題）』（前書き）

表現の不自由とその結果

小話・其の七『愛國者の喜劇（仮題）』

『愛國者の喜劇（仮題）』

彼は“喜劇の王様”と称されていました。

世の出来事をチクリと風刺して描きながらも、しかし觀たあとには“笑い”的残る。それが彼の“演劇／映画”でした。人々が懐きながらも、外に発することのできない思い。それらの“怒り”を代弁するがごとくユーモアをもつて表現された彼の作品は、人々に称賛絶賛され親しまれ樂していました。

彼は自分が生まれ育った国を、心から愛していました。

そしてだからこそ彼は、時に“祖国／政治／主義／思想”を批判的に描いた作品を発表しました。

あるとや。

彼を訪ねて、国から使者がやってきました。

彼は愛國者であることを“自称／自負”していましたから、発表した作品は“祖国の為に／人々の為に”と考えていました。なので今回、国から使者が訪ねて来たことに喜びを感じていました。自らの活動が、少しばかり認められた、と。

嬉々とした気持ちを押し殺して彼は、国からの使者を迎えるました。さつそく話を始めようとする国からの使者を制止して彼は、祖国に対する敬意を払つて最高の“おもてなし”をしました。

絶妙な温度で淹れた、とつておきのお茶を出しました。

甘すぎない、パサパサしていない、とつておきのシフォンケーキを出しました。

国からの使者は顔をしかめて、それらにまじつさこ口を付けませんでした。

祖国から今後の活力になる言葉を贈つてもらいました。彼はそう考えていました。

想像するだけで、その光榮さに心拍数が上昇します。けれどニヤけた顔で“言葉”を頂戴するわけにはいかないので、彼は一呼吸置いてからぐっと表情を引き締め、心してから、改めて國からの使者に訪問の理由を訊ねました。

そして彼は

反社会的と糾弾され、祖国を追われました。

という自身の半生を、彼は作品として発表しました。
祖国の表現に対する圧力を、たっぷりのユーモアとじょっぴりの皮肉と隠し味の怒りを込めて描きました。

作品は亡命先の国で高く評価され、彼はその国で最高の“名譽／榮誉”ある芸術文化の勲章を授与されました。

人々は彼のことを敬愛の思いを込めて称します。

彼こそが“眞の愛國者／眞の表現者／喜劇の王様”だと。

小話・其の八『意味の価値』(仮題)』

『意味の価値』(仮題)』

ふたりの男が、これから食べる昼食について話し合しながら道を歩いていました。

「オレは今日、ガツンと胃にくる重いヤツを食べたい気分だ」

「……そうか。ボクは、胃にやさしいモノが食べたい気分だ」

「そうか。しかしオレは。おつと……」

「ん? どうした?」

「靴ひもがほどけた」

「そうか」

「結び直すから、ちょっと待ってくれ」

「わかった。…………なあ」

「なんだ?」

「ヒトの一生の中で、靴ひもを結び直す時間ほど、『無意味／無価値

』なモノはないと思わないか

「……まあ、否定はしない。…………けどな」

「けど?」

「おかげで100円を拾った。ほら」

「…………そうか。で、昼食だけど」

小話・其の九へ “あれ” の続き（仮題）』（前書き）

誰もが気になる“あれ”的

小話・其の九『“あれ”の続き（仮題）』

『“あれ”の続き（仮題）』

ひとりの男が、思い詰めた表情で手にあるモノを見つめています。そこには腰から引き抜いたベルトがありました。

彼はそのベルトで適度な長さの“わつか”を作ると、それを部屋のドアのノブに引っ掛けました。そしてあらかじめそうすると決めていた動きで“わつか”に首を通して、ドアを背にするかたちで床に腰を下します。けれど腰はギリギリ床に触れません。ベルトが首に食い込みます。のどが圧されて、声の代わりに空気がか細く漏れました。首の血管が圧迫されてうつ血し、みるみる顔が赤くなっています。

これで“今まで”から解放される。そう考えたとたん、男の脳裏に“今まで”がよぎりました。これが走馬灯か、と彼のどこか冷静な部分が思いました。

しばし走馬灯を見やつていたら、ふと男は、“今まで”として思い出された“あれ”的続きが気になりました。

誰もが気になる“あれ”的続きですから、この男だって続きが気になつて当然です。

男はそのことを考えないように努めましたが、気にしないようにすればするほど、気になる気持ちは強くなつてゆきます。

男は考えました。どうせ終わるのなら、“あれ”的続きを知つてからでも結果は同じではないかと。終わりを少し先延ばしにしても、結果は同じではないかと。

そして彼は、ひとつ結論を出しました。

身をよじって、もがいて、男はドアのノブからベルトを外しました。圧迫から首を解放しました。

深呼吸をし、頭の活動を再開させます。

“あれ”の続きを知るために。

小話・其の壱拾《正義の味方の味方（仮題）》（前書き）

似たもの同士ほどケンカする

小話・其の壱拾『正義の味方の味方（仮題）』

『正義の味方の味方（仮題）』

ひとりの男が、人目を避けるようにひつそりとある墓標の前にたたずんでいました。その身なりは、痛々しいほどボロボロです。服は裂け、髪は乱れ、泥で汚れ、ところどころ流血したり、患部が炭化するほどの火傷を負つたりしていました。

そして彼は力尽きたように崩れ、その場に両膝をつきました。

しばし呆然と、晴れ渡る空を眺め

奥歯を噛みしめて、けれど堪えきれずに嗚咽と涙を流しました。

* * *

そして悪の親玉は倒され、世界は救われました。

正義のヒーローの活躍を、人々は心から称えました。

世界を征服せんとした悪の親玉との戦いが終わり、世界に平和が取り戻され

一台の乗用車が平和を満喫する人々の群れの中へと突っ込み、大爆発を起こしました。

悪の親玉という強大なプレッシャーから解放された、それぞれは小さな、しかし確実に平和を齎かす“小さな火種たち”の、最初の爆発でした。

正義のヒーローの、新たな戦いが始まりました。

幾多の戦場を駆け巡り、勇敢な戦士たちと共に根気強く“小さな火種たち”と戦いました。

そしてついに正義のヒーローは、“平和を齎かす火種”を殲滅しました。

これでやっと本当に、世界に平和が取り戻された。
正義のヒーローは安堵と達成感の現れた晴れやかな笑顔で背後を振り返り、共に戦った勇敢な戦士たちを見やりました。彼らの銃口は、正義のヒーローに向けられていきました。

* * *

ひとりの男が、孤独な男が、ボロボロな男が、世界を救おうとした男が、ひとつの粗末な墓標の前で泣き崩れていきました。

彼が最後に
本音を、
本心を、
遠慮無くぶつけられると思つた相手は、
自らの苦悩と苦痛を理解してくれると思つた相手は、
自らの正義と相対した、自らが葬つた、いまは墓標の、
“世界の敵”だけでした。

小説・其の拾壹』『生まれ変わったら（仮題）』（前書き）

可能性は無限大

小話・其の拾壹 『生まれ変わったら（仮題）』

『生まれ変わったら（仮題）』

ふたりの男が、喫茶店のカフェテラスでお茶を飲んでいました。
ひとりはカッチリとしたスーツ姿で、ひとりはカジュアルなジャケット姿でした。

「いやあ、何年ぶりだけお前と会うの」
「……どれくらいだる」
「お前、この前の同窓会に来てなかつたる？」
「……いろいろ立て込んでたから」
「そうかー、それじゃあしょーがないよな
ふたりはしばし“つもる話”をしました。
そして早々にネタが尽きました。

「なあ

「……ん？」

「お前は、生まれ変わったら“なに”になりたい？」

「……」

「なんだよ、ヒトに訊くなり自分から先に言えってか？」

「……」

「睨むなよ。眼力あり過ぎだよ、お前」

「……」

「わかったよ、先に言つよ。だから怒るなよ

「……いや、べつに怒つてないけど」

「そうか？…………まあ、いいや。オレが生まれ変わったらなりたいモノだけどな

「……」

「…………とこつわけだ。なかなか口アソブティックだろ？」

「……そうだね」

「で、お前はどうなん?」

「…………べつに、生まれ変わりたいとは思わない。…………こんな壁

だらけの人生、辛すぎて一度も体験したくない」

「なんだよお前…………、暗いなあ。夢を持とうぜっ!」

「…………いや、夢なら持ってるよ。…………ただ、来世に持ち越す予定がないってだけ」

小説・其の発表《氣にしなければ氣にならない》(仮題)》(前書き)

やうである」とが“当たり前”は眞田

小話・其の拾弐『氣にしなければ氣にならない』(仮題)』

『氣にしなければ氣にならない』(仮題)』

ふたりの男が、いきつけの薄汚れた定食屋で“いつもの”定食を注文しました。

ひとりの男は、注文の品ができるまで新聞を読むことになりました。

ひとりの男は、注文の品ができるまで

「なあ」

することがなかつたので、対面にある新聞の、たまたま田に付いた一面から思つたことを、その新聞を読んでいる相手に問うてみました。

「んー、なんだ?」

「政治と宗教つてさ、分離されてしかるべきだつて、そんなふうに学校で教えられたよな?」

「んー、まともに授業聞いてた記憶がねえから“教えられた”かどうかはわからねえけど……。まあ、でも、いまのご時勢、だいたいは、政と教は分離されていくべきって言つたな。……てか、それがどうした? メシが待ちきれなさ過ぎて、急に“そっち方面”に目覚めたのか?」

「いや、そういうわけじゃないけど。ただ、その新聞に載つてゐる“ある国の統治者の就任式”的真似、思いつきり“教えの書かれた書物”に手を置いて誓つてるじゃん。統治者に就任するヒト。」「ん? ああ確かに」

「政治と宗教がガツチリ握手してゐるよつて思えるのは、オレだけか?

?」

「……いや、オレにもそつ思える」

「こまの」時勢、よく騒ぎにならなくなつて、ふと思つてさ。

す」く堂々と握手しちゃつてゐる」「

「まあ外国の新聞に載るくらいの堂々さだわな。確かに。
けど、んー、べつに気にしてないんじやない？　“この国／ある国”のヒ
トたち。気にしなければ気にならない。気にならなければ疑問は出
ない。疑問が出なけりや異論も出ない、みたいな？」

「そんなもんなのか？」

「そんなもんなんじやね？　　あ、オレのメシ来た」
「そんなもんか。　　む、オレのメシ……、来ない……」

小説・其の拾参『知らぬが樂し（仮題）』（前書き）

知らないことが“よろしき”ときもある

小話・其の拾参『知らぬが楽し（仮題）』

『知らぬが楽し（仮題）』

ふたりの若い男が、とある駅のホームで電車が来るのを待つていました。

「そーいえば今日さ」

「ん？」

「どーしてオレとお前が仲いいんだって、お前に憧れを懷いてる力ワユイ後輩女子さんたちが、あえてオレに聞こえるヒソヒソ話をしていたぜ」

「それをボクに言われてもね」

「お前みたいな自分に厳しく他人に優しい完璧人間の生徒会長が、なにを間違えたらオレみたいな全力低空飛行の残念野郎とつるむことになるのか、周りは興味津々なんだよ。あわよくば自分が“いまのオレの立ち位置”につ！ て」

「自分に厳しいように見られてるボクの言動は、ただ自分に自信がないから。他人に優しいように見られてるボクの言動は、ただ他人に嫌われたくないから。そしてキミとつるんでいるのは、幼稚園からの腐れ縁だから。……眞実には、しばしば“おもしろさ”が欠けている。そんな憧れと現実の違いを知つてまで、“いまのキミの立ち位置”について思つてくれる奇特なヒトは、そつそつ居ないよ」

「“謎”は“謎”だから“ロマン”てか？」

「キミが素晴らしい友人つてことだよ」

「おおう！ なんか照れるぜ。 けどなあ」

「ん？ なにがあるの？」

「真実のない憧れには“おもしろさ”が溢れまくつてるからしくてさあ……」

「はあ？ それで？」

「漫研の一部のアホが、どうでもいいスマッシュなオレとお前を
ネタにして、『ある愛のカタチ』をマンガで描きやがつたらしくて
な……」

「…………漫研の部費、生徒会長権限で八割カットすることに成りよ
う」

小説・其の拾四『青たぬきね』型ロボット（仮題）』（前書き）

しばしば頭の中のタイムマシンで未来を見る

小話・其の拾四 『青たぬきネコ型ロボット（仮題）』

『青たぬきネコ型ロボット（仮題）』

ふたりの男が、夕焼け空の下の公園の粗末なベンチに腰掛けました。

ひとりの男は、缶ジュークを片手に、その景色を楽しむように夕焼け空を見上げていました。

ひとりの男は、缶コーヒーを片手に、その苦渋に耐えるように地べたを見つめています。

「…………もひ、ダメだ。やっぱりボクには無理だつたんだ。……ボクには、……“夢を現実に変える”才能なんてなかつたんだ。ボクは、もうどうしたら……」

「はあ、まあ、あれだな。いつやうどきつて、決まって“頑張れ”とか言うけど、オレはそもそも“頑張る”って言葉が使うのも使われるのも嫌いだから、オレはお前に“頑張れ”とは言わねえよ？そもそもオレがお前の人生の出来事にアレコレ口出しする理由がねえし。なによりお前の“道／人生”なんだから、お前の足で歩け。もし慰めが欲しいなら、オレ呼び出さねえで、優しい彼女を作るか、お優しいママンに電話すりやいい」

「…………そうだよね。急に呼び出してごめん」

「いいや、いいさ、気にするな。ジュークおじつてもらえだし。オレとしては、損はしてねえ」

「…………そうか、ならよかつた」

「ところでさ、好奇心から訊きてえんだけど」

「…………なんだい？」

「お前は“ドラえもん／希望／夢”と出逢つて、タイムマシンを借りたのか？」

「…………え？」

「だつてさ、まるで未来を見てきたかのよくな言ごぐせだつたじやん。無理だつた。才能なんてなかつた。」へ。なんでお前もうすでに“結果／未来”を知つてゐんだよつて、そりゃあ誰だつて疑問に思つだろ？ そんで未来を見るつつたらタイムマシンだら？ で、タイムマシンひつたらやつぱ“ドラえもん／希望／夢”だろ？」

「ん、んん……わ、……かな？」

「そつれ。お前は“ドラえもん／希望／夢”と出逢つたからいへ、未来を見たんだ」と思つぜ？」

「…………う、だね。確かにボクは、“ドラえもん／希望／夢”と出逢つて、タイムマシンを借りて、そして未来を見たよ」

「それで？」

「それで、つて……」

“ひとつ未来／ひとつの可能性”を見て、それでそれからお前はどうするんだよ？ セツカク“ひとつの未来／ひとつの可能性”が見れたんだぜ？ 未来は過去の“結果／積み重ね”でしかないんだ、ひとつ先が見えてるならそつちに行かねえようにすりやあいいじやねえか。それともなんだ、まさかこのまま自分をかわいそがつて終わるのか？ それじやわざわざ“ドラえもん／希望／夢”にタイムマシン借りた意味がねえぞ？」

「それは、…………それは言つのは簡単だけれど、…………ボクは、…………ボクは、これからどうやって“ドラえもん／希望／夢”と“付き合つて／向き合つて”ゆけばいいんだろ？…………それがよくわからなくて」

“そりやあオレじやなくて”“ドラえもん／希望／夢”との付き合いを熟知してらつしやる“のび太”大先生に訊いてくれよ

「…………はつ、ははは！ 確かにつ、確かにそうだね！」

「お、おおひ……。びつしたんだよ、急に笑つちやつて」

「いや、まさか“のび太”くんに“とても大切な事”を教えてもらうことになるなんて考えもしてなかつたからさつ。……ふ、ははは

つ、いまさら“のび太”くんのストーカを思い知つたよ」

小話・其の拾五『夢見た世界（仮題）』（前書き）

大半のヒトが一度は語る“夢”の

小話・其の拾五『夢見た世界（仮題）』

『夢見た世界（仮題）』

河原の脇の歩道沿いに、西欧風の洒落た造りをした飲食店がありました。よろしいほうに称して“味のある”、よろしくないほうに称して“ボロい”、とても“年月の流れ”を感じる風格のあるお店でした。

このお店には、テラス席がありました。道を挟んで河原のほうに視界が開けていて、とても開放感があります。

ときおり流れるそよ風が心地好い“そこ”には、お客様さんの姿がありました。

ふたりの老人が、真昼間からお酒を飲んでいました。

「いやー、しかし、わたしたちが若かりし頃に夢に見ていた未来の世界が、まさか生きている内に目の前に広がるなんて、人類の進歩に乾杯っ！」

「ははは、確かにそうですな。宇宙ステーションが当たり前のようになに頭上にあつて、宇宙旅行ももつ幾つ寝れば現実になるんですからな、人類の進歩に乾杯っ！」

蒼い空のより高き遙か頭上にある宇宙ステーションへ捧げるように、ふたりは手の内の酒を高々とかかげてから、それをひと息に飲み干します。

「…………“SF”が夢に見た未来の世界は、確かに目の前にあります。宇宙ステーションも頭上にある。宇宙旅行も秒読み段階だ。

しかし私は、乾杯にはまだ程遠いと思いますよ」

酔っ払って楽しくなってしまっている老人たちの隣の席で辛抱強く、「コーヒーを味わいつつ、“イマヌエル・カント”の著書を読書をしていた青年が、思うところある顔つきで言いました。

「なんと！ これほどまで進歩して、まだなにか実現していないこ

とがありましたかね？」

「いやはや、そんなモノがありましたかな？」

老人たちは酒の酔いが醒めない程度に驚きを表し、そして酒の肴になりそうな青年に、話の先をうながす“興味深げな眼差し”を向けています。

「世界の大半の人々が夢に描いている未来が、まだあるじゃないですか」

呆れているような、失望しているような、哀れんでいるような、批難しているような表情で、青年は言いました。

「はて？」

「さて？」

老人たちは顔を見合わせ、首を傾げます。

「本当に、おわかりになりませんか？」

とても重大な問題に直面しているヒトの表情で青年は、慎重に“そのこと”を確認しました。

「いやー、ついに頭にガタがきてしまったようで。まったく思い当たりません。これは是非とも、この老いぼれに教えていただきたい」「いやはや、お恥ずかしい。同じく、是非に教えていただきたい」余裕のある年長者の笑みを浮かべて、老人たちは隣の席の“若者”に教えを乞いました。

「……………そうですか」

と返してから青年は、コーヒーを一口。そしてそれを味わう一呼吸を置いてから、言いました。

「…………世界の大半の人々が夢に描いている未来。この一点に限つて私は、人類の進歩はとても遅いと思っています」

「ほう、それは？」

「いつたい？」

青年の“語り”を盛り上げるかのように、老人たちは大仰に“好奇心”を示しました。

そんな老人たちを見やりつつ、青年はとても平坦な口調で“その

「こと”を教えました。

「誰もが飲み食いに困らない、武器兵器の存在しない、平和な世界ですよ」

* * *

“なるほどこの保証は、永遠平和の到来を（理論的に）予言するのに十分な確実さはもたないけれども、しかし実践的見地では十分な確実さをもち、この（たんに空想的でない）目的にむかって努力することをわれわれに義務づけるのである。”

イマヌエル・カント著　『永遠平和のために』

について より抜粋

* * *

第一補説 永遠平和の保証

老人たちは“重大なこと”に気がついたがごとく、すっかり酔いの醒めた表情になつて言いました。

「……あなたの言つとおりだ。わたしたちは、“甘い夢”を追いかけるあまり、“そのこと”を失念してしまつていた……」

「……確かに、そうですな。“甘い夢”ばかりを追いかけて、“苦さをともなう夢”は積極的に追いかけていなかつた。いや、“甘い夢”的“甘さ”を堪能するあまり、“そのこと”それ自体を忘れていた……」

老人たちは“責任ある年長者”的顔で、恥じ入るよつて、恥じを承知の上で、青年に訊きました。

「是非ともこの老いぼれに、“その夢”を叶えるための取り組みかたを教えていただきたい」

「同じく。どうか是非とも、教えていただきたい」
老人たちの熱心な眼差しに、

「……」

しかし青年は“答え”を持つておらず。
追い詰められたヒトの表情で青年は、読みかけの“イマヌエル・
カント”の著書を開いて、必死に“答え”を

小説・其の拾六『よくある出来事（仮題）』（前書き）

時にナビもは策略家

小話・其の拾六 『よくある出来事（仮題）』

『よくある出来事（仮題）』

しばしばおとぎ話で見受けられる“幸せに暮らしました”という
終わりは、しかし現実には起こりえない。

* * *

経済バランスが崩れ、国が食料を配給する時代。

しかし闇市はどこにでもあるもので。少しばかりのお金を払って
食料を買い、食卓にわざやかな彩り加えることは民衆の常識でした。
これはそんなありふれた闇市での、ビニールでもあつた、ひとつ
のありふれた光景

その女の子の大好きな食べ物は、とっても甘くて美味しいと評
判の“ミルクチョコレートノ板チョコ”でした。なので“それ”を
発見したとたん、彼女は発作的に、

「おかーさんっ！ これかってっ！」

けれど母親は、

「はいはい、また今度ねー」

いつものことなので軽くあしらいます。

この時分、“お菓子ノ甘味”は、手は届くけれど少々高級なモノ
になっていたので、誕生日や風邪を引いたなどの“特別な理由”が
ないかぎり購入しないのが一般庶民の感覚でした。

「こんどつて、いつ？ あした？」

母親の服の袖をぐいぐい引っ張り、

「ねえねえ、いつなの？」

明確な情報を得んとする女の子に、

「はいはい」

母親は、いつものように答えました。

「また今度ねー」

後日。

いつものように母娘は、闇市に買い物に来ました。そしていつものように女の子は“チヨ「買つて」”発作を起こし、そしていつものように母親は軽くあしらいました。

けれどいつもと違つたが、なんの前触れもなく起きました。

政府の取り締まりの手が、この闇市にも伸びてきたのです。

銃火器で武装した憲兵隊が、次々と闇市の商人たちを拘束してゆきます。売られているモノを、国旗の名の下に没収してゆきます。ある商人が抵抗をこころみました。しかし訓練された兵士に敵うはずもなく。すぐに商人は身動きを封じられてしまいました。

そして見せしめのように、抵抗するかどうか知らしめるように、ひとりの憲兵が、身動きのとれない商人に暴力を振るいました。それを目にした人々は恐怖に囚われ、反射的に目をそむけました。とばっちりを受けないように、努めて他人であるとしました。

同時に。

人々は憤懣に囚われ、決意するように奥歯を喰いしばりました。たくさんの沈黙が、無意識の中に“きっかけ”を欲しました。

そして。

どこからか飛来した小石が、ひとりの憲兵の肩に命中しました。そして当然のように、その小石は地面に落ちました。たくさんの沈黙の中にあつてその小石の発した音は、とても“明瞭／明確”人々の“耳／感情”へと届きました。

それが、合図になりました。

異常な熱が、一帯を支配しました。

異常な連帶感が、一帯を支配しました。

怒れる人々は波となって、憲兵隊を押し流すようになりました。

女の子と母親もそのうねりに巻き込まれ、強制的に波の一部となつて流れ進んでゆきます。母親は娘の身の危険を感じ、その手を離さないよう強く握り、どうにか波の外へ脱け出そうと試みました。しかしつないだ手は人々のうねりによつて両断されてしまします。母親は必死に娘の手をつかもうとしますが、その意に反してうねりによつて波の外へと押し流されました。

母親は人々をかきわけて娘を探し出そうとしますが、怒りに囚われた人々に彼女の意が伝わるはずもなく、邪魔者を排除するように波の外へと押し戻されてしまいます。彼女は娘の名を呼びました。何度も何度も、声帯が壊れるほどに叫びました。どこか遠くでそれに応えるような声が シュプレヒコールの中に消えてゆきました。

個人の事情などおかまいなしに、人々の波は流れてゆき

い今までの出来事が目覚めの悪い夢であつたかのように、殺伐とした静けさが辺りに訪れました。

そして母親は、道ばたの“ある一点”を注視したまま静止しました。

「……」

頬をなでるそよ風に乗つて、彼方から人々の感情の波の音が聞こえてきました。これが現実であることを告げるかのように。そう意地悪く、耳元でささやくかのように。

その“ある一点”へと向かう母親の最初の一歩は、恐れているような、怯えているような、とても小さな一步でした。二歩、三歩と行くにしたがつて、しかしその足どりは速く荒々しくなつてゆきます。それと同調するように、表情もひつ迫したモノへと変化してゆ

きます。

そして彼女は半狂乱の勢いで“ある一点”へと到り 地べたに力無く横たわる愛娘のもとへと到り、糸の切れた操り人形の「」とくそその場に崩れ落ちます。

だらりと脱力しきつたその身を抱き起こして、その顔にかかつた髪を優しくはらい、母親は娘の名前を呼びました。朝なかなか布団から出ようとしない彼女を起こすときの、柔らかく優しい声色で呼びかけました。呼びかけ続けました。

「…………」

溢れ出る涙で、母親は娘の顔をうまく見ることができなくなりました。物言わぬ愛娘を、言葉なく抱きしました。

脳裏に、あらゆる場面での愛娘との“やりとり／思い出”がよぎりました。それは後悔とも同じでした。

それでもつとも新しい“やりとり／思い出”が脳裏に映し出され、「こんな、こんなことになるなら……」

ひとつ後の悔が、

「好きなだけ、好きなだけチヨン買つてあげるからっー」

母親の口から溢れ出てきました。

「…………お願いよ、…………返事してよ、…………チヨン買つてあげるから、…………ねえ？」

「やくそくだよ？」

「…………へ？」

母親は、我が耳を疑いました。

「チヨン買つてくれるの、ぜつたいのぜつたいのぜえつたいにだからその声のするほうを、彼女は田を凝らして見やりました。

「やくそくだからねっ！ おかーさんっー」

けれど涙で視界がぼやけてしまつて、うまく見れませんでした。

しかし母親の顔に、もう悲愴な色はありませんでした。変わりに

あるいは、歡喜と安堵の混在する“我が子を叱る母親の表情”でした。

彼女はひとりの母親として、涙越しに田が合っている愛娘を、イタズラを思って通り成功させたふうな喜び色の表情の愛娘を

“わい、”と心から抱きしめました。

愛娘の生きごみ温もりをたっぷりと実感して、やつと落ち着きを取り戻した母親は、

「まつたくもうつー、どひしてこんなことするの?ー。」

ひしゃつと娘を叱りました。

「 つー！」

チョコを好きなだけ買つてもいいえる。そのことで頭がいつぱいになつていた女の子は、こまわつさまでと一転して出現した“ねいつてるおかーさん”にビックリと田を見開いて、

「うー」

けれどすぐ、

「だ、だつて」

どうして怒られているのか、

「チョコ、たべたかつたんだもん.....」

田の前にある“おこつてるおかーさん”的、“泣き過ぎて／嘆き過ぎて”涙と鼻水とでぐちやぐちやに汚れた怒り顔を改めて直視して、

「うー、おかーさん」

あがんど、正しく理解しました。

「うー、めんなさい」

そして母娘は、どちらともなく手を取り合って、

「今田は、もつ帰ろつか」

「 かえるー」

家路につきました。

人々の波にのみこまれて早々に女の子は、波に参加していた顔見知りの商人らによつて発見、保護され、波の外の安全な場所まで避難させてもらつていました。なので母親の心配をよそに、騒動が治まるまでヒマになつた彼女は、いまもつとも熱い問題である“どうしたらチョコを買つてもらえるか”について、ずっと脳内戦略会議を開いていました。

そしてそこから導き出された結果が、やれほびの いわゆる“死んだふり”でした。

そんな“事ここに到るまで”的話を娘から聴いた母親は、まづ、顔見知りの商人らに心から感謝しました。もし彼らが娘を保護してくれていなかつたら。あるいはこうして娘を叱ることは一度となかつたかもしれない。それを思つと

「……？」

つないだ手を、さうと改めて握つてきた母親を、
「どーしたの？ もう一回？」

女の子は不思議そうに見上げました。

「…………？」

娘の声に“もしも／想像”から“いま／現実”に引き戻された母親は、もの問ひげにこちらを見やる娘と手をつないでいる“いま／現実”に、そして手と手でつながつている愛娘に、柔らかく微笑み、「なんでもないわ」

どこか嬉しそうに答えました。

それからしばし無言のまま歩みは進み

「誰かを悲しませるようなウソは、もう絶対にダメだからね？ いい？ わかった？」

やんわりとした口調で、母親は改めて娘に言い聞かせました。

「…………うん」

女の子は反省しているのか、しょんぼりしたふうに小さく首肯し

ました。

それを見て、しかし母親もまた、ひとつ反省をしました。チョコを欲しがる娘に、まったく買う予定などないのに、「また今度」と言っていたことをです。それが言い易い言葉だつたから、この場面では“当たり前”的な言葉だつたから、その意をあまり意識していませんでしたが、しかしこれもひとつは“誰かを悲しませるウソ”であることに、母親にとつて都合のいい“言葉ノウソ”であつたことに、いまさらながら気がついたのです。

親が言つ“また今度”が、いつたい“いつ”なのか、むかしは自分も納得し切れない不満の混在する疑問を懷いていたはずなのに……。

「…………」

子の親としてそれが正しい姿勢であるのか、彼女には判断し切れませんでしたが、

「ちょっと寄り道してこつか？」

しょんぼり気味な娘に、ひとつ提案をしてみました。

「…………？ どこいくの？」

いきなりのことに対する理解が追いついていないのか、ポカンとした表情で訊いてくる娘に、

「ん？ ふふふ

彼女はニヤリとして答えました。

「チョコを買いに

夢を現実に変えられるのが子どものスゴイところだとしたら、ウソを本当に変えられるのが大人のズルイところだつたりします。

「しつかり“ズルさ／大人”を体得しちゃつて……、私も“お年頃”かしら……」

念願の“ミルクチョコレート／板チョコ”を前に興奮気味な娘の背を見やりながら、ふと母親は思いました。

そんな母親の愁いとも似た心情など、

「むー」

まったく感知することなく、女の子は規則正しく陳列された“ミルクチョコレート／板チョコ”を熱く凝視していました。

「むむー」

眼差しの熱でチョコがとけてしまつのでは、と思ふるほどに、

「むむむー」

それはそれは熱い凝視でした。

「 っ！」

瞬間、ある域に達した武芸者の「」とモ氣迫を発して女の子が動きました。

「これにするーっ！」

そう言つてかかげられた彼女の手には、いつの間にか一枚の“ミルクチョコレート／板チョコ”がありました。

これにするもなにも、工場で作られた既製品なんだからどれも同じでしょう。 と母親は思いつつ、しかしあまりにも真剣に「いちばんおつきいのにするー！」と息巻いてチョコを厳選する娘の姿には、意図せずして口元に柔らかな微笑みがあつたりしました。

「はんぶんーーー」

家路の途中にある河川敷の、散歩道に等間隔で設置されたベンチのひとつに母娘の姿がありました。

「あら」

いわく“いちばんおつきい”厳選されたチョコを、しかし迷いなく真つ二つに割つて、喜色満面その半分を差し出す娘に、

「もうつちやつといいの？」

次はいつ買うともわからないチョコですから、母親はあえて訊き返しました。

「うんっ」

と晴れやかな笑顔で答える娘の、その心意気だけでもうすでに腹いっぱいな母親は、

「全部、食べちゃつていこのよ?..」

と返しました。

そんな母親の“優しさ”に、しかし女の子は「むつ」としたふつに眉根を寄せて、

「はんぶんこおー..」

半分のチョコを頑と突きつけ、ふくつとほっぺを膨らませます。それがあまりにも可愛くて愛おしく、思わず母親は、わいと娘を抱きしめたい衝動に駆られましたが、

「……そお?..」

そこは気持ちを抑え、

「じゃあ、半分もらうわね」

突きつけられた半分のチョコを娘の手から、もう一度受けました。

「ありがとね」

半分のチョコは、愛娘の熱い心意氣でじゅわじゅわくなつていました。

「どーいたしましてつ」

いまさつきの膨れつ面はどけやひ。女の子は嬉しそうに、じぱつと笑顔になつて言いました。

母親はこの光景を、バツチリしつかり脳裏に焼き付けました。“このときのこと”は確実に、“女の子／愛娘”が“お年頃”になつても“昨日のこと”として語られるでしょう。

「……えへつ」

そして改めて女の子は、“自分の食べる半分のチョコ／念願”と向き合つ

嬉々満々な笑みを浮かべます。よほど嬉しいのが、まだそれが口の端から溢れて垂れちやつています。

それに気づいた母親に、

「むぐ」

よだれをハンカチでぬぐわれてから、

「いつただつきまーす」

ついに女の子は、

「はむ、んむんむんむんむふふ
ミルクチョコレートを味わい、

「はむ、んむんむんむふふふ
その美味しさを、

「はむ、んむんむふふふ
はむ、んむんむふふふ

お腹の底から、

「はむ、んむふふふふふ
心の底から、

「ぬふふつ

堪能しました。

「とおーつても、おいしーねー！　おかーさんっ！　

とろけたチコロドロのまわりをテコレーションして女の子は、言いました。

「　ん？」

愛娘に喜びの共感を求められ、そこでやつと母親は、自分がチョコに口を付けていなかつたことに気がつきました。見ていてこっちの頬がゆる～くなる娘の食べっぷりに、ほつこつぎづけだったのです。

「はむ、んむんむんむんむふふ

娘に返答するため、母親は手にある半分のチョコを口に運びました。いつ以来だか思い出せないほどひさしひぶりに、ミルクチョコレートを味わいます。

「はむ、んむんむんむふふ

当人は自覚していませんが、

「ぬふふつ」

そこには“女の子／愛娘”と、

「とつても、とおーつても美味しいわねー！」

まつたぐ“うつぶたつ”な顔がありました。

「むぐつ、むぐむぐ」

娘の口まわりにある甘いトローレーションを、丁寧にハンカチでぬぐつてから、

「さあーてど、そろそろ帰りましょうね。夕食の支度しなきや」

母親は立ち上がり、つなぐための手を娘に差し出します。

「おかーさんつ」

しかし女の子は、その差し出された手をつかむことなく、

「おぐにちに、チョコついてるよー」

母親の口元を、ビツと指差して言いました。

「……ん?」

ちょっと驚いたふうな疑問顔で、母親は指摘された箇所を軽く手で触れてみました。

「あらやだ」

そこには指摘された通り、甘くて美味しい“汚れ”がありました。

「ふいたあげるー」

ハンカチで“汚れ”をぬぐおつとする母親を制して、女の子が言いました。

母親は一瞬、思考の間を置いてから、

「じゃあ、お願ひしちゃおうかしら」

ハンカチを娘に手渡し、その場に膝をついて娘と皿線の高さを合わせます。

「ぐむつ、ぐむぐむ」

口のまわりにある甘い“汚れ”を、愛娘に、豪気にハンカチでぬぐわれてから、

「ありがとね」

母親は「よつ」と気合をひとつ口から発して、立ち上がります。

「じーいたしましつ」

大きな仕事をやり終えた職人のような晴れやかな表情で女の子は言つて、

「おうち、かえるー、おかーさん」

田の高さほどにある母親の手と、自身の手をつないで 小さなあぐいを、ひとつ。

「……歩ける? もんぶする?」

いろいろと“凝縮／濃縮”して起つた今日なので、ついにまぶたが重たくなつてきたと思しき娘に、母親は確かめるよつに詫わました。

女の子はふんぶんと首を横に振り、

「あるく」

眉はキリッと田は半寝といつ愉快な表情で、けれどキッパリ答えました。

「そお? でも、すゞぐ眠たくなつたら言つのよ?」

「うん」

ほどなくして、女の子は睡魔の誘惑に負けました。

「…………チヨコ」

母親の背におぶさりながら、女の子は“まどろみ”の波間で、
「……はんぶんじゅ、……おとーやん、……わすれてたあ
むにやむにや」と思い出したふうに言いました。

「…………あ」

ほとんど寝言な娘の言葉で、母親も夫の存在を思い出しました。そしてうつかり失念していた夫への“わけまえ”についても、考えが至りました。めったなことでは買つことのないチヨコですから、せめて“ひとかけら”くらいは、夫にも“わけまえ”を残しておいてあげるべきだった、と。 いま冷静になつて思えば、の話です

が。

「あの美味しいを味わって冷静でいられるヒトなんて、そもそも居るのかしら？」

誰にでもなく“いいわけ”めいたこと嘘いて、「……夕食は、ちょっと、ちょっとだけ豪華にしよ」

母親は今日の夕食を、チヨコの“ひとかけら”分くらいは豪華にしてあげようと心に決めるのでした。 と言つても、いろいろ起こつて今日は買い物をしていないので、言つてしまえば“ありモノ料理”なのですが、

「久々の本気料理……」

たまに揮う主婦の本気は、とてもあなどれないモノだつたりするのです。見てガツカリ食べて普通な“ありモノ料理”が、見てビックリ食べて笑顔な“豪華料理”に格上がりしてしまつほどに。

「ふふ、腕が武者震いしてくるわ」

* * *

ひとつつの困難を乗り越えて“幸せに暮らしました”といつ終わりは、現実には起こりえない。しかし、数知れぬ困難の中にあって“それでも幸せに暮らしています”といつ現在は

小説・其の拾七『氣づいた時には、もう遅い（仮題）』（前書き）

ナンセンス

小話・其の拾七『気づいた時には、もう遅い（仮題）』

『気づいた時には、もう遅い（仮題）』

振り向いたらそこに、深淵のじとき闇をたたえる銃口があった。

「え？」

乾いた発破音が、ひとつ

* * *

地上を見下ろす太陽は、ただ殺意を持つて燐々とそこにあり。憎らしいほど、空は晴れ渡っていた。

暑さ以外に意識の向く先のない、枯渴し切った荒野。ただ唯一“なにか”の痕跡を感じえるのは、かるうじて“そう見える”一本の道。

地平の果てから、地平の果てまでを希薄につなぐ、その道に、

「…………」

ひとりの男が、ポツリとたたずんでいた。いまは腕をまくり、胸元のボタンを外している、白のシャツ。使い込まれて味を出しつつある革のベルトに、濃紺のスラックス。本来は足元の品格を演出していたであろう、薄汚れた革の靴。　と荒野よりも都会が適している、居場所を間違えた格好をしている。

「…………」

滴るという表現では不十分な、溺れそなと表したほうが的確と思われるほどに、男は汗だくだった。　が着用している衣服には、汗による湿り気はとしてなかつた。殺意ある日光が、ただちに水分を蒸発させ、衣服が湿ることをよしとしないのである。

「…………」

しかし男は、太陽の殺意など感知していないふうであった。ただ

静かに真剣に、自らの手の内にある“モノ”を凝視している。

読み潰された、と言えるくらいにシワくちゃでボロボロな、手の平にちよつじよい大きさの、硬い紙で装丁されていない、一冊の書物。それを男は、自身の置かれた環境を認知するより優先して凝視していた。

ふと思い出したふつい、男は口を開いて言った。

「…………」

熱された空気を肺にやり、それを吐き出す勢いで、男は言った。

「…………」

そして、男は、こまから口に出す言葉に必要な分だけ空気を吸い込み、いまから詰つべき言葉を、言つた。

「…………」

ついに、男は、満を持して、その言葉を、言つ

「…………」

「ん？ ああ、なんだ、もつ始まつてたのか

「あれ？ ちよつとちよつと、しかるべきといひに“あるべき描写”が止まつちやつたら、 “詰つべきセリフ” が言えなじやないですか」

「…………」

「セリフだけの話は、小説じゃない つて言われちゃいますよ？ いいんですか？ ねえ？」

「…………」

「そりゃあ、こっちも、書物に氣をやりすぎて、話が始まっているのに気づくの遅れましたよ。だから非がない、とは言いません。けど、このままじゃ進展しないでしょ？ もう少し大人になりましょうよ、ね？」

「…………」

「お、その気になりましたか。いや、よかつたよかつた。これで役割をまつとうでき」

乾いた地面に突如として出現した、奈落へと通じる穴に、

「え？」

なんら抗う術もなく、

ええええええええ

落合文庫

大

「五」

渋田山晴風

「その男は、怖氣を感じるキレてしまつたヒトの笑みを浮かべて、「どうだつ！ 思い知つたかつ！ ノノヤロウ！ フハハハ、ヒヒヒ」

とても意地の悪い顔で

作者の思い通りに動かない登場人物なんて要らないんだよー！」パソコンの内側の、“文章作成ソフト内に存在するヒト”に向かつて奇声を上げました。

「ハハハハ、ヒヒヒ」

卷之三

人間工学に基づいて設計された長時間座っても身体を痛めないイスに、深々と身を沈めました。

一
也あ

男の目元には、これでもかっ！といつくらいくつきりハツキリとドス黒いクマがありました。何日もシャワーとシャンプーと疎遠だつたらしい髪の毛は、ギトギトのボサボサです。顔面も、皮脂とアカで汚れています。

端的に述べて、男は疲れていました。そして非常に、追い詰められていきました。“〆切り”という名の終了のお知らせが、終焉の日が、二日後なのです。

男は食べるのに困らない程度には売れている“物書き／小説家”でした。が、しかし現在は、どうにも筆が言つことを聞かない、いわゆるスランプという困難な状況に陥っていました。

この状況を男は、“登場人物の反抗期”と称して けれど、とても四苦八苦していました。登場人物と対話を試みようにも、どうにもうまくいかず。辛抱強く何度も何度も対話を試み続けましたが、やはり進展はなく。当然のように“男／物書き／小説家”も“ヒトの子”ですから、時と共にストレスが蓄積し

「だからって……」

ストレスが耐えうる限界を超えて、ついにブツツンした男は、その勢いで、

「こんな超展開はないよなあ……」

物語の展開にまったく関係なく、突如として場面に“落とし穴”を出現させ、そしてそこに“反抗期の登場人物”を落としました。

「はあ……」

冷静を取り戻して男は、残り時間が少ないということに、「なにやつてるんだよ……、自分……」

と、ふたつの意味で不快な頭を、容赦なくボリボリとかきむしります。

「……はあ。ちょっと休憩しよう」

コーヒー飲んで、気持ちを切り替えよう。両の手で軽く頬を叩いてから、男はイスから立ち上がり、今まで背を向けていたキッチンへ通じる扉の方に

「……え？」

まったく見知らぬ人物が、背景に溶け込むように、恐ろしいほど静かに、寒気を感じるほど無言で、そこに、たたずんでいました。黒の田出し帽からのぞく眼には、深く冷たい笑みがありました。黒の革手袋をはめた手には、右手には、よく斬れそうな大振りのナイフがありました。

そして速やかに、右手のナイフは振るわれました。

* * *

ところどころで“わたし”は、読んでいた本を閉じました。朝の通勤の途中、バスが目的地に到着するまでの車中で、ゆっくり本を読むのが“わたし”的習慣であり樂しみでした。

そんないつもの繰り返しによつて体得した感覚から“わたし”は、もう少しで目的地に到着するだろうと思い、けれど実際、いまどきあたりを走行中なのだろうかと窓の外へ視線をやり

「え？」

そこにあるはずのない、そこにあつていはずがない、大型トラックの顔が、とても間近に、とても致命的な勢いを保つたまま、とてもゆっくりと、けれど確実に、こちらに迫つてくる様子が、そこに、ありました。

* * *

というお話を読んだ“あなた”は、

ました。

小話・其の拾八『いけない連想（仮題）』（前書き）

絶対不可侵の領域、それは“妄想”

小話・其の拾八 『いけない連想（仮題）』

『いけない連想（仮題）』

星々の煌めく空に幻想的な満月が浮かぶ、ある日の夜。

「オレ、ずっとキミと一緒にになりたいと思つてたんだ」

そこに存在感を表す満月を見上げながら、ひとりの男が言いました。

「え？」

男の隣で、同じく満月を見上げていたひとりの女は、一瞬だけ驚いたふうな顔をしてから、けれどすぐに、

「ふふ、奇遇ですね。私も、私も先生と一緒になれたらいいなって思つてたんですよ」

心の底からの気持ちを表すように、とても素敵なお嬢様の微笑みを浮かべて答えました。

そしてふたりは心からの気持ちを確かめ合つように、どちらでもなく身を寄せ合い

満月の夜空の下で、銃器が弾丸を発射したときの乾いた発砲の音が轟きました。等間隔で計三回、それはありました。少々の間を置いてから再び等間隔で計三回、それはありました。

「それでは皆さん、本日のお勤めご苦労さまでした」

カツチリとした黒のスーツ姿の、手に分厚い書類の束を持った、過労気味を思わせる疲れた顔つきの男が言いました。

「お疲れ様でーす」

「お疲れー」

「お疲れ様」

撃ち終えた小銃から弾倉を外し、薬室内に弾が残つていないこと
を確認する作業をおこないながら、それぞれ同じよつた黒のスーツ
姿の三人の男が応えました。

男たちの前方には、折り重なるよつて息絶えた男女の遺体があり
ました。 が、彼らは遺体のことなど気にしたふつもなく、

「このあと、一杯どうです?」

「どーせ、一杯じやすまないでしょー。行きますけどー」

「あはは、確かに。そして同じく、もちろん行きますよ」

とても気楽に、このあととの飲みについて話し合つています。

「いいですねー、私も皆さんと一緒したいですよ」

疲れた顔つきの男が、とても疲れたふうに言いました。

「じゃあ、一緒に行きましょう。知らない仲じゃないんですから」「そうですよー」

「親睦を深めるという意味でも、行きましょうよ」

それぞれ男たちは好意的な意を示しますが、

「ありがたいお言葉ですが、と申しますか、本心としては是非この一
緒したいのですが」

疲れた顔つきの男は、疲れたふうな乾いた笑みを浮かべて、

「このあと書類と一緒に交えなければならぬもので……。はは……。

お誘い頂いたのに申し訳ない」

心の底から残念そうに詫びました。

「ああ、それはそれは」

「ありやりやー」

「お疲れ様です」

いかにもそれらしく、男たちは同情めいた表情を見せました。そ
して残業ある疲れた男にそれぞれ労いの言葉を残して、業務を終え
た男たちは飲み屋へと去つて行きました。

疲れた顔に、疲れた笑みを浮かべて、楽しげに去り行く男たちを
見送り、

「……はあ」

過労気味な男は、夜空に浮かぶ満月を見上げ、

「…………はあ。 つと、よし。お仕事お仕事」

努めて、というよりは無理をして気持ちを切り替えました。

平均的な大人の身長より高く、横幅も長く、積み上げられた土嚢。それを背にするカタチで、先ほどから軽視されている男女の遺体はありました。

疲れたふうな男は、疲れたふうな溜め息を吐きつつ、男女の遺体に歩み寄ります。そして手に持っている書類と、遺体とを、なにか確認するように交互に見やり、

「まつたく」

あきれたふうに、そして溜まつたストレスをぶつけるように吐き捨てながら、胸ポケットから安物のボールペンを取り出し、

「…………はあ」

流れる動作の、けれど雑な筆致で、なにか書類に記入してゆきます。

男の手にある書類には、『違法表現者一覧』と書かれてあります。老若男女を問わず“顔写真／氏名／年齢／職業／備考”が記載されています。

そしてその一覧の中に、いまは遺体の息絶えた男女も記載されていました。

男の項目には、ふたつの名前が書かっていました。本名と、ペンネームです。男は、描くことで表現する漫画家でした。

女の項目には、いわゆる一般人のそれと異なることは書かれてありませんでした。 が、備考のところに“それ”はありました。女は、漫画家である男のアシスタントでした。

差別的、侮蔑的、猥褻的、反社会的な、あるいはそれらを連想させる“書きかた／言葉／表現”的の使用が“規制／禁止”されて久しく、表現に対して強大な権力が抑制なく発揮される世の中で、しきりでも、それらに“表現することで抗い続ける者たち”は確かに存在していました。“好ましくないモノを連想させる”という理

由で“描きかた／言葉／表現”的使用が“規制／禁止”されると、もれなく表現者は“表現者としてのアイデンティティ”を殺される。だからそれに屈するわけにはいかない、と。

遺体となつた男も、そんな“表現することで抗い続ける者たち”的ひとりでした。

遺体となつた女は、そんな男が描いた“マンガ／表現”に魅せられたひとりでした。

「どうしてこの国には、こうも私の仕事を増やす方が多いのだろう……」

書類への記入を終えた疲れた男は、そんなことを口にしつつ、「まあ、でも……」

漫画家とアシスタントの遺体から離れて、先ほど男たちが小銃を射撃していた立ち位置の脇にある“なにかの装置”的操作パネルの前まで移動し、

「おかげで当分は」

慣れた手つきで操作パネルに触れ、

「食べるのに困らず暮らせるのですが」

そして“なにかの装置”を作動させます。

漫画家とアシスタントの遺体があるところの地面にポツカリと、闇黒の穴が出現しました。

漫画家とアシスタントの遺体は、なんら抗うすべもなく闇黒の中へ消えてゆきました。少しの間を置いてから、闇黒の穴も消えました。

「はあ……。もう少し残業手当を厚くしてほしいですね……」

疲れた男は、愚痴をこぼしつつ、残業との戦いの場へと去つて行きました。

なにもなかつたふうを偽装する冷たい静けさが、そこにありました。

* * *

特別な使命感に駆られた者たちは、
究極的な“純白の理想”を追い求めた。
そしてその行為は、
やがて人間性への殺戮を開始した。

小話・其の拾九『ひとつの大極（仮題）』（前書き）

求めあるモノには価値が付く

小話・其の拾九 《ひとつの大極（仮題）》

《ひとつの究極（仮題）》

全国規模どころか全世界規模の、きめ細やかなサービスに定評のある、とあるファストフード店に、

「あ～、腹減ったわ～」

ひとりの男が、そんなことを言いつつ来店しました。自動ドアの開閉に連動して、店員に来客を知らせる機械音が鳴りました。

それを聞いたひとりの店員は、

「…………」

しかし一言も発することなく、そして無表情のまま、レジの前に立ちます。

空腹の男は、メニュー表を眺めつつ、

「じゃあ、まずは」

と“ワンコイン／五百円”のセットメニューを注文しました。

「スマイルサービスセット」を、ひとり

注文を受けた店員は、しかるべきことをレジに打ち込み、

「いらっしゃいませ、お客様」

よく訓練された満面の笑みを浮かべて、

「イートメニュー／飲食のご注文はお決まりですか？」

定評通りのサービスを提供します。

「現在こちらのセットが」

* * *

そして“気配り／親切心／思いやり／まいり／やれこな／は、

靈感とい値値のある商品となつた。

小説・其の弐拾《その如はシテマーロイド（仮題）》（前書き）

【突き詰めれば“それ”になる】

小話・其の貳拾《その名はアンティーロイド（仮題）》

《その名はアンティーロイド（仮題）》

ひとりの男が、苦惱に満ちた表情で、
「なぜだ、なぜだ、なぜだつ！」

頭を抱えていました。

彼は究極の“ロボット／－アンデロイド”を生み出すと日夜研究している、志と熱意のある博士でした。

ヒトのような自律した行動が可能で、なおかつ情報を収集蓄積し成長してゆく頭脳。それが博士たるこの男の求める目標であり課題でした。まさしくヒトの“それ”を解明するに等しい研究開発です。そしてだからこそ彼は、頭を抱えていました。

苦惱の果てに、彼の脳裏に“ひとつ到達点”が鮮明に浮かびました。

彼は研究資金を投入して、しかるべき“モノ”入手し、そしてしかるべき手順を踏んで

ついに、彼の“求める目標／それ”は誕生しました。

彼はただちに研究資金提供者たちを呼び集め、資金提供に感謝の意を表しつつ、

「それでは、ご覧ください。これが私の“アンディー”です！」

誇るように“それ”をお披露目しました。

集められた資金提供者たちは、そろってざわめき、そして言葉を失いました。

その様子を、彼は満足気に眺めました。

ひとりの資金提供者が、

「博士、おめでとうござります」

ふと気が付いたふうに祝いの言葉を述べました。

「かわいい、
“赤ちゃん／お子さん”ですね」

小説・其の武拾壹へ彼方は近く、隣は遠い（仮題）』（前書き）

【選べる繋がりの果て】

小話・其の貳拾壹 〈彼方は近く、隣は遠い（仮題）〉

『彼方は近く、隣は遠い（仮題）』

ひとりの若い女性が、携帯電話を操作しながら歩いていました。海外に居る友人と、他愛無い話をメールでしていました。

ふと、彼女の歩む足が止まりました。その理由を、速やかに友人へメールします。

道ばたに、ひとりの男性が倒れています。苦しそうに、表情を歪めています。額には、脂汗が浮かんでいます。呻きながら、息を荒げています。

突然の事態に、“当惑／困惑”した彼女は、追い詰められたヒトの表情になつて、どうすべきか友人にメールで問いました。

早く速くと“答え／応え”を求め、彼女は携帯電話の画面を凝視します。

永くて短い時を経て、“答え／応え”が届きました。
まずは深呼吸して落ち着こう、と書かれてありました。

そして、“どうしたのか”呼びかけてみるよう書かれてありました。

彼女は友人の言葉通りに、まずは深呼吸をしました。次いで呼びかけようとして、いまさらながらとても重大な問題に気が付きました。

倒れている男性のメールアドレスを、彼女は知りませんでした。

小説・其の弐拾弐『二ノキモノ』(仮題)』(前書き)

【遠くよき近きがよみ】

小話・其の貳拾貳 『ニンキモノ（仮題）』

『ニンキモノ（仮題）』

ふたりの男が、エアコンの効いた部屋で“ガリガリ君／暑い夏の定番の友”を食べながら、気だるげにテレビを見ていました。外は殺人的に暑いです。実際、テレビのニュースは熱中症による死者について連日のように報じています。

「……なあ」

「……ん？ なんだ？」

「お前って“このヒト”的こと、どう思つ？」

ふたりの見やるテレビには、最近人気のアイドルが“視聴者／観覧者”に笑顔をふりまいていました。

「どうつて……。アイドルとか興味ないし……」

「そういや、そうだつたな」

「それにさ」

「ん？」

「みんなに元気になつてほしいとか、笑顔になつてほしいとか、言つてさ　べつに“そのこと”を否定するつもりはないけれど、目の下に疲労のにじみ出たヒトに言われたくないというかさ、ヒトのこと言つまえに、もうちょっと自分を大事にしてから活動しようぜ、つて思う。疲れてるヒトから元気なんて貰えないぜ、つて最近のテレビを見ていて思つわけさ」

「ああ、まあ、そつだなあ。　あつー」

「どした？」

「アタリ出たつ！」

「おおう、それはそれはおめでとつ
「ちょっと交換しに行つてくるぜ」

そう言つて、ひとりの男はアタリを交換しに行きました。殺人的

に暑い、外へ。

「……やつぱり」

部屋に残ったひとりの男が、ぼそりとしました。

“疲れたヒトノテレビの中の人気者”の笑顔を見るより、“ガリガリ君／暑い夏の人気者”のアタリが出るほうが、よっぽど元気が貰える。あ、オレもアタ……リじやないか……、残念……

小話・其の式拾参へ人類共通の伝統（仮題）』（前書き）

【トロ：“侵略者／支配者” 気質を忘れない方々へ】

小話・其の式拾參へ人類共通の伝統（仮題）（）

『人類共通の伝統（仮題）』

ふたりの男が、それぞれの前に置かれたノートパソコンを黙々と操作していました。それぞれのパソコン画面には、それぞれひとりの兵士が見ている、そして直面している、砂塵舞う市街地での壮絶な戦闘の光景が映し出されていました。

「そーいえば」

ひとりの男が、画面から皿をはなすことなく言いました。

「ん？ なんだい？」

ひとりの男は、画面から皿をはなすことなく答えました。

「腹へった」

「ああ、そういういえば、なにも食べてなかつたね」

「なんか食いモンねえ？」

「冷蔵庫に牛丼あるよ。……コンビニのやつだけど」

「お、マジ？ 食つていいか？」

「いいもなにも、この状況に備えて昨日買つてきたやつだから」

「おお、気が利くなあ」

「食べるなら、ボクの分もレンジで温めてくれよ」

「おう、わかつた」

そう言つて、ひとりの男は退席しました。

そして。

温めた牛丼を、右と左の手に持つて戻つてきます。右にあるやつを相手の前に置き、左にあるやつを自分の前に置き、「いっただっさまーす」

嬉々として割り箸を割り、またに食ひおうかといつその瞬間

「そーいえば」

と声をかけられましたが、男は流れる動作でタレの染みた牛肉と玉ねぎどんを口に運びます。

「牛丼で思い出したんだけれど」

声をかけた男は、

「スペインで闘牛が禁止されたよね」

相手の聞く態度を気にすることなく言いました。

「へえー、スペインといったら闘牛ってイメージだったから、それはずいぶんと意外な話だな」

タレの染みた牛肉と玉ねぎどんのハーモニーを味わつてから、男は言いました。

「まあ正確には、スペイン北東部のカタルーニャ州の州法で、つていうだけで国としてではないけどね。本土以外の島の一部では、以前から禁止しているところもあるようだし」

「カタルーニャ州つてバルセロナがあるところが……。てか、なんで禁止になつたんだ?」

「動物虐待だつていう批判と、闘牛それ自体の人気の低落。あと、政治的なお話が背景にあるとかないとか」

「ふーん」

男は思つところあるヒトの顔で、

「昔からある伝統文化の一部を、残酷と受け取るヒトがいて、なつかつそれが世間に不人気だつたら、速やかに禁止できるつていうならさ」

けれどさして真剣さのあるふうもなく言いました。

「世界にある戦争を、なんで禁止しないんだろうな」

「戦争は、確かに不人気ではあるけれど、伝統文化じゃないよ」

「そうか? すつごい昔から世界中で継承され続いているモノなんだから、ある種の伝統文化だろ」

「まあ、否定はしないけれど……。でも、"禁止すること" それ自体が、戦争の火種になっちゃうと思つよ」

「なんだ?」

「だつて、一方の価値観で“それ”を否定して禁止するつてことは、相手の価値観を否定して、否定する側の価値観を相手に強要することになる。 戦争の侵略と似てると思わない？」

「他の価値観の“伝統文化／戦争”に、他の価値観が首突つ込むことが、そもそも“侵略／火種”だつて？」

「似てるんじゃないかな、つて話だよ。異なる価値観から誕生した伝統文化が背景にある“考え方／正義”を、異なる価値観から誕生した伝統文化が背景にある“考え方／正義”が、相手を理解しようとすると努力もなく一方的に“否定／批判”する行為が、ね」

「ふーむ。……てかわ」

なにか気づいたふうに、男は言いました。

「ボケつて称されるくらい平和な国で、戦争モノのネットゲやりなら、牛丼食ってるヤツがする話じやねえ、つてことをいまさら思つんだ」

それを聞いた男は、愉快そうな笑みを浮かべて、

「はは、確かにね」

そう答え、流れる動作でタレの染みた牛肉と玉ねぎといはんを口に運びました。

* * *

残酷性は人間の本性の一部に確實さを持つて共存している。

小説・其の武拾四『ひとつのかへり短い物語（仮題）』（前書き）

【“つづく”で終わる世界ーの物語】

小話・其の武拾四 『ひとつのかべて短い物語（仮題）』

『ひとつの長くて短い物語（仮題）』

【注：この物語を読む前に】

まず、深呼吸をしましょ。う。

次に、胸に手をあててみましょ。

そしてゆっくりと目をつむって、いまこの瞬間に至るまでの“自分／思い出／過去”を思い起こしてみましょ。

思い起こせましたか？

昨日の夜になにを食べたか、答えられますか？

そうですか。

それでは準備万端のよつですでの、ひとつやつひとつ物語をお楽しみください。

『ひとつの長くて短い物語（仮題）』

とても唐突で恐縮ですが、あなたは“作家”です。この物語の。そういう呪いだと思ってください。すみません。

でも呪いは解けません。てへ

…………すみません。“めんなさい。

でも呪いは解けませ

* * *

“「この書き手と、物語を信用しない」

そして、何よりも、読み手としてのあなた自身の感覚を信用した方がいい。この物語は、それにふさわしいものを与えてくれる。”

『マルドゥック・スクランブル The Second Combustion 燃焼』

著　冲方 丁

S F

評論家 鏡 明 による“解説”より抜粋

* * *

そして、“あなた”は産まれました。ここに至ることを宣言するよつこ、産声を上げました。

【中略／思ひ起したことを書き込んでください】

そし

て、“あなた”はこの話を読みました。

ついで

* * *

参考資料

あなたが誕生した日に、あなたを産んだヒトが、あなたへ贈った、
“長くて短い物語／最初の誕生日プレゼント”の一部。

* * *

誰だつて産まれて“自分”を認識した日から、
とても優秀な作家であり脚本家であり演出家であり役者であり、
とても厳格な読者であり視聴者であり観覧者であり批評家である。

* * *

“事実は小説より奇なり”

イギリスの詩人 ジョージ・ゴードン・バイロンの言葉

小話・其の弐拾五「十人十色（仮題）」（前書き）

【個々ではわかりあえるのに集団では否定する】

小話・其の貳拾五『十人十色（仮題）』

あなたが望まれて産まれてきたということを、どうか、忘れないでほしい。

* * *

視覚がとらえた情報を、どのように解釈するか。

その判断は、おおむね成長過程で蓄積された知識によるところが大きい。

その花は美しい。

その花はみすぼらしい。

その花は愛らしい。

その花はおぞましい。

その花は

その花は

その花は

などなど。

しかし結局のところ、その“見かた／価値観”は成長過程で蓄積された偏見から導き出される、“ある特定の角度からその花を見る方法”でしかない。

その花を見る角度が少し違うだけで解釈の齟齬は生じ、ときにはそれは暴力的ですらある。

* * *

だから私は、

殺されることを選んだ。

《十人十色（仮題）》

僕と彼女とでは、そもそも住む世界が違っていた。
存在としての経験も思考も 認識のされかたも。
だから、偶然がもたらす出逢いとは面白くも恐ろしいもので、
「目覚めたのなら、はやく自分の居場所へ帰りなさい」
僕は彼女と出合ってしまった。

といつより、目が覚めたらそこに居たのだ。

射し込む陽の光に煌く長い純白の髪が神々しさを演出するなか、
確固たる強い意志を備えた赤い瞳でこちらに向けて、背筋をしゃん
と伸ばし正座して。その姿に僕は思わず見とれて、
「ここは、黄泉の国ですか」
あきらめたように赤い瞳の女性に訊ねた。
しばしの沈黙が場を支配する。 と不意に、彼女は顔をそらし
て口元を右手で覆い隠す。なんだか小刻みに肩が震えているようだ
けれど……。

僕の死を悲しんでくれているのだろうか
「ずいぶんととっぴな、面白いことを言いますね、あなたは」「
と思つたのは自意識過剰だったようだ、
「どうして黄泉の国だなんて思つたんです？」
彼女はどうにか威厳を保とうと堪えているが、顔は笑つてゐる。
べつに僕は笑いを提供したつもりはない。
ただ最後の記憶が、川で溺れて というものだったから、てつ
きりそのまま死んでしまつたのだろうと思つたのだ。それになによ
り、

「貴女のよつと美しいヒトが居るんだ、この世のハズがない」

「うー！」

なにか驚いたふうに田を見開いて、しかしすぐに彼女は、「嬉しいことを言つてくれますね」

またも笑いを堪えているよつと、

「でも、残念ながら」

柔らかい微笑み顔になる。

「ここはこの世で現実ですよ」

現実でこんなにも素晴らしいヒトに出逢えたのだから、残念といつよりむしろ“幸福／幸運”だと思える。釣りをしていて足を滑らせ溺れた自身の不注意さに、感謝してもいい。

手を貸してくれよつとする彼女を、僕はいらぬ意地で制し、上体を起こした。

「どこか痛みますか？」

訊ねてくる彼女に、

「いえ、どこも」

答えつつ、僕は辺りを見回した。

彼女とよつて存在が付加価値として合わさつて初めて“味のある”と言える、くたびれた木材を簡素に組んだだけの、決して広くない建築物の内部のようだ。

ぐるりと室内を一周して彼女に視点を戻す。

吸い込まれるよつな錯覚に陥る、魔的とさえ言える赤い瞳がこちらを捉える。

「問題なく動けるのなら、はやく自分の居場所へ帰りなさい」

彼女は田覚めた時と同じ、

「ここには長居すべきではありません」

突き放す語氣で言つ。

でもどうしてだろう、僕にはそんな彼女が必死に涙を堪えている

ように思えてしまったのは。

しかし情けないかな僕は、簡単な礼を言つて陽の光が射す外へと出るという行動しかできなかつた。

彼女の気迫に圧倒されたと言つてもいい。

ワラを編んだだけの質素な扉をぐぐり外に出て、空を見上げる。陽の位置で、今がまだ正午であるとわかつた。溺れたのに服が乾いているのも、この高い陽のおかげだろう。

心地の好い柔らかく暖かな光を全身いっぱいに浴びて、背伸びをし、ここが何所であるのか知るために空から視線を地上に戻す。まず目にはいるのは、轟々と神々と水の誇らしさを告辞する滝つぼだろうか。決して巨大ではないが、その美しさは果たして純白の長い髪に赤い瞳を持つある女性にひけをとらないものがある。しばしその寛大さと優美さに見惚れ

不意に、頬を撫でてきたそよ風にハッと意識を覚醒させ、葉と葉をこすり合わせてささやかに自己主張する木々の存在を知る。木々が作り出す深い濃緑は深淵にも似た恐ろしさと神秘性を兼ねていて、引き込まれそうなしかし引き込まれたら虜にされて脱け出せなくなつてしまつよう、危うい魅に思わず背筋がゾクリとした。

そこでようやく、ある重要な事に気がつき、

「……」

僕は簡素な扉を再びぐぐる。

彼女は一瞬だけ即行で戻ってきた僕に目を丸くし驚いたが、すぐにいぶかしげな眼差しで抗議してきた。

なにかを言われるより先に、

「ここが何所なのかわからなくて。その……、帰りようが……」

致しかたない事実を告げる。

彼女は目をつむり何かを考え込み、しばしの間をあけてから、

「しかたありません、人里に通ずる道まで案内しましょう」

諦めたようのあるいは決意したような意思を語る赤い瞳の眼差し

を向けてきた。

木々が作り出す深い濃緑の闇の中にあって、圧倒的な純白を備える彼女は、暗黒に射す希望の光のようだ。獣道とすら呼べない雑多な地面を、ただ黙々と踏みしめて道案内役にてつする彼女の背を追いながら、僕はそんな事を思った

と、不意に彼女は立ち止まり、

「ここを道なりに行けば人里に出ます」

指し示すのは、やつと獣道と呼べるような荒々しく踏み固められた森の小さな切れ間である。

これを果たして道と呼んでいいのだろうか。なんてことを僕が考えていたら、彼女は自分の役目は終わつたとばかりに元来た方向へと歩み去ろうとしてしまつ。

僕はどうにか呼び止めて、

「まだなにか？」

と振り向いた彼女を見て、一の句が告げなくなる。

「え、と……その

そして、どうにか全身から言葉を絞り出す。

「また、会えるでしょうか？」

「何故？」

彼女はいぶかしむように小首を傾げる。

……何故つて、なぜだろう。

うーん。ただ会つてもつと話がしてみたいから、というのが僕の本心だろうが、

「その、えつと、ほら、助けてもらつたお礼とかしたいですし」

口から出たのはそんな言葉だった。

「私は何もしていませんよ。あなたがひとりで助かつただけです。ですから助けにお礼がしたいのなら、強い生命力を授けてくださいご両親にするべきですよ」

どこかつっぱねるような彼女の恋えに、

「だとしても、ほら、貴女に出逢わなければ森の中を彷徨つていたかもしれないですし、やっぱり助けてもらつてます」
僕はどうにか食い下がつた。

「そうですか。では、そのお気持ちだけ受け取つておきます」

「言つと彼女は拒絶するよう、元々

「ですから、私のことはお忘れなさい」

深い濃緑の闇の中へと歩んでいつてしまつ。

「……忘れる、だなんて。どうして

僕にはその言葉の真意が理解できなかつた。

ただ去り行く彼女の背中が、ひどく少しく寂しそうに見えてしまつたのは、どうしてだろう……。

水に浸かつても問題のない品として思い浮かんだのは、果物と釣りたての川魚くらいだった。僕はそれらを布袋につめると、昨日足を滑らせて溺れた川に身を投げて意図的に流される。

本当は帰りに通つた獣道から行きたかったのだが、時を経て見ると、いつたいどこが道なのか、まったく見分ける事ができなかつたので、いたしかたなく荒っぽいが確実な手段で彼女の元へと行くことにした。

が、もう少し深く物事を考えておくべきだったなあ、と轟々高らかに咆哮をあげる川の終着点を前にして気づく。

自分で選んだ事だから後悔はしないけれど、時すでに遅しとは思う。

ただ流されるだけの身体が、ジリジリと、しかし確実に川の終わりへと近づいてゆき

いつも清々しく、水しぶきと共に僕は空中へ舞つた。

数瞬の間、だけ面白可笑しい浮遊感を味わい

次瞬、強烈な平手打ちを同時多発的に全身へみまわれたような感覚に襲われ、耳は水を引っ搔き回す忙しい音を聞きつつも、身体はあらゆる方向からの力にもてあそばれ、頭ではどっちが上でどっち

らが下なんかさえわからなくなる。ただ僕に可能なことは、手にした“お礼の品入り布袋”を手放さないよう必死になることだけだった。

日の光に頬が温められてることで気がつくと、波打つ水面に浮かんでいた。

どうやら、溺れ死なずにするんだようだ。

手の内には“お礼の品入り布袋”的感觸もある。とりあえず、結果は良し。

岸に上がり、大の字に寝そべる。濡れた衣類を日光で乾かすためだ。

滝つぼの発する轟々という意外と耳触りの好い音を聞き、ささやかに肌を撫でる風を感じ、太陽の温もりのなかに居たら、意図せずしだいに田蓋が重たくなつてきて……

……草を踏むささやかな音が近づいて来る。どこか曖昧な場所でそのことを知った。

しだいに近く鳴るその音に合わせるが如く、僕はまじりみから現実に引き戻されてゆき

「あなたは、どうじうつもりなのですか」

当惑気味に、しかし責めているような聲音を聞いて急激に意識が覚醒した。

「おはようございます」

挨拶を先に済ませてから、目を開く。視覚が一番に捉えたのは、柳眉を逆立てる彼女のお顔だった。麗美な表情は、ともすれば半ばあきれているようでもある。

「なにが“おはようございます”です。どうじうつもりなのですか」と問うているのですよ

怒りの口調で言いながらも彼女は、僕が身を起こすのに手を差し伸べてくれる。ありがたく、その手を借りて起き上がり、

「ええっと」

頭の回転が決して速いとは言えない僕は、『どうこうつもりなのか』という問いかけに対し、

「その……、助けてもらつたお礼を」と“お礼の品入り布袋”をかかげて見せた。

「……」

彼女は口を真一文字に硬く結んでから、

「私のことは忘れない」と言いましたよ」

圧殺するような重たい口調でとがめてくる。

「確かに言されました。そのこと、よく記憶します」

「では、どうして、いま、あなたは、ここにいるのですか」

彼女は己が心情を言霊にのせるがごとく、語を強調しながら言つ。

「いや、その、一言一句をよく記憶しているからこそ、まったく忘れなくて 貴女のことを」

そのあと僕は、酸欠を起こすのではないかと心配になるくらい長いながい溜め息を吐いた彼女に、睨みとこゝう無言の圧をかけられ帰宅をよぎなくされた。

彼女のくれる鋭い眼光に背中を押されるようにして、件の人里へ通ずる道まで追いやられ、しかし最後の最後に“お礼の品”を手渡すことには成功する。それを彼女が返してくる前に、僕はそそくさと帰路につく。

次の日。

陸路で行こうと思つても、やはり帰りに歩いた獸道は判別することができるず、結果的に昨日と同じ水路で行くことに。

そして出会つた彼女は、一瞬だけ驚くと、速やかに呆れの態に移行し、とつと僕を追い返す。

その次の日。

翌日の映しえのようなやりとりがあり、そして終わる。

またその次の日。
あるいはただの嫌がらせと思われても仕方がない事を僕は繰り返し

日々は巡つて。

彼女の僕に対する呼び方が、距離感のある他人行儀な“あなた”から、少し距離の近い“キミ”に変化したころ。

またも滝から落つこちて現れた僕を発見した彼女は、魅惑的な赤い瞳のある眼球をこぼしそうな程に目を見開くと、これでもかといふくらいの空気を肺に吸い込み
こつたいどこまで続くのか、奈落の底より深々とした溜め息を吐くと、

「キミは……いい加減にしないと、いつか命を失くしてしまいますよ」

「冗談まじりの注意だらうと思ったのだが、しかし言つ彼女の眼差しと表情には、真に迫るような不安めいた色がうかがえた。

そんな事を言われた次の日。

現実として、僕は死にそうな状況に陥つた。

滝を落ちるまではいつも通りだったのだが、滝つぼで渦に揉まれてしまい上下左右の感覚を失い、冗談じゃなく溺れてしまったのだ。濁流の音を最後に、意識は暗黒に包まれ

目を開けると、そこには僕をのぞきこむ彼女の顔があつた。

安心しているような、しかしそれでいて悲しんでいるような、触れたら崩れてしまいそうな儂げな表情で、

「身に染みてわかつたでしょう？　もう私の所へ来るのはおやめな

さい。私にかかると、不幸にしかなれませんよ
赤い瞳でこちらを捉え、真摯な眼差しで、

「私は、疫病神なのですから」

彼女はそう口にした。

反射的に僕は言葉を吐こうとしたのだが、しかしそれは頑強な城壁のごとく総てを隔てる彼女のまとう雰囲気に拒まれてしまう。彼女はすっと立ち上がると、

「……道まで送ります」

ひちらの反応など意とせぬ有無を言わせぬ態度で、簡素な扉の向こう側へと行ってしまった。

僕は慌てて後を追う。

歩む途中で、何度かその背中に声をかけようと試みたのだが、言霊は喉に引っかかったイガのごとく口から出でこない。口腔内に手を突っ込んで強引に引き出したい衝動に駆られるが、しかしそんな事をして、果たしてその言葉は彼女に届くだろうか。

けれど結果的に僕は、彼女の疫病神という言葉の意味を知ることになった。

翌日の早朝　突然に、僕は同じ村に住む男たちに拘束され、理由もわからないままに村長のもとへと強制連行された。

村長は森の精霊たちや神々の声を聞くことのできる特別なヒトで、この村においては絶対の存在だった。

そんな彼いわく。

僕は悪い“あやかし”に魅入られ、そして利用され、この村に“不幸／悪い流れ”を運んできているといつ。

最近、よくない虫が大量発生して農作物が全滅してしまったのも、僕が運んできた“不幸／悪い流れ”によるものだと。

そんなことを早朝、突然に言われても、さっぱり僕の理解は追いつかなかつたが、しかし注意深く村長とその他の者たちの話を聞い

て、次第に自分が置かれている状況がわかつてきた。

どうやら昨日、イノシシ猟に出て森に入っていた者に、運悪く偶然にも、彼女の所から帰る僕の姿を目撃されてしまっていたようだ。そして目撃者たる彼には、純白の髪に赤い瞳を持つ彼女の姿が“恐ろしいモノ／この世ならざるモノ”に映つたらしく。それが村で暮らす者なら誰もが頭の片隅に記憶している、村長が言い伝えるところの、山に住まつ“あやかし”だと思い至つたようだ。

僕が毎日のように川へ流されに行つては、公言せざとも狭い村であるから話は誰にでも伝わつており、それだけでも僕の行動は奇行と思われ奇異の眼差しを向けられていたのに、そこへきて目撃者いわく“恐ろしいモノ／この世ならざるモノ”と一緒に居たそんな姿を目撃されでは、目撃者からの報告を受けた村長が僕を捕らえに来るという現状は不本意ながらに呑み込んだ。

そして同時に、僕の村長に対する認識が一変した。

今まで“そうだ”と教え込まれ教育され育つてきたから、村長は森の精霊や神々の声が聞ける特別なヒトだと“思つてはいた／思い込んでいた／思い込まされていた”が、それがどうだ

僕が悪い“あやかし”に魅入られ、そして利用され、この村に“不幸／悪い流れ”を運んできているだつて？

最近、よくない虫が大量発生して農作物が全滅してしまつたのも、僕が運んできた“不幸／悪い流れ”によるものだつて？

そもそも会つた事もない彼女を悪い“あやかし”だと決め付けて語つている時点で、僕には村長の言葉がとても稚拙な場当たり的で幻想に満ち溢れた妄言にしか聞こえなかつた。

僕が元々、森の精霊や神々の存在を熱心に信奉していなかつたら、余計にそう聞こえたのかもしてないが。

でもだとしても、森の精霊や神々が、彼女を悪だと、果たしてそんなこと言つだらうか？

実際に会つて話して少なからず彼女を知つてはいる僕は、彼女から悪なモノなど感じたことなどないというのに。

この極短い時間の内に、僕の村長に対する“信頼／信用”的念はめつきり失われたが、しかし他の者たちが村長に向ける“信頼／信用”的眼差しは搖ぎ無く、だからこそ村長の下した命に反を唱える者は僕しか居らず、ゆえに僕へ向けられる“奇異の／気持ち悪いものを見る”眼差しは決定的となつた。

村を、村の者たちを、未来を、守るために 不幸をもたらす“あやかし”を退治する。

こんな馬鹿げた、一方的に身勝手な負の責任の押し付け。それに勇んで賛同する村の者たち見て僕は……今まで苦楽を共にして暮らしてきたけれど、申し訳ないけれど、その姿が酷く矮小なモノに思えてしました。

知らないヒトを、知らうともしないで、一方的な偏見の言葉を吟味せずに受け取つて、そこからの想像だけで相手の存在を決め付けるなんて。まさかそんなことをするヒトたちだつたなんて、考えたこともなかつた。

村長の言葉を従つていれば幸せになれると信じて疑わず、意思決定を外部に委ねて、“意志／自己／わたし”が稀薄になつてしまつていても強力で、“集団／集合体”としての規範に外れる個を、その圧倒さで排除しようとする、自らを正義として行動する絶対的盲目心。僕には今まで共に暮らしてきた村の者たちが、矮小であると同時に不気味なうねりをもつた危険なモノに見えた。

けれど僕も、この不気味なうねりの一部だつたのだ。

彼女と出逢うまでは

村長の一方的な話が終わると、僕は両脇を抱えられて外に連れ出された。そして、村の外れに在る、悪さをしでかした厄介者を懲らしめるために存在する牢屋に容れられた。

なにもできないまま時間だけが経過し、格子窓から射し込む光が

夕刻色に染まつたころ。

僕に、思わぬ来客があつた。

背後から見ると一瞬、首がないよう見えてしまつぽだ腰の曲がつた、ボサボサの白髪頭をした老婆である。

最初、誰なのか見当がつかなかつた。

が、ふと、この老婆が誰であるのかを思い出した。

村の外れにある竹林に住む、いわゆる村の偏屈者である。

僕との接点は、まったくない。

なのに、どうしてここに現れたのか？

村長いわく、悪い“あやかし”に魅入られたといつ僕を、冷かしにでも来たのか。

そんなことを考えていたら、牢の前まで来た老婆がフトコロからなにやら取り出して

牢の施錠がはずされた。

いまいち状況がのみこめず呆ける僕に、老婆は無言のまま手招きをし、踵を返して歩み始める。

「…………」

数泊の間を置いてから、

「ま、待ってください」

理解が現状に追いつき、僕は慌てて老婆の背を追つた。

牢のある小屋から外に出ると、出入り口の所で、ふたりの男が地位に寝そべり騒々しいイビキをかいて眠つていた。この村で牢屋番をしているヒトを僕は知らないので、きっとこのふたりは貧乏くじを引いてしまつた間に合わせの牢屋番だらう。まあ、すでに役割は放棄しているようだが。

「さしこの酒に、いっぷく盛つてやつたのさ

鼻先でせせら笑うよつて言つて、老婆は歩みを止めることなく先へ行く。

なかなかどうして僕には度胸が足りず、

「……あの」

だからその間に疑問を投げかけるまで、たっぷりの時を要してしまった。

「どうして僕を、牢から出してくれたんですか？」

その問いかけに、老婆は歩みを止める。しかし、なかなか言葉は返つてこない。

その間を埋めるように、川の流れる力強い音が耳に流れ込んでくる。

そこで疑問のことから少しだけ意識がそれで、いま自分がどうに居るのかを知つた。いつの間にか、彼女の所へ行くのに使つていた川の、橋の上まで来ていたようだ。

「お前さんに」

老婆は振り返り、懇願するヒトの表情で僕を見やりながら、

「救つてもらいたいの！」

心の底から発せられた言霊特有の、深く重みのある音声で言つてきた。

「……救つ？」

老婆が「冗談を言つているわけではない」といふことは、その雰囲気から十分に察することができるのだが、しかしながら「そ僕には、その言葉の意図が正しく理解できなかつた。

こまかつきまで接点のなかつた僕に、そんなことを頼む理由が見当たらない。

それにどう考へても、牢屋から出してもらった僕のほうが救われている。

どうこいつとなのか、もう少し具体的に説明してもいいと、問い合わせの言葉を口にじょうどとした次瞬、

「あの子を」

鬼気迫る勢いで老婆は僕の腕をつかみ、

「あの子を」

「

言葉に込めた想いと比例するが」とぐ、そこにある老体からは想像もつかない強い力で腕をしめつけてきた。

「どうか、救つておくれ」

ひとまず状況整理も兼ねて、老婆の話を聴いた。
老婆の、決して愉快ではない事情を知った。

だから僕は

川に飛び込み流される。

いまさらながらに、彼女の所へ向かう方法をこれしか知らないことに気がついた。

* * *

老婆は自身が、彼女の祖母であることを明かしてくれた。
そして老婆の背負う罪の、告白を聽かされた。

彼女の家族でありながら、その当時は村長の言葉を信じて疑わず、
彼女と彼女の父母を村から追い出すことに抗うことなく、むしろ率先してそのことを推し進めたことを。なにより村の内部の自分の居場所を保守するために、そのことを推し進めたということを。

自分の居場所を確保するために行動することが、それが家族を見捨てるに至ることだとしても、そのことそれ 자체の善し悪しに関して、いまの僕は意見する言葉を思いつけなかった。自らが属する内部から疎外される“恐ろしさにも似た形容し難い気持ち”は、牢屋に容れられるに至る先刻、少なからず経験していたから。

困難な状況に追いやることとは、できる。

それが自分の認知できつる範囲内の、ひとつ出来事だとしても。
けれど死へ追いやることは、できない。

それが自分の認知できつる範囲内の、ひとつ出来事であるがゆえに。

それは家族であるからこそ、あつたからこそ、ひとつひとつの非情さの、ひとつのカタチ。

だから老婆は、僕を牢屋から出した。かつて困難に追いやった家族を、迫る死から救わせるために。

けれどこの際、老婆の事情はとても些細なモノでしかない。老婆の語ったことで、僕にとってもっとも重要で有益だった情報は、この老婆が彼女の祖母であるということだ。

やつぱり彼女は、村長がうそばく“あやかし”なんかじやなかつた。

彼女も、僕と変わりない“ヒトの子”なのだ。

やつぱり彼女は、彼女が自称する“疫病神”なんかじやなかつた。彼女は、僕と同じ村出身の“ヒトの子”なのだ。

しかし、この村にあるべき彼女の居場所は一方的で身勝手な偏見ある理由によって奪われ、存在していない。

* * *

「.....」

彼女は無言のまま、滝つぼからはじ上がる僕に手を貸してくれる。「ありがとう……」じぞこます……

地べたに両手をついて呼吸を整えながら、見上げるかたちで彼女の様子をうかがう。

そこには、とてもあきれているふうな表情があった。

「 」

なにか言おうとした言葉をのみ込み、彼女は溜め息を吐きつつ首を横に振り、

「……道まで送ります」

そう言つて先へ行こうとする。

僕は反射的にその手をつかんで、その歩みを阻止した。

「…………」

美しく幻惑的な赤い瞳の訝る眼差しが、僕を見る。

「いえ……、あの、その――」

こまかつき滝つぼからはじ上がるまでの出来事を、僕は言葉を選びつつ簡潔に話した。

「だから言つたでしよう」

つかむ僕の手をほどいて、彼女は滝つぼの水面へと視線を移し、

「私は、疫病神なのです」

なにか諦めてしまったヒトの表情になつて言つ。それは僕にではなく、自身の内側から内側へ向けて言つているように思えた。

「……父さんも、……母さんも、……私と関わったヒトは、みんな、みんな不幸になつてしまつ」

そして彼女は、どこか間違つた決意を秘めた顔になる。

言葉を発すことなく小屋の中へと消えていった彼女は、しかしすぐに戻ってきた。

その手に、よく使い込まれて刃の短くなつた包丁を持って。

これから夕食の準備をする　という雰囲気ではなく。

なので現状における包丁の用途を考えていたら、

「……私を」

彼女は切つ先が自身に向ひ、逆手に持つた包丁を、僕の方に差し出し、

「……お願い、私を殺して」

まったく理解できないことを申し出だしてきた。

「なにを、こんなときにはんな冗談は

「冗談じゃない」

「

とても切実な、とても鋭い眼差しで、彼女は口から言の葉を発する。

「私を殺して、“私／あやかし”を“殺して／退治して”、キミは潔白を証明するの」

反射的に僕は、彼女の頬を叩きそうになつた。けれど、

「ただ生きて。キミに、生きていてほしい

言の葉を発する彼女の、

「だから……、私を殺して……」

けれど口から出でてくる“それ”とはチグハグな、

「キミは生きて

「お願い

その赤い瞳の奥にある“彼女”の存在に気づいたことで、

頬を叩こうとした僕の手は、向かう先を失つた。
だから僕は、

「…………わかりました」

その手を差し出した。

彼女から、包丁を受け取るため。

* * *

自分達と違う、髪の色をしているから。
自分達と違う、瞳の色をしているから。
自分達の基準から、外れているから。

私を見た誰もが、私を“自分達の基準から外れている不気味な、
この世ならざる者”として拒絶する。

そして“そんなモノ”的親であつたがゆえに、父さんと母さんは
村から外に追いやられてしまつた。私が追いやつた。“私”という
誕生が追いやつた。

「一つのこと産まれてすぐに、この世から私を消し去ってくれればよかつたのに。そう思つたけれど、それができなかつた理由も、風に乗つて流れてきた話で知つていた。

村の人々は“自分達の基準から外れている不気味な、この世ならざる者”を殺したら生ずると信じて疑わない“厄ノ禍”が恐ろしくて、だからこそ私を生かして両親と共に村の外に追いやつた、と。誕生しただけで自分の両親に不幸をもたらす、もたらした。だから私は自分の、この白い髪も、この赤い瞳も、好きじゃなかつた。

好きになれる理由がなかつた。

けれどキミは、こんな私のことを拒絶することなく接してくれた。嬉しかつた。自分でも驚くほど、嬉しかつた。

そしてキミはこんな私のことを、美しいと、そう言つてくれた。

自分の耳を疑うほど嬉しくて、嬉しすぎて、キミと面と向かつて話をするのが、ちょっと恥ずかしくなつた。産まれて初めての、とても温かくて熱い気持ちだつた。

初めて、いまここにいることを肯定してもらえた。

キミの言葉が、キミという存在が
それだけで、それだけで私は
私には、キミだけでいい。

キミとの出逢い。キミとの思い出。キミとう存在。それだけでいい。

だから私は、いかなる手段をもちいても、それを護る。護りたいと思う。

そういう気持ちを懷けるようになれた。キミが、そうしてくれた。

だから私は、キミに、

「私を殺して、“私／あやかし”を“殺して／退治して”、キミは潔白を証明するの」

殺されることを選んだ。

私と出逢つてしまつたから、私と関わつてしまつたから、これからキミには不幸が、困難が、待ち受けているかもしない。けれどここで身の潔白を証明すれば、それは、少しは軽減されるかもしない。

潔白が証明されても、私と関わつたという事実から、それでも困難が待ち受けているかもしれないけれど、最期にわがままが許されるのなら、

「ただ生きて。キミに、生きていてほしい」

困難に勇敢に立ち向かわなくとも、格好悪くても、ただ生きて、生きていてほしい。それが、それだけが、私の願い。

「だから……、私を殺して……」

そう強く、頭では思うのに、

「 キミは生きて」

けれど、どうしてだろう、

「 お願い」

まだここに存在したいと、

もつとキミと一緒にありたいと、

そう強く、心から願つたままのは

決意を秘めた眼でキミは、

「…………わかりました」
手を差し出してくれた。
だから私は、

.....
その手に、包丁を託した。

* * *

僕が包丁を受け取ると、彼女は“そのとき”を心するかのように目を閉じ、身体から無用な力を抜き、すべてを受け入れる姿勢を整

える。

そして僕は、流れる動作で受け取った包丁を

* * *

最期の時になつて
まだここにいたいと願つた。

そう思える理由を「与えてくれた存在が、現れたから。まさしく“
降つて湧いた”を体現するように

ある日、突然に、滝つぼに落ちてきた。

あるいは迷惑と、普通は思うのかもしないくらいに、けれど私
を拒絶することなく、私に会いに来てくれる、初めての存在。
初めて私のほうから対面を拒んだ、けれどそれでも私に会いに来
てくれる、初めての存在。

すべてを賭してでも護りたいと、生き続けていてほしいと願う
初めての“ヒト／居場所”。

けれどだからこそ、そう思えるからこそ、強く願つてしまつ
まだここにいたい、と。
もつと一緒にありたい、と。

死は恐ろしかつた。だから死ねなかつた。しかしそれは生への執
着ではなく、ただの恐れでしかなかつた。

そしてその惰性で私は、今までここにあり続けた。
けれど、いま感じる、この死への恐怖は
生きたいと願う、ウソ偽りのない私の心だとわかる。
だからこそ私は、殺されることを選んだ。
でも、選んだからこそ私は、まだ生きたいと願つてしまつ。
強く、そう願つてしまつ。
どんなに制しようとしても、
心から溢れ出てくる“それ”は、

どうしても抑えきれない

なにか水面を叩くような、小石を水面に投げ入れたときのような音が聞こえた。

私は反射的に口を開けてしまい

この場にある張り詰めた空気感の糸を、ポチヤンという間の抜けた音が配慮なく切った。僕が流れる動作で滝つぼへと投げ捨てた包丁が、最期に発した存在感の音である。

包丁の最期を見届けてから彼女のほうへ視線を戻すと、そこに止まっている

事態がのみこめず、口を見開いて固まっている彼女の姿があった。

「…………どうして」

やつと理解が状況に追いついたらしい彼女は、

「どうしてっ！」

驚きと怒りが混在する強い語氣で言い、そして一転して、

「…………どうして」

追い詰められたヒトのみなうな表情になつて、

「どうして……」

すべての感情が納得できうる説明を求めて、詰め寄つてくれる。

だから僕は、ウソ偽りのない言の葉で答えた。

「貴女／誰か”を殺してまで、僕は“僕の居場所／村での立ち位置”を確保しようとは思わないからです」

「でもっ」

辛抱強く必死に説得するヒトの表情で、

「でもそれではっ、“私／あやかし”と関わってしまったキミまで、最悪、命を奪われてしまう」

彼女は目元に涙まで浮かべて、訴えてくる。

「そんなの、そんなのイヤです……。私のせいで“誰か／大切なヒト”が不幸になるのは、もう……、イヤ……」

それが彼女のウソ偽りのない本心であることは、理解できた。けれどだからこそ、僕は述べた。

「貴女を殺して、僕が幸せになれるわけがない。むしろ、貴女を殺してしまったら、それこそ僕は、“貴女のせい”で不幸になってしまつ

まつ

「へ？」

いまいち理解できていない物問い合わせる顔で、しかし彼女は、なにか驚いたふうに固まる。

「貴女が僕に生きていることを望むように、僕だつて貴女に生きていてほしいんです。　僕は、貴女と一緒に生きていたいんです」

「……私だつて、……私だつて！」

なにか抑えていたモノが爆発したようになにか

「私だつて、キミと一緒に生きていたいっ！」

彼女は怒ったふうに言い、

「でも、でもそれは

困難に直面して仕方ないと諦め、そしてそれを悔しがるように表情を曇らせる。

「人生の選択肢は、選ぶ項目それ自体を、自らの意志で“選択する／作る”ことができるんですよ。知つてましたか？」

「え？」

なにを言わんとしているのかよくかわらない、と彼女の顔には書かれていた。だから僕は、参考までに、僕が自らの意志で“選択した／作つた”ひとつ目の選択肢を提示してみた。とても自分勝手な僕の、ひとつ目の意志を。

「一緒に、世界を見に行きませんか？」

なにも“現在の居場所／いまの立ち位置”で完結しなければなら

ない決まりは、ない。そんな“決まり／制約／誓約／契約”は、どこにもない。勇者の「」とく孤高に戦つて、こちらの存在を否定してくれる“現在の居場所／いまの立ち位置”を守らなければならぬ必要はない。あるいは“現在の居場所／いまの立ち位置”をなにをしてでも守らなければならぬ“理由／家族”を、僕が持つていなければ、そう“思う／考える”的かもしれないけれど。でも、僕はそう思うのだ。

「……へ？」

僕の突然の提案に、どうやら彼女は理解が追いついていないらしい。不思議と疑問の混在する幼子のような顔を浮かべ

そして。

徐々に理解が追いついてきたのか、雪が解けるように、眉が、眼が、頬が、口が、表情が、感情を表し

* * *

僕と彼女の物語に、“未永く幸せに暮らしました”という終わりはない。

* * *

考えの甘さを思い知るまでに、そして時は要しなかつた。

閉ざされた空間から、開けた世界への、未知への憧れは、輝かい希望は、盲目とも同義だつたと

情け容赦なく思い知るまで。

世界は、ヒトは、必ずしも優しくはない。奇妙なモノ、理解できないモノ、気に食わないモノ、自らの利にならないモノ、それらをことごとく疎外し排除しようとすると。耐え難い困難と苦痛と苦悩が、ときには善を装つて襲つてくる。

けれど、それでも

「どうしたの？ 真面目な顔をして」

からかうような口調でそう言われて、「それだと、まるで僕が真面目な顔をしないヒトみたいに聞こえるよ」

僕は喜びを噛みしめながら抗議した。

「ふふ、間違いじゃないと思うけど？」

彼女はいたずらっぽく笑みを浮かべて、言い返してくれる。

「はは、まったく否定できないのが辛いところ」

「それで？ 珍しい真面目な顔で、いったいなにを考えていたの？」

魅力的な赤い瞳を好奇心色に染めて、彼女は訊く。

「ちょっとした物語を思い出してね」

なぜだかちょっぴり恥ずかしくなって、僕は頬をかきながら、

「感概にふけっていたんだ」

彼女の眼を見れないので答えた。

「物語つて？」

彼女は譲歩するつもりのないヒトの表情で問う。

「……出逢った頃の、……こと」

「あらっ！」

と彼女は愉快そう笑って、

「あらっ！」

次瞬、驚きと喜びのある顔になつて、

「すぐに“せんせい”を呼んでっ！」

大きくなつたお腹を愛おしそうになでながら

「産まれそうっ！」

喜びの声を聞き終わるより早く、僕は喜びを噛みしめながら速くに駆け出していた。

* * *

感動と云う言葉は、きっと“いづこづとも”の形容し難い心からの気持ちを、無理矢理に言葉という形状に形成して作られた言葉なんだらうと思った。決して“他者の困難な状況を物語として見て”懷くモノではないと、そんなヒトの“残酷性／残虐性”と表裏なモノではないと、やう思った。

「ここにいることを高らかに宣言する、いまから“ここへ自分自身／居場所”を専有することを高らかに宣言する、その産声を聴いたとき

僕は感動のあまり氣絶した。……してしまった、……らしい。

「まったく、男は肝心なときに限つて役に立たない」

と“せんせい／助産師”にはあきれられ、

「まったく」

彼女には愉快そうな苦笑を浮かべられてしまった。

感極まってしまった、というか極まり過ぎてしまったわけだけれど

喜びを抑えるなんて器用な真似は、僕にはできない。
なにより、そんな器用さは欲しくない。

しばしの時を経て。

* * *

僕と彼女と我が子は家族で散歩に出かけた。我が子はまだよちよち歩きもできないので、彼女の胸に抱かれている。必然的に、僕は荷物持ち。いまなら家でもなんでも担げそうだ。

見晴らしのよい小高い丘の上で独りある老樹の、その足元に座らせてもらうこととした。そして開放感と景色とただ一緒に居るという時を楽しみながら、軽い食事を味わう。

そよ風に流れる純白の長い髪を、やつと手で押されて。彼女は荷物の中から一冊の本を取り出す。

その姿に、その光景に

僕は改めて、彼女の美しさに見惚れた。

のろけと揶揄するヒトや、のろけとうざつするヒトもあるかと思つが、いま僕は間違いなくのろけているので、どうぞ思いに言いたいことを言つてうんざりしていただきたい」と、平然と平静と公言できる“心境／心情”だ。

「なあに？　じつと見て？」

彼女は不思議そうに赤い瞳をこちらに向ける。

「え？　ええと、その本はなんのかなあーって見惚れていた、と堂々と本人に言つことができないのが僕である。残念というか、情けないことだ。

「これは……」

彼女は表情に影を落として、

「これは、母さんがつけていた日記なの」「どこか遠くを見る眼差しで手にある日記を見やり、「ずっと怖くて見れなかつた……」

胸に抱く我が子を見やり、

「けれど」

表情から影を消しおり、柔らかく微笑んで、

「いまなら見れると」

決意あるヒトの、

「そう思えるようになつたの」「ほがらかな顔で、そう述べる。

「でも」

と困ったふうな微笑を浮かべて、彼女は言つ。

「これ見ようと思つと、やつぱり怖い」

そして彼女は、なにかひらめいたふうにぱっと笑みを浮かべて、

「お願いつ

と日記を僕のまつに差し出してきた。

お願いされると、とくに彼女にお願いされると、否と断れないのが僕である。情けないこと。

日記に書いてある内容を先んじて確認してほしい、というのが彼女のお願いだつた。

正直に言えば、あまり気乗りしないのだけれど、それでも否と断れないのが僕なのだ。残念なことに。

彼女から日記を受け取り、読む。

書かれてあつたのは

彼女の誕生と成長についてだつた。

彼女が産まれた日のこと。彼女が笑つたこと、怒つたこと、泣いたこと、日向で居眠りしたこと、遊んでいて滝つぼで溺れてしまつたこと、木陰に生えていたキノコを食べてお腹をくだしてしまつたこと。

そして。

彼女のお母さんの気持ちが、書かれてあつた。

最期が近かつたであろうと推察できる、希薄な筆致で。けれどそこにこめられた強い気持ちは確かに伝わってくる言葉が、書かれてあつた。

だから僕は、彼女に日記を返して読んでみると薦めた。

あなたが望まれて生まれてきたということを、
どうか忘れないでほしい。

* * *

小説・其の弐拾六『“まさかー”を懐く物語（仮題）』（前書き）

【願わくば、創造を超える想像を】

小話・其の貳拾六『“まさかー”を懐ぐ物語（仮題）』

『“まさかー”を懐ぐ物語（仮題）』

「え？ おー、うそだろ？ “＊＊＊”が“＊＊＊＊＊”だなん
てつ！」

最低文字数制限の関係上、
書いているヤツの意図する範囲内の文字数で投稿でいいので、
あえてこの文章を書いているので、
上記の“え？”で始まり“つ！”で終わる文章が、
書いているヤツの意図する“本編／本文”であります。
なので決してこの文章は“本編／本文”に関係ありません。
深読みは厳禁であります。素直に受け取ってください。この文
章に限つては。
正直に申しまして、

『“まさか！”を懐く物語（仮題）』投稿しようと
結果的に書いているヤツ自身が、
「まさか…」と感じてしましましたわ。

小説・其の武拾七『御園血廻』(仮題)』(前書き)

【鏡に映つた“自身”を嫌惡する】

小話・其の武拾七《御国自慢（仮題）》

《御国自慢（仮題）》

ある国の、ある街の、ある道の、ある交差点に面した場所にある、ある喫茶店のテラス席の、ある円卓で、違う“祖国／文化”を持つふたりの男がお茶を飲んでいました。ふたりは今日たまたま“この国”に訪れていて、ある偶然の“ドラマティックな出来事”をきっかけに知り合い、そしてお互いをより知るためにお茶を一緒にすることにしたのです。

と言つても、やることはただの“お国自慢”なのですが。「なんといつても私の国の自慢は、ご存知の通り、表現豊かで多種多様な“マンガ／文化”ですね。あなたの国には、こんなに豊かな“マンガ／文化”はないでしょう？」

そう言つてひとりの男は、多機能携帯端末を操作して、電子版のマンガを相手に見せます。

「あなたの国はとても“ロミック”が豊かだということは、とても有名なので知つていました。けれど私は、実際にあなたの国の“ロミック”を見たことがありません」

「おや？ そうだったんですね。じゃあ、これもなにかの縁です。ぜひひ読んでみてください」

「では、読ませていただきます」

そう言つてひとりの男は、相手の多機能携帯端末を借りて、マンガを読み始めました。

それを、ひとりの男はどこか誇らしげな気持ちで眺めつつ、お茶を一口すすりました。

しばしの時を経てから。

「なるほど……。ありがとうございました。ウワサ通り、あなたの国の中ミックは“とても多種多様多彩な表現”ですね」

そう言って、ひとりの男は多機能携帯端末を相手に返しました。

ひとりの男は、誇らしげに返された多機能携帯端末を受け取りました。

ひとりの男は、思つていろいろある顔つきでお茶を一口すくつてから、「では、私の国の誇るべきところを話させていただきましょう」

語り始めました。

「ご存知の通り私の国は、世界最強の軍隊で、世界の平和維持に貢献しています」

そう言つてひとりの男は、多機能携帯端末を操作して電子版のニュース記事を相手に見せます。

「あなたの国の軍隊が強いといつゝとは、とても有名なので知っています。けれど私の国は、憲法で“戦争／軍隊の存在も含む”を放棄しているので、そういう“世界情勢／平和の為の戦い／正義の戦争”に関してあまり報道がなく、軍隊が実際どのような活動をしているのか知りません」

「おや？ そうなのですか。じゃあ、これもなにかの縁です。お教えしましょう」

「是非、教えてください」

そう言つてひとりの男は、相手の多機能携帯端末を借りてニュース記事を見つつ、相手の語りに耳を傾けました。

ひとりの男は、とても誇らしげに、本国の“軍隊の活動／歴史”と武勇伝を語ります。

しばしの時を経てから。

「なるほど……。とても興味深いお話を聞かせていただき、ありがとうございました。ウワサ通り、あなたの国の軍隊は“世界平和のために、正義のために、とても素晴らしい貢献をなさっている”の

ですね

そう言つて、ひとりの男は多機能携帯端末を相手に返しました。
ひとりの男は、誇りしげに返された多機能携帯端末を受け取りました。

それからしばらくふたりは語らい

「またいつか」

「またいつか」

最後にガツチリ握手を交わして、別れました。

そして。

ひとりの男と、ひとりの男は、遠く離れた別々の場所で、

「あの国の連中は、なんて野蛮なんだ」

「あの国の連中は、なんて野蛮なんだ」

まつたく同じ言葉を、それぞれ口にしました。

自国の人“マンガ／文化”を誇った男は、

「いくら綺麗に聞こえる大義を掲げたって、やつていいことは“人殺し／破壊／戦争”じゃないか。それを誇るなんて」と吐き捨てるように言い

自國の“軍隊／歴史”を誇った男は、「いくら表現が自由だからって、描かれているのは“エロ／グロ／ナンセンス”じゃないか。それを誇るなんて」と吐き捨てるよつに言い

そして。

ひとりの男と、ひとりの男は、遠く離れた別々の場所で、
「まったく、あの国の連中の人間性を疑うね」
「まったく、あの国の連中の人間性を疑うね」
まったく同じ言葉を、それぞれ口にしました。

小話・其の弐拾八 へ後悔は先に立たず（仮題）』（前書き）

【“大きな実感”は遅れてやつてくる】

小話・其の貳拾八 『後悔は先に立たず』（仮題）

『後悔は先に立たず』（仮題）』

ふたりの男が、公園のベンチに座っていました。ふたりとも決して明るいとは述べられない表情をしています。

「……なあ」

「ん?」

「どうしても、年を取るとも、大人になると、素直に“つて言えなくなるんだろうな。ガキのころは、あつさう言えたのに」

「それは、あれだよ、子どものころは“ネガティブな未来”なんて想像すらしないからだと思うよ。“…………”と言ったあの、好くも悪くも変わらぬ人間関係をさ」

「どうして大人になっちゃったんだろう……、オレ」

「…………」

「もう…………”つて本人に会つて言えないって意識したらさ……」

「…………」

「もう会つて話せないって、アイシは居ないって、寒感しちゃつてれ…………」

ひとりの男は、うつむき、努めて抑え込もうとしながら、けれど嗚咽を漏らし、ボロボロと涙を落とす。

「…………」

ひとりの男は、黙したまま、曇天の空を見上げる。隣でなにもおこっていないかのように。隣に座る旧知の男のプライドを守るために。

ふたりの男が、ふたりの喪服姿の男が、公園のベンチに座っています。

ました。ふたりとも決して明るいとは述べられない表情をしています。

そんな彼らを見かねたふうに。

そんな彼らの肩にそっと手を置くよう

曇天の空に小さな穴が開いて、そこから射す一筋のやわらかな光が

彼らを優しく包みました。

小説・其の弐拾九『私の宝物（仮題）』（前書き）

【誰にも譲れない私だけの】

小話・其の貳拾九《私の宝物（仮題）》

《私の宝物（仮題）》

午後の日光が射し込み暖かい、庭に面した窓際。そこに置かれた安楽椅子で、ひとりの老婆が日向ぼっこしていました。

老婆はときおり、なにかを確認するように自身の左手を午後の日の光にかざし

とても嬉しそうな、素晴らしい幸せそうな微笑みを浮かべます。それを見た老婆の孫娘は、不思議に対する好奇心に駆られて、

「ねえ、ねえ、おばあちゃん」

スケッチブックから床に壁にと彩色が到る“壮大なお絵描き”を中断して、

「なにを、みているの？」

安楽椅子まで駆け寄つて訊ねました。

この世でもっとも愛おしい声の問いかけに、老婆はシワだらけの顔をよりいつそうシワだらけにして答えます。

それを聴いた孫娘は、嬉々として“それ”を見やううと老婆の左手に熱い視線をやつて、

「…………？」

けれどお田辺での“それ”は発見できず。なので彼女は、状況を理解せんと眉根を寄せて思案顔。

そして、しばしの考える間を置いてから、

「…………！」

とっても重大な事柄に思い当たり、そのあまりの重大さに彼女は大きく口を見開いて

「ママあーーー おばあちゃんがボケちゃったー！」

なにか奇抜なことを呟きながら慌てたふうに駆けて来た愛娘に、

「ねえねえ、ママ。どうじょつ」

グイグイと、

「ねえねえ」

グイグイとエプロンの裾を引っぱられ、

「どうしたの？」

台所で洗い物をしていた母親は、作業の手を止める「ことなく訊きました。

「おばあちゃんがねつ、おばあちゃんが、ボケちやつたのつー！」

そんな愛娘の言葉に、しかし母親は愉快そうな苦笑いを浮かべます。携帯電話ビービーかスマートフォンやパソコンを自在に使いこなす自身の親が、いまさつきの短時間で“そのよつなこと”になるとは思えなかつたからです。

なので母親は、

「どうして、そつ思つたの？」

柔らかい口調で、理由を問いました。

「だつてねつ、だつて」

という愛娘の危機迫る必死の説明を聴いて、しかし母親の顔には微笑みがありました。それは、いわゆる思い出し笑いといつもつでした。母親もまた幼い頃に、いまの愛娘と“つりふたつ”なことをしていたのです。

母親は洗い物をする手を止め、愛娘に、おばあちゃんの“それ”を見やる方法を教えました。より正確に述べると、おばあちゃんとおじいちゃんがまだ若かつた頃の“のりけ話”のひとつを話して聞かせたのです。

ぽかんと口を開けて話を聞いた愛娘は

転瞬、嬉々満面の笑みを浮かべて、瞳を燐々と輝かせて、おばあちゃんのもとへ駆けて行きました。

ドタドタと音を発して駆けて来た孫娘が、くくりくりとした愛らじい顔を見開いて、瞳を輝かせて、なにも言葉もなく自分の左手を凝視してきたことに老婆は最初は少々驚いて、けれどすぐに優しい微笑みを浮かべます。

「じい

じじくつと確かめるように、しばし孫娘は“おばあちゃんの左手の薬指”を見つめ

「うう～

と悔しそうに呻いてから、

「やつぱり、みえないっ！」

けれどこいつは清々しいくらいにスッパリと言つて、

「でも

と花咲くような笑みで、

「とおつても、とおつても、すてきな“ゆびわ”だねっ！　おばあ

ちゃんっ！」

* * *

戦後間もない、物を得るのも、食べるのにも苦労する時代ひとりの青年は、愛するひとりの女性へ、そのときの彼にとって精一杯の“贈り物”をしました。

焼け野に咲いた花を編んで作った、それは“指環”でした。

そしてその“指環”は

青年がいなくなってしまったあとも、

いつまでも、青年の愛する女性の薬指で咲き継いでいます。

小話・其の参拾《きもん（仮題）》（前書き）

【率先して“それ”を知りうとする姿勢が、大切なこと】

小話・其の参拾『ぎもん（仮題）』

『ぎもん（仮題）』

あなたは、この村で一番の物知りさんです。知らないことはなにもないと称される、この村で一番の物知りさんです。

あなたのところには、日々疑問でいっぱいの小さい子どもたちが、「ねえ、ねえ、おしえて！ おしえて！」

と疑問の答えを求めてやってきます。

今日もまた、ひとりの小さい子どもが疑問を抱えてやってきました。疑問で頭がいっぱいなのか、眉をハの字にしています。

「ねえ、ねえ、おしえて！ おしえて！」

あなたは、この村で一番の物知りさんです。知らないことはなにもないと称される、この村で一番の物知りさんです。

「どうして【 】はいけないっていうのに、【 】のためつていつて【 】をするの？ おなじ【 】なのに。

「ねえ、ねえ、どうして？ どうして？」

あなたは、この村で一番の物知りさんです。知らないことはなにもないと称される、この村で一番の物知りさんです。

さあ、この子の疑問に答えてあげてください。教えてあげてください。

小説・其の参拾七『此種なじと（仮題）』（記書セ）

【こまち “ルイ” で起り立つ】

小話・其の参拾壹些組なこと（仮題）

《些組なこと（仮題）》

彼らは、とくに贅沢をするでもなく、その田その田を精一杯に生きて暮らしていました。

ある日、そんな彼らの集落に

突然、ヤツらはやってきました。

ヤツらは、彼らの力ではどうあがいても敵わない強力な武器で身を固めています。

彼らの大半は、本能的に“いのち／生命”の危険を察知して、物陰に身を隠しました。見つからぬように息を潜めて、物陰からヤツらの様子をうかがいます。

そして彼らの中の少数の者たちは、血の氣の多い若者たちは、勇敢に、無謀に、ヤツらに挑みかかりました。自らの“産まれた場所／居場所／故郷”を、ヤツらに奪われまいとして

勇敢で無謀な少数の彼らは、じつにあっさりとあっ気なく、ヤツらの武器によつてその“いのち／生命”を散らしました。

彼らの大半の半数は、その光景をなすすべもなく物陰から見ることしかできませんでした。残りの半数は、田をそむけて見ることもできませんでした。

ヤツらは、彼らの集落の中央まで進むと歩みを止め

そこに、円筒形をした“なにか”を置きます。

ヤツらはそれが終わると、それ以外になにもすることなく集落から出てゆきました。

彼らには置いていかれた円筒形の“なにか”が“なに”であるのかわかりませんでしたが

張り詰めていた空気が、ふと、ほと、ゆるみました。散つて逝つた者たちに対する想いもありましたが、いまはこの瞬間は安堵

に対する想いのほうが大きかったです。

そんな彼らの中にあって“それ”は

影から忍び寄るよう、
さしたる音もなく、
煙を発生させる。

* * *

「ただ静かに、我々は“我々の価値観”で生きて暮らしていただけなのに……。ただ、それだけなのに……」

苦痛に襲われながら絶命しれゆく仲間を見やりながら、自らも苦しげに横たわつて彼は、

「どうして……、どうして……、どう……し……」

苦痛と苦悩と憎悪と悲しみを最期に懷いて、
息を止めました。

* * *

「すげえ、うじゅうじゅ居やがったぜ」

ひとりの男が、吐くように言いました。

「まあ、そのおかげで、オレらは美味しいモノが食えてるんだがな」

ひとりの男が、口にくわえたタバコに火をやりながら言いました。
「殺して、掃除して、依頼主が快適に使える下準備をする簡単な御仕事」
だが、少し食欲が失せる御仕事だぜ

「まあ、な」

「ところで」

「ん?」

“バルサンノ殺虫装置”がおさまるまで、メシ食い休憩しないか

？」

「食欲が失せるんじゃなかつたのか？」

「あくまでも、少しだ。 生きてりや、なにもしなくたつて腹は減るもんだぜ？」

「さいですか？」

害虫駆除と背に書かれた揃いの作業着に身を包んだふたりの男は、「そついいえば、街外れの廃校の体育館を使ってなにするんだりう？」
「なにかのイベントって話だつたような」

作業着と同じように害虫駆除とドアの部分に書かれた軽自動車に乗車し、

「で、なに食べる？」

「んー」

食事休憩をとるために、一時この場を去り行きます。

* * *

そして先に居た者の居場所を奪つて、自らの居場所を確保する。

小説・其の参拾弐『探求心（仮題）』（前書き）

【じばじば最初のきっかけは、くだらなこ】

小話・其の参拾弐「探求心（仮題）」

《探求心（仮題）》

その男の子が最近もつとも楽しくカツコイイとお熱なことは、三時のおやつに“かりんとう”と“ちよつと濃い田のお茶”を“嗜む／たしなむ”ことでした。その時に田覚ましアラームをセットするほどの、徹底したお熱ぶりです。

田覚ましアラームをセッテした時刻が近づいてくると彼は、まるである域に達したヒトの「」とく田覚まし時計の前に鎮座して、その瞬間、アラームが鳴つたと同時の瞬間にぴしゃりとそれを止め、

「…………」

彼は三時のおやつタイムを指し示す時計を持つて母親の前へ行き、無言でそれを見せて知らせます。“嗜む”時刻である、と。

母親は愛らしこ我が子に愛着ある苦笑を浮かべつつ、“かりんとう”と“ちよつと濃い田のお茶”を用意します。ちなみに、お茶は市販されているカフエイン抜きのモノです。

男の子は母親から“嗜むための必需品／かりんとう／ちよつと濃い田のお茶”を受け取ると、それらを持って、夕刻に傾く日射しの当たる庭に面した縁側へ移動し、そこに腰を落ち着けます。ここが彼の“嗜む”定位置なのです。

と、その縁側には先客が居ました。

一匹の三毛猫が、なにか悟ったふうな顔つきで寝ていました。

しかし男の子は、そんなこと知ったことではないと“かりんとう”を口に運びます。味わいます。そして一口、お茶をすすり

ちらりと、三毛猫のほうに視線をやります。

けれどすぐに、気にしてなどいないと言い張るよつこ、次の“かりんとう”を口に運びます。味わいます。かりんこ、と空いた手

で三毛猫を軽く突いてみたりしました。

三毛猫は薄つすらと田を開けて男の子を見やり、しつぽをひょいとひょいとおしゃこと音づぶつに揺らして、また田を開じます。

男の子は努めて氣にしてないふうを装つてお茶をすすつてから、またちよいと突きました。

今度は田を開けることなく三毛猫は、しつぽをひょいと揺らします。

そして男の子は“かりんとう”を味わいつつ、またまたちよいと突き

そんなやりとつと繰り返して。“かりんとう”を口に運び、それを味わおつかとこう瞬間に、男の子はふと思いました。思いつきました。

しばし食べようとした“かりんとう”を眺め

そして三毛猫を見やり

男の子は手にある“かりんとう”を、

そつと三毛猫のお尻の後ろに置いてみました。

小話・其の參拾參々がくじゅう（仮題）》（前書き）

【その“背中”を見て、子は育つ】

小話・其の參拾參くがくしゅう（仮題）

『がくしゅう（仮題）』

彼には、生徒会総会長という肩書きがあつた。彼の通う私立の学園は、いまじき珍しい総生徒数が三千を超える大所帯の規模の大きな小・中・高等学校の一貫校で、生徒会総会長という肩書きは、その三千人超の生徒の先頭に立っていることを意味している。

いま彼は、困難に直面した悩むヒトの表情をしていた。各部活動へ支給される部費の割り当てを決める会議が、難航してしるのだ。生徒数が多くれば、当然に部活の数も多くなる。部活の数が多くなれば、相応して部費の額も大きくなる。そうなると必然的に生徒会の運営は責任の重いものとなり、なおかつ、なかなかどうして困難を多々抱えることになる。

部活の数があまりに多く、“生徒会／総会長／副会長／会計／書記”だけでは部の活動内容を把握しきれないでの、この学園には“文化系部活動連合会”と“体育系部活動連合会”という生徒会とはべつの部活動を管理管轄する会が存在している。各部活の部長が、各部活に所属する者に推薦投票され、それによつて選ばれた十五名から構成されている。

そして部費の割り当てを決める会議で、このふたつの会は、より“自らたち”が充実するためになみなみならぬ心血を注ぐ。ゆえに。

なかなかどうして話が進まず、まとまらない。

「そもそも、先に“数字／予算”を決めて、その決められた“枠内／予算内”で部活動するつていうのがおかしいと思うんだな。数字に合わせて、それを使い切るうとするカタチでヒトが“活動／行動”するなんても」

ぼそりと、小さめの声で愚痴るように彼は言った。

「それを私に言われても、困ります」

ショートカットの黒髪をした、活発そうな印象の女の子が応えた。彼女には、生徒会会計という肩書きがあった。その印象的に、肩書きについて「ちょっと意外」との声が多くある。

「でも、なんとなくわかる気はします」

セミロングの薄い茶髪をした、どこか氣だるげな印象の女の子が意を示した。彼女には、生徒会書記という肩書きがあった。その印象的に、肩書きについて「かなり意外」との声が多くある。

「はあ～」

疲れきったふうに彼は、息を吐いた。

「なにかを参考にしてみたらどうだろう?」

オールバックの黒髪をした、小柄で小太りな男子が提案した。彼には、生徒会副会長という肩書きがあった。その肩書き的に、「で、なにしてるの?」との声が多くある。

「どゆこと?」

「会議を円滑に進めるための運営方法の参考を、求めてみたらどうつって」

「……例えば?」

「え? んんー、そうだなー、例えば」

生徒会総会長は、副会長の提案を受け入れてみようと思った。なかなかいいかもしれない、と。この場に居る全員にその旨を伝え、いまの会議は翌日にまわして、本日は終わった。

そして。

会議室には、汚い言葉のヤジが飛び交っていた。一部の武闘派を自称する者たちが、椅子をぶん投げる。

会議は、とても酷く荒れていた。

騒ぎを聞きつけた教師たちが、駆けつけてきた。けれど彼らは会議室の扉を開いて中を見て、あ然ぼう然と固まり立ち尽くす。

ひとりの教師が、ふと我に返つた。彼は、扉の脇に座つて我関せずと本を読んでいる生徒会書記の女の子に気づき、事情を問うた。生徒会書記の女の子は本を見やつたまま、ただ淡々と述べました。

「“大人／国会”から学んだ結果です」

【けれど、 “無色” ではない】

小話・其の參拾四くじらじつ（仮題）

『くじらじつ（仮題）』

彼の頭の中には、いつも、いかなるときも、鮮やかな極彩色が溢れて煌めいて輝いていた。

彼が見る世界は、つねに楽しさや喜びで満ちていた。

「遠い、過去の話だ」

誰にでもなく、彼は独り小さく言葉を吐いた。そして。

見上げた空は、見わたす限り灰色だった。ほんの数分前まで雨を地に落としていた雲たちが、まだそこに居座っているから。せめて太陽の“煌めき／輝き”くらいあつてほしかった、と彼は思つた。けれどそんな些細な救いすら、ここにはなかつた。

彼がそのことに気が付いたとき、もうすでに頭の中から色彩も煌めきも輝きも失せていた。

彼の頭の中は、いつの間にかモノクロ写真のような白と黒だけになつていた。

彼の見る世界に、いまや樂しさも喜びも満ちていない。

そうなつたのがいつたい“いつ”的タイミングだったのか、記憶にない。大概の“それ／問題”がしばしばそうであるように、気が付いたときには、もうすでに手遅れだった。

そして。

大概の“それ／事故”がしばしばそうであるように、

「あだつ」

後頭部に衝撃を感じたときには、もつすでに痛みがあった。地べたに、なにか硬質のモノが落ちた音がした。見ると、そこには石ころがあつた。

どうやらこれが後頭部に当たつたらしい。石ころが自ら飛ぶわけはないから

彼が視線をやつた先に、とても居心地悪そうにしている男の子と女子の姿があった。どうやらこのふたりが、石ころが飛べた理由らしい。

「お兄ちゃんっ！ ちゃんと謝らないとダメだよっ！」

叱りつける口調で女の子が言った。

「あー、んー、わかった」

なにか逡巡してから、渋々といったふうに男の子が同意を示した。

そして困り果てたふうに、

「わかつたから、足踏むのやめてくれよ」

と付け加えて言った。

女の子が手を引いて先導し、男の子は手を引かれ重そうな足取りでやつてきた。

「あのっ」

女の子が、ついでいる男の子の手を一度ぎゅうっと握つてから言つた。緊張しているのか、声が少し上ずつている。

「ごめんなさいっ」

ペニシリと頭を下げる。 そして、

「ほらっ、お兄ちゃんもっ」

男の子が明後日の方向を眺めていたことに腹を立て、その足を思いっきり踏む。

「イテッ！ だから足踏むなよ。 イテッ！ わかつたよ、わかつてるよ」

男の子は降参したふうに言つて、女の子をなだめてから、

「ごめんなさい。石は、オレが蹴つて飛ばしました」

しつかりと頭を下げて、謝る。

「…………」

謝罪を受けて彼は、思考した。まったく知らぬ他者との関わりに

“リスク／損得”を考えるようになつたのは、いつからだつただろう。他者と関わっている場面を、関わっている以外の他者が“どのような眼で見ていいのか”を気にするようになつたのは、いつから

だつただろう。他者は、いまこの場面を見てどう思つだらう。いい歳した男が、子どもに頭を下げさせているこの場面を見たら。「大丈夫です。平氣です。あまり気にしないでください。でも、今度からは注意してくださいね」

人造物のような愛想のいい表情を浮かべて、彼は言つた。“リスクノ問題”とは、できるだけ関わりたくなかつた。早く流してなかつたことにしたかった。

「…………」

不安そうな、怯えているような、不気味なモノを見るような表情を浮かべて女の子は、黙したまま男の子の手をぎゅうと握つた。

「んー」

残念そうな、悩んでいるような、不思議なモノを見るような表情を浮かべて男の子は、

「なんか、曇り空とおんなじような顔してる」

鋭利さを秘めた純粋な眼差しで見やりながら、述べた。身長の差から必然的に見上げる視線になり、意図せずして自然と“その顔”と“その空”を見比べる結果になつたのだ。

「え？」

彼は余裕ある大人を装つた表情を浮かべつつ、しかし胸の内でギクリとした。なにを言われているのかわからないのに、なぜだか見ないようにしていることをズバリ指摘された気分になつた。

最後にまた頭を下げてから、女の子がまるで逃げるように男の子の手を引いて歩を進めた。

急に手を引つぱられたことに男の子は一瞬ビクッとしてから、やれやれと言つづけに女の子の後を追う。

「…………」

なにも言葉も思いつけずに、彼は去り行くふたりの背を眼で追つた。

男の子は水溜りを見つけると、いっさいのためらいなくそこへ跳び込んだ。楽しそうな音を發して、しぶきがはねた。女の子の服に、

ちょっとそれがかかつた。

女の子は抗議する鋭い眼光を男の子に向か助走を付けて思いつきり水たまりへ飛び込む。爆笑するような音を發てて、しぶきがはねた。男の子に、浴びるようにならがかかつた。

どちらともなく笑つて、バチャバチャと足踏みして水たまりを樂しむ。いまさつきの出来事など、もうキレイさっぱり忘れているようだつた。

雲の切れ間から射してきた光が、ふたりを照らす。男の子と女の子は、煌めき輝きの中で遊び楽しんでいた。

とても遠い、自分とは別世界の光景だ。そう感じて彼は、それが自分らしいと表現するよひにつつむく。と、そこに先ほどの石ころがあつた。

彼にはその石ころが、別世界から飛来した未知の隕石めいた、とてもカラフルなモノに思えた。

「…………」

しばし眺めて彼は、ちょいとそれを蹴つてみた。

小説・其の参拾五「終わらない」（仮題）』（前書き）

【あなたなら、『終わらぬへ。』】

小話・其の参拾五へ終わらない（仮題）

《終わらない（仮題）》

とある小さな国に、あなたは訪れていました。“あなたの大切なヒト”と楽しむ旅行です。

とある小さな国は、街並みがとても綺麗なことで有名でした。どこを見ても絵になるとの評判通り、どこを見ても絵になる街風景です。

あなたと“あなたの大切なヒト”は、いい思い出になると嬉し楽しそうに笑みを浮かべました。

ちょっと休憩しようということになりました。とある喫茶店の車の通れない大通りに面したテラス席で、あなたは“あなたの大切なヒト”とお茶を飲むことにしました。

まるで映画の一場面に出てきそうな風景だと“あなたの大切なヒト”は言つて、嬉々満面はしゃいでいました。

* * *

とある小さな国は、その街並みからは想像がつかないのですが、かつて民族間の価値観の違いの問題で内戦になつたことがありますた。

内戦は、ひとつ民族の勝利でいちおう終わりました。勝利した側の民族の人々は戦後、負けた側の民族の人々の多くを殺しました。やつと“勝ち得た平和”を脅かす可能性を減らすために、“悲劇を繰り返さないために／平和のために”殺しました。このような過去を持つがゆえに、民族間にはいまでも相手の民族に対して強い嫌悪感が根付いています。

ひとりの子どもが、死にました。

かつて虐殺された側の民族の子どもでした。死因は、かつて虐殺した側の民族の子どもが「近寄るんじゃない！」と言つて投げた石が頭部に当たったことでした。

あと少しでも刺激があつたら爆発してしまつまでに蓄積されたモノが、ひとりの子どもの死を起爆剤に爆ぜました。

かつて虐殺された民族の人々は、銃を手にしました。彼らはかつて虐殺した民族の人々に向けて、その銃の引き金を引きました。男も女も老人も若者も子どもも差別することなく、平等に銃弾をあびせました。

かつて虐殺した人々も黙つてはいませんでした。彼らも、銃を手にしました。

銃撃戦が始まりました。

かつて虐殺された民族の人々は、かつて虐殺した人々を殺すたびに蓄積されていったモノを吐き出すように声を上げて笑いました。

* * *

あなたと“あなたの大切なヒト”は、とても悲惨な事態に遭つてしましました。

目の前で、ヒトがヒトを殺しています。

あなたと“あなたの大切なヒト”は、喫茶店に隠れました。身を縮めて、早く銃声が鳴り止むことを祈りました。

けれど銃声が鳴り止むことはなく、銃を手にした人々が増えました。銃撃戦が始まりました。

銃声が鳴り止む気配は、まったくありませんでした。ここに留まついたら危険と判断したあなたと“あなたの大切なヒト”は、銃声が沈静した一瞬を合図に、逃げ出しました。

転瞬。

あなたの目の前で、“あなたの大切なヒト”が糸の切れた人形のように力なく地に崩れ落ちました。倒れている“あなたの大切なヒト”的身の下から血が湧いてきました。それはあつという間に血だまりとなりました。

笑い声がしました。“あなたの大切なヒト”に向けて銃の引き金を引いたヒトが、声を上げて笑っていました。歓喜するように笑っていました。

あなたの側らに、“あなたの大切なヒト”と“そうではないヒト”的亡骸がありました。“そうではないヒト”は、先ほどの銃撃戦で死亡したヒトのようでした。その亡骸の側らに、銃が落ちていました。

銃声と笑い声を聞きながら立ち尽くすあなたの側らには、銃がありました。

あなたは【】しました。

小話・其の參拾六くおこしべてただきました（仮題）』（前書き）

【面倒臭いモノにはフタをあわ】

小話・其の参拾六くおいしくいただきました（仮題）』

『おいしくいただきました（仮題）』

子どもが、好き嫌いを言つて食べ残しをしました。

「世界には食べたくても食べられないヒトがいるんだ。食べられるのに好き嫌いを言つて食べ残したりしたら、ダメだろ？」「父親が叱りました。

「せうよ？だから好き嫌いを言つて食べ残したりしたらいけないのよ」「母親も言いました。

「……でも」「と子どもは言い返そうとしますが、

「でも、じゃないだろ？」「威圧感ある語氣で父親が“それ”を封殺しました。

「…………」「子どもは素直すぎるほど“嫌々”のにじみ出た表情で、食べ残しを口に運びます。口に入れます。

そして。

吐きそうな顔をして咀嚼し、ありつだけの気合を動員してやつと“それ”をのみ込みました。

* * *

テレビの画面の中で、いま人気のあるタレントや俳優や女優が集まって、自身の料理の腕を競っていました。そうして作られた料理を、これまた人気の芸能人が“できばえ”を批評します。

ある若手のタレントが作った料理を“一口”食べた瞬間、批評する側の芸能人が口をおさえて“番組セットの裏”へ消えてゆきました

た。カメラがその背を追い、その姿を捉え、その姿をテレビに映しました。

批評する側の芸能人は、青の「ゴミ箱を抱え込むようにしてこまし

た。カメラがその背を追い、その姿を捉え、その姿をテレビに映しました。

そこで、画面が切り替わりました。

批評する側の芸能人が“番組セットの裏”へ消えていったことに、料理を作った若手のタレントが“本気さのない抗議”を述べています。

した。それを見聞きしている他のタレントや俳優や女優は、喜劇を楽しむように笑っています。

そして、

青の「ゴミ箱を抱え込んでいた批評する側の芸能人が、口元を拭いながら戻つてきました。カメラがその姿を捉えると同時に、若手のタレントの作った料理のあまりの不味さを猛然と言い連ねます。

若手のタレントが、それに対し言い返します。

他の批評する側の芸能人が、「どれどれ」と言つて話題の料理に口をつけました。

若手のタレントが、期待する眼差しで見やりながら「どうですか？」と訊きました。

言葉は返つてきませんでした。その代わりに、またひとり“番組セットの裏”へ消えてゆきました。

テレビ画面の中に笑い生じました。

* * *

「せかいにはたべたくてもたべられないヒトがいるのに、たべられるのによきよきをいつてたべのこしたりしたら、いけないんじょう?」

子どもが、テレビを見やりながら問いました。

「どうして、このヒトたちは“いけない”としてるのにおこられなーの? どうして、わらつているの?」

それに対しても父親は、テレビ画面の右下を指差して答えます。

「ここに書いてあるだらう。『使われた食材は、あとでスタッフがおいしくいただきました』って。あとでちゃんと食べてるんだよ」「でも、あのヒトはすぐまずいっていってるよ？ うちにいたやつを！」みばこにさいてるよ？ なのに、どうしておいしいの？」
「それは、あのヒトは不味いと感じたけれど、スタッフのヒトは美味しい感じたんだ」

「でも、まずくても、おきあらこをこってたべのこすのはいけないことなんでしょう？ どうして、あのヒトはおこられないの？ どうして、まわりのヒトはわざわざこるの？」
「…………」

父親は、どういふことをかとしづら思ひました。

そして。

ひとつの画期的な答えを導き出しました。

テレビのコモロノを手に取り、チャンネルを変えました。

小説・其の參拾七くめつせーじ（仮題）』（前書き）

【それもまた“本性”の一部】

小話・其の参拾七くめつセージ（仮題）』

『めつセージ（仮題）』

映りの悪いブラウン管テレビの中に、ひとりの人物の姿がありました。大勢のヒトに囲まれています。

そのヒトは、テレビの中で“「意見番／大御所”と称される歌手でした。今回は、新曲の発表なのです。

囲んでいる大勢のヒトは、記者でした。新曲に関する取材と言いつて、最近の芸能界や政治や社会に対する「意見番の言葉を拾おうと狙っています。

テレビの中のこの場で中心にある歌手のヒトが、真摯な表情をして“歌／新曲”へ込めたモノについて語り始めました。

「いま私たちが生活している“この国”は、とても幸いなことに、当たり前のように平和を謳歌しています。しかし、世界に目を向けると、いたるところでいまだに“戦争／紛争”という悲劇が繰り返されています。……無力な私には、歌うことしかできません。しかし私は、歌の力を信じています。歌は、歌に込められた想いは、国や人種や宗教に関係なく届くと」

いまも遠い場所で起こっている“戦争／紛争”が終結してくれるようだ。差別や偏見のない、争いのない、平和への願いが込められた一曲である、と述べて歌手のヒトの語りは終わりました。

囲んでいる大勢の記者から、次々とその姿勢を称賛する言葉が送られます。それはしばしば続き

ピタリと、そうすると予定が組まれていたかのように称賛する言葉は止みました。

そして。

大勢の記者の口から次々と、最近の芸能界や政治や社会に対する「意見番の言葉を引き出すための、新曲に引っ掛けたりした問いか

けが開始されました。

* * *

映りの悪いブラウン管テレビの中に、ひとりの人物の姿がありました。複数のヒトと一緒にあります。

そのヒトは、テレビの中で“「意見番／大御所”と称される歌手でした。先日、新曲の発表をおこなつたばかりです。

そのヒトは歌手であると同時に、現役を退いた方々に絶大な人気を誇る休日お昼の情報バラエティー番組の司会者でもありました。いまは、ボードに貼り付けられた各社の新聞紙のまえに立っています。

新聞の記事を指して、副司会のアナウンサーのヒトが流行の話題に関して“「意見番／司会者”に「意見をうかがいました。流行の話題は、いま“町興しの素／地域産業”にもなりつつある、アニメやマンガやラノベやゲームが好きで好きで好き過ぎるヒトたちの文化に関するこことでした。

話を投げられた歌手であり司会者であるヒトは、じつに苦いふうな表情を見せます。それでも、とりあえずテレビ的に当たり障りのないことを述べました。

そして、“それ”を“より理解するため”に作られた映像が流れました。アニメやマンガやラノベやゲームが好きで好きで好き過ぎるヒトたちの暮らしづりが、とても“それらしく”強調された映像でした。

それを見た歌手であり司会者であるヒトは、不気味なモノが目の前にあるかの」とく自分の腕で自分の身を抱いて、述べました。

「私には、どうにも理解できない世界ですが……。んー、まあ、……その、……なんと言つか、情熱が熱すぎて正直ちょっと不気味で気持ち悪いというか、……うん、ちょっと理解できませんねえ。……お好きにどうぞ、としか言えません

* * *

音は、心に響く。

だからこそ、音には“国境という線引き”がない。

しかし、“それ”を創り出すヒトの頭の中には
しばしば“価値観”という線引き／文化／言語／
線引き／自覚なき線引き／努力なき無理解／偏見的な視点／差別的
な視点”が存在する。

* * *

戦争は、いまだ続く。

小話・其の參拾八へかぞくのいぢいん（仮題）』（前書き）

【せめて最低限の敬意を】

小話・其の参拾八 『かぞくのいちいん（仮題）』

『かぞくのいちいん（仮題）』

彼女のお腹は、とても大きいことになつていきました。歩くのが、ちょいとばかり大変そうです。辛そうでもあります。

しばしば自分に甘くなつて食べ過ぎてしまうことは、誰しも少なからず経験することではあります。けれど彼女の“それ”は“そのような事柄”によるものではありませんでした。現に、彼女の表情に忌避の色は一切なく、むしろ喜びに満ち溢れています。それもそのはずです。だつて彼女はもうすぐ、我が子に出逢えるのです。

いまから“この場所”を専有すると宣言する産声を、彼女の耳はしつかりと聽きました。

彼女は、我が子と対面しました。

しかし。

別れは、一切の予兆なく訪れました。
とてつもなく強大な力ある手によつて、彼女は我が子を奪われてしまいました。

彼女の持ちえる力では到底抗えない、とても強大な相手でした。彼女とて無抵抗で我が子を差し出したわけではありません。ありつけの力を振り絞つて立ち向かいました。抗議の声を張り上げました。

でも、彼女は我が子を奪われてしまいました。とてつもなく強大な力ある手に。

* * *

そこは、とてもとても息苦しい部屋でした。時と共に、息苦しさが増してゆきます。本当の意味で、密室でした。

彼女の子の姿は、そんな部屋の中にありました。光源のない、暗い暗い部屋でした。

彼女の子は、彼女の温もりを求めて声を上げました。とても息苦しい場所ですから、とてもか細い弱々しい泣き声でした。

その部屋に、ふつと“熱のある灯り”が点きました。“それ”は部屋全体を例外なく包み込み、彼女の子も包み込みました。それからもしばらく彼女の子の泣き声は続きました。

そして、あるところを壇に。

それは、ふつと口ウソクの火を吹き消すよ。

泣き声は聞こえなくなりました。

* * *

「まつたく」

ひとりの老婆が、うんざりしたふうに言いました。そして、

「“ウチの茶トラ”が、またガキを産みやがってね。だからほら、また頼むよ」

と“産まれて間もない子猫”を“空のペットボトル”を扱うよくな軽率さで差し出します。

「勘弁してくださいよ」

白のシャツに紺のネクタイをした、ひとりの男性が言いました。

どこか泣きそうな、参ったふうな顔をしています。

「なにが“勘弁”だい。こっちの血税でメシ食つてるくせに、職務放棄しようつてのかい？」

老婆は責める口調で言い、詰め寄ります。

それでも男性は根気強く“言つべきこと”を言い伝えますが、老

婆は聞く耳を持ちませんでした。

そして老婆は強引に子猫を男性に押し付けると、早々に家へ帰つてゆきます。

子猫を受け取ってしまった男性は、殺意にも似たモノがある眼差しで老婆の背を見廻けました。それから手の内にいる子猫に向かつて、

「「めんなさい。本当に、」「めんなさい……」

とても深いところからの言葉を、述べました。

男性の背後には、白が主色の鉄筋コンクリートの建築物がありました。その外壁にそつよつにして、 “なにか” の詰められた土嚢がびっしりと置かれてあります。その中から、あらゆる生き物の泣くよつの声が、あるには激怒するよつの声が、漏れ聞こえてきました。

「「めんなさい」

子猫を手に立ち廻くす男性が、いまへ到るまでの “こま” を含めたすべてに對して懺悔するふうに述べました。

* * *

とある町の、とある商店街の、とあるペット・ショップの、その店内の、ある一角に。

父・母・娘という構成の一組の家族の姿がありました。

「 “いの口” にするー」

女の子が嬉々とした表情で言いました。その胸に、小さな子猫を抱いています。

「きょうから “いの口” は、 “かぞく” の “いちいんな” の。あたしの “きょうだい” なの

家族が増えることの喜びを、 “買づ／飼づ” ことの喜びを、女の子は無邪気な満面の笑みで表しました。

* * *

とある町の、とある商店街の、とあるペシトショップの、その前にある道の、電信柱の影に。

ペシトショップの店内で無邪気な笑みを浮かべる女の子を、じいと見ている田がありました。

その田は、茶色にトラ柄の毛皮を身にまとっていました。
その田は、ただじいと見ていました。

小話・其の參拾九『えいむのはなし』(仮題)』(前書き)

【認識する側の“目”によつて】

小話・其の参拾九 『えいむつのはなし』(仮題)』

『えいむつのはなし』(仮題)』

黄昏色の空の下、ひとりの男がコンビニを田舎して歩いていました。丸刈りにされた頭に、ヒトを近づけない鋭利な目をしています。身なりは、上下共に黒のジャージ。足には、使い込まれて汚い灰色の運動靴。

彼は、盗みや恐喝やその他諸々の悪意ある手段で老人や無防備なヒトから多額の金品を騙し取る常習者でした。悪知恵に関しては無類の才があるらしく、逮捕されたことはありません。

信号に差し掛かりました。タイミングのよろしくないことに、表示が赤に変わりました。

男はそれが当然のことなので、足を止めました。 が、しかしすぐに舌打ちをひとつして歩き出します。彼は、とても短気でした。

* * *

黄昏色の空の下、ひとりの男がコンビニを田舎して歩いていました。七三にきつちり分けられた髪をし、目元にはインテリジェンスを演出するメガネがあります。その下には、他者に対する自己主張が希薄そうな目がありました。身なりは、上下共に濃紺のスース。足には、使い込まれた味ある革の靴。

彼は、社会の歯車と呼ばれてしまうような人物でした。これといった個性や意志や特徴はなく、積極性もありません。

信号に差し掛かりました。タイミングのよろしくないことに、表示が赤に変わりました。

男はそれが当然のことなので、足を止めました。不意に、苛立ち

ある舌打ちの音が聞こえました。彼は反射的に身を縮め、音の聞こえたほうへ目をやりました。

丸刈りの頭をした人物が、苛立たしげに赤信号を横断して行きました。

* * *

男は丸刈りの頭をポリポリとかきながら自動ドアをくぐり、コンビニに入店しました。そして迷いのない慣れた足どりで酒類売り場へと向かいます。

子どものはしゃぐような声が聞こえました。“どうやらお菓子を買おう”と選んでいる子どもが先客として居るようでした。

男はうざったそうに舌打ちをしました。彼は心の底から“子ども／ガキ”が嫌いでした。

男が酒を選んでレジに向かうと、狙つたようなタイミングでお菓子を手にしたふたりの子どもがレジにそれぞれ品を置きました。罵声が反射的に口から出たくなりました。男はどうにか舌打ちひとつに堪えました。ここで子ども相手に“なにか”をやらかして、最悪、警察を呼ばれてしまつては、とても都合が悪いのは自分だからです。

ひとりの子どもが、手をすべらせて支払いの小銭を床にばら撒きました。焦つてそれを拾い始めます。もうひとりの子どもも、それを手伝います。店内にひとりしか姿のない店員も、それを見かねて拾うのを手伝います。

決して気の長いほうではない男の苛立ちは、時計の秒針が進むのと連動して増してゆきます。爆発しそうになるのを、彼は奥歯を噛みしめて堪えました。

* * *

男は七三の髪を手でなでつけてからひとつ深呼吸をしました。そして片手をポケットに突っ込み、そのまま自動ドアをくぐってコンビニに入店します。

そこには、床に這いつぶばるふたりの子どもとひとりの店員、それを苛立たしげに見ている丸刈りの頭の男の姿がありました。子どもと店員は、どうやら床に散らばった小銭を拾い集めているようでした。

男は意を決したふうにポケットから折りたたみ式のナイフを取り出し、不慣れな手つきで刃を出現させました。彼は歩みを進め、ちょうど手前に居た子どもの首にナイフの刃を当てて言いました。

「か、金を出せっ！　いますぐにッ！」

突然の事態に対し理解が追いつくまでの間を置いてから、店員は慌ててレジに向かいました。

* * *

早く酒を飲みたい男の苛立ちは、もつすでに限界を超えていました。だというのに、これ以上さらに余計な時間を喰う強盗が出現してしまいました。

「ふざけたことしてんじゃねえぞ、コラ！　おい、このクソ野郎っ！」

どうにか堪えていたモノが爆発し、彼は手にしていた酒の缶を強盗に投げつけました。

強盗は、酒の缶の直撃と、男の気迫ある鋭利な眼光に怯みました。その拍子に、ナイフが子どもから外れます。

子どもは、その隙に強盗の拘束から脱出しました。

苛立ちと怒りの収まらない男は、一発と言わず二発、三発、ぶん殴つてやろうと強盗に詰め寄りました。

ナイフという凶器によつて優位な立場にあると思っていた強盗は、まったく臆せぬ迫つてくる男に、恐怖にも似たモノを懐きました。

それは強盗の精神を容赦なく追い詰めます。恐怖心を振り払つように、強盗はめちゃくちゃにナイフを振り回します。

「え？」

男の腹部に、いつの間にかナイフが突き刺さっていました。

「え？」

強盗は、いつの間にかナイフを突き刺していました。

「……」

「……」

刺した者と刺された者が互いの顔を見合ひ、奇妙で静かな間が生じました。

「そ、そん、本当に刺すつもりなんて、そん、そん、そん、そん」

強盗は刺してしまったことに動搖し、

「そん、違、そん、違、そん！」

錯乱し、現実逃避するかのように逃走します。

刺された男は、苛立ちと怒りからくる舌打ちをして倒れました。

* * *

その日の、夜のテレビのニュースで

ひとりの男の、英雄の“死”が報じられました。

子どもの首にナイフを当てて金を要求する狂人に臆することなく勇敢に立ち向かい、子どもを救つも、自らは死してしまった男を、英雄を称える内容でした。コンビニの監視カメラの衝撃的な映像に、気持ちを盛り上げる効果音を合わせた、編集された映像が流されました。それだけでした。

英雄を殺した狂人に関しても報じられました。

通報を受けて駆けつけた警察官が迅速に逮捕したこと。物静かな人物だったこと。朝に会えばちゃんと「おはよつじぞいます」と挨拶する人物だったという、かつての近所住人の証言。まさかこんな

ことをするヒトだなんて、といつ知り合いの言葉。数ヶ月前に会社をリストラされて職を失い、同時に住む家を失っていたこと。逮捕されたときの所持金が二十三円だったこと。ひとりのヒトの“いのち／生命”を奪ったこと

そして。

話は、いまの社会が抱える問題点に関する、ニュースキャスターとニュース解説者の“思つところ”に移行します。

「現在のネット社会が

「やはり、ヒトとのつながりが

」

小説・其の四拾《サーマス(仮題)》(前書き)

【やーびす、やーびすうー】

小話・其の四拾《サービス（仮題）》

《サービス（仮題）》

とある時代の、とある国の、とある場所の、とある会議室に、會議机を囲むようにして座っている多数の人影がありました。

「では、今後さらなる“顧客”の獲得を目指して売り出す“商品”についてですが」

この場において進行役と思われるひとりの中年の男性が、ホワイトボードの前に立ち、手にある書類に目をやりつつ言いました。きつちり七三に分けられた頭に、カツチリしたスーツを着ています。左の手首には、実用性とファッショニ性を兼ね備えた“いやみのない”ブランド物の腕時計がありました。

「“集団生活”においてしばしば生ずる“諸問題”から“購入者／顧客”を優先的に保護し、問題の優位的な解決に取り組む、“集団生活ニコニコ安心プラン”」

進行役の中年の男性はホワイトボードに必要事項を書いてから、手にある書類の次のページを開き、

「次に、“購入者／顧客”に対して“優先的／優位的”に既存のサービスを提供し、なおかつ“購入者／顧客”的要望に応じて出張して既存のサービスを提供する、“ガンバレ！努力応援プラン”」

そう述べてから、またホワイトボードに必要事項を書き込みます。

「なるほど、なるほど、なかなかいいんじゃないですかね」

会議机を囲んで座る人影の中の、ひとりの初老の男性が言いました。オールバックにされた白髪に、堅苦しさのないジャケットを着ています。左の手首には、実用性やファッショニ性よりも高級品色を重視した“いやみある”ブランド物の腕時計がありました。

「今後は、このふたつのプランをぐっと押し出していきましょう」

という初老の男性の言葉に、ホワイトボードの前に立つ中年の男

性と、会議机を囲む多数の人影はそれぞれ「ではその方向で」と首肯して応じました。

ホワイトボードの前に立つ中年の男性と、会議机を囲む多数の人影は、それぞれ同じ呼称で呼ばれていました。“先生”と呼ばれていました。

この場に居る面々から首肯を得た初老の男性は、ふたつの肩書きを持つていました。“理事長”と“校長”というふたつの肩書きを持つていました。

とある時代の、とある国との、とある学校の、とある会議室に、会議机を囲むようにして座っている多数の先生たちの姿がありました。“学校教育”というサービスに関するビジネスの話をしている先生たちの姿がありました。

とある時代の、とある国では、学校の教育は“顧客”に提供する“サービス”という“商品”になっていました。

* * *

学校の教育がサービス業になつたとき、
果たして、ヒトは育つのだろうか?
あるいは、どのように育つのだろうか?

小説・其の因縁 *くわんじん* (仮題) 』(前書き)

【表面と内面は、しばしば一致しない】

小話・其の四拾壹くひとりとひとり（仮題）』

『ひとりとひとり（仮題）』

まどろみに囚われそうになっていた意識が、金属をこすり合わせる不快で耳障りな大きな音によつて、とても好ましくないカタチで覚めた。

どうして地下鉄つて、普通の電車みたく程好い感じで走ってくれないんだろう。地下鉄の最後尾の車両の座席に腰を落ち着けて、私はそんなことを思った。

閉鎖的な空間を走行しているのだから、騒音が外へ逃げれずうるさくなつてしまふのは仕方がない。頭では理解しているのだけれど……。だけれど……。

どうにもむつとした気持ちが消し去れず、私は密やかに“かかと”で床をグリグリしてやつた。決して、休日の夕方に急用を頼まれて駆り出された不満をやつあたり的にぶつけているわけではない。決して、断じて、違う。…………ちょっとは、本当にちよつとだけ、あるかもしぬないけれど。

車内に人影はまばらで、まだ余裕を持つて座れるほど空いていた。曜日的な理由からか、時間的な理由からか、進行方向的な理由があるのはそのすべてか。

そんなことを考えていたら、列車が停まった。いつの間にか、駅に着いたようだ。駅名を確認する。私が下車する駅は、まだまだずつと先だつた。

ドアが開く。数少ない人影の中に、下車しようと動くモノはなかつた。乗車してくる人影もなかつた。いや、あつた。発車のベルが鳴る中、ひとり乗車してきた。まさしく転がり込むように、ひとり転がり込んできた。

その瞬間。

車内にある数少ない人影が、驚くほどの一休感で、まったく同じ空気を発した。察するに、まったく同じことを思つたに違いない。

転がり込んできたそのヒトは、周囲に対する配慮のない大きな声で悪態を吐いた。それから、“なにか”をブツブツ言つている。

そのヒトは、どうやら酔っ払いのようだつた。

正直、隣に座つてほしくないと思つた。けれど、“そう”思つたときに限つて、“そう”なるもので……。

そのヒトは世の中に対する愚痴のようなモノを吐きながら、ドカリと、私の隣に腰を下した。

ドアが閉まつた。列車が走り出した。呼応するように、隣のヒトが大きな声で歌い始めた。「なにはともあれクリスマス！ メリー、メリー、クリスマス！」と歌い始めた。ワンマン運転の地下鉄なので、最後尾の車両に車掌さんの姿はなく、なので義務的に注意してくれるヒトは存在しなかつた。

不幸中の幸いというのか、不快中の幸いというか、地下鉄の走行する金属をこすり合わせる不快で耳障りな騒音が、隣の歌声と相殺しあつてくれて、まだ耐えられる状況ではあつた。けど、決して好ましい状況ではないので、気を紛らわせるために、対面上部にある広告へ意識をやることにした。電車の広告の重要な存在意義に、いまさら気がついた。

一駅、二駅と過ぎるごとに、隣の歌は調子を上げていつた。「この辺で争いは無しにしないか？ まあ、なにはともあれクリスマス！ クリスマスだ！」と調子を上げていつた。

六駅目を過ぎた辺りで、私の忍耐力にも少々限界がきた。でも正面から注意するような度胸は備えていないので、正面は正面でも対面にある窓ガラスの反射越しに睨みをやることにした。地下鉄の窓ガラスは、向こう側が闇なので、ちょっとした鏡のようによく反射する。

それでも、ガツツリとはできないので、チラリと渾身の睨みをやつた。

窓ガラスの反射越しに、目が合ひた。

隣の歌も、列車の騒音も、いまここにあるすべての音が消え去った。

「助けて」

真摯さのある“それ”が、いまここにある唯一の音だった。
あまりの意外な“それ”に、私は自分の耳を疑いつつ、隣に目を向けた。

そこには、周囲に対する配慮のない大きな声で歌っているヒトの姿があつた。歌い続けているヒトの姿があつた。

終わるための言葉が思い出せないのか、同じところを繰り返し、繰り返し歌っているヒトの姿があつた。

列車が停まつた。ドアが開いた。

繰り返し歌いながらそのヒトは下車した。

ドアが閉まつた。列車が走り出した。

走行時の騒音の中に、奇妙な静けさが生まれた。

いまさつきまでヒトの座っていた私の隣に、人影はなくなつた。
しかし“ひとつの言葉”という存在は、確かにそこに残留していた。

そして。

帰宅したいまもまだ、
私の隣に残留している。

小話・其の四拾弐『贊美と誇張（仮題）』（前書き）

【ウソも偽りもある作り話】

小話・其の四拾弐『贊美と誇張（仮題）』

『贊美と誇張（仮題）』

冷静さを失つた言動は、
しばしば自らの首を絞める。

* * *

とある時代の、とある国の、とある街の、とある路地裏に、“なにか”から逃れるように走つてゐるふたりの人影がありました。

ひとりは、けつして清潔とは言い難い風貌の男性でした。背中に、大きくはないけれど重量感のあるリュックを背負っています。

ひとりは、けつして清潔とは言い難い風貌の女性でした。胸の前で、雑誌ほどの大きさの封筒を大事そうに抱えています。

ふたりは、路地裏から表の通りに出ました。目前に、中規模の書店がありました。ふたりは互いの顔を見やり、会話するよりも意が通じ合つてゐる田で見つめ合い、そして真摯な表情で、ひとつ首肯し合いました。　ふたりは、田前の書店にその歩みを向けました。

* * *

とある時代の、とある国の、多彩な表現がおこなえる自由ある文化の、その一部から生まれたモノの中に、とあるマンガがありました。読んだ者をどきどきわくわくさせて感動させる、夢と友情と熱い戦いの描かれた、ロマン溢るる作品でした。

そのマンガの主人公は、“夢ノロマン”を追い求めて大海原へと乗り出した“海賊”でした。“海賊”たちでした。様々な出会いと別れを経験して成長してゆく彼らの姿は、多くの人々に支持されま

した。

いつしか、歴史に名を残すほど売れた世界的人気作品となっていました。

* * *

とある時代の、とある国で、青少年の健全な判断能力の形成と育成に関する事柄を理由に公権力が“表現／創作／意の発信”に対して力を行使できる“決まり”が作られました。賛成派と反対派による突っ込んだ意見交換も議論もなく、それがどうしたことなのか民衆が詳しく理解することもなく、ぬるっと作られました。

* * *

とある時代の、とある国で、青少年の健全な判断能力の形成と育成に関する事柄を理由に公権力が“表現／創作／意の発信”に対して力を行使できる“決まり”が作られました。賛成派と反対派による突っ込んだ意見交換も議論もなく、それがどうしたことなのか民衆が詳しく理解することもなく、ぬるっと作られました。

* * *

とある時代の、とある国で、とある街の、とある書店の、マンガ「一ナーハー」のいつかくに、ふたりの人影がありました。

「そういえばさー」

ひとりの、いくぶん幼さの残る若い男が言いました。

「ん？ なあに？」

ひとりの、いくぶん幼さの残る若い女が応じました。

「いつの間にか、あの海賊のマンガさ、新刊なかなか出ないなあと思つたら、最近じゃあ既刊も見なくなつたよね」

「ああ、そういえば……。結局、あのクライマックスな展開の続き

は、どうなつたんだろうね

そんなやりとりをするふたりの背中に、

「続き、読みたいかい？」

少々息切れしたふうのある音声が言いました。

「「え？」」

ふたりが驚いたふうに振り返ると、そこにはけっして清潔とは言い難い風貌の男性と女性の姿がありました。

「じつは、いまここに“その続き”があるんだ」

サプライズするヒトの微笑みある表情で男性が言つて、それに呼応するように側らに立つ女性が胸の前で抱えていた封筒を差し出しました。

若い男と若い女は、訝りつつも“それ”を受け取り、中身を見てみました。そこには、マンガの原稿がありました。いましがた話していたクライマックスな展開の続きが、描かれてありました。ふたりは、当たり前の疑惑を懐きました。　が、いつしか描かれてある内容に引き込まれて“それ”を読んでしました。

* * *

とある時代の、とある国の、とある街の、とある路地裏に、“なにか”を追うように走っている複数の人影がありました。
黒のサングラス、黒のスーツ、黒の革靴、という黒で、それぞれ全身を潔癖的に固めています。

複数の黒は、路地裏から表の通りに出ました。目前に、中規模の書店がありました。複数の影の中のひとりが、スーツの袖のところに隠された小型の無線機で“どこか”と短いやり取りをしました。それから他の複数の黒に、言葉なく“手信号／ハンドサイン”を示しました。　複数の黒は、目前の書店にその歩みを向けました。

* * *

しつかりと読み終えてから、若い男と若い女は、率直な疑問を口にしました。どうしていまここに“続き”があるのか、と。問われた男性は、なんでもないことのようじ、じつにあつせりと答えました。自分が“それ”的作者だから、と。

しばし無言の間を置いてから、

「へつ？」

若い男と若い女は声をそろえて、

「ええっ！」

とても素直に驚きを表しました。

その反応に、作者の男性と、その側らに立つ女性は、愉快そうな微笑を浮かべました。

「……あの」

若い男と若い女は、少々ためらいつつも再び率直な疑問を口にしました。どうしてとても売れていたのに新刊どころか既刊の姿すら見れなくなってしまったのか、と。

作者の男性と、その側らに立つ女性は、互いの顔を見合ひ、苦そ
うな微笑を浮かべました。

「もしかしたら知っているかもしれないけれど

作者の男性は、そう前置きをしてから、ある“決まり”が作られ
たことを述べました。そして、その“決まり”に、“自分の描いた
作品／海賊のマンガ”は引っかかってしまったのだと教えました。
悪質な犯罪である海賊行為を贅美し誇張するような描かれたのさ
れた表現物である“海賊のマンガ”は、青少年の健全な判断能力の
育成に悪い影響を与える、という公権力側が述べるところの理由に
よって。また、国際社会の一部から、国際社会が団結して“海
賊の問題”と戦っているのに、海賊行為を贅美するような“モノ”
を世界に広めるのは不謹慎である、と批難されたことも少なくなく
影響していると。

「……それって、つまり

若い女は軽い頭痛を堪えるヒトの表情をして、

「あたしたちが“あのマンガ／作り話”的影響を受けて、“海賊”は“いいものだ”って考えるようになつて、“海賊”を本気で志すようになつたりして、もしかしたら“海賊”になっちゃう“危険性／可能性”があるから、つてことですか？」

確認する口調で言いました。

「んな！ どれだけ“青少年／ボクたち”を“無知／バカ”だと思つてゐるのさ、それ。 それぐらい、善し悪し判断できるよ。

“どうか、そもそも“モノ”を強制排除するまえに、判断できるよう学校と家庭で教育したらしい話、じゃん。 なんかヘンだよ。 といふか取り組む順番を間違えてるよ

若い男が、不満そうに言いました。

「“いまここにいるキミたち”は大丈夫、“かもしけない”。

けれど“どこかにいる誰か”は大丈夫じやない、“かもしけない”」 作者の男性の、その側らに立つ女性が落ち着きある口調で述べました。

「　　え？」

若い男と若い女は、そろつて問うように眉根を寄せました。

「“決まり”を作ったヒトに、あなたは“このマンガ／作り話”的影響を受けて“描かれている好ましくない行為”を実際にやつてみたいと思いましたか？ つて訊くと決まって返つて返つてくる言葉です。

“自分”はやりたいなんて思いません、でも“誰か”はやりたいと思う、“かもしえない”。 だから、“決まり”で律する必要があるって」

「それって、もうただの疑心暗鬼じやないですか……。そもそも、どうして、こんな“決まり”が作られちゃつたんですか？ 誰も反対しなかつたんですか？」

若い女が、心の底から不思議そうに問いました。

作者の男性と、その側らに立つ女性の顔には、そろつて、また、苦そうな微笑がありました。

「もちろん、反対する意見はあったよ」

作者の男性は疲れたヒトの顔をして、

「でも、『決まり』は作られた」

深い後悔の念が滲む音声で、

「反対するヒトも、賛成するヒトも、お互い“自分”が“正義”だと信じて疑わなかつたんだ」

経験者としての意を、どこか“希望のようなモノ”を込めて話します。

お互い自分こそが“正義”という考えが先にあり、ゆえに対する“意”との対立は、“敵／よくわからない怪物”と戦うというような空気を持つようになり、次第に冷静さを欠いて、時に汚い言葉を用いて叩き合つて、ネガティブキャンペーン的なことになり、結局まともに話し合ひこともなく、その結果、この状況を作つてしまつたこと。それでも一部の反対派と賛成派は話し合つた、話し合おうとしたこと。そしてその一部のヒトたちを、反対派も賛成派も“裏切り者”といつて叩いたこと。

反対派の中にも温度差があつたこと。なにより、“そのことに熱心な一部のヒトたちの問題”とされて、まったく一般民衆の関心を得られず、一般民衆と致命的な温度差があつたこと。

「同時に起こつた“芸能人が酒の席でトラブルに遭つた話”的な話が、よほど熱心な関心を集めて過剰なまでに報じられていましたね……」

そんな中で、関心を得るために効果的な行動がとれなかつたこと。“表現／創作／意の発信”が致命的なダメージを負い、“表現／創作／意の発信”が致命的な衰退へ傾いてしまつた、“表現／創作／意の発信”が瀕死になつてしまつた日、けれど“それ”を深く認識したヒトは少数でしかなかつたこと。

「でも、もっとも致命的な問題は、一度“決まり”が作られてしまつと、“それ”に対して熱心に思考するということがなくなってしまう、思考しなくなってしまった、この“やり直せない状況／

現状”にあるんだ。

もし“これ／いま／現状”が作り話だつたなら、タイムマシンでも登場させて、せめて冷静になつて話し合おう、ネガティブキャンペーンみたいなことはやめて、ちゃんと議論しよう、つて伝えに行けるんだけじね

作者の男性は、諦め切れていない諦めたヒトの表情をして言いました。

そんな男性の肩に、そつと手が置かれました。男性の背後に、黒のサングラス、黒のスーツ、黒の革靴、という黒で全身を潔癖的に固めたヒトの姿がありました。複数、ありました。

作者の男性と、その側らに立つ女性は、静かに現れた黒に、その身を拘束されてしまいました。

黒の中に、手に書類を持つたひとりの姿がありました。その手にある書類には、『違法表現者一覧』と書かれてありました。老若男女を問わず、『顔写真／氏名／年齢／職業／備考』が記載されています。

そしてその一覧の中に、いま黒に拘束されている男性と女性も記載されていました。

男性の項目には、ふたつの名前が書かれていました。本名と、ペンネームです。男性は、描くことで表現する漫画家でした。

女性の項目には、いわゆる一般人のそれと異なることは書かれてありませんでした。が、備考のところに“それ”はありました。

女性は、漫画家である男性のアシスタントでした。

「間違いない。よし、連行しろ」

書類を手に持つ、黒の中のひとりが言いました。

男性と女性が、発言することも許されずに連れて行かれました。

複数ある黒の姿も、静かに去つてゆきました。

それを、若い男と若い女は見送りました。

書店のマンガコーナーのいつかくに、ふたりの人影が残されました。

* * *

とある時代の、とある国の、とある街の、とある住宅街の、とある公園のベンチに、ふたりの座っている人影がありました。“危険だから”という理由で遊具が撤去された公園に、子どもの笑い声はいつさいなく、じつに静かで殺風景です。

「あたし、ガチでマンガを描いてみようと思つの」

ひとりの、いくぶん幼さの残る若い女が言いました。ベンチから立ち上がりつて、決意を表明するようにぐつと右の拳を握ります。左手には、スマートフォンが握られています。

「…………は？」

ひとりの、いくぶん幼さの残る若い男が応じました。状況に対しうまつたく理解が追いついていないのか、口が半開きです。

「あたしね、じつは」

若い女は、恥らうようにもじもじとしてから、これから重大な秘密を告白するかのようにためらつてから、

「けつこう、マンガとかラノベとかアニメとかゲームとかフィギアとか大好きなのっ」

頬をほんのり朱に染めて言いました。

「ええー、いまさら“それ”言つのー」

ある意味で意表を突かれた若い男は、

「どうか、今まで秘密にしていたみたいなその態度に驚きだよ」と少々引き気味に返しました。それから一呼吸して冷静さを呼び戻し、

「なんでもまた急に、ガチでマンガを描こうと思つたのさ?」

率直な疑問を口にしました。

「べつに、急じゃないよ。発表していなかつただけで、ちょいちょい描いては、いたよ」

若い女は、少し拗ねたふうに言いました。

「…………そうですか」

若い男はそうサラリと流して、

「それで？」

改めて問いました。

若い女は一瞬、なにか不満そうな膨れつ面をしてから、仕切り直すように「コホン」とひとつ咳払いをして、

「現実の犯罪行為」と“犯罪行為を描くこと”とをゴッチャにしているのが、どうにも、あたしには納得できないの」

左の手にあるスマートフォンを差し出し、その画面を若い男に見せます。その画面には、“決まり”に関する文章が表示されてありました。

「でね、“決まり”には、“青少年／あたしたち”が“決まり”的で“ダメ”とされているモノを作ることに関して明記されていなさいの。　というか、“決まり”を作るとき、そのことそれ自体ちやんと話し合われていないので」

「……つまり、どゆこと？」

「あたしがその“ダメ”なモノを作ることで、“それ”を問題として話題沸騰させて、“決まり”に関する話題を再燃させて、“決まり”的の“ありかた”について意識を向けさせ、今度こそしつかり“決まり”について議論してもらうの…」

若い女は力を込めて語り、それから少し勢いを静めて、

「まあ、“諸刃の剣”的なところはあるけれど……」

と冷静なふうに述べてから、

「それでね、ついてはお願ひがあるの」

また勢いを戻して、若い男に言葉を投げます。

「ちなみにどんな？」

若い男はイヤな予感に頬を引きつらせつつ、いちおう訊いてみました。

「アシスタントをやつてほしいの」

若い女は真摯な顔で言つて、

「“はい”か“イエス”で答えて」

これが「**一**択であることを改めて強調するように、人差し指と中指を立てた右の手を**すい**と突き出します。

「おおう、言語の種類しか選べないね」の「**一**択」

若い男はあきれたふうに言いました。

そんな反応に、若い女は耐えかねたふうに左顎をピクリと動かし、「思**い立つた**が吉日！」

あまり乗り気ではない若い男の手をむんずとつかみとり、「さあ、アシスタンントくん！ これからあたしの家で創作活動開始よー！」

強引に進む一步を踏み出しました。

「ええー！ まだなにも返答してないんですけど」

若い男は引っぱれるカタチで、進む一步を踏み出しました。

ふたりの“歩み”が、始まりました。

小話・其の四拾参《背負つべきモノ》(仮題) 《前書き》

【重くても投げ出してはならぬモノ】

小話・其の四拾参 『背負うべきモノ』(仮題) 』

『背負うべきモノ』(仮題) 』

とある時代の、とある街の、とある学校の、とある教室に、複数の子どもの姿がありました。いまは休み時間で、好き勝手に遊ぶ姿もあれば、火事場の馬鹿力を發揮して友の宿題を複写している姿もあります。

そんな中に、ひとりの男の子の姿がありました。ある一点を、じいーと見つめています。その視線の先には、ひとりの女の子の姿がありました。男の子は、どうやら正確に自覚していないようですが、人生初の恋を経験中なのです。

「ん？」

恋を経験中の男の子の友達が、男の子のおかしな様子に気がつき、「あー！」

当の本人より早く“そのこと”を正確に把握し、「おまえー」

当然の洗礼として“そのこと”をちゃかします。しかも大きな声で。

男の子が恋した女の子とその友達の耳にも、当たり前のようにその声は届きました。女の子は顔を赤くしてうつむき、女の子の友達はニヤニヤしながらこの状況を観覧しています。

「な、ななな」

自分の置かれている状況を認識し、男の子は顔を沸騰するようこみるまる赤くし、

「ち、ちげーよ！」

顔を真っ赤にして声を荒げました。

あまりにも恥ずかしくて、この状況をなかつたことにしたくて、

男の子は自分が恋した女の子に対して酷い言葉を口から吐きました。

「こんなやつ好きになるわけねえーだろ」と。難儀なこと、冗談で、「いっつても素直になれない不器用なお年頃なのです。

酷い言葉をぶつけられた女の子は、様々な要因もあいまって泣き出してしまいました。

それを見た女の子の友達が、女の子のことをよく知っているがゆえに怒りました。

そしてこの状況をよく理解していないクラスメイトの誰かが、「いーけないんだー いけないんだー “せえーんせー／＼先生” に言つてやるー！」

男の子が女子を泣かせたことを批難するように言つました。

「ん？ どーした？」

そろそろ休み時間が終わるので早めに教室にやつてきた教師が、なにか絶妙なタイミングで呼ばれたので、そう返しました。

教師の側に居たクラスメイトの誰かが、とてもぞわつくした状況説明をしました。それを聞いた教師は、

「そつかー」

男の子と女の子を見やつて、

「ふたりともあとで職員室な」

そう告げ、

「じゃ、授業始めるぞー」

休み時間が終わるチャイムが鳴るより先に、授業を開始しました。

職員室に、男の子と女の子と教師の姿がありました。

教師は、とりあえず当人の口から事情を聴きました。最初は断片的なハツキリしない言い回しでしたが、教師は辛抱強く聴きました。事情を把握した教師は、男の子に、“酷い言葉を言うのはよくないこと”と気づかせる言葉遣いで話しかけました。

男の子は、そもそも自分でもわかっていることなので、

「い、ごめん」

それでも素直になりきれていませんでしたが、謝りました。

女の子は「ククリと肯いて、それを受け入れました。

職員室から教室へ戻る途中で、

「あ、あのセ！」

男の子が明後日の方向を見やりながら、振り絞るように、「きよ、今日さ、い一緒に帰つてやつてもいいんだぜ！」

言葉のチョイスを間違えました。

女の子は一瞬きょとんとしてから、ちよつぴり大人びたふうに、「今日、一緒に帰つてくれる？」

ほんのり頬を赤くして言いました。

「え！ う、うううん、うん！」

男の子は、

「帰つてやるよ！」

素直な満面の笑みで応じました。

* * *

とある時代の、とある街の、とある学校の、とある教室に、複数の子どもの姿がありました。いまは休み時間で、好き勝手に遊ぶ姿もあれば、火事場の馬鹿力を發揮して友の宿題を複写している姿もあります。

そんな中に、ひとりの男の子の姿がありました。ある一点を、じいーと見つめています。その視線の先には、ひとりの女の子の姿がありました。男の子は、どうやら正確に自覚していないようですが、人生初の恋を経験中なのです。

「ん？」

恋を経験中の男の子の友達が、男の子のおかしな様子に気づき、

「あー！」

当の本人より早く“そのこと”を正確に把握し、

「おまえー」

当然の洗礼として“そのこと”をちやかします。しかも大きな声で。

男の子が恋した女の子とその友達の耳にも、当たり前のようにその声は届きました。女の子は顔を赤くしてうつむき、女の子の友達はニヤニヤしながらこの状況を観覧しています。

「な、ななな」

自分の置かれている状況を認識し、男の子は顔を沸騰するよひにみるみる赤くし、

「ち、ちげーよ！」

顔を真っ赤にして声を荒げました。

あまりにも恥ずかしくて、この状況をなかつたことにしたくて、男の子は自分が恋した女の子に対してもう少し口から吐きました。「こんなやつ好きになるわけねえーだろ」と。難儀なことに、どうにも素直になれない不器用なお年頃なのです。

酷い言葉をぶつけられた女の子は、様々な要因もあいまって泣き出してしまいました。

それを見た女の子の友達が、女の子のことによく知っているがゆえに怒りました。

そしてこの状況をよく理解していないクラスメイトの誰かが、「いーけないんだー いけないんだー “ぎょーセい／行政” に言つてやろう！」

批難するよひに言いました。

「ん？ デーした？」

そろそろ休み時間が終わるので早めに教室にやつてきた教師が、なにか絶妙なタイミングで呼ばれたので、そう返しました。

教師の側に居たクラスメイトの誰かが、とてもぞつくりした状況説明をしました。それを聞いた教師は、

「コラッ！」

自分の座る椅子を確保するために、適切な指導をおこなつたというカタチを作るために、頭ごなしに男の子のおこないを否定する言

葉を吐きました。自分が適切な指導をおこなつたと証言させるかのように、クラスメイトの眼差しがある教室で、いつさいの配慮なく言葉を吐きました。

男の子と女の子は、公開処刑されるヒトの顔で、眼つきで、お互

いと騒ぎ立てた周囲を批難するように見やりました。

以後、男の子と女の子が会話することはいつさいありませんでした。

* * *

行政による物事への規制などの介入が、
教育と保護者が背負うべき責務の放棄であつてはならない。
その責務は、ひとりの人間の人生の道筋に関わる“とても重いモノ”であるから。

小説・其の四拾四『野放し（仮題）』（前書き）

【なにかともバランス感覚は重要】

小話・其の四拾四 〈野放し（仮題）〉

『野放し（仮題）』

とある時代の、とある国、とあるショッピングモールのいつかに、とあるモノが販売されていました。そのいつかくは、他のモノとそのとあるモノを区分して販売するための専用コーナーでした。子を連れた母親が、とあるモノの専用コーナーを横切りました。そして整然と大量のとあるモノが販売されている光景を目の当たりにして、ある思いを懐きました。そして行動しました。

子どもが健全に育つために、とあるモノが野放しにされ氾濫しているこの惨状をどうにかしなければならない、と近所のヒトや母親友達に芝居役者の「ごとく感情豊かに語つてまわりました。

とあるモノを所有することは憲法によつて国民に保証された権利である。そもそも今現在だつてきちんと厳しく区分販売されている。現場を見てから本当に氾濫しているのか判断してほしい。という意見もありましたが、子どものですから彼女は屈しませんでした。

そしてついに、彼女の訴えはカタチとして実りました。

とある時代の、とある国、憲法によつて国民が所有する権利が保障されていた“銃器”の販売が厳しく規制されました。

とある時代の、とある国、とある港、とある倉庫の中に、“銃器”の販売が厳しく規制されることを心待ちにしていたヒトたちの姿がありました。

「いやー、まさにビジネスチャンスだ」
ひとりが嬉しそうに言いました。

「ああ、まったくだ」

ひとりが嬉しそうに同意しました。そして、側に置いてある木箱を愛おしそうになれます。その木箱と同じようなモノが、倉庫の中に大量に積まれてありました。

「どんなに厳しく規制したって、規制した瞬間と同時に欲する者が根絶されるわけじゃないんだ。むしろ、厳しい規制のおかげで規制対象の価値が上昇する。欲する者が存在する限り、こりやあいい商売だよ。本当、規制を厳しくして需要と供給の管理のバランスを崩してくれたヤツには心から感謝するよ。おかげで規則を破る“うま味”が増したんだから」

小説・其の四拾五『姫君と魔女のお話（仮題）』（前書き）

【ウソの世界は親切で優しい】

小話・其の四拾五 『吾輩と脇役のお話（仮題）』

『吾輩と脇役のお話（仮題）』

* * *

これは吾輩のお話である。しかし同時に、まいにちなき“彼”的お話である。

このお話の主役は、いつせいの揃るぎなく吾輩である。このお話における“彼”的役回りは、いわゆる脇役だ。いちおう以前はあつたから、名前持ちの脇役、という脇役の中においては比較的田立つ役回りを演じていたことになるだろうか。

繰り返しになってしまったことをご容赦願いたいのだが、これは、吾輩が主役のお話である。とても長いお話だ。その長さたるや、主役を演じている吾輩自身、しばしば嫌気がさして幻想的空想世界へ逃避したくなるほどである。……こま、とてもどうでもよことこうで偽りを語つてしまつた。申し訳ない。お詫びして訂正させていただく。“逃避したくなるほど”ではなく、“逃避するほど”が事実に即した文言である。

閑話休題。これは長いお話だ。読者諸賢の中には、いまこの一文を長いと感じて嫌気がさしているヒトもあらうかと察するところであるが、それとは比べ物にならぬ長さであることを、その卓越した明晰たる脳みそで「想像」推察いただきたい。そして願わくば、吾輩がしばしば幻想的空想世界へ逃避するに至るいかんともし難い心情をお察しいただきたい。

あるいはこれも、そんな幻想的空想世界への逃避と同義的な行為なのかもしれない。気分転換。または気まぐれ。

若干前後してしまつて申し訳ないが、これについては、今現在進行しているこの文字の羅列のことである。吾輩のお話の中から、“彼”に関する部分を抽出してみようとした試みだ。

本来ならば、名前持ちといえども脇役である“彼”にスポットライトが当たられることは、まあ、ない。それに嫌気がさすほど長い吾輩のお話であるが、その中における“彼”的登場期間は、初期の頃に限定されており、極々短い。短いが、確かに登場したこともまた、搖るきない事実である。

前置きが長くなってきたので、端的に述べよ。つまるところ、幻想的空想世界へ逃避するより、思に出を嗜んでみよつとこつことだ。

ここで冒頭の一文を持つてこよ。いいかげんしつっこ、といふお気持ちは重々お察しするところであるが、そこをどうにか、煮干しなどでカルシウムを摂取するなどして堪えていただきたい。

これは吾輩のお話である。しかし同時に、まじつとなき“彼”的お話もある。

願わくば、読者諸賢には寛容寛大な御心でお付き合いいただきたい。

* * *

吾輩は小中高一貫の私学で勉学に勤しんでおり、“彼”的存在を知ったは中等部一年の頃であったと記憶している。“彼”は転校生であった。

吾輩が“彼”に対して懷いた最初の印象は、“気に食わぬ”、であつた。“彼”はなかなか整つた面をしており、制服のない私服登校である我が学び舎であつたから、その衣装センスの良さだつて望まずともよく知れた。そんな良くできた“彼”であつたから、自己紹介のときなど、同級生女子諸君の一部がとても元気よろしく耳障りであった。

吾輩の“彼”に対する興味は、自己紹介のときにはもう歴無となつていた。およそ吾輩とは相容れぬ世界の人間であろうと予想できただからだ。

だとうのに、だとうのに、だとうのに、である。どうして世界は望まれぬ
気配りばかりお上手なのであるつか。世界の最高責任者はしつかり
と説明責任を果たしていただきたい。どうしてよりもよつて吾輩
の目前の席に、そこがこれから居場所だとでも宣言するよつた顔
で“彼”が着席しているのか！ 世界さんマジ KUY !
……

……まつたく使い慣れぬ言語は安易に使用するべきではないと、いま
悟つた。時代の流れに乗つてみよかと試みたのだが、乗るべき時
流をどうやら間違えたようだと薄つすらジワリと感じている。
話を戻そつ。“彼”は、吾輩の前の席となつた。

このとき、吾輩はミスを犯した。どうして吾輩の前の席なのだ、
と納得いかぬ気持ちを眼光で表現していただがために、着席しようと
こちらへ歩んできた“彼”と目が合い、いらぬ誤解を生んでしまつ
たのだ。じいと呪うように見やつていた吾輩の姿は、どうやら“彼
”には転校生に話しかける好機を探つてゐる在校生に映つたらしい。
「これからよろしく」

嫌味なく爽やかに“彼”が声をかけてきた。
初対面だとうのにクソ馴れ馴れしい好青年野郎である、とか。
どうしてお隣さんではなく真後ろの吾輩に話しかけるのだ、とか。
まま思うところはあつたが、

「つむ、じぢらこそよろしく」

吾輩として最低限、礼節を重んずる人間性は持ち合わせているから
そう返した。

これが、吾輩と“彼”との間で交わされた初の言葉であった。

* * *

吾輩は必ずしも社交的な人間ではなかつたけれども、だからとい
つて“彼”と不仲ではなかつた。どちらかと言えば、親しかつたほ
うであろうと吾輩は思つてゐる。相容れぬ世界の人間であろうと予
想していた吾輩であつたが、意外な接点が、“彼”とあつたのだ。

吾輩の田の前の席に座つて、“彼”は苦惱するヒトのよつに眉根を寄せてつとううなつっていた。“彼”と初の言葉を交わしてから、およそ七日が過ぎた月曜日の朝のことである。

ウソ偽りなく正直に述べて、不快極まりなかつた。なにが嬉しくて新たな一週間の始まりの朝つぱらから他者のそんな顔を見ねばならんのだ！ 吾輩は抗議の意を込めた鋭い眼光をくれてやつた。そうしたら“彼”は吾輩の存在に初めて気づいたふうにじりじりを見やつて、

「あ、おはよ」

なんとも気に食わないことに、嫌味のない健やか好青年的な朝の挨拶を放つてくるではないか。そんなことをされてしまつた日には、「つむ、おはよ」

最低限は礼節を重んずる吾輩であるから、やつ返す。なんだこの健全で健康的な絵に描いたがごとき朝の学校風景は。どうしてよりもよつて氣に食わぬこの好青年とそんな望まぬ風景を描かねばならんのだ。まつたく。遺憾極まりない。 — ニュースの記事でしばしば田にする言葉であるから使用してみたが、どうも遺憾の使いどころを間違えた気がする。……遺憾なこと。

「ところです」

ヒトが遺憾の使いどころにて思考してこゝの話しかけてくるとは、なんとも図々しい好青年である。本当ならば無視してしかるべきなのが、転校早々この学年内において確かな立ち位置を獲得した“彼”である。ここで無視すると吾輩が困つた事態に陥ると容易に想像できるので、「なにか」と応じてやることにした。「これの名前、知つてたりする？」

知らぬわつ！ と一喝してやろうと前もつてのどの奥に言葉を用意しておいたのだが、“彼”が問い合わせと共に差し出したモノを正しく認識して、吾輩は出かけたそれをのどの奥に押し戻した。

問い合わせと共に差し出されたのは携帯電話であつた。そして“彼”は、その携帯電話の待ち受け画面を指して問うつている。

携帯電話の待ち受け画面にあったのは、名作映画である『バック・トゥ・ザ・フューチャー』シリーズの第一作目であるところの『バック・トゥ・ザ・フューチャー？』において未来世界で改造が施され飛行能力が追加されたスーパー・カー型タイムマシンであるところの『デロリアン』が空に軌跡を引いていままさに時空旅行へ飛び立たんとしている図面であった。

「デロリアン」

吾輩がそう口にすると、

「あー！ あー！ そうだ！ そりそりデロリアン！」

長年の苦惱から解放されたヒトのように“彼”は歓喜した。

「自分のケータイの待ち受けなのに名前ど忘れしちゃってさ。一度、気にしだしたら、もうずっと気になっちゃって、五日間の悩みがやつと解消されたよ。いやー、助かった」

五日間もこんなことで苦惱していたとは、「苦労なこと」である。だが吾輩にも似たような経験があるので、まったく理解できないわけではない。お役に立てたならによりだ。

「ところでわ」

一件落着一段落して吾輩がやや油断したところに話しかけてくるとは、なんとも忙しい好青年である。もう面倒臭いので、「なにか」と感じてやつた。

「おもしろいよね、『バック・トゥ・ザ・フューチャー』シリーズ」

「うむ、激しく同意する」

しばしば幻想的空想世界へ逃避する吾輩であるから、それとなく映画への造詣は深く。なかでも『バック・トゥ・ザ・フューチャー』シリーズは、何度も繰り返し鑑賞するほど愛している屈指の作品であった。

相容れぬ世界の人間であるうと予想していたが、それは吾輩がよく知りもしないで一方的に懐いていたモノであり、事実と多少異なるところがあるようなので、これを機に“彼”に対する認識を少々改めることにした。

* * *

国語・英語・数学といつ教科がある。よほど専門的な学び舎でない限りは、誰しも学業に勤しむ課程でかじることになるつと思つ。これら関して、吾輩にはどうしても納得いかぬことがある。この三大教科の成績が優れていれば、他の教科の成績がダメでもその人物を優秀とみなし、逆にこの三大教科の成績がダメだと、他の教科の成績がどんなに優れても問答無用でその人物は否優秀とみなす、もはや疑念すら懷かぬほど。“当たり前”として定着しているかんのある風潮。まつたくもって納得できぬ、というよりは理解できぬ。勉学に勤しむことがとても重要なことであるとは重々承知しているが、しかしだからといって筆記試験において高得点を獲得することが必ずしもよりより人間を育むとは思えないのだ。自分のために勉学に勤しみ高得点を獲得するだけなら言つことはないのだが、しばしば低得点を獲得してしまったヒトを見下すような言動をする者がいる。果たしてそれが優秀な人間のすることだろうか？　点数によつて差別し、それによって競争させて進歩をつながし、下が上を志し、上は下に追いつかれまいとさらなる上を志す、という本来の意味での競争なら

はつ！……少々熱くなつてしまつた。申し訳ない。改めて、單純明瞭に述べさせていただく。

吾輩は、国語・英語・数学が超特大が付くほど苦手であった。

中等部一年、最初の期末試験が終わり、新たな学期が始まった。テストの返却があり、それにともなう喜怒哀楽があつた。数日後、吾輩は担任教諭殿による呼び出しを喰らつた。三大教科の期末試験の獲得点数がずば抜けて危険水域を下回つており非常に危ういから特別補修を受けよ、という用件であつた。頼まれたわけでもなく、一生徒のためにわざわざ給与の出ないサービス残業的な特別補修を開催してくれるとは、なかなか素晴らしい担任教諭殿である。吾輩

は、担任教諭殿の恩義に報いるためにも、心して特別補修を受けるむねを伝えた。

特別補修を受けるのは、どうやら吾輩だけではないらしい。放課後、特別補修が開催される教室に足を運ぶと、そこには先客の姿が二者あつた。親しくしている我が友と、“彼”である。親しくしている友が吾輩と同等の獲得点数水域であることは承知していたが、まさか“彼”も、とは、正直、驚きであった。話を聞いてみると、しかし“彼”は吾輩らとは違うのだな、ということが判明した。

吾輩の通う私学は、他と比べて独白色の濃ゆいところがあった。配布される教科書はすべて独自で製作した物で、だというのにほとんどの教諭が教科書を使用することなく自作のプリントを使用して授業を進めたりする。教科書の購入費用が無駄になつていると思わなくもないのだが、まあそれはそれとして。転校生であるところの“彼”は、転校生であるがゆえにまだこの独白色に慣れておらず。よつて最初の期末試験では、どうにも本領を發揮できなかつたらしい。

もう帰るがよろし！　ここは貴様の来るところではない！　と心の底からズバリ宣告しそうとしたところで、「お、そろつてるな。じゃ、始めるぞー！」担任教諭殿がやつてきた。

これ以後、学期と学年が変わつても、どうしてだか吾輩だけが、まことに不本意ながら特別補修の常連となつてしまつわけだが、それはまたべつのお話。

* * *

そもそも吾輩は、繋がりを脅迫的に強制する感のある携帯電話をあまり好ましく思つていなかつた。電子メールをコミュニケーションと称することに極大なる違和感を覚える部類の人間なのだ。でも、だからと言つて、べつにそれを否定する意があるわけではない。個

人的な価値観の話だ。それに好ましくないと言いつつ、吾輩も携帯電話はいちおう所有している。好ましくはないが、所有していないと不便であることも搖るぎない事実だから。

あるとき、“彼”が吾輩の携帯電話の番号と電子メールのアドレスを訊ねてきたことがあった。それなりに親しくしているのだから、まあ不自然なところはない、とても自然な事柄だ。そのときの吾輩が、たいそう不機嫌であったことを除けばだが。

不機嫌であることの理由は、これといって思い当たらない。ただただ不機嫌であり、ただただ理不尽であった。虫の居所が悪い、といつやつなのだろうと思う。ただこの虫はどうにも日本人の好いところでもある察しと思いやりに欠けるヤツで、じつに空氣の読めないヤツであった。この虫を即刻早急に駆除する殺虫剤を開発してくれる頭脳が出現することを、吾輩は渴望してやまない。

「話しかけてくれるな」

親しき仲にも礼儀あり、という先人のありがたい教えに真っ向から反する言葉を吾輩は吐いた。じつに不快極まる態度で。

「ん？ ……ああ、そう、わかった」

吾輩の中に不法居住している虫と違つて、“彼”は日本人の好いところでもある察しと思いやりを有していた。とくに語氣を荒げるでもなく、ただ事実を理解したふうに言葉を発して、“彼”は自らの携帯電話をポケットに収納し、静かに去つていった。

そして一切の交友が絶たれた、ということは、けれどなく。次の日には、それまでと変わらぬ付き合いがあつた。本当ならば前日の非礼を詫びねばならなかつたのだが、“彼”的変わらぬ対応にあぐらをかいて、吾輩は詫びなかつた。以後、“彼”が吾輩の携帯電話の番号と電子メールのアドレスを訊ねてくることは一切なかつた。

* * *

時は流れ、吾輩は高等部一年となつた。これから勉学に勤しむ拠点となる高等部の校舎は、無計画な増築を重ねた結果、“一年四組の教室は中一階と二階の間にある図書室の前／一年四組の教室は中庭に面した一階で、一組と二組と三組は二階／二年四組の教室は屋上の階段の脇／三年三組の教室は一階にある食堂と職員室と階段の間”といった具合に教室の位置が規則性なくバラバラになつてしまつていて、じつにおもしろかつた。ただ、吾輩が腰を落ち着けることとなつた一年二組の教室には前方にひとつしか扉がなく、消防法的に限りなくアウトなのではなかろうか、なんてことを考えたりした。

そんな非常時には生命の危機が多分に増す教室には、“彼”的姿もあつた。

この頃、吾輩のお話的には“人生における羅針盤的な存在”を喪つたという重大な事柄が起きたりしたのだが、しかし“彼”に関するようなお話はとくにない。いや、強引になにか述べることがあるとしたら、“彼”に彼女ができるということだろうか。まあ、さしたる欠点のない好青年な“彼”であるから、彼女ができるのも自然なことであり驚くほどのことではない。ない、のだが、ナメクジのごとく地べたをヌラヌラ這いつぶばるような生き様の吾輩からして、優雅に空を飛ぶような生き様の“彼”は、じつにつらやましくあつた。

また時は流れ、吾輩は高等部一年となつた。高等部は単位制なので、吾輩としてはとても危ういふうがあつたのだが、どうにか問題なく進級できた。しかし、気づいたときにはもうすでに、小等部の頃から知っている悪友的な立ち位置だつた脇役の姿がひとり分なく、周囲の話では“進級に関する諸事情”で学び舎から去つたとのことだつた。……なんというか、……人生色々である。なむなむ。そして、クラス替えがあつた。“彼”とは別々になつたのだが、選択科目で同じモノがあつたので、“彼”と彼女の姿をしばしば目撃することあつた。けれど積極的に会話することはなかつた。恋

仲のふたりの間に割つて入るよつた不粹なマネ、できよつはずがない。

この頃も、“彼”に関するよつなお話はとくになかつたが、ある意味で吾輩のお話的に重大な事柄が起きた。ある同級生女子のアタックを喰らつたのだ。以後、吾輩は苦しいくらいきゅんきゅんしまくりである。主に胃と腸がつ！ 吾輩は密やかにラヴ・ロマンス的なアタックを渴望していたのに、どうして精神的にネガティブな意味でのアタックが容赦なく放たれるのか！ 世界の最高責任者は吾輩の前にその面を出すがよろし！ 人類史上最上級の土下座をするので吾輩に関する世界の文脈を書き直してください心からお願いします。

願いも虚しく、きゅんきゅんしつぱなしで時は過ぎ去つた。

吾輩は高等部三年となつた。クラス替えはなく、一年の時と同じ顔面の同級生諸君と勉学に勤しむことになつた。またも“彼”とは別々なのだが、またも選択科目で同じモノがあつたので、いつかと同様の絵図らを目撃することとなつた。

この頃は、吾輩のお話的に重大な事柄が起つり、そして“彼”に関するお話でも重大な事柄が起つたりした。まず吾輩のお話的には、吾輩の胃と腸をきゅんきゅんさせてくれ続けた同級生女子が、まさしく掌を返したように、今までの文脈を完全に無視して、「べつに嫌いじゃないの。どちらかと云つて、好き。むしろ、好き」などと意味のわからないことを告げてきたというのがある。今までこちらに対してもジンコの存在感ほども好意的な振る舞いを見せたこともないのに、だ。不意打ちとはこのことか！ 吾輩には新手の精神的にネガティブな意味でのアタックにしか思えなかつた。あるいは世界の最高責任者さんが吾輩の願いをくんぐれてくれたのかもしないが、察するに、世界の最高責任者さんはご多忙すぎてお疲れなのだろう。でなければ、こんないろいろと間違えていることをやらかすわけがない。まあ、その辺りを論じたところで搖るぎない答えがあるとは考へられないでの、端的に結果だけ述べよう。乙女心

はさっぱり理解できない。そして吾輩は、ただただ人間不信に陥つた。

“彼”に関するお話をしよう。高等部三年の最後の学期が中盤を過ぎた頃の、あるときを壇に、まったくもって静かに、地べたにしみた雨水が消え去るよう、「彼」と彼女の姿を学び舎で目撃しなくなつた。

なんと充実した青春だコノヤロー！　吾輩はうらやましきて狂い悶えながらそう思つた。彼女と姿を消すとか、どこの青春映画だよと声を大にして苦情を述べたい。胃と腸をきゅんきゅんさせたあげくに人間不信に陥つた吾輩との、この圧倒的すぎる扱いの差はなんなのだ！　まったくもう！　お幸せい！

* * *

想像と創造によつて生み出されたモノは、

最後の一線、“それ”を生み出したモノに対しても配慮ある優しさを持つている。

吾輩がいつたいなにを述べたいのか伝わり難いところがあるかもしれないで、単純に明瞭に言い表そう。

現実の世界など、極めて醜悪なクソゲーに等しい。

* * *

なんの脈絡もないことだが、どうやら“彼”は、いつの間にか死んでいたらしい。吾輩がその事実を知ったのは、学び舎への登校が残り七日で終わるかという頃のことである。担任である中年の女教諭が、じつにあつさりさつぱりきつぱりと事実のみを告げてくれた。「“彼”が急死しました」と。「高等部三年の最後の学期が中盤を過ぎた頃のことです」と。

なるほどそれなら姿を目撃しなくて当然だ。冷酷と思つヒトもあるだろうが、ウソ偽りなくそれがそのときの吾輩の素直な反応である

つた。涙を流す同級生女子の姿もあったのだが、どうにも吾輩には、それが“ある個人の悲劇的な人生を描いた映画”を見て感動したと公言して泣く者の涙のように感ぜられてしまった。あるいは、涙を流せるその素直さがうらやましかったのかもしれない。

教諭の方々は、高等部三年といういろいろと考えなければならぬ時期であることに配慮して、“彼”についての事実を吾輩ら同級生に告げるか告げないか議論していたらしい。事実があつた時期と、事実を知つた時期に、時間差があるのはそのためである。

告別式は翌日のことだった。各自、自分の意で行つたらよしいとのことだ。

そして。

翌日の放課後、吾輩は“彼”的告別式に出席しなかつた。式場へ行くまでには電車を利用せねばならず、それには吾輩の懐から切符代である百六十円が旅立つ必要があり、懐の事情や様々な要因をかんがみるに、いま切符代である百六十円が旅立つのは賢明ではないと決断し、出席を辞退したのだ。

そもそも、吾輩と“彼”は、最期に別れを告げねばならぬほど特別に親しいという仲ではない。だから吾輩は、切符代の百六十円をケチつたのだ。

それはヒトとしてどうなの、と親しい友に言われた。否定はしない。でも、吾輩は思うのだ。よく知りもしないのに同級生だからと、いう理由で形式的に出席する多数の面々よりは、いくぶんマシだろう、と。

死因に関しては、風にのつていろいろ聞こえてきた。それによつて同級生諸君が“彼”に対してもう一つ心象を持つていたのかが、よくも悪くもよく知れた。

吾輩としては、うらやましいほど充実しているように見えた“彼”が、どうして死ななければならなかつたのか、その理由がいまだによくわからない。世界の最高責任者は、是非とも説明責任を果たしていただきたい。死は、むしろ吾輩のよき隣人だと思つてい

たのに。どうしてそれすら“彼”的モノなのか。切に教えてほしい。

* * *

ナメクジは地べたをヌラヌラ這いつぶばるしかなく、鳥は空を飛ぶしかない。そうする以外、ゆるされていないから。ナメクジと鳥が互いを完全に理解し合えることは、おそらくないだろ。でも、地べたを這いつぶばるには這いつぶばるなりの、空を飛ぶには飛ぶなりの、二者一様の“思うところ”があるから、ふと気まぐれ的に相手の胸の内を察してみたりすることがある。そして自分勝手な思いを懐くのだ。こっちもまあ苦しいが、あんたもまあまあ苦しいようだな、と。お互いボチボチ前に進もづじやないか、と。

* * *

吾輩のお話はまだまだ先へと続くのだが、“彼”に関するお話はここで終わる。所詮は、気分転換であり、気まぐれなのだ。デロリアンの名前を教えていなければ、携帯電話の番号と電子メールのアドレスを教えていれば、あるいは“これ”とは異なるお話になつたのではないか、なんて、そんな“たられば”、べつに考えていいない。繰り返しになつてしまつて申し訳ないが、所詮これは気分転換であり、気まぐれなのだ。そして、これが吾輩のお話であり、同時にまたこのことなき“彼”的お話なのだ。

これは余談、というか真実どうでもいいお話なのだが

キング・オブ・ポップと称され、世界の人々から愛されすぎたマイケル・ジャクソンというヒトがいた。そして彼は突然に急死した。彼を愛する人々の中には、彼はまだ生きていると述べるヒトがいる。馬鹿げた話と嘲笑うヒトもあれば、同情的な目をするヒトもあるが、吾輩はそうかもしれない経験から由来する共感的同意を懷く。街の中を歩いていると、いまでも時々すれ違うことがあるのだ。

名前持ちの脇役と、その彼女の、楽しそうに談笑する姿と

* * *

小話・其の四拾六《すへい》(仮題)》(前書き)

【安全圏からば、じばしづその矢を射る】

小話・其の四拾六 『すくい』(仮題)』

『すくい』(仮題)』

ある国の、ある街の、ある小規模な映画館で、悪党に母親を殺されてしまつた十一歳の女の子が父親と共にガチでヒトを殺しまくる場面の描かれた映画が上映されていました。その映画は、好みが大きく分かれるところですが、なななかの高評価を得て『る』口メディア寄りの作風の作品でした。

「……はあ

その映画を観た、ひとりの女性客が暗い顔をして溜め息を吐きました。

「おもしろくなかったですか？」

女性客の隣にたまたま座っていた、まだ幼さのある少年が、訊きました。

「……いいえ

と女性客は首を横に振つてから、

「評判通り、なかなかおもしろかったわ」

その表情からして、どうにも信憑性に欠ける返答をしました。

「そうですか？ こう言つてはアレですが、おもしろいと思つているヒトの顔には見えませんけど」

少年は遠慮がちに述べました。

「映画全体というか、映画 자체は、とてもおもしろかったわ。でも「でも？」

「まだ幼い十一歳の女の子がヒトを殺しまくるのは、そうせざるえない状況に追いやられて、そうしてしまるのは、救いがなくて、見ていて複雑で、ね」

「そうですか……。ですが、最後は、父親と、途中で出来た仲間と、笑い合える平穏な暮らしを手に入れた場面が描かれていたじゃない

ですか

少年の意見に、女性客は納得できていないヒトの苦い表情を浮かべます。

「ひとつ、言わせていただいてもいいですか？」

少年が、至極真面目な顔をして言いました。

「なにかしら？」

「じつは、ボク」

少年は言い辛そうに口を数回、言葉なく開閉してから、「とある国で、ヒトを殺していました」

「え？」

「ある日、ボクの住む村に反政府組織のヒトたちがやつてきて、銃を撃つて、ヒトを殺して、ボクの家族を殺して、ボクを連れ去つて、ボクを革命戦士にしたんです。ボクは革命のために、革命の邪魔をするヒトたちを銃で撃つて殺したんです。男も、女も、老人も、お腹に赤ちゃんがいるヒトも、ボクと同じ年くらいの子も、ボクより年下の子も、いっぱい殺しました」

少年はそう述べて、女性客の目を見やりました。

「そ、そつな」

女性客は血の氣の引いたふうな顔をして、

「なんとこやか……その、大変だつたんでしょうねえ」

理解あるヒトの引きつった微かな笑みを浮かべ、

「こあと、約束があるから」

まるで待ち合わせの時間を気にするヒトのように、なにもない左腕を見やつて、

「そろそろ、失礼するわね」

そそくさと手荷物をまとめ、足早に去つてゆきます。

「そうですか、それは残念。では」

少年は女性客が扉の向こう側へ消えるのを見届けてから、

「あなたが救いがないと言つた映画ほどの救いも……。ボクの知る

現実にあるのは

「

女性客が座席に残したモノへ手を伸ばし、つかみとり、
「食べ残しのポップコーン」
それを口に放り込み、
「むぐむぐむぐむぐ
食べました。」

小話・其の四拾七『笑い話（仮題）』（前書き）

【“笑”と受け取るかは】

小話・其の四拾七 『笑い話（仮題）』

『笑い話（仮題）』

とある会議室に、複数の人影がありました。

そこでは“＊＊＊＊＊・b”と“＊＊＊＊＊・c”的“ありかた”に関する話し合いがなされていました。

“＊＊＊＊＊・a”に対する“理解／解釈”は個々人それぞれ多様にありますが

ひとりのヒトが、至極真面目に述べます。会議室にある複数の人影は、それを吟味するヒトの顔で拝聴していました。

“＊＊＊＊＊・b”と“＊＊＊＊＊・c”に対する“理解／解釈”は誰にとつても同一の“それ”しかなく

「ふつ！ はははははははは

至極真面目なこの場において、とても不謹慎と思われる笑い声が、話をやえぎりました。

「なつ！ ヒトが真面目に話しているときに、失礼じやないかつ！」
意を述べていたヒトが、当然のように怒りを示し、謝罪を要求しました。

「いやー、はつはー」

笑い声を上げたヒトは悪びれたふうもなく、向けられた怒りを受け流して、

「あなたの“発言は、他の方々には“＊＊＊＊＊・b”と“＊＊＊＊＊・c”のように同一の“真面目な話”として“理解／解釈”されたのかもしれません、いや、どうにも私には“笑い話”に“理解／解釈”できてしまいまして。いやいや、気分を害されたようでしたら申し訳ない」

笑った顔で、けれど音声はそれに反して至極真面目に述べます。

「しかし、“ひとつ”、これで私は気が付けましたよ。そしてあな

たも、お詫びになられたでしょ？」「

「…………なにをですか？」

「ヒトの“理解／解釈”に“絶対的な同一／完全な一致”なんてない」と

小話・其の四拾八『れんじゅう』(仮題)』(前書き)

【よしゅう、ふくしゅう、明日の自分のために】

小話・其の四拾八 『れんしゅう』(仮題)』

『れんしゅう』(仮題)』

ふたりの男の姿が、とあるカフェのテラス席にありました。ひとりの男が、新聞を手に不満そうな顔をして言いました。

「まったく、おい、見ろよこの発言。ふざけやがつて！ この野郎、オレたち国民から“表現の自由”を奪つておきながら、子どもためとか、書あつて一利なしとかぬかしやがる…」

新聞には、ある“表現の規制”に関する最高責任者の発言が書かれてありました。

「なあ、おい、聞いてんのか？ お前だつて納得いかないだろ？ 頭ん中じや、この野郎のことハつ裂きにしたいくらい気に食わないだろ？ 聞いてんのか？ なに悟つた坊さんみたいに穢やかな顔してやがんだよ」

「いやー、だつてさー、その内さー、犯罪行為を“そつそつ”しただけで逮捕されるような世の中になりそだからさー、いまからどんなに気に食わない野郎がいてもハつ裂きにしようなんて“そぞう”しないよう練習しこうと思つてさー」

「マジかよ……。お前、スゲエな」

「いやー、まあー、“表情／おもて”に出でなこよひにするだけで精一杯なんだけどさー」

小話・其の四拾九『おかるべあわの（仮題）』（前書き）

【こつだつて“それ”をおこなうの、 “わたくし達”】

小話・其の四拾九くおやるべやもの（仮題）

『おやるべやもの（仮題）』

とある時代の、とある国の人、とある街の、とある道を、 “あなた”は歩いていました。“しかるべきところ”で“しかるべきところ”を済ませた、いまは帰路の途中です。

突然に。

不意打ち的に。

薄汚れた身なりをした男が、進路をふさぐよつとして“あなた”的前に出現しました。“あなた”は華麗なる動作でスルーしようとしましたが、

「なあ、オレの話を聞いてくれよ」

男は意思を持つて、“あなた”に道をゆずりません。
どうにか回避しようとした、“あなた”は無音無動作の攻勢に打って出ます。

しばし、静かな戦闘が繰り広げられました。

が、男には一切の隙がありませんでした。

結果的に、“あなた”はいたしかたなく耳を貸すことになりました。“こんな身なりしてるから、きっと察してくるだらけれど、オレ、なにも食べてなくてさ、もう三日以上でさ、ものすくなく空腹でさ”
男は、けれどして悲壮感もなく言つて、

「そうしたらね」

歓喜するよつて、

“核兵器よりも強力なモノ”をや

満面の笑みを浮かべて、

所持することになつちやつてさ

優越感に溺れているヒトの雰囲気で、そう述べました。

そんな話を聞いた“あなた”は、意を理解できていないヒトの表

情をします。“核兵器より強力なモノ”がいったい“なに”であるのか。そもそも“そんなモノ”を、この“なにも持っていないふうな身なりの人物”が所持しているのか。

と、“あなた”が懐いた疑念は、じつに一方的で唐突な“まったく歓迎できない事態”によつて解消されます。

男が、一本のナイフを取り出しました。

男は、不特定多数のヒトと共存するための価値観を持ち合わせていないヒトの顔をしています。

“躊躇わぬナイフ”的先が、“あなた”を捉えます。

小説・其の五拾『題名は文末に（仮題）』（前書き）

【節操なく、“意味／価値”を見出す】

小話・其の五拾『題名は文末に（仮題）』

『題名は文末に（仮題）』

とある時代の、とある国、とある寂れた公園に、ひとりの男の姿がありました。頭部にあるべき髪の毛はキレイに剃られており、代わりに『！』の形をした“のり”がひとつ後頭部に貼られています。身体に衣服はなく、隠す役割を果たしているのは、乳首のところにそれぞれ貼り付けられたピース・マークのシールと、股間のところにある束ねられた彼岸花だけでした。

男は走っていました。滝のように汗を流し、苦しそうに息を切らせていました。多分に肌の露出した身体からは、湯気が立ち上っています。

必死の形相で、男は走っていました。しかし、男の身体は、その場からまったく移動していませんでした。

男は、ルームランナーの上で走っていました。青空の下、心地よいそよ風の流れる公園で。わざわざ“それ”を持ち込んで。

公園という場所なので、もちろん男以外にも多数のヒトの姿がありました。そしてもれなく、その多数のヒトの目は、男を眺めています。

ともすれば、ともしなくとも、とても目立つ男は、警察に通報されてもおかしくありません。ですが、そうするヒトの姿はありませんでした。通報するどころか、感慨深そうな表情をしているヒトの姿があります。

ルームランナーの前に、スケッチブックが置かれてありました。そこには、太い文字で大きくわかりやすく、『題名【】』と書かれてありました。

空が青色から黄緑色に変貌する頃になると、眺めるヒトの姿が徐々に減つてゆきました。そして街灯に灯りがともる頃には、眺める

ヒトの姿はなくなっていました。けれど男は、まだ走っていました。

翌日。

男の姿は、昨日と寸文の狂いなく同じ場所にありました。身なりも、まったく同じです。それもそのはず。この男は、昨日から休みなく走り続けているのです。

そのことを知った眺めるヒトのひとりが、ルームランナーの前にあるスケッチブックの前に空のお菓子の缶を置きました。そしてお財布をひっくり返し、ありつたけの小銭をそのお菓子の缶に入れました。

翌日。

男の姿は、昨日と寸文の狂いなく同じ場所にありました。身なりも、まったく同じです。それもそのはず。この男は、昨日から休みなく走り続けているのです。

そのことを聞きつけたマスクミが、男を取り材しに訪れました。そして「あなたは、なぜ走っているのですか?」としました。

男は黙して走り続けます。

「争いをやめない者たちへの抗議ですか?」

男は黙して走り続けます。

「平和への訴えですか?」

男は黙して走り続けます。

「貧しい子どもたちへの寄付金を集めるチャリティー・パフォーマンスですか?」

男は黙して走り続けます。

男は、その日のトップ・ニュースに取り上げられました。

翌日。

男の姿は、昨日と寸文の狂いなく同じ場所にありました。身なりも、まったく同じです。それもそのはず。この男は、昨日から休みなく走り続けているのです。

そのことを聞きつけた知識人たちが、こぞって意を述べました。男のやつていることの意味や価値を、各自好き勝手に、そもそもが唯一無二の正解であるかのようにマスメディアを通じてうそぶきました。

流行に影響されやすい鋭敏なヒトたちが、知識人が意を述べるようなスゴイ人物を一目見ようと公園に殺到しました。

それに比例して、スケッチブックの前に置かれたお菓子の缶に投入されるお金が増えてゆきました。ついには缶から溢れてしまい、見かねた誰かが新たにひとつ缶を設置しました。

しかし男は目の前で増えて溢れるお金に一切の興味を示さず、ただその場で走り続けます。

翌日。

男の姿は、昨日と寸文の狂いなく同じ場所にありました。身なりも、まったく同じです。それもそのはず。この男は、昨日から休みなく走り続けているのです。

そのことを聞きつけた感化されやすいヒトたちが、男の真似事をやりだしました。崇高な“なにか”を魂で感じたんだ、と感化されたヒトのひとりが神妙な顔をして、マスクの取材に返答していました。

知識人たちは、新たな宗教の誕生を目の当たりにしていると述べました。

男はどんどん有名になつてゆきました。それに比例して、生たまごを投げつけたりといふ、男のやつていることを否定する意も出できました。

しかし男は生たまごで身体が汚れたことになど一切の関心を示さず、ただその場で走り続けます。

翌日。

男の姿は、昨日と寸文の狂いなく同じ場所にありました。身なりも、まったく同じです。それもそのはず。この男は、昨日から休みなく走り続けているのです。

そのことを聞きつけた男を知るヒトたちが、真偽を確かめるように訪れました。そして走っている男がまぎれもなく自分の知つている男だと確信を得て認識すると、各自とても驚いたふうを顔面を使つて表現します。

男を知るヒトたちであると知ったマスコミが、彼ら彼女らに喰い付きました。男はいつたい何者であるのか。男はどうして走っているのか。いまの男を見て、どう思うか。

数多くのカメラや好奇の目を向けられた男を知る彼ら彼女らは、まるで有名芸能人になつたかのような高揚感に囚われました。振る舞いまで、どこかそれっぽく高慢です。男がスマートことをやる大変優秀な人物であると以前から見抜いていた、と口をそろえて当たり、さも自分がそんな男と同等の人物であるかのように言葉の裏で主張します。

しかし男は好き勝手に言葉を吐く彼ら彼女らになど一切の意識を向けず、ただその場で走り続けます。

翌日。

男の姿は、昨日と寸文の狂いなく同じ場所にありました。身なりも、まったく同じです。それもそのはず。この男は、昨日から休みなく走り続けているのです。

そのことを聞きつけた近所の子どもたちが、学校帰りの途中、見

物に訪れました。保護者や学校からは、公園の走る男・見物禁止令なるモノが発せられているのですが、それで子どもの好奇心を抑制することはできないようです。

有名な芸術作品を鑑賞するような顔をしている大人たちの間から、子どもたちは話題の公園の走る男を見やりました。そして、

「マジかよ……」

子どもたちはいちょうに落胆したふうに、

「……ぜんぜん、おもしろくないね」

感想を述べました。それから周囲の大人たちの顔を見やつて、走る男を見やつて、

「ぐだらない……」

じつにきつぱりと批評します。

それを聞いた周囲の大人们は、いちょうに自分より下の“わかつてない”存在を見やるような目で子どもたちを見やりました。

それを聞いたルームランナーの上で走る男は、その場で走り続けた脚を、止めました。

あまりにも不意の出来事だったので、数泊遅れてざわめきが起きました。一部の大人们は単純に驚き、一部の大人们は責めるような視線を子どもたちに向けました。

ついに走るのを止めた男は、周囲の反応に一切の感慨を示さず、けれど歓喜するヒトの笑みを満面に浮かべて、

「ありがとー！」

感謝の言葉を大きく発しながら、批評した子どもに抱きつきます。抱きつかれた子どもは、心の底からイヤそうな顔をして、拘束から逃れようともがきます。

ハゲ頭の後頭部に『ー』の形をした“のり”が貼られ、乳首のところにそれぞれ貼り付けられたピース・マークのシールと、股間にところにある束ねられた彼岸花だけという、ほぼ全裸の姿をした男が。滝のように汗を流し、苦しそうに息を切らせ、多分に肌の露出した身体から湯気を立ち上らせている男が。イヤがる子どもに抱き

ついている絵図らが、そこにありました。

大人たちはどうするでもなくその光景を眺め、抱きつかれた子どもと共にこの場に来た子どものひとりが慌てたふうに携帯電話を取り出して“しかるべきところ”へ電話しました。

権力の象徴の制服に身を包んだ方々が、権力の象徴たる彩色のされた自動車を駆り、子どもからの通報を受けて、迅速に参上しました。

数多くのヒトの目があるので、とりあえず詳しい話は“しかるべきところ”でということになり、走っていた男は、権力の象徴たる彩色のされた自動車に押し込まれました。その間も、それ以後も、男は歓喜しました。

男に感化されて真似事をやっていたヒトたちが、まるで信仰の対象を失ったヒトのような表情を浮かべて、男を乗せた自動車の去りゆく後姿を眺めていました。

奇妙な熱気と賑やかさのあつた公園内に、妙な静けさが生じました。

男が走っていたルームランナーの前に置かれていたスケッチブックが、不意と倒れました。

スケッチブックの前に置かれていたお金の溢れている缶が、倒れてきたスケッチブックに、不意と小突かれました。

不意と衝撃を受けたお金の溢れている缶から、お金がこぼれました。

妙な静けさのある公園内に、お金の落ちる音が明瞭に響き渡りました。

公園内にある数多くの耳に、その音は明瞭に響き渡りました。

公園内にある数多くの目が、無抵抗主義者のごとく置かれてある溢れるお金を見やりました。

公園内にある数多くの利巧な獣の目が、愛想笑いを浮かべて、互いの間合いをはかります。

* * *

とある時代の、とある国の、とある街の、とある人通りの少ない路地裏に、ひとりの男の姿がありました。愛想の悪い顔をして、身には上下揃いの黒のジャージを着ています。いまは、「コンビニで缶ビールを買った帰路の途中です。

男の進路を作為的にさえぎるよつに、"なにか"が落ちてきました。男は「チツ、あぶねえーなつ！ クソ！」と黄昏色の空に向かって悪態と吐き、それからなにが落ちてきたのか気になつて、道ばたにある"なにか"をよくよく目を凝らして見やります。

そこには、一冊の黒いノートがありました。外装が真っ黒という以外は、いわゆる大学ノートのそれと同じです。

男は、空から黒いノートが落ちてきた不自然さに、深い疑念を懷きました。 が、考えたところでなにがわかるわけではないので、とりあえずその黒いノートを手にとつてみます。当然のよつに、ページを開きます。表紙の裏面も真っ黒で、そこには白色で文字が書かれてありました。

顔を思い浮かべながら名前を記入すると、その人物の命を奪うことができる、あの有名な黒いノートか、これは。 と、男は直感的に思いましたが、白色で書かれてることをよくよく読んでみると、まったくそうではないことがわかりました。

これは、"誰か"の願いをひとつだけ叶えるノートです。叶えられる願いは、このノートの使用者につき、ひとつだけです。願いは、どんなことでも可能です。下記、このノートの使用方法。願いを叶える対象となる人物の氏名・年齢・生年月日を記入してください。その人物の身に起こつてほしい願いを記入してください。このノートを使用する、あなたの氏名・年齢・生年月日を記入してください。このノートを使用する本人照明として、あなたの血判を押してください。このノートの使用方法は以上です。

そんなことが、そこには書かれてありました。

「は、そりゃあいい」

男は、まったく信じていませんでしたが、お遊び的に黒いノートを持ち帰ることにしました。

そして。

帰宅した男は、まずなにより優先して買つてきた缶ビールに口をつけました。それから冷蔵庫をあさり、さりうりの浅漬けとキムチというなかなかよろしい感じのお供を酒の席に迎え入れます。ビールを嗜む勢いが、ぐぐっと増します。

六本目を飲み干して、なんとなく愉快な気分になつてきた男は、「ん？ なんだこのノート？」

ふと氣まぐれ的に、ほっぽられてあつた黒いノートに意識を向きました。どうやら、自分で拾つてきたことは、すっかり忘れてしまつているようです。

男は愉快な気分に先導された好奇心から、黒いノートを手にしました。当然のように、ページを開きます。

「んー？ なになに？ 諸いを叶えるだあ？ ずいぶんとまた氣前のいいことぬかしてくれるなあ、おい！」

酔っ払いのノリで言いながら、男はボールペンを取り出して、黒いノートに必要事項を記入してゆきます。

「ああん？ 血判だあ？ おもしれえこと要求してくるなあ、おい！」

愉快な気分によつて冷静な判断力が低下しているのか、男は台所から包丁を持つてくると、なんの迷いもなく親指の腹を浅く切りました。当たり前のように出血します。

「ほりよつ」

と掛け声を発しながら、男は出血した親指を、ぐいと必要事項を記入し終えた黒いノートに押し付けました。そして血によつてべたりと紙面に密着した親指を離すと、そこには指紋の形がよくわかる

血色の印がありました。

「…………」
男は客人の来訪を歓迎するヒトのように“それ”を待ちましたが、
「…………なんにも起こらねえじゃねえかこのクソが！」

結局、男が願つた“それ”が起ることはありませんでした。男は悪態を吐いて黒いノートをぶん投げると、それと一緒に意識までぶん投げてしまつたらしく、電池の切れたおもちゃのようにそのままガツクリと寝てしまいました。いびきが室内に轟き、来るべき静寂の訪れを阻害します。

翌日。

扉と一体化した郵便ポストに“なにか”が投函された音と、バイクの去りゆくエンジン音に、男は起床をうながされました。薄く目を開くと、カーテンの隙間から射す朝の光に目を焼かれ、

「…………」

反射的に手をやつて影を作り、

「クソ、もう朝か…………」

どうにもスッキリしない目覚めに苛立ちつつ、あぐびを噛み殺して、だるい身体を叱咤し、起き上がります。そして朝の習慣として、緩慢な動きで新聞を取りに向かいます。

新聞を持つて戻る途中、男は台所に立ち寄つて水を一杯ぐびぐびと飲んでのどを潤しました。

戻り、腰を下して。男は新聞を広げました。不景気な顔をして、不景気な言葉の躍る紙面を見やります。

「…………ん？」

あるページを開き、男の思考が一時停止しました。

「…………じゆこと？」

そこには、この国で一等賞金が最高額の“くじ”が一枚、潰した

米粒で貼り付けられてありました。その“くじ”的横には、この国で発行されている“くじ”的当選情報が書かれています。

「まさか、な」

謙虚さのような理性で否定しつつ、男は貼られてある“くじ”と当選情報を見比べました。まったく根拠のない期待に由来する下品な笑みが、その顔に滲み出ています。

「おつと……」

その瞬間、男の思考が完全に停止しました。

そこにある“くじ”と、
そこにある当選情報が、
完全に一致していました。
一等のところで。

その瞬間から、男の生活は一変しました。

男は成功者がステータスとして住む一等地にある高級高層マンションに居を移し、ブランド物の衣服に身を包み、実用性のない豪華な腕時計をして、希少で高級な酒を水道の水が」とく胃に流し込み、豪華で高価な食事をコンビニ食品がごとく胃に詰め込み、そして知り合いのヒトたちにお金のある贅沢な苦悩をとつとつと語つて聞かせました。

そして時は流動し、一ヶ月後。

男が大型の最新テレビで映画を鑑賞していると、インターフォンが鳴りました。懐が潤っているヒトが多く住むマンションなので、外部の者がエントランスホールに入るためには、住人に許諾を貰つて扉を開けてもらわなければならず、エレベーターも許諾がないと使用できない仕様なのです。

「ん？ 誰だ？」

男は懐が潤つているヒトの余裕ある寛容な態度でテレビのリモコンを操作し、画面を分割に切り替えました。右には無音で映画が流れ、左には黒いスーツ姿の男が映し出されます。テレビとインター フォンが接続されており、テレビのリモコンにマイクが内蔵されてるので、座り心地のよい高級ソファーから重い腰を上げることなく呼び出しに応じることができるのです。

「はい、はい、どちら様ですか？」

「あ、どうもー。わたくし

画面の中の黒スーツは、

「あなた様から、契約に対するしかるべき“返済”を受け取りに参った者ですー」

よく訓練された営業スマイルを浮かべて、述べました。道化師じみた仄暗い得体の知れなさが画面から滲み、伝わってきます。

「契約？　返済？　なんのことだ。そんな憶え、こいつには一切ないぞ」

「おやおやー、まさかしらばっくれて踏み倒すおつもりですか？」

「踏み倒すもなにも、憶えがないと言つてるだ奴うー！」

男は不快感を隠すことなく言つてから、はたと状況を見抜いたヒトの表情になり、

「いや、なるほどなるほど。この悪徳業者め、因縁をつけて金を奪い取ろうといふことなんだなー！」

ズバリ指摘しました。

が、指を向けたテレビ画面の左に黒スーツの姿はなく。

「まったく、ずいぶんとまた失礼なことを言つてくれますねー」

音声は、テレビのスピーカーからではなく、

「わたくしは、正直に交わされた契約に対する“返済”を受け取りに参つたといひのに」

男の左耳のすぐ隣から聞こえてきました。

「なつー！」

突然の理解し難い事態に、男は冷や水を浴びせられたような怖気

を感じて、

「なななぜつー！」

けれど腰が抜けてしまい、高級ソファーの上から動けず、「どどどつしてここにつけー！」

気力を決死総動員して、その言葉を投げつけるのがやつとでした。「ですから、先ほどから申しておりますとおり」

黒スーツは忍耐力のあるヒトの営業スマイルを浮かべて、「わたくしは、正當に交わされた契約に対する“返済”を受け取りに参ったのです」

高級ソファーに座して動けない男の両肩に、やつと手を置きます。「ひいつー！ だ、だからさつきから詰つてるだれつ、じつちにそんな憶えないんだ」

男は身をすくませながらも、「んなことに至る記憶が本当にないことを訴えました。

「ひ、人違ひじやないのか？」

「いいえ、確實にあなた様です」

黒スーツは言い聞かせる柔らかい口調で言い、それから手品のように一瞬さで、すつと男の目の前に一冊の黒いノートを出現させます。

「これに、見憶えがいりますでしょつ？」

「こんなの」

男は、脳みそではまったく心当たらない“ドキリ”を、「どこにでも売つてこる、ただの、やつただの、ノートじやないか」胸の内で“ドキリ”と響きながらも、

「これが」

口先に限つて、強気にチャレンジャー精神を發揮しました。

「これが、なんだと言つんだあ」

発音は内心に忠実で、尻つぼみにか細く消えてゆきましたが、

黒スーツは余裕あるヒトの営業スマイルを浮かべたまま、

「では」

と、黒いノートを開いて、

「ひづらは、記憶にござりますでしょ？」

突きつけられよつて、文字の書き込まれたページを男の視界に置きます。

「だから？」

男は反射的に“知らぬ”と言おうとして、

「 つ！…………これは、……まさか

しかし視界に置かれてある“それ”には、どうしようもなく、憶えがありました。

「おお！ 思い出していただけましたか」

黒スーツは、やつと話を進められることに「ほつ」と微笑を浮かべてから、

「 では

と、事務的な作業を処理するヒトの顔になります。

「ここに書かれてあります、あなた様のあなた様に対する“いまより金持ちになる”という願いは叶えさせていただきましたので、契約の取り決めに基づきまして、“いまより金持ちになる”という願いと相応の“返済”を、お納めください」

「 は？ ちょっと待て待て待て

「 はい？ なんでございましょう？」

「確かに、確かにあの黒いノートに“いまより金持ちになる”と書いた。そこは潔く認めよう。 だが、だがしかし、だ！ あの黒いノートの使用方法に、“返済”なんて言葉、一文字も書いてなかつただろ！ これは明らかにそつちの不正請求だ！」

男は一変して勝利を確信したヒトの表情になり、そう言い切りました。

「いいえ」

黒スーツは、想定の範囲内の事態を冷静に処理する熟練者の営業スマイルを浮かべて、

「“返済”に関することも、しっかりと記載させていただいており

ます」

黒いノートの裏表紙の裏面を開いて、男に提示します。そこには、表紙の裏面と同様に、白色で文字が書かれてありました。

「こんなの、気づくわけないだろ！ 不正だ！ 不正当だ！」

男は保身するヒトの勢いで抗議しました。

「……と、申されましても。とくに小さな文字を使用しているわけでもなく、黒地に白字という読みやすい配色でありますし、こちらと致しましては、課せられた責務はきちんと果たしております。不正だ、不当だ、と責められるゆわればございません」

黒スースは、冷氣の滲む不動さで言葉を返し、

「そもそも、一度交わされた契約は、いかなる理由があらうとも、一切の例外なく破棄することができません。これは一方的なモノではなく、お互いに“そう”なのです」

余地も猶予も容赦もないといつ、いまにして横たわる搖るぎない事実を淡々と告げました。

「…………参考までに」

男は迷路からの脱出路を模索するネズミのような慎重さで、口から言葉を発しました。

「これはあくまでも参考までに、だ。決して承知したわけではないぞ。いいな」

「はい。参考までに、ですね」

「そうだ。参考までに、だ。……で、訊くが、その願いと相応の“返済”については、いつたいどういうモノなんだ？ なにを“返済”しようと要求しているんだ？」

男も多少は鋭さのある脳みそを持ち合わせていましたが、“金持ち”にした相手から“金”を要求することはないだろうと考え至つており、そしてだからこそ、いつたい“なに”を“返済”として求められているのか、想像できない怖気を感じていました。

「願いと相応の“モノ”である、としかお答えすることができません

ん

黒スースは、苦慮するヒトの表情をして言いました。

その曖昧さに、

「なんなんだよ！」

男は“形容し難いモノ”が足元からヌラヌラと這い上がりてくる
ような不安を覚え、

「なんだよ、おい！ ハツキリしろよ…」

追い詰められたネズミがネコを噛むような勢いで、
「臓器か？ え、臓器なのか？ 臓器が用當てなのか？」
と、大量の唾液と共に、言葉を口から吐き出しました。

黒スースは首を横に振り、上品な静かさで“その可能性”を否定
します。

「まさか

男は息をのみ、

「“いのち”か？」

ウソ偽りを渴望するヒトの眼をして、訊きました。

黒スースは、アメリカン・コメディーを見て義務的に笑うヒトの
ように乾いた音声を口から出しました。

男は、不安そうに唾液を嚥下します。

「いただけるのでしたら

と黒スースが口にした瞬間、男はこの世の終末を悟つた賢者の顔
をしてうつむきました。

「いただきたいところですが、“相應の”といつ決まりに忠実である
ことが、こちらの誇るべき流儀ですか？ おや？ どうされ
たのですか？ 熱心に床を凝視なさつて」

「へ？ あ、いや……」

“いのち”と“あんなモノ”が相応であるわけがないじゃないで
すか。これであなた様の“いのち”を“返済”としていただいて
しまつたら、あまりにも過請求で、わたくしが同志に肅清されてし
まいりますよー」

黒スースは、親しいヒトのくだらない冗談に応じる碎けた姿勢で

述べました。

「じゃあ！ じゃあなんだつてんだ！」

男は苦惱することに胸の内が參つてしまつた悲痛さの滲む音声で、
「なにを“返済”しろって言うんだよお
赦しを請うふうに言葉を吐き出しました。

「んー、ですから、“相応の”としか言い表しようがないのですよ
ー。決まつた“カタチ／名称”があるモノとは限りませんので
という黒スーツの言葉に、男は悲愴な表情をします。

「百聞は一見にしかずと申しますし

黒スーツが、“やつと”といつぶつな少々の疲労と少々の喜びが
ある顔で発言し、

「では、さくつといつてみましょうか

パチン、と指を鳴らしました。

「へ？」

部屋の電灯を消すよに、

世界が暗転しました。

男が肌に感じていた辺りの空氣感が豹変しました。嗅覚にくるモノも、自室の“それ”とはまったく異なります。

暗転から、急速に光が再来しました。

「へー！」

男の“視覚／脳みそ”が“眼のくらみ／思考の停止”から復帰し、
“いまそこにいる風景／いまここにある現状”をざっくりと把握するまでには、しばしの時を消費しました。

「…………じゆこと？」

そこには、まったく見憶えのない公園の風景がありました。他者の姿は、いまのところ見あたりません。

「あなた様には

「

黒スーツはその表情に一切の驚きの色なく、冷然と当然のことの

ように“これから男がおこなわなければならぬこと”返済”について説明します。

「いまから“返済”としての“おこない”として、この公園でなぜかルームランナーの上で走らなければならない」と。そして七日以内に、“金持ちになる”という願いに対する“返済”としてのその“おこない”の“本性”を誰かに言い当てもらわなければならぬこと。もし仮に言い当てもらえなかつた場合、期限を一日過ぎる毎に寿命の半分が利子として徴収されてしまうこと。“返済”が終了するまでは、肉体が疲労を訴えることはなく、食欲・睡眠欲・性欲・排泄衝動とも無縁でいられること。などなど。

男は戸惑いながらも話を聞き、そしてその話の流れから、今現在の自分の身なりに初めて意識が向きました。さきほどまで確かに着ていたブランド物の衣服がまったく見あたらず、いま確かに見えるのは、なぜだかよくよく見えすぎている自らの肌色と、なぜだか胸部にある円形の黄色がふたつと、なぜだか股間にある彼岸花の色だけです。

「……………どういとく?」

到底、理解できぬが起こり、男の脳みそは焼き切れようとしていました。

「お、おお前はいつたい何者なんだよお」

現状の元凶であろう黒スーツに対し、男は底知れぬ怖氣を覚えました。

「自分が何者であるのか。果たしてその間に正しく答えられる存在はあるのでしょうか?」

黒スーツは、男の混乱具合を正しく認識していましたが、わざわざ“それ”を解消するための助け舟を出すといつことはせず、

「ああ、それから」

と、ただ事務的な口調で述べます。

「あなた様がこれからおこなう“返済”に関しては、一切の例外なく他言禁止でござりますから、ご留意くださいませ。禁を破つ

た場合に関しましては、まことに心苦しいところではござりますが、あなた様の“生命／いのち”の保証が一切なくなります

「え、え？」

男は混乱したまま、けれど身体が“そうしなければならぬ”と勝手に動いてルームランナーの上に乗りました。そして男の脳みそを無視して、男の手は勝手にルームランナーを起動させ、男の脚は勝手に走り始めます。

黒スーツは“ようやく”といったふうにひと息、吐いてから、つかの間の達成感を味わう表情を浮かべます。

思い出したふうに、黒スーツはパチンと指を鳴らして手品的にペントスケッチブックを出現させました。ページを開き、流れる動作で“なにか”を書き込みます。そして“それ”を、男が走るルームランナーの前に置きます。

「んー、これはなかなか」

黒スーツは少し距離を作つて遠田から“走る男”を見やり、言いました。

* * *

とある時代の、とある国の、とある寂れた公園に、“なにか”に熱狂する人々の群れる姿がありました。そしてその脇に、なぜかルームランナーがぽつりと置かれてありました。

「不法投棄はいけないことだから、そういたしかたなく、“これ”は私が処理しましょう」

誰に対するモノなのか定まりのない言葉を発しながら、誰かが“それ”を持ち去りました。

しばしの時を経て。

公園からヒトの影が消え去りました。もうこの場に居る“価値／

意味”はないと吐き捨てるよし、缶やペットボトルや吸い殻やスケッチブックなどのゴミがちらほら置き土産されてあります。

今まで通りの“寂れ”を取り戻した公園に、どこからともなくヒトの影のような存在が現れました。黒いスーツを着たヒトのよな姿をしています。

黒スーツは、足元にあつたスケッチブックを拾い上げました。それには、“題名【 】”と書かれてありました。パチン、と指を鳴らして手品的にペンを出現させます。流れる動作で“なんか”を書き込みます。そして書き終えると、そのスケッチブックをゴミ箱へ捨てました。

* * *

とある時代の、とある国の、とある寂れた公園のゴミ箱に、スケッチブックが捨てられてありました。

題名【ぐだらない】

と書かれたスケッチブックが、捨てられてありました。

小話・其の五拾壱くさかな(仮題)』(前書き)

【美食家は“美味”を欲す】

小話・其の五拾壱さかな（仮題）

《さかな》（仮題）

ひとりの男が、ギターをかき鳴らしていました。整った見てくれをしていたので、ギターを鳴らすその姿は、なかなか栄えています。そんな男の前に、ひとりの女性の姿がありました。度数の強い酒を何杯も飲んだとのよつた表情をしています。

そして。

男はギターを鳴らし終えました。全力をそいでいたので、全身から汗が噴出していますが、煌めく“それ”は、この場においてはカッコよさを演出する要因でしかありませんでした。

「キミにい！　言いたいことがあるう！」

男が微妙にイントネーションのずれた言い回しで、田前の女性に言葉を投げました。

女性は、なにかを期待する煌めく眼差しで肯き、それを受け取ります。

「キミもおーーこのギターのよつこーー オレのゴッドファインガーに鳴らされてみないかあああ、こつーー」

終止符を打つように、男は「こつーー」の最後にギターを鳴らします。

女性は、頭から冷や水を浴びせられたヒートのよつて、煌めきの失せた醒めた眼差しで男を見やり、

「…………」

言葉もなく去ってゆきました。

* * *

とある時代の、とある国との、とある町の、とある小汚くて狭い居

酒屋にて、店主を除いてふたりの男の姿がありました。整った見てく
れをしている男と、整っているとは言い難い見てくれをした男です。

「ちくしょおおおー！」

つこ数時間前までギターをかき鳴らしていた整った見てくれの男
が、叫びと共に酒をかつ喰らいました。速やかに空になつたジョッ
キを、胸の内の代弁者としてガシンとテーブルに叩きつけます。

「どおおおしてつーーどおして、どこつもこつも女はオレに振り
向かないんだあ！　ちくしょおおおー！」

と嘆く男の“本日の出来事”を聞いた、整っているとは言へ難い
見てくれの男は、

「まあ、まあ、ほり、飲もう飲もつ」

と、なだめるように肩をポンと叩きつつ、どうして彼が女性に振
り向かれないのか、だいぶ以前から容易に心当たりがついていまし
た。場の雰囲気にに対する“言葉／コード”の選択を間違えている
と。しかし、あえて教えることほじしていません。

「へわおおおー！」

と叫び一発、また酒をかつ喰らいつ男を見やりながら、

「お前と一緒にだと」

心当たりを持つ男は、

「じつに“うまい”酒が飲めるよ

そよ風のような微々たる音声で述べ

最高級の酒の肴を嗜む美食家のような上品さで、抜群な蒸留酒を
なめました。

小話・其の五拾弐 〈毎日と突然（仮題）〉（前書き）

【意外と大切なモノだつたり】

小話・其の五拾弐 『毎日と突然（仮題）』

『毎日と突然（仮題）』

毎朝、私は時間厳守で行動します。朝六時起つかりに起床し、その五分以内にお手洗いへ向かい、それから五分以内に手と顔を洗い、朝六時半には朝食を食し、軽くシャワーを浴びてから、朝七時半までに家を出ます。

そして。

休日を除く毎朝、朝八時一分前、私はその横断歩道で、前方からやつてくる“迷惑な事態”とすれ違います。

「ンン・ランルー・タイ・スー・マイスー・マイスー」

カツチリとした黒のタキシードに身を包み、頭には洒落た黒のシリクハットをかぶり、手にはステッキの代わりにビニール傘を持ち、背筋をしゃんと伸ばした、いかにも紳士然としているナイス枯れ具合の老いた男性。 見てくれだけなら、そつとずつと“愛でていたくなる／眺めていたくなる”ほど申し分なくよろしいかんじの彼が、哀しいかな毎朝の“迷惑な事態”的元凶でした。

「ンン・ランルー・タイ・スー・マイスー・マイスー」

意味のある言語なのか、意味のないただの音なのか、わからないし知る気もないのでですが、

「ンン・ランルー・タイ・スー・マイスー・マイスー」

この見てくれだけナイス老紳士は、

「ンン・ランルー・タイ・スー・マイスー・マイスー」

と、周囲に対する配慮の一切ない大きな音声を口から発しながら、「ンン・ランルー・タイ・スー・マイスー・マイスー」
毎度「マイスー」と发声し終わると同時に、手にあるビニール傘をぐるりんと一回転させるのです。

不幸中の幸いにしてヒトの往来が激しい横断歩道ではないので、

最悪の事態が発生してしまったことはありません。　が、大声だけならまだしも、ビニール傘の一回転は迷惑なうえにとても危険な行為です。やめていただきたい。

そう思いつつも、私を含めたこの時間この横断歩道を利用する“誰も”が、今まで彼に対しても注意を述べたことはありません。彼が近寄りがたい雰囲気の人物であること、朝の忙しい時間ですからそんなことをしている余裕がないこと、なにより“誰か”が注意を述べてくれるだろうという“誰か”に対する根拠なき信頼感がありますから、どうにも“誰か”に対する謙虚さのようなモノが生じてしまい、“あえて自分が述べること”が躊躇われるのです。

雨の日も、雷の日も、雪の日も、暑い日も、寒い日も、彼は寸ぶんの狂いなく“迷惑な事態”的元凶をしていたので、もはや私は諦めといふか無関心の境地に移行していく、もつ“それ”が当たり前に感じるくらいになつていきました。なので本日も、迷惑だなあという意を毎朝の恒例行事的に懐きつつ、毎朝と同じよつと一回転するビニール傘のない彼の右側を通行しました。沈黙と傘は回転させるものではないことを覚えてくれたら、本当にとてもよろしい“おじさま”なのに、じつにもつたいたいない、　と、しみじみ思ひながら、すれ違いました。

翌日。朝八時一分前。いつもの横断歩道。

なんら脈絡もなく突然に、じつにあつけなくあつさりと、毎朝恒例の“迷惑な事態”は終了しました。前方からやつてくるはずの見てくれだけナイス老紳士の姿が、どこにもありません。

私を含めたこの時間この横断歩道を利用する“誰も”が、「え？」とこう不意打ちを受けたような気分になり、“誰も”が誰にでもなく「どういうことなの？」と問うような薄い愛想笑みを浮かべました。もちろん、答えが返つてくることはありませんでしたが、せいせいしたような気分を味わえたのは、けれどその最初の日だ

けでした。どこかで翌日になればまた毎朝と同じに戻ると信じていたから、一時の違いをよろしいふうに感じられたのでしょうか。

不意打ちのような事態から一夜明け、翌朝。朝八時一分前。いつもの横断歩道。

「ンン・ランルー・タイ・スー・マイスー・マイスー」

という迷惑な音声を耳にすることも、一回転するビニール傘を避けて通行することもありませんでした。見てくれだけナイス老紳士の姿は、影も形も気配も兆しすらもありませんでした。

その翌朝も、そのまた翌朝も、そのまたまた翌朝も

いつの間にか、彼と再会することを切望している自分が存在することに気がつきました。やめてほしいと変化を求めていたのに、“そう求めていられる変わりない毎朝の風景”を求めている自分が存在しているのです。確信を持つて、変わりない毎朝を求めている自分がウソ偽りなく本心であるとわかるまでは、そして時を消費することはませんでした。

けれど。

いくら時を消費しても、彼と再会することは叶いませんでした。そして気がついたときには、本当の本当に不本意ながら、ついに私も他者から“老”と称される存在になっていました。

そうなつてやつと、あの騒々しい“迷惑な”毎朝を味わうことはどう一度と出来ないのだと意識しました。そうしたら、とたんにどうしようもない喪失感に襲われました。それは“会話できることが当たり前”だと確信していた家族を亡くしたときの“どうじょうもない感”と、不思議なことにとても似ていました。

脈絡もなく突然に。

私は“そのこと”を思いつきました。そして一切の迷いなく、そ

の思いつきを実行に移しました。

懐かしいあの頃のように。

時刻は、朝八時二分前。

場所は、あの横断歩道。

カツチリとした黒の衣服に身を包み、

頭には洒落た黒の帽子をかぶり、

手にはステッキの代わりにビニール傘を持ち、

背筋をしゃんと伸ばして、

いかにも“それっぽい”雰囲気を演じながら、

意味のある言語なのか、意味のないただの音なのか、わからない
しもう知れない“それ”を、

周囲に対する配慮の一切ない大きな音声で口から発して、
手にあるビニール傘をぐるりんと一回転させるのです。

「ンン・ランルー・タイ・スー・マイスー・マイスー」

小話・其の五拾参『わるこ』と（仮題）』（前書き）

【巡り巡つて“誰の”ため?】

小話・其の五拾参《わるこじ」と(仮題)《

『わるいこと』(仮題) 』

とある時代の、とある国を、ひとりの旅人が訪れました。頭に麦わらの帽子をかぶり、その下に耳と首の後ろを覆い隠すようにして白のタオルをはさんでいます。灰色の袖の長いシャツを着て、濃紺のジーンズをはき、足には黒のアサルトブーツがありました。背に、あまり大きさのない深緑色のリュックがあり、それを包み込むようにして黒のフード付きロングコートが、伸縮性のあるロープでぐるぐる巻きにされて留めています。それぞれどれも“使い込まれた味”という銘の汚さがありました。

旅人は、目の前に広がるウソ偽りのない現状を認識して言葉を失いました。訪れた国は、国としての体裁を保てていないのであろうほどに荒れ果てていました。家屋や商店が存在していたであろう街と思われる場所は、廃品置き場より混沌とした様相です。

- あ の -

どうしたものかと歩んでいた旅人の視界に、“なにか”を探すよう^うに家屋や商店だつたであろう場所をあさつて^ているひとりの男性の姿が映りました。かなりの長時間、身体を洗つていな^いことがわ^かる見てくれをしています。

「ん?
あなたは……見たところの國の者じやあないな?」

男性はあさる手を休めて、とてつもない“疲労／心労”の滲む顔に、生来の人懐っこさが垣間見える笑みを浮かべて訊きました。

旅には自分が旅をしていふことを語りはじめる。そして、この国の現状が、話に聞いていたモノとだいぶ異なつていて驚いたことも伝えます。

「ああ、そりやあ、独自の文化で情緒溢れる樂園つて謳い文句を聞

いて来てみたら、こんなことになつてゐるんだから、まあなんて言つ
か、旅人さんには申し訳ないなあ……」

男性は“どうしようもないこと”に直面して困り果ててしまつた
ヒトの微笑みを浮かべて、それでも旅人に説明してくれます。

数ヶ月前に、史上最大の自然災害がこの国を襲つたこと。数ヶ月
も経過しているのに、被害が甚大過ぎてまったく復旧が追いついて
いないこと。清潔な飲み水を確保するのが非常に困難なこと。どう
にか食べ物だけは、他國の人道支援組織が定期的にプロペラ飛行機
から投下してしてくれる。排泄物などがどうしようもなく、
医療機関も機能していないから、衛生環境が悪化していること。“
政府／行政／軍隊／國家”が正常に機能していないから、治安がと
ても悪化していること。

「悪い連中に襲われるまえに出国することをオススメするよ、旅人
さん」

男性は至極真摯に出国を推奨しました。

旅人は、いちおう護身用として半自動拳銃を所持していることを
伝えてから、

「ですが、滞在しても皆さんのが邪魔になつてしまふだけでしょ
うから、夜が明けたら早めに出国します」
そう告げました。

「ああ、それがいい」

男性も強く同意しました。

旅人は一夜を過ごすためのテントが設置できる最適な場所を探し
て、“直視することが躊躇われる場面／瓦礫に押し潰されて絶命し
ているヒトがどうしようもなく放置されている場面”もしつかりと
見やりながら歩みを進めます。

「お願い、お願いよ！ 助けて！」

ひとりの女性が心の奥底からの叫びを口から吐き出して、旅人を
呼び求めました。

旅人も当たり前のようにひとりのヒトですから、助けを求められれば駆けつけます。そこには、叫びを上げた女性と、その側らに横たわる男性の姿がありました。

「お願い、お願いよ！　夫を、私の夫を助けて！」

女性は側らに横たわる男性にすがりつきながら、容赦のない悲痛さのある音声を、容赦なく旅人にぶつけます。

しかし。

旅人は、女性の夫であるらしい男性へ助けの手を差し伸べることができませんでした。旅人が助けの手を差し伸べられるのは、どんなに尽力しても“生者／生存しているヒト”に限られてしまうからです。

「残念ですが」

旅人は努めて淡々と事実を告げました。

「ウソ吐きつ！　いえ、そう、お金、お金が欲しいのね。でも、いま手元はないの。でも待って！　助けてくれたら、絶対に絶対に言い値を支払うわ。だから、お願いよ、このヒトを、夫を、助けて」

女性は根気強く説得するヒトの顔をして言いました。

「残念ですが」

旅人は努めて淡々と事実を告げました。

「ウソ吐きつ！　いえ、そう、そんなのね。身体が目当てなのね。わかつたわ。それで助けてくれるなら、好きにして。だから、お願ひよ、このヒトを、夫を、助けて」

女性は切望あるヒトの顔をして懇願しました。

「残念ですが」

旅人は努めて淡々と事実を告げました。

「ウソ吐きつ！　なによつ！　なにが欲しいのよつ！　教えなさいよつ！　教えて、ください……。あげるから……。あなたの欲しいモノをあげるから……。だから、お願ひよ」

「残念ですが」

「

旅人は努めて淡々と事実を告げました。

「.....」

女性は地べたを凝視したまま、口を開きませんでした。

旅人は寝覚めが少々悪くなることを承知しつつ、その場から立ち去ることにしました。親身になって話を聞いてあげることも、なにか救いになるような話をしてあげることも、旅人は旅人自身の心を保持するために意を持つて選択しませんでした。

翌朝。

旅人は出国するために、来た道らしきところを足で踏みながら先へ歩み進みました。

そして。

来た道らしきところを進み、それが正しく来た道らしきところだつたがゆえに、旅人はそこで会ったヒトたちと再会することになりました。

限りなく同一に近い既視感を覚える力タチで、彼女と彼はそこにありました。

「おや、旅人さん。出国するのかい？」

声の聞こえたほうを見やると、そこには旅人がこの国で最初に出会つた男性の姿がありました。

旅人は出国することを伝えました。そして、ふと、彼女と彼のほうへ視線を流します。

男性は誘われるようにして旅人の視線の先を見やり、それから、

「ああ、彼女か.....」

速やかに自らの纖細な部分を保持するために視線を外して、地べたを凝視します。

「どれくらいだろうな.....、気づいたときにはもう“ああいう状態”だったんだ。飲まず食わずですつと“ああいう状態”だから、そろそろ強引にでもどうにかしないと、彼女自身の生命に関わっていく

るんだが。最初はまあ、みんなどうにかしようと手を差し伸べたんだが、彼女自身がその手を払いのけてしまって、みんなも自分のことがあるから、ついには、ね

「そうですか」

旅人は、男性の話を淡々と聞き受けました。それからしばし沈黙の間が生じ、旅人は旅人自身のために“あること”を思いつき、“それ”を実行することにしました。

「彼女の旦那さんは、極悪非道の悪人から彼女を守つて死んでしまつたんです」

旅人が言いました。

「は？」

男性が理解が追いついていないヒトの顔をして、旅人を見やります。

旅人は男性に対し、一切の説明もなく、歩みを進めました。

「お願い、お願いよ！ 助けて！」

女性は心の奥底からの叫びを口から吐き出して、旅人を呼び求めました。昨日の旅人に関することをまったく記憶していないような、初対面のヒトに接するふうがあります。

「お願い、お願いよ！ 夫を、私の夫を助けてつ！」

女性は側らに横たわる男性にすがりつきながら、容赦のない悲痛さのある音声を、容赦なく旅人にぶつけます。

「なるほど。確かに、あなたの旦那さんはまだ息をしているようですね。適切な処置を施せば、きっと助かるでしょう」

旅人はそこにある事実を淡々と告げる口調で述べました。

やつとわかつてくれるヒトが現れた、と女性は救世主を見やるような眼差しを旅人へ向けます。

「しかし残念です」

旅人は背腰から護身用の半自動拳銃を引き抜き、

「私は医療関係者でも救世主でもなく、極悪非道な悪人なのです」と告げて、女性の隣で横たわる息なき男性に銃口を向けます。

そして、

「あなたの大切なヒトは確かに、生きています。けれど、いまこの瞬間」

旅人は手にある半自動拳銃の引き金を迷いなく絞りました。
乾いた発破音がひとつ、鳴りました。

空の薬莢がひとつ、地べたに落ちました。

「あなたを殺そうとした極悪非道な私から、勇敢にも身を挺してあなたを守り、 私に殺されてしまいました」

小話・其の五拾四へ信頼の証（仮題）へ（前書き）

【“空論”と“信頼”は】

小話・其の五拾四 『信頼の証（仮題）』

『信頼の証（仮題）』

とある時代の、とある国の、とある町の、河原に面した喫茶店のテラス席に、ふたりの男の姿がありました。

「なあ」

ひとりの男が言いました。

「なんだ？」

もうひとりの男が応じました。

「いまオレたちが暮らしているこの国は、銃火器の所持携行が法律で原則禁止されているよな？」

「そうだな。おかげで、どつかの国みたいに銃火器を使用した犯罪もほとんどない。まあ、銃火器を所持携行することは国民が有する権利だつていうどつかの国の銃火器に関する団体からは、警察権力が変態的に強力なオカシナ国つて言われてるらしいけど」

「でもさ、犯罪がないわけじゃ ないよな」

「そうだな。銃火器を使用した犯罪はほとんどないけれど、刃物を使用したりした犯罪は、ままあるよな」

「そこで、だ。オレはひらめいたわけだよ」

「……なにを？」

「最強の防犯を、や」

「ほう。どんな？」

「ふふふふ。教えてやるから、いまからオレの家に来い」

「じゃあ、行かせてもらおうかな。この紅茶を味わい終わったらな」

* * *

とある時代の、とある国の、とある町の、とある住宅地の、とある一軒家の前に、さきほどまで喫茶店のテラス席にあつたふたりの男の姿がありました。

「 で、最強の防犯て？」

教えてやるからとお呼ばれた男が、訊きました。

「これだよ、これ！」

教えてやると言つた男は、家の扉の横に貼られたシールを指します。

「……んん？ “包丁あります”？ 刃物屋にでもなつたのか？」
お呼ばれた男は、難問にぶつかつたヒトのように眉根を寄せています。

「…………なぜ？ ピリして“それ”が最強の防犯なんだよ」

「もううつ、バカん！」

最強の防犯をひらめいた男は、するつと理解してくれぬ相手の鈍さに足踏みをして、けれどキチンと述べます。

「誰だつて、“奪う”のはまだいいけど、“奪われる”のは絶対にイヤだらう？ オレはそこに着目したつてわけだよ」

「それがこの“包丁あります”的シールだと？」

「あなたが私から“奪う”なら、私もあなたから“奪います”よ、つて告知さ。誰だつて自分のモノを奪われたくないから、自分のモノも奪われるとわかつて奪いに来たりしないだらう？」

「やり返されるのが怖いから、やらない。つてこと？」

「そう。そうだよ。やつとわかつてくれたか、このオレの素晴らしいめを！」

「ん、んん……。まあ、言いたいことはわかつたけど…………」

「けど？ なんだよ、なんか物申したそудだな」

「お前の言つてる」とは、まあ、わかつたけどや」

「なんだよ？」

「それって、奪いに来る相手が、最後の一線、自分と同じ“怖れを知っている人間”だつてことを“信頼しているから成り立つ考え方”だよね」

* * *

相互の“相手に対する信頼”なくして、
相互確証“望まぬ事態”的抑止論は成り立たない。

小説・其の五拾五『やうこそうちの（仮題）』（前書き）

【じつじこ】

小話・其の五拾五 くわうじゆもの（仮題）』

『そういうもの（仮題）』

とても凄惨な事件がありました。それを知った人々は、とても心を痛めました。

そして、それを凶行した犯人が、ついに捕まりました。そのことが、あらゆるメディアを通じて報道されました。犯人が捕らえられている警察署に、人々が集いました。集つた人々は、奇妙な熱気と共感と連帯感と“ある感情に由来する衝動”に突き動かされ、警察署になだれ込みました。人々は、凶行した犯人の姿を、獣の眼をして探します。

しかし犯人の姿は、もうすでに警察署にありませんでした。“なにか”が起こりそうな空気を敏感に察した警察署側が、裏口からこつそり安全な場所へ護送していたからです。

人々が警察署になだれ込んだことを聞かされた犯人は、「ほら、やつぱり。誰だって“気に喰わない存在”があつたら“そう”するのですよ」と

憎たらしいほど訳知り顔をして言い、

「わたしのことを“人間じゃない”とおっしゃる方々がありましたけれど、これで証明されました」

そして、ある“小さな輪”に帰属できることを喜ぶヒトの微笑みを浮かべます。

「わたしは、まぎれもなく人間だ」

小説・其の五拾六『どちらなのか（仮題）』（前書き）

【“人”は、自らの脚で自立していくヒトの】

小話・其の五拾六 『どひらなか』(仮題)』

『どひらなか』(仮題)』

とある時代の、とある国、とある街の、とある喫茶店のテラス席に、ふたりの男の姿がありました。コーヒーとミルクティーを、それぞれ味わっています。

「“人”という漢字は、“ヒト”と“ヒト”とが支え合いで大切なことを示しているんだ。あれだよな、支え合いで大切だつてことを、昔の“ヒト”は知っていたんだな」

コーヒーを味わっていた男が、学があることを誇るがごとく得意げに言いました。この男は新しく知ったことを得意げに語りたがる癖があります。

「へえー」

ミルクティーを味わっていた男は、友人である男の癖のことをよく知っていたので、その話が“いまさら”だとはあえて言わず、「じゃあ、お前は“どつち”なんだ?」

という問いを、“いまさら”という言葉の代わりに投げました。いいことを語つたつたとコーヒーを味わっていた男は、

「…………どゆこと?」

口内に広がる苦味と酸味に眉をしかめるがじとく、眉根を寄せて訊きました。

男はミルクティーを味わうのをいつたん休止し、ふとこみから手帳を取り出すと、それを開いて付属のボールペンを手にし、そしてまだ予定の書き込まれていないページに“人”という漢字を書きます。

そして。

右の短いほうに寄りかかっている左の長いほうと、左の長いほうに寄りかかっている右の短いほうを、それぞれ指差して、改めて

聞こめます。

「左の長いまづか、右の短いまづか、枝えぐつていのと並ひのなら、自分を“どっち”だと想ひ? “どっち”でありたいと想ひ? 相手が“どっち”である」とを望む。」

小説・其の五拾七『美しき（仮題）』（前書き）

【“それ”は売つてこる】

小話・其の五拾七く美しき（仮題）く

《美しき（仮題）》

とある時代の、とある国の人々の、とある街の、とある駅の前の広場の木製のベンチに、数歩引いた地点から“それら”を観察するようにしている男の姿がありました。まったく清潔とは言えない身なりをしています。

「うわあ、やだあ、見てよ“アレ”、やだ、やだ、ばつちい」

駅の前の広場で待ち合わせしていると思しき若い女が、ベンチのほうを指差して言いました。最新の流行を敏感に取り入れた見目麗しい身なりをしています。

「うわあ、ホントだあ、なに“アレ”。あ、やだあ、こいつ見た」

一緒に待ち合わせしていると思しきもうひとりの若い女が、一瞬だけベンチのほうに視線をやって応じました。最新の流行を敏感に取り入れた見目麗しい身なりをしています。

そして。

ふたりの若い女は、それぞれ手に持っている携帯電話を忙しくいじりながら、お互いに目を合わせることなく言葉を交わして、駅の前の広場から去ってゆきました。

ベンチに座つて“それら”を観察するようになっていた男は、自分がなにか言わせていくことに関して認識していましたが、とぐに気にしてふつもなく“流れ”を見やつしていました。

高級そうな黒のスーツを身にまとつたひとりの男が、ベンチに座る男に近づき、

「“先生”、またそんな汚い身なりをして……」

感心とあきれの混在する音声で言いました。

ベンチに座る“先生”と呼ばれた男は、

「いひすると“モノ”がよくよく見えるようになるからな

言つて、愉快そうな笑みを浮かべます。

「“先生”には“なに”が見えているんでしょう」

黒のスーツが、素朴な流れで訊きました。

「見目を麗しく演出する美しい装飾品は、金で買える。しかしいくら“身なり／外見”を整えたところで、そこにある“中身／本性”は“そのまんま”。いやはや千里眼も度肝抜かれるほどよく見える。見えすぎてもはや興奮すら覚えるくらいだ」

ベンチに座る“先生”と呼ばれた男は、

「どうだい？ キミも一度やってみるとこつのは？」

面白こと感じた“映画／書物／遊び”を薦める氣をくわだ述べました。

黒のスーツは、満面の笑顔を浮かべて応じます。

「確かによそぞうではありますが、私は“先生”の作品に触れることがなによりの、そりやあもう興奮を覚えるくらいの楽しみですから。“先生”がいますぐ速やかに次の作品の制作に戻つてくれれば、もう言ひつけとなしですよ」

小話・其の五拾八へいぢりゅう(仮題)』(前書き)

【“に帰属”と“になる”は違う】

小話・其の五拾八 『こちりゅう（仮題）』

『こちりゅう（仮題）』

とある時代の、とある国、とあるホテルの会場で、とある高校の同窓会が開かれていました。適度に設置されたテーブルの上には、高級で上品な大人の料理やビールやワインといった酒類が惜しみなく並べられています。

同窓会に参加しているかつての高校生たちは、それぞれお酒や料理を片手に、それぞれ積もる話に花を咲かせています。雰囲気が変わったとか変わっていないとか、結婚したとか子どもができたとか、太ったとかやせたとか、とかとかとか

会場の隅っこほうに、そこそこのスーツを着て、そこそこ整った身なりをしている、ひとりの男の姿がありました。誰と会話するでもなく、料理を味わいお酒をたしなんでいます。

そんな男に、

「おお、久しぶり」

と声がかかりました。

「ん？ ああ、久しぶり」

そこそこな男が視線をやつた先には、一流のスーツを着て、一流の身だしなみをしている男の姿がありました。

「最近どうよ？」

一流な男が言いました。 が、そこそこな男がそれに対してもにか言うまえに、一流な男が話し始めます。

一流の大学に進んだこと、一流の企業に就職したこと、そこで重要な案件を任せられていること、そのことの責任の重さに関する苦悩のこと、などなど

どこか誇らしげに一流な男は話し、それから気がついたように、

「そういえばお前」

と、理解あるヒトの顔を装つて、

「進学しなかつたんだっけ？」

あえてそのことを口にします。

「ん、ああ、まあ、そうだよ」

そこにそこな男はビールを一口、飲んでから、応じました。

「……そつか」

一流な男は言つておいて気まずそうな表情を作り、

「いま、なにやつてるんだ？」

チャリティー活動する余裕ある人物の顔をして、そう言います。

困つてゐるなら助力するぞ、と。

そこそこな男は、料理を咀嚼して胃に流し込んでから述べます。

「まあ、いろいろあつたけど、やりたいことるために会社を作つてね。順風満帆とはいかなかつたけれど、いまはそこそこゴハン食

べられるくらいにはやれてるよ」

「へえ、そつなのか」

「うん。　あ、そうだ。お前の大学の後輩たちさ、さすが一流の大学を出でるだけあって、みんな優秀でさ、すごく助かってるんだ。本當、雇つて正解だつたよ」

小話・其の五拾九（四月一日（仮題））（前書き）

【*****です】

小話・其の五拾九《四月一日（仮題）》

《四月一日（仮題）》

とある時代の、とある世界が、その日、とても穏やかになりました。

世界中で叫びを上げていた銃火器はその口をつぐみ、ヒトの怒号も、ヒトの嘆きも聞こえません。

お腹を空かせて声を上げることすらできないヒトの、訴えかける無言の眼差しも一切、見あたりません。

その日、世界から一切の例外なく争いの火種が霧消しました。

その日、世界から一切の例外なく空腹がなくなりました。

満腹になつた世界で、昨日まで殺し合いをしていた人々は、お互いを理解するための食事会をおこないました。最初はぎすぎました空気もありましたが、いっぱい食べて、いっぱい飲んで、満腹になる頃には、そこにいるみんなが、相手も自分とそう変わらないヒトであると気がつくことができました。

「どうしてオレたちは、必死になつて“あんなこと”をしてたんだろ？」「うう

食事会に出席したひとりの男が、昨日まで兵士であつたひとりの男が、ぼそりと呟きました。

「本当、どうしてだろうな……」

隣に座つていた、昨日まで戦士であつたひとりの男が応じました。重たい空気がそこに落ち、そうになつた刹那、お酒を飲んで酔つ払つたひとりの男がおもむろに服を脱ぎました。

食事会の会場にある人々の眼差しが、その男に向きます。

「ふおのすふあらふいいひふおばしゅふしてつ！」

酔つ払いの男は、宣誓するよつに手を上げてなにかを大きな声で述べてから、いきなり腹踊りを始めました。

それを見て。

昨日まで兵士だった男は困ったふうな笑みを浮かべ、 昨日まで戦士だった男はくだらないもつとやれと声を上げて笑います。

そしてひとしきり笑つてから、 昨日まで戦士だった男はふつと眞面目さのある笑顔を浮かべ、 手に持っている酒の入ったグラスを高らかに掲げて、 言います。

「今日が昨日じゃないことに、 乾杯っ！」

* * *

想像した“嘘”は、
創造して“真”にすることができる。
少なくとも確実に、
そうしようと努力する」とはできる。

小説・其の六拾『ゆめのきかい（仮題）』（前書き）

【巨大な壁は、けれど思いのほか薄っぺらい】

小話・其の六拾『ゆめのきかい』(仮題)』

『ゆめのきかい』(仮題)』

“今すぐ洗面所に行って鏡を見てください。

魔法使いはそこにいます。

魔法をかけられる相手も、そこにいます”

『お茶が運ばれてくるまでに～A B

ook At Cafes』

文 時雨沢 恵一

絵 黒星 紅白

より抜粋

* * *

人影よりも野生動物の影のほうが多い街外れに、廃材を組んで作られたトタン屋根の、家というよりは秘密基地と呼んだほうがしつくりくる建物がありました。大型車両が余裕を持つて格納できる倉庫並みの規模があります。

そんな秘密基地めいた建物の中に、ひとりの人物の姿がありました。疲労の色濃い顔に、地肌の見える頭頂部を囲むようにクセのある白の混じった黒髪が生えているという頭髪事情を抱えた、中年の男でした。

「ついに、ついに完成した」

疲れたヒトのしわがれた音声で、中年の男が言いました。

彼の目前には、一台の自動車がありました。実生活での利便性を考慮しつつ、疾走感が堪能できるよう設計された市販の自動車ですが、いまここにあるモノは、市販されているモノとは少々異なる部分がありました。

「これで、これでやつと」

中年の男が解放される喜びを噛みしめるヒトの表情をして、自動車に乗り込みました。エンジンを始動させます。

「“過去の間違えた自分”を殺しにゆける

中年の男が乗り込んだ自動車には、市販されているモノとは少々異なる部分がありました。中年の男が短くない時を費やして発明開発した“時空間を疾走する機能”が、この自動車には搭載されるのです。

「目的の時間は」

中年の男は、“時空間を疾走する機能”を管制できりやつ改造したカーナビを操作して、

「忘れもしない」

これから向かう“時”を設定し、決定します。

「いまも鮮明に思い出せる“あの”誕生日

* * *

その少年は、映画に取り憑かれていました。行動範囲圏内にある“パラダイス・ロマン座”という名の小規模で小汚い映画館に好奇心からこいつそり忍び込んだ、その日以来。その日の、ふたつの出逢い以来

ひとつは、心を奪う映画との出逢いでした。“パラダイス・ロマン座”は小規模な映画館であるからこそ、経営者の趣味趣向によって選ばれた映画が、客の入りをまったく気にすることなく上映され

ていました。世間で話題の最新技術と莫大な制作費を投入して作られたいわゆる流行の映画が上映されたことは、過去一切ありません。なので彼が出逢った映画は、新しい流行のモノではありませんでした。彼が出逢った映画は、“ニューキネマ・パラダイス／Nuovo Cinema Paradiso”という題名のイタリアの映画でした。ヒトと人生と映画への愛に満ちた映画でした。観始めはときは、退屈な、悟つたふうな大人の映画かと思った彼でしたが、しかし気づいたときにはエンドロールが流れており、そのとき彼は自分でも意外なくらい「いいな」という“形容し難い温かな感覚”に包容されました。彼は、映画に好意を懷いていました。

そして。

このとき、もうひとつのお逢いがありました。空席の目立つ、余裕を持つて座ることのできる環境にあって、わざわざ彼の隣に座っている人影があつたのです。彼はエンドロールを視聴しながら、ふと、隣にある“その気配”に気がつきました。そこには、ひとりの女人人が居ました。黒の長い髪をした、色の白い肌の顔の中に、映画を観る燐々と輝く黒の瞳を持つ、麗しく美しいヒトでした。彼は、その“美”ある姿に見惚れました。それと同時に、「おや？」と不可思議さを晦きました。彼女の身体の向こう側にあるはずの座席や劇場の壁などが、本来なら彼女の身体で隠れて見えないはずのそれらが、透けて見えるのです。映画に集中し過ぎて目が疲れてしまったのだろうと思つた彼は、ぎゅっと目を閉じて、しばしそうしてから再び開いて、隣の席を見やりました。そこには、誰も居ませんでした。これが、彼と彼女との最初の出逢いでした。

翌日。

少年の姿は“パラダイス・ロマン座”の昨日と同じ座席にありました。昨日と同じく、料金を払わぬ忍び込みです。映画を観るのが楽しくなったという理由と、あるいはまた彼女に会えるのではないか

かという理由から発揮された行動力でした。

映画の上映が開始されました。けれど少年の意識は、じきじきわくわくな心待ちにする気持ちは、映画からそれたところにあります。視線を、チラリとスクリーンから隣の座席へやります。

そこに、彼女は居ました。

少年は嬉しい気持ちになりました。同時に、話しかけたい衝動に駆られました。が、それは映画館のマナーに反するのでじうにかぐつと堪え慎みました。

エンドロールが流れ終え、映画の上映が終了したタイミングで彼は話しかけようと試みましたが、話しかける第一声を考えている間に、彼女の姿はなくなっていました。

それから少年は毎日のように“パラダイス・ロマン座”へ足を運んで忍び込み、映画を楽しみ、彼女と会話しようと尽力しました。

しかし、彼女との会話に成功したことは一度もありませんでした。

ある口。

一切の前触れなく、少年の悪事がばれました。料金を支払うことなく忍び込んでいたことが、“パラダイス・ロマン座”的経営者であり近所で偏屈者として有名な老人に知られてしまったのです。

「このクソガキ、ふざけたマネしあつてからに」

老人は、少年の行為がいかに映画と“映画を製作しているヒトたち／映画を愛するヒトたち”に対して失礼なことであるかを、たっぷりの時を費やして言い聞かせました。そして最後に、

「ところで

素っ気ないふうを装つて聞いていました。

「 映画、好きか？」

少年は熱狂ある声で即答しました。

その日から、少年は映画館の掃除などの雑用を命じられました。今までの悪事に対する罰ですから、もちろん“タダノ無給”働きです。

と言つても、少年には学業という至極重大な仕事がありますから、朝から晩まで毎日というわけではありません。学校が終わつてからの夕方や、休日に限つての“働き”です。

雑用は悪事に対する罰でしたが、しかし当の少年は嬉しく楽しい気持ちで胸いっぱいでした。手際よく雑用をこなして、「よし」の言葉がもらえるば、そのままそのとき上映されている映画を観てもいいといつ話だつたからです。

映画館で雑用をこなすことが少年にとっての日課となつた、ある日。あるとき。

ふと、少年は、経営者の老人に話してみました。　彼女について。

「そうか、お前さんも彼女に会つたのか」

老人はさして驚いたふうもなく応じました。その口ぶりには、旧知の友に関して話すような親しみがありました。

なにか知つていそうな老人に、少年は問い合わせの言葉を投げました。彼女はいつたいどこの誰なのか、と。返答を急ぐ口調で。

多大な関心のある異性に関して情報収集することは、ある種の盲田さに囚われた者ならしばしばやつてしまつ、じつに健全で普通なことです。少年も、例に漏れることなくじつに健全で普通な男の子でありました。

「古い客でな、ま、『パラダイス・ロマン座』の常連さ」

少年はそこから継ぐ経営者の老人の言葉を待ちましたが、しばし経ても継ぐ言葉はなく。

堪らず、少年は話の先を要求しました。

「ただの経営者が普通、客のことアレコレ知つていいわけがないだろう」

じつにあつさりとした返答に、少年はガックリとうな垂れました。まったくその通りだとは、彼も思います。しかし彼女がそもそも普通とはちょっと異なっているので、もう少しなにかあってもいいだろうとも思つてしまい、どうにもすんなり受け入れられないのです。

経営者の老人は、そんな“少年の若さ”を娯楽のように楽しみつつ、

「まあ、熱烈な映画好きであることは間違いないだろうから　　」

まったく意図もなく、至極ただの思いつきとして、

「映画を通して彼女に語りかけたら、もしかしたら応えてくれるかもな」

そんなことを言いました。

少年の中で、“なにか”がカチリと音を発して漸進を始めました。

そんな“彼女に関する話”をした、翌日。

「…………はあ？」

経営者の老人はまったくの不意打ちで起こった“その愉快な事実

”を、

「いまなんて言つた？」

慎重に確認するように訊きました。

それを受けた少年は、けれど一切の揺るぎない姿勢で、再び“そのこと”を述べます。

「映画監督になつて映画を撮つて、それを“パラダイス・ロマン座”的スクリーンで上映して、彼女と話す！」

再び“そのこと”を聞いて、経営者の老人は清々しく声を上げて笑いました。

少年はむつと眉根を寄せ、抗議する視線で経営者の老人を射ます。経営者の老人はまったく悪びれたふうもなく、

「だったら、それまでこの“パラダイス・ロマン座”的スクリーンは維持しとしてやる」

まるで歓喜するがごとく、最高の笑顔を浮かべて、
「せいぜいあがいてもがけよ、クソガキ」

そう、少年に告げました。

しばしの時を経た、ある日。

もはや当たり前になつてゐる雑用から解放された少年は、経営者の老人の私室も兼ねてゐる休憩室で“あるモノ”と出逢いました。お茶のおともにお菓子でもないものかと、経営者の老人の用務机の引き出しを探ついたら偶然、発見したのです。

その“あるモノ”というのは“ハミリフィルム・カメラ”でした。しばしば映画作品の中に登場するので、少年は憧れの気持ちを懐きながらよく知つていました。胸が高鳴るのを抑えきれず、瞳を煌めかせて、それを手に取ります。

少年は、経営者の老人が私室兼休憩室に入室したと同時に、“ハミリフィルム・カメラ”を使わせてほしいと申し出ました。

経営者の老人は最初、状況がよくわからないという顔をしましたが、少年の前のテーブルの上に丁寧に置かれてある“ハミリフィルム・カメラ”を見て、すべてを理解したようです。

「机の引き出しを勝手にあさつておいて図々しいヤツだな。盗人なんとやらだ」

経営者の老人は、少年をまったく相手にしませんでした。置かれである“ハミリフィルム・カメラ”を手に取ると、元あつた机の引き出しに戻します。

それから連日、ことあるごとに、少年は“ハミリフィルム・カメラ”を使わせてほしいと述べました。経営者の老人の対応は、いつも同じです。

少年は使用許可を求めるとき同時に連日、図書館などで“ハミリフィルム・カメラ”に関するモノから雑学まで、映画製作に役立ちそうな知識を頭に叩き込むようになりました。

さらにしばしの時を経た、ある日。

少年が毎度の雑用をこなしていると、
「ちょっと来い」

と経営者の老人に呼ばれました。

なにか呼び出されるようなへマをしただらうか？　と思いつつ、少年は呼び出しに応じます。

経営者の老人の私室兼休憩室、併の用務机を挟んで、ふたりの姿はありました。経営者の老人はさほど高級でもない革張りの椅子に腰掛け、少年は用務机の前に立たされています。

経営者の老人は、用務机の引き出しからおもむろに“ハミリフィルム・カメラ”を取り出すと、それを机の上に置きます。そして、「これは今日からお前のモノだ」と言いました。

少年は最初、この老人がなにを言っているのか正しく理解できませんでした。

そんな少年の無言の反応に、

「なんだ？　いらないのか？」

経営者の老人は“ハミリフィルム・カメラ”に手を伸ばす。それより先に、少年は“ハミリフィルム・カメラ”を手に取ります。

「なんだ？　やっぱりいるのか？」

と訊く経営者の老人に、少年は「クククと肯いて応えました。

それから少しの間を置いて少年は、ふと疑問を懷き、訊きました。どうして急に“ハミリフィルム・カメラ”をくれたのか、と。「誕生日なんだろう、今日」

経営者の老人はあつさり述べました。

言われて少年は、そういえば今日は確かに自分の誕生日だつたと思い出しました。そうしたら、さらなる疑問が湧いてきました。ど

うしてこの老人は、自分の誕生日を知っているのだろうか、と。

経営者の老人は、痛いところを突かれたように居心地が悪そうな顔をします。それからボソボソと聞き取り難い音声で、「映画を観に来たお前の学校の友人に聞いたんだ」と述べました。

使い方などの知識の予習は万全でした。あとは実践あるのみ。少年ははやる気持ちに従つて“ハミリフィルム・カメラ”を手に持ち、黄昏色の空の下、近所の公園へ向かい、そこで初の撮影を開始しました。

しかし時間的に人影は公園からは去つてゆくモノばかりで、撮れるのは去りゆく後姿ばかりでした。公園にあつた人影の最後、母親に手を引かれて去り行く幼子を撮り終えようとしたら、新たな人影が公園に入つてくるのを捉えました。その人影は、確たる意思があるかのようにカメラのほうへ歩んできます。

* * *

中年の男は、ここまで想定通りでることに安堵しつつ、ここからが重要だと気を引き締めて、自作した“時空間を疾走する機能”的ある自動車から降りました。目前には、“あの日”の公園が一切の変わりなくありました。公園には、“あの日”的“自分”が一切の変わりなく“ハミリフィルム・カメラ”を手に持つてそこにいました。そちらへ歩みを進めます。

しかし。

いざ“過去の自分”的にして、その輝かしさを前にして、中年の男はすぐに行動できませんでした。

そんな中年の男に、“過去の自分”は好奇の“眼差し／カメラ”を向けながら、いったい何者なのかと警戒心ある問いの言葉を投げました。

中年の男は、少し言いよどんでから、正しく告げます。“未来の

自分”である、と。

それを聞いて“過去の自分”は、当然のように自称“未来の自分”を不審者だと思いました。けれど、心のどこかで、“未来の自分”が眞実であることを期待してしたりもします。だから、訊きます。どうして未来から過去へ来たのか、と。

その言葉が耳に入り込んできた瞬間、いまここへ至るまでに蓄積したモノが、中年の男の口から溢れ出しました。いまこの場をまつたくの他者が傍観したら、大人が子どもに個人的感情を理不尽にぶつけているだけにしか見えません。

自分がいかに映画を撮る才能がないか、いかに望んでいないことしかこなせないか、“やりたいこと”と“やれること”の現実的な違い、それを容赦なく突きつけられたときどれほど苦しいか、それらを中年の男は口から吐きました。

それから中年の男は、大切なモノを喪失してしまったヒトの表情をして述べます。もうすぐ経営者の老人が約束を守らず“逝ってしまう”こと、“パラダイス・ロマン座”がなくなってしまうこと、それと共に彼女の姿もなくなってしまうこと 輝かしかった光源を喪つたあとに訪れる暗闇は、とても暗いこと。

中年の男は切実に説得するヒトの顔をして、あんな思いはもう一度としないと“過去の自分”に伝えました。

それを受けて、“過去の自分”は肩を震わせて言います。

「自分が諦めたからってそれを押し付けるなっ！――緒にするなつ！」

怒りに肩を震わせ、意志あるヒトの搖るぎない瞳で“未來の自分”を射る。

「“パラダイス・ロマン座”で待つてろよっ！――“パラダイス・ロマン座”のスクリーンで絶対に上映するからっ！」

そう言い放つて、“過去の自分”は公園から出て行きました。

中年の男は“過去の自分”的搖るぎない姿勢に圧倒されてしまい、結局なにもできませんでした。

そんな“自分”を情けないと思いつつ、中年の男は久々に“まだ健在”的“パラダイス・ロマン座”とその経営者の老人と、彼女に会いたくなつて、会いに行くことにしました。

その日の“パラダイス・ロマン座”での上映作品は、憎らしい演出のように、『『ヨー・シネマ・パラダイス』』（Nuvovo Cinema Paradies）でした。とりあえず観ていくことにします。

チケットを購入するとき、経営者の老人と会うことができて、思わず涙が溢れそうになつてしましました。というか、ちょっとばかり溢れました。名乗り出したい衝動に駆られましたが、グッと堪えました。

そして“『ヨー・シネマ・パラダイス』”（Nuvovo Cinema Paradies）を観て。あわよくば、と思つていましたが、彼女に会うことは叶いませんでした。

なにをしに来たんだろう、と“パラダイス・ロマン座”から出て中年の男は思いました。

そんな“なんとも言い難い気持ち”を胸に懷きつつ、駐車場に停めておいた“時空間を疾走する機能”のある自動車に乗り込もうとして、ふと、中年の男はとても重大な事実に気がつきました。

記憶にないので。今日、この日、自分の誕生日に、公園で“未来の自分”を自称する男と出会つたという、いまさつき起こつた事実の記憶が。今日この日をすでに経験しているはずの、“未来の自分が”なのに。

中年の男は多大な疑念を懷きつつ、けれどひとまず、“自分の時代”へ戻ることにします。

そして“自分の時代”へ戻り、中年の男は愕然たる思いでそこに立ち戻りました。

ここまで確かにこの場に存在していた、確かに自分が住んでいた

秘密基地めいた建物が、影も力タチも残骸もなく、さっぱり存在しないのです。

状況に対して理解が追いつかず、中年の男は混乱して頭をかきむしりました。頭の髪の毛に諸事情を抱えていることなどおかまいなしに。

一通り、頭をかきむしてから中年の男は、ふと、なにかに呼ばれるかのように、“自分の時代”ではもう跡地でしかない“パラダイス・ロマン座”へ向かうことにしました。

そして。

中年の男は、歓喜の感情にも似たモノを懷いて驚愕しました。跡地でなければならぬそこに、ウソ偽りなく確かに、“パラダイス・ロマン座”が存在していたのです。信じられないという気持ちを懐きつつ、入館します。

そこは、それは、“自分”以外に客の姿はありませんでしたが、まぎれもなく“パラダイス・ロマン座”でした。

感慨に浸ろうとしたら、上映開始の合図が鳴りました。身体が憶えているのか、中年の男は近くの座席に腰を下して、映画を観る体制になります。

薄暗かつた館内が、非常灯以外の光源なく闇になりました。スクリーンに、最初の光が映し出され

上映された映画は、まったく“知らないはず”的映画でした。だとういうのに、すべてを知っているような、妙な既視感を覚える映画でした。やられた、という悔しさをなぜだか懐く映画でした。

「なかなかいい映画だつたわ」

隣から、落ち着きと清楚さといい映画を観たあと清々しさある女性の声が聞こえました。

中年の男は、まさかと思いつつそちらを見やりました。

そこには、しっかりとこちらを見ている彼女の姿がありました。

彼女の声を聞いたこと、彼女に見られていること、驚きと喜びに

中年の男の胸の内はお祭り騒ぎでした。けれどそのとき彼がもつと

も気になつて思わず口から発した話題は、上映された映画に対する妙な既視感についてでした。

「当然のことだわ」

と、彼女がすっぱりと断言するふうに言いました。

なぜ、と中年の男は訊きます。

「だって、この映画を撮ったのは、監督である“あなた”ですもの」
彼女は“ある一点”を指差して、そう教えてくれました。

そんな記憶はない、と思いつつ、中年の男は彼女が指差す先を見やりました。そこには、「“パラダイス・ロマン座”で待ってるよっ! “パラダイス・ロマン座”のスクリーンで絶対に上映するからっ!」と言い放ってきたあのときの“自分”が座っていました。

「この状況がもつよくわからず、

「……これは、……どうしたことだ?」

そんな素直な言葉が、中年の男の口から漏れました。

「簡単なことよ」

彼女が言います。

「“あなた”は諦めなかつたのよ
その言葉に、しかし中年の男は追い詰められたヒトの表情をして頭を抱え ようとして、彼は“そのこと”に気がつきました。身体が、彼女のように透けていることに。

ふと、「ああ、なるほど」と、なにかがわかつたような気がして。中年の男は、言葉もなく、すべてを受け入れる余裕のある顔をして、座席に深く腰を落ち着けました。

「これはとても純粋な疑問なのだけれど、いいかしら?」
彼女が投げかけてきました。

中年の男は、

「どうぞ」

と気さくに応じました。

「諦めてしまった“あなた”は、諦めなかつた“あなた”に出逢つて、なにを思ったのかしら? なにを感じたのかしら? 「

そんな彼女の問いかけに、中年の男は“諦めなかつた自分”的な見やつて、そして恥ずかしそうに微笑んでから、

「なんだ、やればできるじやないか、つて」

一切の悲壮感のない清々しい表情で、

「もつと自分を信じてあげればよかつた、つて」

迷いのない言葉で答えます。

「そう、思いました」

暗転。

「ちよつと館長っ！ 起きて下さこよつ！」

耳の至近距離、大音量で叩き込まれたそんな言葉に、彼は目を覚ました。

「おおうー、どうした？」

「どうしたじやないですよ。あなたが決めた閉館の時間です。まつたく、自分で撮った映画を観ながら寝ないでくださいよ」

「雇主に臆することなく文句を垂れるとは、まったくいい従業員を雇つたよ」

「そうでしょう、なかなかいい目をお持ひのようですね」

そんな従業員の言葉に、彼は愉快そうに微笑を浮かべます。それから背伸びをして、

「自分で撮った映画を、自分の映画館で上映して、そして寝る。これほど贅沢なことはないな」

彼は感慨深げに言いました。

「はいはいわかりました」

従業員はあきれたふうに首を横に振つてから、

「贅沢を堪能するのは結構ですけれど、“あなた”的の新作を待つてているファンがいるということを忘れないでくださいよ 目の前にもいるんですから」

と切望するヒトの顔で述べます。

「もちろん忘れてないさ。明後日からその新作の撮影だから、英気を養っていたんだよ。自分にとつてすべての始まりたるこの映画を観て、撮るぞー超撮るぞー、ってさ。ま、儀式みたいなモノさ」

「はいはい、期待してますよ」

従業員は本当に期待しているヒトの笑顔で言つて、先に外へ出ます。

それに続いて出ようとする彼の背中に、

「私も期待しているわ」

そんな女性の声が、誰も居ない館内のはうからかけられました。けれど彼は振り返ることなく、歩み行きます。

期待に応えるために。“やりたいこと”を“やれること”を“やるため”に。

小説・其の六拾壱『“そんな空氣感”だから』（仮題）』（前書き）

【“そんな空氣感”だから】

小話・其の六拾壹《すばらしー》(仮題)』

《すばらしー》(仮題)》

とある時代の、とある国、とある街の、とある美術館に、鑑賞した人々から必ず絶賛される“ある作品”がありました。

そしてふたりの男が、その“ある作品”的前に立っていました。美術館ですから、作品を鑑賞するヒトの姿があるのはなんら不自然なことではありません。ただ、いまは、閉館時刻をとっくに過ぎた頃合いです。

「さて、じゃあいたくとしようか」

ひとりの男が言いました。

「ああ、いたくとしようか」

もうひとりの男が応じました。

ふたりの男は、目前にある“ある作品”に魅せられ、それを独占したい欲に囚われた者たちでした。ネットを通じて知り合い、“ある作品”を自分たちだけのモノにしようと意気投合し、いまに至ります。

そして。

ふたりの男は、“ある作品”を盗み出しました。ふたりが念入りに計画した結果であり、美術館の警備が予想外に“お粗末”だった結果でした。

ふたりの男はアジトへ戻り、ついに独占した“ある作品”を贅沢に鑑賞します。

が、ふたりの男は「あれ?」といつ“ある奇妙な感覚”を味わいました。それはどうやらお互に同じようなモノであると確認しどうしたものかと首をひねります。

しばしの時を消費して。

ふたりの男は、“ある奇妙な感覚”を解消するための方法を考案

しました。

速やかに、それを実行します。

* * *

とある時代の、とある国、とある街の、とある駅の前で、ふたりの男が“あるモノ”を道行く人々に見せてまわっていました。その“あるモノ”を見せられたヒトたちの反応は、様々でした。あるヒトは不快そうに眉をひそめ、またあるヒトは吐き気を堪えるように眉をひそめ、またまたあるヒトは不快さうにしつつも鼻の下を伸ばして、またまたまたあるヒトはしげしげと興味深げに眺めます。

ふたりの男が見せてまわる“あるモノ”といつのは、一糸まとわぬ“裸のヒトたち”が水遊びをしている“絵／イラスト”でした。“だんだん自信がなくなってきた。この“絵／イラスト”に、盗み出すほどの価値はあったのかな?..”

ひとりの男が言いました。もうひとりの男がそれに応じます。“んんー、むしろオレは、この“絵／イラスト”そのモノの価値と、いうより、この“絵／イラスト”に対する“ヒトの価値観”的価値がよくわからなくなってきたよ”

小説・其の六拾弐『とべべつやはなし』(仮題)』(前書き)

【“それ”は自分の一部でもある】

小話・其の六拾弐『とべべつではない』（仮題）

『とべべつではない』（仮題）

とある時代の、とある町の、とある小奇麗なカフェのテラス席に、
ブラックのコーヒーと甘いミルクティーをそれぞれ味わっているふ
たりの人影がありました。

「なあ、どうしても、『じうち』に移り住む気はないのかい？」

「コーヒーを一口、飲んでから、ひとりの恰幅のいい中年の男が訊
きました。

「ええ」

ミルクティーを味わっていたきちんとした身なりの初老の男は、
「気遣つてくださいねお気持ちはとてもありがたいのですが、その気
はありません」

きつぱり返しました。

それを受けて中年の男は、コーヒーに口をつけるのを中断して、
「どうしてなんだい？ どうして、『あんなところ』に住むことに
こだわるんだい？ あ、いや、失礼。ただ、あなたが心配なん
だよ」

相手のためを思つて辛抱強く説得するヒトの表情で述べます。

「町から離れた山の中腹に住んでいて、あなたが町へ下りてくるま
での道は非常に険しい。それだけでもアレなのに、それに加えて“
あの山”の至るところには、過去の戦争の負の遺産たる地雷と不発
弾がまだ大量に埋まっていて危険だ。これだけで、町へ移り住む
理由は充分だろう？」

それを受けた初老の男は、ミルクティーに口をつけるのを中断し
て、静かに首を横に振りました。

「どうして？」

納得できないと声を少し荒げて、中年の男は言います。

「べつに金銭的な問題はだろう？　あなたはとても優れた創造力を持っていて、あなたの創造した物語のファンは至るところにいて、その物語を販売した収入がある。正直な話、あなたは私よりよっぽど金持ちだ。それに入柄だって、ちょっと自己主張は苦手なようだが、真面目で礼儀正しくて、困っているヒトがいたら見返りを求めるに助けの手を差し伸べられるヒトだ。町のみんなだって、そんなあなたのことを好いている。迎え入れられないなんてことには絶対ならない。　町のみんなだって、あなたを心配しているんだよ」

初老の男は、心の底から申し訳なさそうな顔をして、

「みなさんには、本当に心から感謝しています」

「じゃあ

「でも、移り住むことはできません」

「どうしてっ！　“あそこ”から離れられない特別な理由もあるのかい？」

「特別な理由はありません。ただ、“私の暮らせる場所／私の帰れる場所”は、“私の家”だけなのです。生まれ育った愛着ある“そこ”が、どうしようもなく“私の居場所”なのです」

小話・其の六拾参『アイゆえに』(仮題)』(前書き)

【周りなんか知つた』『ちやないもん】

小話・其の六拾参『アイゆえに（仮題）』

『アイゆえに（仮題）』

その“彼ら”的の“愛情／正義”は、
しかし“彼ら”以外のための“愛情／正義”ではない。
その“彼ら”に優しい“愛情／正義”は、
しかし“彼ら”以外には優しくない。

* * *

とある時代の、とある国の、とある街の、とあるオフィスビルの一室に、複数のヒトの影がありました。それぞれ“ある一点”を注視し、とても悲痛な表情をしています。

その“ある一点”には、古いブラウン管のテレビがありました。テープ式のビデオテッキと接続されています。テレビの画面には、“あるビデオ”的の映像が再生されていました。

その“あるビデオ”には“ある食材”を食材たらしてめいる工程が包み隠さず記録されており、複数のヒトの影はその記録映像を観聴して悲痛な表情を浮かべているのです。

その“ある食材”とは、この国では古くから食されている“ある動物”的お肉のことです。ですから、“ある食材”を食材たらしめる工程とは、その“ある動物”をシメてさばくという血生臭さあるモノでした。

そのシメられてさばかれている“ある動物”とは、他の国に限らずこの国でも“愛玩用”としての人気を獲得している動物でした。

「……どうして」

複数のヒトの影の中のひとりが、嗚咽を堪えるようにしながら口を開きました。

「どうして、『彼ら』を食べるんです。かつての食糧難の時代ならまだしも、いまは飽食の時代ですよ。『彼ら』を殺してまで食べる必要が、どこにあるんです」

複数のヒトの影の中のひとりが、部屋にある冷蔵庫から“あるモノ”を持ち出してきました。そしてその“あるモノ”を裁判における搖るぎない証拠品のように示し、述べます。

「そんなに肉が食べたいのなら、『彼ら』以外の肉を食べたりいひんですよ。いまの世の中、どこでだって簡単に買えるんですから

」

そう述べる、そのヒトの、その手には、加工されて“もつ動物の形をしていない”大量生産の家畜の肉のパック詰めの特売品がありました。

小話・其の六拾四 『ちゅうじん』(仮題)』(前書き)

【自分の道を信じて歩くヒト】

小話・其の六拾四 くちょうじん（仮題）

『ちゅうじん（仮題）』

ふたりのヒトがいました。ひとりのヒトは、流行の最先端をとり入れた身なりをしていました。ひとりのヒトは、流行の“り”の字も感ぜられない身なりをしていました。

「どうです、今年の流行の最先端をとり入れた、私のファッショhn。自分で言うのもアレですが、なかなかとてもよろしいでしょう。身なりを誇り見せつけるふうにして、最先端のヒトが言いました。」「そうですね。とても素晴らしいと思いますよ」

お世辞ではなく素直に、流行の“り”の字もないヒトは感じました。

「でしょ？ それで、その、あえて述べさせてほしいのですけれど

「はい？」

「私のファッショhnを素晴らしいと感じれるのに、どうしてあなたは、その、あえてハツキリ述べますけれど、どうしてあなたは、そんなに独創的過ぎる その、ダサい身なりをしているんです？」

流行の“り”の字もないヒトは、しかしどくに怒るでもなく感じます。

「今年の流行の“共通の”最先端も、来年の今頃にはきっと流行遅れの“共通の”ダサい身なりと言わってしまうでしょう？ ですから私は、流行遅れの“共通の”ダサい身なりではなく、流行遅れじゃない“私だけの”ダサい身なりをしているのですよ」

小話・其の六拾五『おせよひれこもつた（仮題）』（前書き）

【甘い飴だけでは味覚は洗練されない】

小話・其の六拾五くおはよりやれこめた（仮題）』

『おはよりやれこめた（仮題）』

とある時代の、とある国の人々が、とある町の、とある家の朝がとてもなく苦手な親とその子どもがいました。親は夕方から深夜までの仕事をしており、朝は疲れで夢の中なのです。子どもは、ただ単によく寝すぎなだけでした。

この国は義務教育という制度があるので、子どもは学び舎へ行かねばなりません。しかし親子そろって朝がとてもなく苦手でしたから、結果的に子どもは遅刻の常習者になってしまいました。

それをよろしくないと思つた学び舎の担任教師は、その子の親にどうにかならないかと告げました。親は深刻な顔をして、なにか提案するようにしばしの時を消費し、そして、

「わかりました」

と、ひらめいた子どもの遅刻の解決策を担任教師に示しました。

担任教師は当惑しましたが、最終的には担任教師自身のためにその解決策を実行することにしました。

後日。早朝。

朝がとてもなく苦手な子どもが寝てゐる枕の頭上、無意識につけて止められた目覚まし時計の横で、電話機が呼び出し音を鳴らしていました。数回、子どもは目覚まし時計を止めるようにして手を伸ばし、さりに数回それをおこなつてから、いつこづに鳴り止まないそれに嫌気がさして、薄田を開けました。そして寝ぼけたまま、受話器を取り、

「……はい、もしもし」

と、気だるげな音声で言いました。

それに対しても、

「はいっ！ おはようっ！ わい、田を覚ましてくださいっ！ 学校に行く時間ですよっ！」

努めて元気ハツラツとした音声が述べました。

「ああ……、おはようございます、…………」

子どもはそれでも気だるそうに応じます。

「先生……」

遅刻の解決策とは、担任教師が遅刻する子どもにモーニングコールをするというモノでした。

本来はそんなことするべきではないと担任教師も承知していましたが、あまりに遅刻の多い生徒があり、改善が見られない、学び舎での担任教師自身の評価にも関わり、それは生活にも関わることなので、いたしかたなくそうすることにしたのです。

そんなこんなで。
時は消費されてゆき。

子どもも成長して、大人と呼ばれるようになり、ある会社に就職しました。朝にとても弱いことを除けば、優秀な成績を有していましたので、多数の会社から求められるほどあつさりと職につくことができました。

しかし、

出社というものをするようになつてから数十日後、大人と呼ばれるようになつたかつての子どもは、上司に呼び出されました。呼び出した上司は、とても不機嫌でした。そしてその感情を多分に反映した音声で言います。

「お前はどうして遅刻が多いんだ！」

大人と呼ばれるようになつたかつての子どもは、上司の感情を読み解くことなく、まったく反省の色のない態度で応じました。

「だって、モーニングホールしてくれないじゃないですか」

小説・其の六拾六《しあみ（仮題）（記書也）

【コトコトイヤー遊ゆる屋上の娛樂】

小話・其の六拾六 くしゅみ（仮題）

『しゅみ（仮題）』

とある時代の、とある国で、ある凄惨な事件が起こってしまいました。

それを起こした犯人である可能性が濃厚なひとりの男が、容疑者として速やかに確保されました。

各メディアは、迅速にそのことを報じました。そして同時に、容疑者の“個人情報／人物像”が公開されてゆきます。

マンガが好きなこと、アニメが好きなこと、ゲームが好きなこと、ヒトと話すことが苦手なこと、小・中・高校生時代の卒業文集に書かれた将来の夢、などなど。

各メディアも、それを視聴した人々も、誰もが、この容疑者こそが真犯人であると確信している暗黙の空気が生じていきました。

一週間ほどが経過しました。

そして誰もが、「ウソだあ」と胸の内で言いました。容疑者の潔白が、一切の搖るぎなく証明されたのです。

その日を堺に、各メディアはパタリと“ある凄惨な事件”に関するこれを報じなくなりました。

容疑者とされた男は、まったく歓迎されていないとわかる「近所からの空気を肌に感じながら、久しぶりの我が家の扉をぐぐりました。

男は一息ついてから、蓄積した鬱憤を解消するために、“もつとも好きなこと”に興じることにしました。

その興じる過程で、男は自分が「近所の方々からどのように見られ思われていたのかを知りました。

そして。

「やつぱり、か」

各メディアが、自分の“暇つぶし程度に好きなこと”に関しては熱心に報じているのに、自分の“もつとも好きなこと”に関しては一切報じていないことを知りました。

「各メディアの“よくできた”報道を知るのが、人生最高最上の、生き甲斐と言つてもまったく過言じやない“好きなこと”なんだけれどなあ……」

* * *

他者に対してもそれなりに面白味があるふうを装つて物語ることで、必ずしも“絶対の真実”は重要ではない。いかに良心的に“向こう側の人々”をだますか、あざむくか、いかにそこから“面白さ”を創出するか、しばしば“それ”を重視し、“そこ”に注力する。

小話・其の六拾七く見ぢやタメハ一（仮題）』（前書き）

【鏡を見よつ】

小話・其の六拾七く見ちやダメっー（仮題）』

『見ちやダメっー（仮題）』

とある時代の、とある国、とある町の、とあるスーパーマーケットの入り口の横にある駐輪場を兼ねた駐車場に、夕飯の買い物を終えた親子の姿がありました。母親は右手で我が子の手を握り、左手に大きく膨らんだ買い物袋を持ち、そして買い物という戦いからの解放感を味わうように、器用に口の端でタバコをくわえて紫煙を吹かしています。子どもは、買つてもらつた風船ガムをくちゅくちゅしています。

あとは自転車に買い物袋と子どもをのせて帰るだけなので、母親はさして急ぐこともなく、我が子の手を引いて、自らの愛機が停めてあるところまで歩を進めました。

ほじなくして、愛機のところにたどり着きます。

自転車の後部の力ゴトに買い物袋を積み、子どもを前力ゴト兼子供用座席に乗せようとしたとき、母親は我が子が妙におとなしくしていることに気がつきました。ガムをくちゅくちゅしながら、ある一点を凝視しているように見えます。なにか子どもの興味を引くモノでもあるのかしら、と考えながら、母親もそちらへ視線をやつてみました。

転瞬。

「見ちやいけませんっー！」

はっ、として母親は我が子の視界を手でさえぎりました。視線をやつた先に、停めてある車の中で若干淫らな雰囲気を漂わせていちやついている若い男女の姿があつたのです。

なんてモラルのないつ！ と頭の中で怒りながら、母親はくわえていたタバコを吐き捨てて足で踏み消しました。そして、子どもの教育によろしくない、汚らわしくするこの場から速やかに去る

ために出発の準備を急ぎます。我が子を自転車に乗せようと抱っこしようとしたとき、おとなしく“こちら”を見ていた我が子の口から風船ガムが地べたに“落ちてしまいました”。やれやれと思いつつ、母親はかまわずに子どもを自転車に乘せます。

そんな親子の姿を見ている眼差しが、ありました。

「見たいやいけませんつ！」

はつ、としてその親は我が子の視界を手でさえぎりました。視線をやつた先に、停めてある自転車の横で、子どもの目の前だというのにタバコを吐き捨てて足で踏み消す女性の姿があり、そしてその女性の行動をマネるよつて口からガムを吐き捨てる子どもの姿がありました。

小話・其の六拾八『よくほう（仮題）』（前書き）

【究極的に純粹な想いは】

小話・其の六拾八《よくほつ（仮題）》

《よくほつ（仮題）》

その場には、ふたりの人影がありました。

ひとりは、とくにぱっとしない普通そうな男でした。

もうひとりは、“絶世の”と称して異論ないほど魅力的で、麗しく美しい若い女でした。

ふたりは、とても至近距離で向かい合って、お互いの表情を見やっています。

麗しく美しい若い女は、愛着の情熱が滲む微笑みある表情で。

普通そうな男は、それでも信じたいという悲哀の滲む苦しげな表情で。

「どうして……、どうしてこんなことを…………」

普通そうな男の口から、そよ風にすらかき消されてしまふ、そんな、か細い音声が発せられました。

「どうして？」

麗しく美しい若い女は、普通そうな男とのやり取りを心の底から喜ぶように口の両端を薄く吊り上げ、

「あなたを、もつともつともおーつとよく知るためよつ

精巧な造形の顔にある双眸を、まるで夜空に煌く星々のように輝かせ、

「だつて、あたしは――」

口を相手の耳元へ寄せて、

「あなたのことが、とおーつても大好きなんですものつ」

まるでとつておきの秘密を告げるかのように、しかし一切の躊躇いなく、述べます。

そしてその気持ちのあらわれが」とく、お気に入りの“ぬいぐるみ”をぎゅうと抱きしめるような愛着ある自然で、普通そうな男

の首をさきほどからずつと“触れている／絞めている”両の手に少し力を加え、普通そうな男の首を少しだけ“深く触れます／絞り上げます”。

「い、こんな」としなぐたつて……、言葉で会話すれば、「言葉なんて簡単に偽れるモノなんかでヒトを知れるわけないじゃない」

母親が小さな我が子に言い聞かせる柔らかな聲音で、「そうでしょう？」

麗しく美しい若い女は断言しました。

「だから、あたしは、いつも、この手で、あなたの“いのち／生命”に“触れる／干渉する”の。だって、言葉なんて不完全な道具をわざわざ使うより、直接あなたの“いのち／生命”に“触れる／干渉する”ほうが、よっぽど確実に、深く“あなた”を感じてくれるんですもの。」

それはとてもとても素敵なこと。

麗しく美しい若い女は信じて疑わないヒトの純粹な双眸をして言い、

「だから、ね」

恥じらいの女のよう、おねだりする小悪魔のよう、「あなたにも、

片方の手で器用に、普通そうな男の手に果物ナイフを握らせ、「あたしのことを」

そのナイフを握った手の上に皿の手を重ねて、

「もつともおーっと深深々深く

自らの“心”があるほづく、

ゆづくつと、しかし確實に導いて

小話・其の六拾九『正義のお話（仮題）』（前書き）

【　を誤らないでほしい】

小話・其の六拾九 『正義のお話（仮題）』

『正義のお話（仮題）』

とある時代の、とある死刑制度のある国の、とある私学の高等学校の教室で、とあることに関する授業がおこなわれていました。教室には、眠そうなモノや退屈そうなモノから熱心なモノまで様々な表情がありました。

一部の生徒にとつてみたら上質の寝物語である教諭の今現在のお話は、人間の生命の尊さについてでした。家族とあれらの幸せ、友人と語らえる幸せ、「ご飯を食べられる幸せ」などなど、教諭は熱心に語ります。

そして。

人間に生命の尊さについて授業時間の九割を割いて語つてから、教諭は本日の主題を生徒に告げます。

果たして、国家が合法的に人間の生命を奪う死刑制度は必要か？必要か、必要でないか、どうしてそう考えたのか、自分の意見を書いて提出しなさい。教諭は、生徒に指示しました。

生徒たちは各自、自分の考えを書きます。人間の生命の尊さについてよくよく知った直後ですから、生徒たちは人間の生命を尊重する選択と意見を書いて提出します。

いかなる事態があつても、国家が人間の生命を奪つていけ理由にはならない。

そもそも惨たらしいことをした者に、「死」という永遠の逃げを与えるべきではない。生かして償わせるべきだ。

言い回しはそれ異なりますが、中身としてはだいたいそのような選択と意見ばかりでした。

「なあ、お前はなんて書いた？」

ひとりの生徒が、隣に座る友人に訊きました。

「ん？ オレ？ まあ、なんて言ひつか、惨たらしことをしたヤツは赦せないけれど、だからってそいつと同じようなことをしていい理由にはならないから、生命は尊重するべきだって、生かして償わせるべきだって書いたよ」

「やっぱり、そうだよなー」

ひとりの生徒は“意を共有できたこと”を認識して喜ぶように微笑んでから、

「お前はなんて書いた？」

自分の側であることが当然であると確信しているヒトの音声で、後ろに座る友人に訊きました。

「ん？ オレ？ まあ、なんて言ひつか、惨たらしことをされたヒトの家族とかの気持ちを考えてみたり、そもそも国家が法律で惨たらしことをしたヤツを守つて国民の税金を使って養うとか、なんか殺し得みたいな感じになるから、まったくなくしてしまうのはどうかなのかなと思うなあ。 でも、生命は尊重するべきだとも思うから、なんていうか、惨たらしことをしたヤツに最高刑として“死”で償つか“生”で償つか選ばせたらいいんじゃないかなあ、つて考えてみたりもしたよ。でも、まあ、結局、難題すぎて、オレにはよくわからなかつた」

「…………ん、あ、え、あ、そうですか」

ひとりの生徒は“意を共有できなかつたこと”を認識するや、後ろに座る友人の話の途中から一切の関心を失くしたヒトの微笑みを浮かべていました。そして話が終わつたと同時に、次の話へ迅速に移行するための言葉を準備していました。

「 でさ、昨日発売されたゲームのことなんだけど」

小話・其の七拾『自称善玉菌（仮題）』（前書き）

【“あなた”的ために】

小話・其の七拾『自称善玉菌（仮題）』

『自称善玉菌（仮題）』

とある時代の、とある国、とある町の郊外に、時の流れを感じさせる小さい雑貨店がありました。初老の独身男が個人で経営する雑貨店で、朝は出勤の“おとも”に新聞を買うスース姿のヒトを、昼はただ喋りたいだけの近所の顔馴染みを、夕方は学業を終えてから週刊マンガ誌やお菓子を求めてやつてくる近所の子どもたちを、夜は酒やその肴を求めてやつてくる近所の酒飲み連中を、それぞれ相手に商売をして、そこそこ安定的に売り上げています。

雑貨店は、経営主である初老の独身男の自宅を兼ねていました。誇張しても大きいとは言えない店舗兼自宅です。誰かが入店すればすぐに気がつけるので、客があまり来ない時間帯はリビングでお茶を飲んだりしながら過ごすこともしばしばありました。

その日も、リビングでお茶を飲んだりする間をはさむ、いつもと比べて変化のない一日を経て、雑貨店は営業時間を終了しました。いま、時計の針は、午後の十時を六分ほど過ぎたところを指しています。

経営主の初老の独身男は、店舗の戸締りを確認してから消灯し、今日も一日終わったという達成感のような解放感を味わいつつリビングへ移動　のまえにキッチンへ寄り道し、あらかじめ冷蔵庫で冷やしておいた“輸送の途中で凹んでしまい売り物にならない缶入りの酒”を取り出して手に持ち、改めてリビングへ移動。そしてリビングにあるソファーに腰掛けつつ缶入り酒の口を開け、よく冷えた発泡酒を喉の奥に流し込みます。グビグビと満足するまで流しながら、「ふはー」と一息つくついでにテレビのリモコンを操作してテレビを点けます。画面の中では、人気急上昇中の若手芸人が持ちネタを披露していました。面白いかどうかはべつにして、お酒

はすすみます。

はつ、として尿意に気がついたとき、テレビ画面の中に入気急上昇中の若手芸人の姿はなく、代わりに最近とんと見ないなあという懐かしさすら覚える顔の芸人が懐かしいネタを混じえて聞いたことのないメーカー製の商品を紹介していました。初老の独身男は、胡散臭く映る深夜の通販番組を流し見ながら、頭の片隅で飲みながら寝てしまつたかあと思いつつ、事故を起こすまえに己が膀胱の訴えに従つてトイレへ向かいます。

トイレでの用事を済ませて、けれど眠気は飲んだ酒と一緒に便器の向こう側に流れてゆかず。初老の独身男はあくびを噛み殺しつつ、とりあえず寝るまえにつけっ放しのテレビを消そうとリビングへ向かおうと一步を踏み出したと同時に、なにか物体が床に落したときのような音がしました。薄つすらと漏れ聞こえてくるテレビの音とは異なる、機械的ではない生のそれ独特の気配をともなつた音で、どうやら店舗のほうから聞こえてきたようでした。

初老の独身男はその音に関する心当たりを考えて、胸の内では大きく、口の内では小さく舌打ちをしました。最近、近所で古いビルの建て替え工事をやつているから、そこに居住していたネズミが望まれぬ引越しを断行してくれおつたか、と。

苛立ちを覚えつつ、確認のために店舗を見にゆきます。

そして店舗の照明を点灯すると

果たしてそこには、巨大なネズミの姿がありました。

理解が状況に追いつかず、初老の独身男は一度、目をつぶつて深呼吸をしてから、改めてそこを見やります。

黒いスーツで身を包み、黒が主色のデフォルメされたネズミの被り物を頭にした人物が、レジのところに立っていました。

のつそりとした動作で、「ハハツ」という笑い声が聞こえてきそうな笑顔で固定されたネズミの顔が、レジのほうから呆けて立つ初老の独身男のほうに向きます。

「どうも、こんにちは」

落ち着いた渋みある男の音声で、ネズミが言いました。

初老の独身男は反射的に“こんにちは”と返しそうになりましたが、どうにかそれを喉の奥に押し戻して、「警察を呼ぶから“おかしなマネ”はしないでじつとしている」と告げました。

対してネズミは、

「おやおや、警察とはまた穏やかじゃありませんね」
不気味なほどの平静で応じました。

お前が言うな、と初老の独身男が指摘しようとすると、

「あ、ああ、安心してください」

ネズミは察したふうな態度でそれをさえぎって、黒いスーツの内に手を突っ込み

初老の独身男は“凶器のようなモノ”が出てくるのではと身構えます。

取り出されたのは、スーツの内から出現しても一切の違和感ないアルミニ製の名刺ケースでした。

ネズミは“大人の挨拶”の動作で名刺一枚、差し出します。

初老の独身男は警戒しつつもそれを受け取り、

「……………“善良な”……強盗？」

氏名の脇に記載されている肩書きで、あわてたれに、思わず眉をしかめました。強盗といふ言葉のまえに、“善良な”といふ言葉が付いている不自然さを、正常な認識能力がよしとしないのです。

「ええ、そうです。“善良な”強盗です」

ネズミは紳士が一礼するような芝居がかつた動きで自身の胸もとに右手をそえて、

「強盗は強盗ですが、あなたから“一方的に”奪うなどといつ野蛮なことはいたしません」

通販番組のプレゼンターを思わせる断言口調で述べます。

「……………は？」

困惑を通り越して意味がわかりません。初老の独身男の反応は、

じつに素直でした。

ネズミは“それ”も想定の範囲内といった平然さで、発言を続けます。

「いま私がこうしてあなたと対面していられるのは“なぜか”、おわかりになりますか？」

「お前が不法侵入してきたからだ」

初老の独身男の即答に、ネズミは、

「そうです、その通りです」

クイズ・シヨーで問題に正解した解答者に賛辞を贈る同僚者のような軽さで応じてから、

「つまり“こちら”には」

相手の関心を最大限、引き寄せようとする、充分が過ぎてもはや腹立たしい溜めを間に置いてから、

「こうして私が侵入できてしまつセキュリティーの脆弱性があるわけです」

まくし立てるふうに、セリフを一気に吐き出します。

「だから?」

初老の独身男は極めて純粋な言葉を、端的に返しました。だからどうした、と。

そして思わず、こんな状況だとこのに、彼は頭の片隅でくつくつと笑ってしまいました。この小さい雑貨店に“セキュリティー”なんて小洒落た言葉、ずいぶん不似合いだな、と。ネズミの力のこもった言い回しとあいまって、じつにおかしいです。

「お互いに“うまみ”のある取り引きをしましょう」と、そういうわけです

商談でプレゼンをするビジネスマンのよう、固定された笑い顔の奥で“欲”をギラつかせながら、ネズミは述べました。

「強盗に入られてまさか“うまみ”が発生するとは、想像もしなかつたよ」

初老の独身男は想像力の斜め上をゆくネズミの発言に、文字通り

“好奇心”を懷き、

「それで」

ギャンブルに片足を突っ込んでしまったの危うさで、しかし訊いてしまいます。

「その“つまみ”と云のは？」

「それはですね」

と答えるネズミの顔は、声を上げて笑つてござりました。

そんなネズミ、いわく。初老の独身男にある“つまみ”というのは、この小さい雑貨店のセキュリティー強化のこと。強盗として侵入してきた自分は、この雑貨店の弱点を正しく認識しており、強盗として“強盗の攻め方”をも熟知しているから、それに対する“的確な守り方”を助言することができる、と。

「なるほど」

初老の独身男は流すように自分の“つまみ”について受け取つて

から、「

で？」

「氣をくなふうを裝つて、問います。

「そんなんふうに手の内を明かして得られるお前の“つまみ”は？」
「あなたが支払ってくれる助言に対する“正当な”報酬 清潔な
お金です」

ネズミは“お金でまわる社会”を生きるヒトの礼儀正しさ率直さで、せつぱりと答えました。

「助言してやるから顧問料を支払えって？」

ズバリ言つ初老の独身男に、

「“商品／サービス”に対する“正当な”報酬 “正当な”対価
ですか？」

ネズミは最初から一切の変化ない「ハハッ」笑いの顔で、そう応じました。オウム返しのおもちゃを相手にしているかの「」とく、これ以外の返答が聞ける“気配”は感ぜられません。

「なるほど」

初老の独身男は真剣に思案するヒトの顔をして、
「ちなみにその“正当な”報酬とやらを数字で表すと、どれくらい
なんだ?」

と、まるでネズミの述べたことに関心があるかのようだ。
ネズミはスーツの内から電卓を取り出すと、なにかぶつぶつ呟き
ながら数字を入力し、足したり引いたりをおこなつてから、

「“今日は”これくらいになります」

言つて、結果の打ち出された電卓を提示します。

そこには、強盗が“正当な”と主張して要求していくのは図々し
い数字が並んでありました。

初老の独身男は吟味するふうにその数字を眺めてから、
「ちょっとと眞面目に検討したいから」

と口を開きます。親指と小指を立てた手を耳に当てる。

「一本、電話をしていいか?」

「ちなみに“どちら”に?」

「(+)の店の共同経営者に」

「(+)から個人経営のお店だったかと、記憶しておりますが?
ネズミは居合い斬りを放つような鋭さで、指摘します。

「え、ああ」

初老の独身男はネズミが目と鼻の先に迫つてくる姿を幻視してしまひ、一瞬たじろいでしまいました。一度、三度とまばたきをして、
ネズミが一切その場から動いていないのを確信してから、
「確かに個人経営だが、個人経営であるからこそ、友人に金銭的援
助をお願いしたりもするわけさ わかるだろう?」

察してくれ、と困つたふうに寄せた眉根で語ります。

「お店の運営に関わることはそのご友人に相談してから決めたい、
と」

ネズミは確認するよつて訊きました。

「そうだ」

「なるほど、わかりました」

「それは、電話をしていいと受け取つても？」

初老の独身男の言葉に、ネズミは、

「ええ、かまいません」

それが“正当な”報酬を正しく頂戴するための“正当な”対応である、と述べるより、言葉を返しました。

「じゃあ」

初老の独身男は、電話をするために奥に引っ込みます。しばしの間を置いてから戻ってきた初老の独身男は、「じかに会つて説明を聞きたいから、こっちに来る だと」と、電話相談の結果をネズミに報告しました。

それからさらにしばしの間を置いてから、店舗の出入口ではなく自宅の玄関のほうで呼び鈴が鳴りました。

初老の独身男は「友人が到着したらしい」とネズミに断つてから、自宅の玄関のほうへ。

そして待たされたカタチのネズミのところへ、ふたりの人影がやつてきました。しかし、そのふたりの中に、初老の独身男の姿はありません。

「おやおやこれはまた物騒な」

ネズミは自らに抵抗の意思がないことを表すために両の手を上げて、ポソリと漏らしました。

拳銃を構えたふたりの警察官の姿が、そこにはありました。ネズミは速やかに逮捕されました。

翌日の朝の新聞に、ネズミの逮捕に関する記事が極々小さく書かれてありました。“善良な”強盗が逮捕された、と。その内容は、ネズミが成人そこそここの若者であつたことから始まり、ネズミの犯したことはまったく肯定できるモノではないが、しかし将来有望で優秀な“セキュリティー・アナリスト／セキュリティー・コンサルタント”たりうる若い人材がこれで失われてしまった、という、どこのネズミを擁護するような気配のあるモノでした。

初老の独身男は、“新聞社／新聞記者”的仕事の速さに感心を懐きつつ、どうにも釈然としないモノを覚えました。けれど、気にしないことにしました。もつ過ぎたことだ、と。

気持ちを新たに今日という一日を過ごそう、といつ想いを懐いて、レジ・カウンターのところに置いてある椅子に腰を下ろした　とたん、

「おいおいおいおい雑貨屋あー！」

やかましい酒焼けした声が、朝の清々しい空気をだいなしにして入店してきました。

「雑貨屋じやない、雑貨店だ。酔っ払い」

初老の独身男は訂正しつつ、

「なんだ？　今日は朝から酒か？」

付き合いの長い常連な中年男に、馴染みの特権たる軽い口調で訊く言葉を投げました。いつもは夜に見る顔を朝から見やるというのは、どうにも不思議なもので。いつもと異なる理由が知りたくあるのです。

「違げえよつ！　酒なんぞ飲んでる場合じやねえから、いつしてこに来てるんだろがよ！　察しろよ雑貨屋つ」

「雑貨屋じやない、雑貨店だ。酔っ払い」

初老の独身男は再び訂正しつつ、

「で？」

と訊きます。

「酔っ払いが酒を飲んでいる場合じやないって、なんだ？　ついに内臓が壊れたか？」

「違げえよつ！　仮にそつだつたとしても、なんで俺の内臓事情を雑貨屋に報告しなくちゃならぬんだよつー。しかもこんな朝っぱらからつー！」

といつ常連な中年男の言葉に、

「さあ」

初老の独身男は軽く肩をすくめて、興味なさそうに返します。

「 いじのヤロウ……」

常連な中年男はしかしグッと堪えて、ポケットから多機能携帯端末を取り出してそれを操作し、ある画面を表示させて、「機械音痴の雑貨屋に教えてやるために、わざわざ来たんだよつーと、初老の独身男に見せます。

多機能携帯端末の画面には、ネット上で自らの発言を制限内の文字数で書き記すツールのサービスを利用している。“どじかの誰か”の発言が表示されました。

我らの“善良な”同志たる優秀な若い人材からの魅力的な提案を蹴り、我らの“善良な”同志たる優秀な若い人材から“これから”の選択を奪つた愚かな雑貨屋に、我ら“善良な”同志は有する能力を惜しみなく發揮して“わからせる”ことを、ここに宣言する。

その文面を読んで、初老の独身男は、

「……で？」

泥酔した友人に辛抱強く付き合つヒトの表情をして、言葉を投げます。

「だからなんなんだ、酔っ払い」

「で、じゃねえよつ！ 昨日の今日だぞつ？ 明らかに雑貨屋のことだろつ、これ！」

常連の中年男はケンカを吹つかけるような勢いで肉薄し、語氣を強めて指摘しました。

「確かに間違いない雑貨屋のことを言つてているんだろつ、 が、
うちは雑貨屋じやない、雑貨店だ」

初老の独身男は再々訂正して、

「まったく、どこかの雑貨屋はお気の毒なことだな。同じく雑貨を扱う者として、そのどこかの雑貨屋にはお見舞い申し上げるよ」他者に対する同情の色が浮かぶ顔で、そんなことを述べます。

「 いじのつ、頭の固い老人めつ」

常連の中年男は額に薄つすら血管を浮かべ、奥歯を噛み締めてか

「 もう知らんつ 」

唾を飛散させてそのまま宣言し、バンシとレジ・カウンターの上に勢いよく拳を叩きつけ、

「 こつものつ ！」

と、常連の特権たる要求をします。叩きつけられた拳が開かれ、“いつも”を得るのにピツタリな金額の硬貨がレジ・カウンターの上に控えめに落とされました。

「 朝から酒かよ、酔つ払い 」

初老の独身男からのそんな苦言を、しかし常連の中年男は「ふん」と鼻を鳴らして受け流します。それから常連の中年男はレジ・カウンターから離れて冷蔵陳列棚の前まで移動し、一切の迷いない拳動で冷蔵陳列棚の扉を開き、ハーフサイズのビン・ビールを取り出します。そして小慣れたかんじで奥歯を栓抜きのように使ってビン・ビールの口を開け、そのままグビッと一口、喉の奥に流し込みます。

店の中で飲むな、と初老の独身男が注意する」とはけれどなく。夜はだいたいちょっとした立ち飲み屋のようになるので、いまさら気にならないのです。

「まあ、仮に、酔つ払いの通りだったとして」

初老の独身男はいちおつ閑話休題して、

「こんな堂々と“やらかす”って宣言しているヤツらを捕まえられないほど、この国の警察は無能じやあないだろつぞ」
さしたる真剣さもなく述べました。

「 はつ 」

常連の中年男は鼻で笑つて、

「 ここの国に有能な権力があつたら、禁酒してもいいぜ 」
と言い、グビッと一口、ビールの苦味とうま味と炭酸が喉の奥に流れしていくのを味わいます。

数日後、常連の中年男が禁酒を断行する理由のひとつがなくなり

ました。

一夜にして、小さい雑貨店の商品すべてが消失したのです。

初老の独身男がいつも通りの決まった時間に田を覚まし、毎朝の習慣となっている開店の準備をおこなうと店舗に足を踏み入れたら、異常にキレイさっぱりしていたのです。販売するべき商品が、ひとつも見当たらぬほどに。

初老の独身男はすぐさま警察を呼びつけました。そしてどうにも収まらない気持ちのままに、言葉を投げつけます。「あなた方がこれほど無能だとは思わなかつた！ この税金泥棒めつ！」と。

いつこうに落ち着く気配の見えない初老の独身男に、現場担当の警察官は対応しきれず。その日の内に、「そちら」の処理が専門の部署の人材が派遣されることになりました。

カツチリとしたスーツに身を包んだ、いかにも頭脳労働担当といった風貌の男がふたり、どこか小慣れたふうな所作で、今回のことに対するお詫びなどの言葉を口にしながら、それぞれ名刺を差し出してきました。

初老の独身男は、いちおうそれを受け取ります。

スーツ姿の男のひとりは改めて今回のことに関する“定型文”を口にし、それから恥を告白する深刻な顔をして、「我々も完璧ではないのです」と一定の理解を求めました。

「あなた方が完璧ではないことは、今回、身を削つてよくよく知ることができた。そこには理解を示そう」

初老の独身男は厳しく眉間にシワを刻んで、腹の底から重々しく音声を吐き出して言います。

「しかしそれで、はいわかりましたと言つて、あなた方にお茶をふるまえると？」

スーツ姿の男のふたりはかしこまつた顔をして肅々と、初老の独身男の言葉を受けます。そして絶妙な一拍の間を置いたところで、「いらっしゃると致しましても」

と述べます。

今回のこととは重く受け止め、犯人を逮捕することに全力を尽くす所存です、と。

それから「しかし」と言葉を継ぎ、「しかし現状、犯人はまだ捕まつておりません。で、ありますので、再び“こちら”が狙われる可能性があります。“こちら”が営業を再開する際の安全、警備に関して、お話をさせていただきたく」

そこで瞬と相手の顔色をうかがい、話を先に進めて大丈夫そうだと判断し、述べます。

「今回は外部から“今回のこと”に関して優秀な能力を發揮する“セキュリティー・アナリスト／セキュリティー・コンサルタント”を呼び、参加していただき、より万全な警備プランを提示させていただく所存です。ちょうど先日、とても優秀な人材と“契約／取り引き”を交わしたところなのです」

初老の独身男はあまり期待していないヒトの目でふたりを見やりながら、口を開きます。

「その外部から呼ぶのは、いつたいどんなヒトなんですかね？」
「はい、ええ、じつは同行しております。いま呼んできます」
そう言つてスーツ姿の男のひとりが席を外し、「呼んできました」

すぐに戻つてきました。かたわらに、新たな人影をともなつて。初老の独身男は吟味するヒトの目を、そちらに向けました。そこには、固定された笑い顔がありました。

「ハハツ」

小話・其の七拾壱『ゆびパッチン（仮題）』（前書き）

【魔法のパッチン】

小話・其の七拾九くゆびパッチン（仮題）』

『ゆびパッチン（仮題）』

とある時代の、とある国、とある町の、とある公園のベンチに、ふたり分の人影がありました。ひとつは大量生産のハムと野菜のサンディッシュを、ひとりはお弁当屋さんのからあげ弁当を、食していました。五〇〇ミリリットルのペットボトルの、甘さひかえめの紅茶と、濃いめの烏龍茶が、それぞれ脇に置いてあります。

「なんだかなあー」

からあげ弁当に箸をつけていたひとりが、やや日射しの強い青空を見上げながら、ポンリと呟きました。

「んー？ どうしたー？」

サンディッシュをもしゃもしゃと咀嚼していたひとりが、サンデーを嚥下して、紅茶を一口ジョリと飲んでから、応じました。

「なんかさ、」

からあげのヒトは、箸を持つていなければ、手の、親指と中指をうまく使ってパチンと音を鳴らし、

「これで世界がガラリと変わったりしないかなあーと、思ってみたりしてさ。心情的にどうか、」時世的にどうか、ね」

青空の中をチマチマと横切る飛行機の影を熱心に見やつながら、「ま、変わるわけないんだけどさ」

そう述べました。

「ふーんむ」

サンディッシュのヒトは神妙そうに話を聞いてから、親指と中指を不器用に使ってペチンと気の抜ける音を鳴らし、

「ほほう、なるほど、なるほど、なんとなくわかった」

こまだ飛行機の影を田で追つていてからあげのヒトを、横田でチココとうかがつてから、

「確かに変わらないね 受け身だと」

ニヤリ顔で言います。

「でも、いまので、ひとつ変わったことがある。いや、変えた」と
ができた、と表現するべきなのかな。能動的に

「んん？ なにを言つてるんだ？」

からあげのヒトは疑問顔で、飛行機の影からそちらへ視線を移し

、

「ああっ！」

自分のからあげ弁当の主役たるからあげを、いままさに喰らわん
とするサンディッシュのヒトの姿を発見しました。

サンディッシュのヒトはイタズラを成功させた子どもみたいな顔を
して、言います。

「サンディッシュが主役の私の食事に、からあげという一品が加わっ
た。これは間違いなく、『世界ノ私の食事』が変わったと表現
できるだろ？」

小説・其の七拾武くわつかせん(仮題)』(前書き)

【時と場合によつて】

小話・其の七拾弐『そつせん（仮題）』

『そつせん（仮題）』

とある時代の、とある国、とある街の、とある商店街の、とある電気店の展示してあるテレビの画面の中で、

「ええ、はい」

質のよいスーツを着た初老のヒトが、

「で、ありますから」

努めて真摯ふうな顔をして、

「国民のみなさんには、省エネをお願いしたいわけであります。わたくしも、この國の一員として、一国民として、そつせんして取り組んでゆく所存であります」

そう述べました。

テレビの場面が切り替わり、テレビ局のスタジオが映しだされました。

そこには、二コースキャスターとコメンテーターが、初老のヒトの発言に対する意を異口同音で述べました。いまのご時世、省エネはとても重要なことだ、と。

それからじばじ経過した、ある日。

テレビ画面の中での、質のよいスーツを着た初老のヒトが、ペンとメモ帳やボイス・レコーダーやマイクを持った複数のヒトに囲まれて詰め寄られていました。刺々しい熱のある雰囲気が、画面を通して伝わってきます。

複数のヒトの中の誰かが、憤怒と切実さと情けなさに対する嘆きの混在する音声で言いました。

「この大事なときに、ここの運営の責任者である“あなた方”が省エネ・モードになつてどうするんですか？」「

それを受けて、しかし「この国の運営の最高責任者である初老のヒトは、

「ええ、ですから」

まるでそれが知的な振る舞いであるかのような稚拙な冷静さで、応じます。

「わたくしも、この国の一員として、一国民として、そつせんして省エネに取り組んで」

テレビ画面が暗転しました。

省エネのために、テレビの電源が落とされました。

小話・其の七拾參『気軽に計画（仮題）』（前書き）

【“簡単便利”には慎重に】

小話・其の七拾参 『気軽に計画（仮題）』

『気軽に計画（仮題）』

とある時代の、とある国の人々、とある町の、とある喫茶店のテラス席に、ふたりの若い男の姿がありました。ひとりはブラックの「コーヒー」を、ひとりはミルクと砂糖がたっぷりの「ミルクティー」を、それぞれ味わっています。

「お前、身体壊すんじゃないかというくらい、異常なほどバイトをしているけれど、そこまでして手に入れたいモノでもあるのか？」
パリッとしたスーツに身を包んだ男が、訊きました。言葉を発したあとの口で、「コーヒー」を一口、味わいます。

「もちろん。それはそれはすごいモノを手に入れるために、ぼくは千からびぢゅうほどの汗を日夜びぢゅうびぢゅう流しているのさ」
着古したシャツにジーンズという軽い身なりの男が、応じました。
言葉を発したあとの口で、「ミルクティー」を一口、味わいます。

「ふんむ。車、……は、たぶんもう五、六台、買えるくらいは稼いで貯め込んでいるだらうから……、一等地の一国一城の主にでもなりうとしているのか？」

「いや、そんな小さいモノじゃないよ」

「ほう。じゃあ、その小さくないモノとは？」

スーツに身を包んだ男は興味深げに、「ぜひとも教えてほしい」とやや身を乗り出して問いました。

軽い身なりの男は焦らすように、自称セレブ的な優雅さでミルクティーを深々と味わつてから、「手に入れたいのは……」と口を開きます。

「世界、さ」

「画材と額縁の専門店を？ なんでもまた？」

「違う！ 違うよ！ ゼンゼンまったく違うよ！」

軽い身なりの男は、慌てたふうに訂正を入れます。

「“世界”的と“堂”って言つてないでしょ。違ひよ、ぼくが手に入れたいのは“この世界”であつて、画材と額縁の専門店の世界じゃあないよつー！」

「……「ノセカイ？ 聞いたことないなあ。どうこいつといつなんだ？」

スース姿の男は眉間に“疑問のシワ”を刻みつつ、コーヒーをすります。

「なんで片言なのさ。知らないわけがないだろ？ “この世界”だよ。英語で言うと“the”ザ・ワールド」

「…………ん？ いまなんて？」

「だ・か・ら！」

軽い身なりの男はざつにか辛抱強さを發揮して、教えます。

それから、同じようなやり取りをウンザリするほど繰り返して。「それはそれはまた……お前、身体を休めたほうがいいんじゃないか？ 疲れているんだよ」

スース姿の男が、他者を気遣う声色で言いました。とてもとてもとても優しさある眼差しと表情をしています。

「疲れて妄言を吐いているわけじゃあないつ。ぼくは正氣だし大真面目だー！」

「大真面目じー、この世界”を手に入れようとしてこねどー！」

「うん」

軽い身なりの男の子どもみたいな素直もある返事に、

「そうかー」

スース姿の男は全面降伏してすべてを受け入れる構えのヒトのフランクなノリで応じて、とりあえず一口、コーヒーをすすります。そして意外な事実を知つたとこつぶつに、

「それにしても、まさか“この世界”が、バイトで貯めた金で買えるモノだつたとはね」

大根役者の芝居のような“驚き”の音声で、言いました。

「いやいや、なにをおっしゃる」

軽い身なりの男は、一発屋芸人の“一発芸／インスタントなお笑い”を見たヒトのような笑みを浮かべて、

“この世界”が、お金で買えるわけないでしょ
しかしキッパリと冷静に、そう指摘します。

「…………“この世界”を手に入れるために、バイトして金を貯めているんだろう？」

「いや、確かに、“この世界”を手に入れるために、お金を貯めているけれども。お金で直接、“この世界”を手に入れるわけじゃないよ」

「……どういと？」

“この世界”を手に入れるために必要な複数の“道具／ツール”を買つために、ぼくはお金を貯めているんだよ

「まさかそんな“道具／ツール”が売つていたとは、驚きだ」

「いやいや、キミも日常的に使つていると思うよ。ヒトによつては、依存しているとも言えるかもしね」

「パソコンとか、携帯電話とか、か？」

「ほぼ正解」

「ほほ？　じゃあ、大正解は？」

「パソコンとか携帯電話とか、ネットに接続できる機器で使用する、実名なり匿名なりで登録して制限以内の文字数で発言を喰く／＼ニコニケーションのサービスとか、実名で登録して実在の個人の意見やステータスを発信する／＼コミュニケーションのサービスとか、キーワードを入力してそれに関連する情報をネット上から検索してその関連情報を生成する検索のサービスとか」

「…………それが、“この世界”を手に入れるために必要な複数の“道具／ツール”？」

「そうだよ。だから、バイトをしてお金を貯めているんだ。そのお金で株をやって資金を増やして、それで“それら”的サービスの主軸の会社を自分のモノにする。だから株に関することも現在、独学

だけれど猛勉強中だ。キミの勤め先が、いつの間にかぼくのモノになつてゐる日も遠くないかもね」

「そうなつたときは、社員の待遇向上をお願いするよ。ところで、どうして“それら”的サービスを自分のモノにする」といで、“この世界”が手に入れられるんだ?」

「眩きとか発信の情報の関連の指向性や、検索したワードに関する情報の関連の指向性を、利用者には自覚できない程度の些細さで意図的に形成、生成したら、どうなると思う?」

「さっぱりわからん」

「下降にある大きな流れの河の、山奥にある小さな源流を握つたら、それはもう下降にある大きな流れの河を握つているということにもなるでしょ? 事後である“いまある流れ”に手を加えるのではなく、事前に“流れそのもの”を自分の好きなカタチに形成、生成してしまう。検閲や規制による“支配”ではなく、形成と生成による“誘導”で、“この世界”を手に入れれるのさ」

「んんー。わかつたような、わからないような……」

「今日なんとなくキミは、ぼくに一千九百八十円のスーパー・デリシャス・グレート・チョコパフェをごちそうしたい気分になる。そういうシチュエーションに違和感なく自然と陥る。って、ことさ。ぼくが“それら”的サービスを自分のモノにしたら、ね」

「ふんむ……。お前に一千九百八十円のスーパー・デリシャス・グレート・チョコパフェをごちそうしたくなる世界、か。まったく歓迎できないな」

「阻止したいなら、手がないわけでもないよ?」

「ほう。参考までに、『教授願おうか』

軽い身なりの男はメニュー表のある一点を指で示して、

「この、五百円の普通のチョコパフェをだね、キミは取り引き材料とするわけさ」

と提案します。

「五百円の普通のチョコパフェで、一千九百八十円のスーパー・デ

リシャス・グレート・チョコパフェを「あそびしたくなる世界を阻止するか、それとも一千九百八十九円のスーパー・デリシャス・グレート・チョコパフェを「あそびしたくなる世界を受け入れるか、どちらにする?」

「そりゃあ、どちらにすると訊かれたら、五百円の普通のチョコパフェをお前に「あそぶよ」

「なるほど、よくわかった」

軽い身なりの男は大仰にうなずいてから、スッと右手を頭上に掲げます。

「店員やーんつ! チョコパフェ追加でお願いしまーすつー!..」

小説・其の七拾四くとも少な輸の内側で（仮題）》（前書き）

【裸のよつな王様のよつな　　のよつな】

小話・其の七拾四 『とても小さな輪の内側で（仮題）』

『とても小さな輪の内側で（仮題）』

ふたりの男が、バス停でバスが来るのを待っていました。このふたりの男は、知り合いです。

「は！ こりゃいかん！ こりゃどうしたことが！」

ひとりの男が、突然に頭を抱えて言いました。

「ん！ ど、どうしたんだ？」

もうひとりの男はいきなりのことに驚きつつ、訊きました。

「どうした、だと？ まったく……」

ひとりの男は、あきれ果てたふつに息を吐き捨ててから、「いや、私とてヒトの心は持ち合わせているから、知り合いであるキミには、教えてやる！」

これまた突然に、どうしてだか上から田線で述べます。

「ん、んん……」

もうひとりの男は、釈然としないモノを胸の中にモヤモヤと懷きつつ、

「……で、いつみたいなにを教えてくれるんだ？」

辛抱強く子どもの声を聞く保母さんのような顔をして、訊きました。

た。

「いや、なに、以前“＊＊＊＊＊”に関して＊＊＊＊＊が＊＊＊＊＊であると思考したことふと思ひ出してな。いやはや、時を置いて改めて、自分の“すごさ”、天才さに気づき、驚きを覚えてしまつてな。自分の優れ過ぎている頭脳が、恐ろしくすらあるのだよ。こりゃいかんぞ……。まったく、こりゃいつたいどうしたらいいものか

ひとりの男は深刻な問題に直面したヒトの表情を作つて、また頭を抱えます。

「そりゃー」

もうひとりの男は、乗車するバスの到着は「まだかなあー」というふうに道路の先へ視線をやりつつ、

「頭の中で天才なのはよくわかったよー」

鼻をかむような気さくさで、

「その勢いのまま、次は頭の外でも天才になるんだねー」

頭を抱える知り合いの男の肩を、ポンと軽く叩きました。

* * *

特定の輪の中で頂点に君臨し、
その椅子の座り心地に満足していくは、
その椅子の地点より先へ進むことができない。

小話・其の七拾五「なるほど」（仮題）》（前書き）

【戦略部コロニー・ケーショーン】

小話・其の七拾五 なるほど（仮題）

《なるほど（仮題）》

とある時代の、とある国、とある街の、とある学園にある家庭科調理室に、授業の一環として炒め物を調理している生徒たちの姿がありました。

「熱つ！」

ひとりの女生徒が、悲鳴のような声を上げました。負傷したヒトのように、顔を押さえています。

他の女生徒たちが、それぞれ心配するような言葉を口から出しました。そう言つことが“お約束”であるような、どうにも奇妙な空氣です。

ひとりの女生徒が声を上げたのは、どうやら炒め物の油が、極々微量、顔にはねたことが理由のようでした。日常的に料理をおこなうヒトに、「どう思いますか？」と意見をうかがえば、ほぼ満場一致で、「とくに声を上げるほどのことではない」という言葉が返ってくることでしょう。

だといひの。女生徒は、念のために病院へ行くことになりました。

女生徒がいつに負傷者然とした態度を終了しなことと、学校側が“顧客”的機嫌を損ねかねないリスクを負いたくないと、姿勢による、ひとつ結果でした。

「マジかよー。あの程度で病院のお世話をなるとか、どんなだけか弱いんだよ」

ひとりの男子生徒が場の空氣を察することなく、素直な感想を口にしました。

家庭科調理室にある“意味”的なほどだが、胸の内で意図せず首肯します。

「サイテー」

声を上げた女生徒とよく一緒にある顔のひとりが、憤怒の滲む音で言いました。男子生徒を、軽蔑の眼差しで見やります。

男子生徒はどのように対応したらよいか考えつかず、とりあえず微笑んでおきました。

声を上げた女生徒が、病院へ行くために家庭科料理室から退室しました。よく一緒にある顔のひとりも、その付き添いとして退室します。

家庭科調理室が、「ふう」と息を吐いたような雰囲気になります。

た。

さきほどどの男子生徒が、

「なるほど」

なにか“わかった”ふうに言いました。

「なるほど、つてなにが？」

男子生徒の友人が、訊きました。

「ん、いやー、いまさらながら、夏場にパンツ一丁で油はねに耐えながら料理していたオレが、じつは救急車を呼ぶ権利を獲得していつたんだなあということに、いまつきのおかげで気づいて」

と、しみじみ述べる男子生徒に、「なにが？」と訊いた友人と、彼の担当の教諭が、そろって深刻そうな顔をして言います。

「頼むから、お前までメンドウにならないでくれよ」

「頼むから、お前まで“あんなふうに”ならないでくれよ」

小説・其の七拾六『あつえない』(仮題)』(前書き)

【あなたのとは違つのです】

小話・其の七拾六「ありえない」と（仮題）

『ありえない』と（仮題）』

とある時代の、とある国で、とある事故が起きました。そのとある国の政府は、そのとある事故を責任の所在を明確にしないまま速やかに処理してしまいました。

政府のその対応には、国の内外から批判的な意見が相次ぎました。

とこう外国の事故とそれに対するその国の政府の姿勢に関する、テレビ番組の街頭インタビューが、とある時代の、とある国のある街でおこなわれていました。

「我々の国ではありえないことです」

インタビューのマイクを向けられたヒトは老若男女問わず皆、口をそろえて、そう述べました。それから同情的な苦い笑みを浮かべて、これまた老若男女問わず皆、口をそろえて述べます。

「しかし“あの国”は国民に政府を選ぶ権利がありませんから

とこう街頭インタビューの模様を流す外国のテレビ番組を、ソファーに身体を沈めて見ていたラフな身なりの男は、ビン・ビールを一口、喉の奥に流しこんできら、

「あんたたちも、“我々の国ではありえない”ってことになつてるぜっ」

と、テレビ画面に向かつて、ゲップと一緒にそんな言葉を吐きました。

「ちょうどさつさ、ビール買いに行つた帰りに、あんたたちの政府の姿勢に関するテレビ番組の街頭インタビューを受けたから、オレがそう言つてやつたのさ」

男はそこでさらにビールを飲んで上機嫌に顔を赤くしてから、お

もむろにタバコを取り出します。そして一本、口にくわえ、マッチを擦つて火をおこし着火。深々と吸つてから、紫煙を吐き出し、その後にやっと言葉が繼ぎます。

「祖国が困難に直面しているのに自分の座る椅子の質ばっかり気にして責任の所在をなすりつけ合つて、祖国が直面している困難だけはとりあえず一丸となつて解決しようとしたやしない、“あの困難”に対してあんな対応をするなんて。我々の国ではありえないことだ　つてな」

とこつぶつにお酒を飲んでタバコを吸つてテレビに向かつていろいろ語れるある外国の風俗を耳にした、とある時代の、とある国の、とあるヒトは、

「我々の国ではありえない」とだ

と、閃光が煌く夜空を見上げながら、言葉を漏らしました。

「そんな優雅な余裕は、とつくの昔に失われてしまったのだから…」

土砂降りの雨が「」と夜空に注ぐ対空砲の曳光弾の明滅を見やりながら、自分の生まれ育った街のどこかに爆弾が落ちた破壊の音を聞きながら、そう言葉を漏らしました。

小説・其の七拾七『いんたびゅー（仮題）』（前書き）

【“それ”を扱うのは】

小話・其の七拾七『いんたびゅー（仮題）』

『いんたびゅー（仮題）』

理想と現実の表情は、時に似ている。

* * *

「本日は、よろしくお願ひ致します」

その男は、やや緊張した面持ちで、対面向かって一礼しました。

「いらっしゃ」

向かつて右から、厳格さを感じる鋭い音声が応じました。

「いらっしゃ、よろしくお願ひしますね」

向かつて左から、温厚さを感じる穏やかな音声が応じました。

その男は一度、手にしているペンとメモ帳を握り締めてから、

「それでは」

この場における自らの使命を果たすために、口を開きます。

* * *

“力／ちから”について、どのようにお考えですか？

「わたしが、“力／ちから”そのものだ。それ以上でも以下でもない

い

右にある音声が、とくに主調するでもない平坦な口調で述べました。

「わたくしは、ご存知のように元が“空っぽ”ですから、自らに“力／ちから”そのものが備わっているとは考えていません」

左にある音声は、“自ら”を正しく理解している“わきまえた”

落ち着きと余裕ある口調で述べてから、

「わたくしにとつての“力／ちから”とは、様々なヒトたちから“気持ち／少しづつ”分け与えてもらうものであり、その結果です」大切な“それ”に対する感慨と愛着のある言葉遣いで、

「 ですか」「から

と、継ぎます。

「 “ P e t i t a p e t i t , l - o i s e a u f a i t s o n n i d . ” 小鳥は数日をかけて巣を作る／ちりも積もれば山となる” これこそが“力／ちから”であると、わたくしは確信しています」

* * *

“不要である”との声が一部からあります、そのことについては、どのようにお考えですか？

「昔から投げられる言葉ではあるが、本当にそれが、今まで残ることなく、とうに廃れているだろう」

右にある音声が、わかりきつていることへのあえての問い合わせに努めて応じる、若干の嫌を滲ませて、そう述べました。

「本来はわたくしも含めて“不要である”べきだと、そう思います。しかし現状が“それ”をよしとしないのです」

左にある音声は、歯がゆさを噛み締めるように述べてから、「いますぐにも“あるモノ”が廃れてくれたら、事は漸進するのですが」

と、極めて意図的に、右のほうへそんな言葉を投げます。
「まるで、わたしが、その“漸進”を妨げている要因であるかのような物言いだな」

「そう聞こえてしまつ“思い当たり”が、あるのでは
「なにを言つ。“いぢぢら”は、“そちら”に対しては莫大な出資を

し、ときには“力／ちから”をもちいて、“そひり”の活動を援助している

「確かに、それは事実ではあります。しかし、さきほども述べたように、本来は“不要である”のがわたくしなのです。“あるモノ”がもたらす“ひとつつの結果”を根絶するために、わたくしは活動しているのですから、そもそも“あるモノ”がなければ、“そちら”の援助も不要となります」

「“そちら”の解釈、認識、意見を、否定するつもりはない。ただ、その“あるモノ”を必要とする存在があるのも“ひとつつの事実”であり、結果的に救われる存在があるのもまた“ひとつつの現実”だ。“そちら”を必要とする存在があるように。それが“現状”だ」

* * *

“正義”について、どのようにお考えですか？

「“神がどこの誰であるのか”と信仰ある者に問う、“勇敢さ／不礼さ”だな。……まあ、わたしそのものに信仰はないが」右にある音声は、やや慎重な姿勢でそここぼしてから、「“どこかの誰かの正義”が、“わたしの正義”。それ以上でも以下でもない」

と、主調する感のない平坦な口調になつて述べました。

「信念」と言いたいのですが、正直、もう、よくわかりません。“ある信念”が、“不要である”べきものを必要としてしまうことを知っていますから」

左にある音声が、そつ言葉をこぼしました。困難に挑み続けたことによる疲弊の色が、滲んでいます。

「ただ」

と、左にある音声は、諦め色の一切ない口調で継ぎます。

「Petit a petit, l'oiseau fait

t s o n n . / 小鳥は数日をかけて巣を作る／ちりも積
もれば山となる” “ わたくしの正義” はそこにあると、そう思
つています」

* * *

「本日は、ありがとうございました」

無駄に力んだ手でペンとメモ帳を持っていたその男は、対面に向かって一礼しました。

「ふんむ」

右にある歯声はやうございました。

「いえいえ、こちらこそ、貴重な経験ができました。ありがとうございました」

左にある歯声はやうございました。

* * *

ヒトが去ったあとの温もりがまだ残っている椅子の、対面にあるソファーに、ふたつの影がありました。
ソファーの右側にある影は、最も多く流通し、最も多くの生命を奪つた兵器とされる突撃銃でした。

ソファーの左側にある影は、一定水準に達した文明文化を有する国では至るところに目にする募金箱と称される箱でした。

小話・其の七拾八『浦島太郎は鏡をのぞいて眞を知る（仮題）』（前書き）

【ヒトのふり見てなんとやら】

小話・其の七拾八 『浦島太郎は鏡をのぞいて眞を知る（仮題）』

『浦島太郎は鏡をのぞいて眞を知る（仮題）』

とある時代の、とある国の、とある街の、とある駅まで続く道を、ふたりの男が喋りながら歩いていました。

「てさ」

ひとりの男が、多機能携帯端末を操作しながら言いました。
「へえー、そうなんだー」

もうひとりの男は、そう応じつつ、ふと聞こえたジエットエンジンの音に空を見上げて飛行機の影を田で追います。

「それでさ　あつ」

手元の端末から目を上げて隣に話しかけようとした男が、

「クソ、腹立たしい」

突然、悪態を吐きました。

「ん？　どした？」

空の機影が“なにであるか”を脳内検索していた男は、不意と隣から聞こえてきた“それ”に、空から隣へ視線を移して訊きました。

「ほら、あれ、“パクリの国”のヤツらだ」

悪態を吐いた男が顎で示した先には、“こちらの住人”ではないとわかる異文化を身にまとった複数の人物の姿がありました。

「世界共通の規定」を守らずに、“こちらの国”的“優れたモノ”を“マネ／＼コピー”した拳銃、悪びれも恥じらいもせず“これ”は“わたくしのオリジナル”と言い張る　まさに盗人猛々しいヤツら。よくも陽の下を歩けるものだ

「まあ、キミの気持ちは理解できるけどさ」

「けど？　お前はヤツらの肩を持つのか？」

「いや、それはない」

「じゃあっ」

“猿真似を一步に、アイデンティティへ至る”。ワガママな子どもの成長を見守る母親の境地で接しよつ、というだけさ。“彼らの国”はまだ幼いのだから

「んー」

「まあ、それはそれとして。さつき、なにか言いかけていたけれど？」

「ん、ああ

ひとりの男は思い出したように多機能携帯端末を操作して、言います。

「昨日、“動画投稿共有サイト”で“いい音楽”を“発見”したんだよ。ちょっとまえに発売されたやつらしい。アップロードした“どこかの誰か”には感謝だな。あまりに“いい音楽”だったから即行でダウンロードして　いま聞かせてやるよ」

小話・其の七拾九 『こゝに存在していたのです（仮題）』（前書き）

【ヒトは疑問の答えを知りたがる】

小話・其の七拾九 くにに存在していたのです（仮題）

『くにに存在していたのです（仮題）』

とある時代の、とある国、とある場所に、複数の人影がありました。円卓を囲むように座しています。

「これは……その、なにか“この形状”に意味があるのですか？」
影のひとりが、遠慮がちに訊きました。その眼差しは、円卓の上に向けられています。

円卓の上には、“なにか”的設計図と思しきモノが置かれてありました。

「見てくれに意味など、ないつ！」

ひとりの影が、断言する口調で言いました。

「……では、……あの」

影のひとりは、おずおずと手を挙げて、

「意味のないモノにて、この莫大な費用を投じるところじとじょうか？」

相手に畏れを懷いているヒトの口調で、しかし最後の一線、退くことなく指摘します。

「……その、違うヒトに“莫大な費用”を投じるべきではないかと思つのですが」

「“意味がない”ことに意味があるのだ」

畏れを懷かれているひとりの影は、

「より具体的に言ひなう、“こまの我々にとって意味がない”ことにな」

これからを見据えてこるヒトの搖るかない姿勢で、そう述べました。

* * *

とある時代の、とある場所に、複数の人影がありました。揃つて、同じほうを見やっています。

複数の人影の眼差しの先には、“あるモノ”がありました。
「じつに形容し難い……“アレ”は、いつたいなんなのでしょう?..」
影のひとりが、ポソリと疑問をこぼしました。眼差しの先には、
からうじて建築物であろうと推察できる“あるモノ”があります。
「なにか儀式を執りおこなう神殿とも推測できますが……いえ、そ
れを知るために私たちはここにいるのですから、憶測で論を広げる
まえに、調べましょ」「う

と言つて、影のひとりは、プレゼントを目前にした子どもの“ひと
き輝きある瞳を“あるモノ”に向けました。

「そうですね」

影のひとりは首肯して同意を示し、真摯な眼差しで“あるモノ”
を見やりながら述べます。

「なぜ“彼ら”的“国／文化／文明”が滅んだのか。それを知
り、そこから学ぶことで、いまの私たちが抱える困難を解決できる
かもしね。少なくとも確実に、ヒントはそこにあるはずですか
ら」

とある時代の、とある場所　かつて国が栄えていた、いまは意
味不明の遺跡群がそびえる場所に、過去を知り、過去から学ぶため
に集まつたヒトたちの姿がありました。

* * *

とある時代の、とある国の、とある場所で、

「“いまの我々にとつて意味がない”このことは、未来に対する叫
びなのだ」

国の運営の最高責任者たる人物が、一切の疑惑を持つていねいヒ

ト特有の妙な説得力がある言葉遣いで述べました。

「未来の者たちに、我々が確かにここに存在していたと知つてもらうための」

小説・其の八拾『夢の国（仮題）』（前書き）

【幻想、現実、どちらの“コメ”を】

小話・其の八拾『夢の国（仮題）』

『夢の国（仮題）』

木々の葉々の間から切れ切れと光の差し込む森の中の、道なき道を意志ある足どりで歩む、ふたりの人影がありました。

ひとりは、まだ幼さの残る少年でした。ボロを着ていて、清潔とは言えない身なりをしています。

もうひとりは、さらに幼いふうのある少女でした。ボロを着ていて、清潔とは言えない身なりをしていますが、頭には生花を編んで作つたと思われる綺麗な髪飾りがありました。乙女の嗜み、意地が、そこから感ぜられます。

ふたりは、少年と少女は、血の繋がつた兄妹でした。とある貧富の格差が激しい国の、とある貧民街で生まれ、そして育つた、いまはふたりだけの家族です。いちおう両親はありましたが、わずかばかりの生活資金を得ようとふたりを売ろうとし、けれど人身売買人のところへ行く途中で悪い連中に襲われ……“たぶん”死んでしまいました。“たぶん”とはつきりしないのは、両親が襲われている隙にふたりが逃げ出したからです。悪い連中からではなく、自分たちを卖ろうとしている両親から。

いま、ふたりは、目的を持つて歩んでいます。まだ両親があつて貧民街で暮らしていた頃に耳にした、楽しみ溢れる誰もが笑顔の“夢の国”があるという話。そのときはどうせただの夢物語と信じていませんでしたが、偶然にも實際に行つてきたというヒトの自慢話を聞き、どうやら実在するらしいと確信を得たふたりは、両親から解放されたという勢いに強く背中を押されたのもあって、“夢の国”を指すことにしたのです。進むべき方向は、實際に行つてきたところヒトの自慢話から知れました。あとは一步を踏み出し、また一步を踏み出し、踏み出し続けて、歩みを進めるだけなのです。

道のりは決して楽ではありませんでした。しかし、貧民街で暮らし生き抜いてきたふたりには、音を上げてしまつほど致命的に苦しいというモノではありませんでした。なにより夢を懷いて一步を踏みしめているので、期待に胸が高鳴るばかり。もうふたりの中には“止める／諦める”という発想それ自体が存在していませんでした。

そして。

深い森の長い道なき道をついに抜けたふたりの目の前に、“それは現れました。

見上げた空との間に真一文字引くような高い石の壁が、不動の構えでそこにありました。右に左に目を凝らしても、壁の終わりは見えません。

少年と少女は、期待を込めた眼差しで石の壁を見やります。しかし、これが“夢の国”であると教えてくれるようなモノは見あたりませんでした。

ふたりの胸の内に、不安めいた焦燥感が生じました。それに先導されるがごとく、ふたりは壁に歩み寄ります。そして可能性を妄信しているヒトの必死さある顔をして、壁に手をやります。探るように。かきむしるように。

すると。

ふたりの正面、石の壁の表面に、書物を開いたくらいの大きさの厚みのない白い“光の窓”が出現しました。

突然の出来事に、少年はビクッと身体を震わせ、少女は驚きのあまり体勢を崩して地べたにペタンと尻餅を着いてしまいます。

「おや、驚かせてしまったようですね。申し訳ありません。大丈夫ですか？」

気遣わしげな声が、どこからか聞こえました。

少年と少女は怯えたふうに辺りを見回します。

「こっちです、こっち」

という声に合わせて、石の壁の表面にある“光の窓”に“簡略化された二頭身のヒトの絵”が現れました。道化の衣装を着たそれは、

遠くのヒトを呼ぶかのように手を振る動きをしています。

少年と少女は、目の前で起こっている事態が事実であることを確認するように互いの顔を見やりました。そしてこれが事実と承認するようにうなずき合つてから、慎重な動きで“光の窓”に視線をやります。

「怪我はありませんか？ 大丈夫ですか？」

ふたりが確かに“自分”を見やつていると認識しているかのようにな、道化のヒトの絵が念を押すように訊きました。

少年と少女は驚きたじろぎつつ、大丈夫という意味で首肯して見せます。

「そうですか。それはなによりです。 が、なにがありましたら遠慮なく言つてくださいね」

ふたりは再度、首肯して見せます。

「では」

道化のヒトの絵は、仕切りなおすように「コホン」と咳払いする動作をしてから、本来の与えられている役割を演じます。

「よつこそ我が国へ！ 入国を！」希望ですか？」

少年と少女は、力強く首肯して応じました。

「では、こちらへ」

道化のヒトの絵が招き入れるようひたひたやさしく頭をたれると、石の壁の表面にある“光の窓”が静かに形状を変えます。窓が、扉になりました。

少年と少女はおつかなビックリしつつ、その輝かしい“光の扉”

へ

白光の暗転。
広がる“純白の闇”。

少年と少女が“光の扉”へと一步を進めた次瞬、ふたりの視界は眩い光に塗りつぶされました。数瞬を消費して、ふたりの視界は眩

さから解放されます。しかし薄く目を開いた先に見えるのは、遠いのか近いのか不明確な“眩くない光”だけでした。周囲には一面、“純白の闇”が広がっていました。

その不可思議な未知なる体験に、少年と少女は“恐怖／恐怖”に似たモノを懐きました。どちらともなく相手の手を取り、互いにぎゅっと握ります。

「それでは、出入国管理所までご案内します

至近距離、右のほうから声がしました。

少年と少女は驚き、ビクッと身をすくめました。それから恐々

と、声のしたほうへ視線をやります。

顔の高さの辺りに、先ほどの道化のヒトの絵がありました。“純白の闇”の中にあって厚みも遠近感も正しく認識できないので、その存在はじつに奇妙です。

「どうかされましたか？」

状況に理解がついていけず呆然とする少年と少女に、道化のヒトの絵が言いました。

数泊、呆然沈黙の間を置いてから、はつとしてふたりは首を横に振つて応じました。

「そうですか？」

道化のヒトの絵は気遣わしげな表情をして、確認するよつに訊きます。

少年と少女は、迷いなく首肯して応じました。あの“夢の国”が、もうすぐなのです。ここまで来て、余計な問答をして追い返されたくはありません。絶対に。

ふたりの応えに、道化のヒトの絵は表情を気遣わしげな“それ”から柔らか微笑み変化させました。それから満を持するかのように、その短い手を掲げます。

「では、出入国管理所へ」

パチンと指を鳴らすよつな音が聞こえ

白光の暗転。

聞こえてくる“楽しげなヒトの声”。

少年と少女の視界が回復するところには、“純白の闇”の中にあつて奇妙な存在感ある鋼鉄製の遮断機が下りているゲートがあります。その脇には、高級そうな革製のソファーとそれに合わせた纖細そうなガラス製のテーブルが設置されています。ここが“純白の闇”の中になかつたら、ソファーやテーブルも幽らしです。

少年と少女は、摩訶不思議に直面しているヒトの“形容し難い感覚”に包まれました。そして、ふと訪れた冷静さで、そういうえばひとつ疑念を懐きました。見られないのです。さきほど聞こえた“楽しげなヒトの声”の、その音源たる人影が、一切。

「こちらへどうぞ」

いつの間にかソファーのところに移動していた道化のヒトの絵に呼ばれ、ふたりは「はっ」と現実離れした現実に意識を引き戻されました。

「どうかされましたか？」

その場から動こうとしない少年と少女を気遣うふたりに、道化のヒトの絵が訊きました。

ふたりは慌てて、首を横に振つて応じました。ソファーのところへ急ぎ足で向かいます。

「では」

道化のヒトの絵が、少年と少女がソファーに座つたのを確認してから、

「我が国への入国には“ひとつ”だけ条件がございます。しかし“それ”以外は一切、ございません。年齢、性別、身分、人種、国籍、言語、宗教、犯罪歴を含む経歴、これらは我が国への入国に際しては一切、不問でございます。武器兵器を含む所持品に関しましても、武器兵器は自衛以外の私的使用は原則禁止ですが、持ち込みに制限は一切、ございません」

と、入国に関する説明を述べました。

それを聴いて少年と少女は、はやる気持ちを抑えきれず、前のめりになつて訊きました。“ひとつ”だけの条件の、その内容を。

道化のヒトの絵は、じつに丁寧な口調で答えました。

そして。

「お帰りは、あちらの扉からどうぞ」

道化のヒトの絵は満面の笑顔でそう言つて、『純白の闇』へと霧消してゆきました。

少年と少女はソファーに腰を落としたまま、うつむいています。身動きする気配は感ぜられません。

そんなふたりの背後には、空間にポツカリと穴を開けたような“暗黒の扉”が無音でたたずんでいました。

自らの呼吸音がよく聞こえてくる“静けさ”が、場の状況に一切の関心を示すことなく、無表情に横たわります。

そのまましばし“静けさ”は居座り

そしてとうとうに聞こえてきた機械が駆動するときの重たい音によつて、この場から追い出されました。

少年と少女は、とくに意もなく、音のするほうに視線をやりました。奇妙な存在感ある鋼鉄製の遮断機が、疲れた中年男性がダルそうに腕を持ち上げるがごとく駆動していました。

遮断機が上昇し終えるまえに、ひとりのヒトが身を少し屈めてゲートの向こう側から出てきました。

そのヒトは、頭に麦わらの帽子をかぶり、その下に耳と首の後ろを覆い隠すようにして白のタオルをはさんでいました。灰色の袖の長いシャツを着て、濃紺のジーンズをはき、足には黒のアサルトブーツがあります。背には、あまり大きさのない深緑色のリュックがあり、それを包み込むようにして黒のフード付きロンブグコートが、伸縮性のあるロープでぐるぐる巻きにされて留めてありました。そ

れぞれどれも使い込まれた“汚れ／味”があります。

「おっと、こんにちは」

そのヒトが、少年と少女の視線に気づいて言いました。

少年と少女は、力なく小さく会釈してそれに応じました。

そんなふたりの様子に、

「どうかしたのかい？」

そのヒトは気遣わしげな顔をしてソファーのところまで歩を進め、そう訊ねました。

少年と少女は悔しさを噛み締めるようにうつむき、ポソリと言葉を漏らします。

夢の国に入国するための“ひとつ”だけの条件を、夢の国に入国するための“資格”を、自分たちは有していないなかつた、と。

そして堤防が決壊するように、その“漏れ”をきっかけにして心情が口から溢れ出でてきます。いつたいどれほどの想いで自分たちが“ここ”まで歩みを進めてきたか。いままさに出国せんとする“あなた”には、この気持ちは理解できないでしょう、と。

そのヒトは、困ったふうな微苦笑を浮かべます。それから言葉を慎重に選ぶような間を置いて、自分は旅人だと述べました。

だから、と経験に由来する断言の口調で言います。

「この国を訪れるまでに様々な国や地域を実際に見て、肌で感じたことのある経験から、あえて言わせてもらうけれど、この国は、キミたちが想っているような“夢の国”ではないよ」

じゃあどのようないい国なのかと、少年と少女はやつあたり的と自覚しつつ不満と苛立ちを投げつけるふうに訊きました。

旅人は、ファンタジーを信じている子どもに容赦なく“リアルな現実”を教える大人のヒトのように告げます。

「この国は、“娯楽としての夢”をサービスとして対外的に販売提供している国だよ。よそ者からしたらまるで魔法と区別がつかないほどに発展しているこの国の科学技術を活用した、“娯楽としての夢”を、ね」

だからこの国は、と旅人は言い切れます。

「“都合のいい優しさある夢の”ではなく、“容赦のない厳しさある現実的な”」

歩き疲れたときにふと見上げた夜空にある星の煌きみたいな

「“いわゆる普通の”国だよ」

唯一ある入国条件の内容からして、“そう”だろう？
その旅人の言葉を否定するどころか、むしろ経験に由来する確信として同意している“自分”を認識して、少年と少女は喪失感に襲われました。

まるで燃え尽きた灰のような雰囲気のふたりに、旅人は、

「ところで

と、声をかけます。

「これから軽い食事をとるつもりなのだけれど、一緒にどうかな？」

少年と少女は口を開くことはなく。代わりに、どちらともなく、

「ぐう～」とお腹が返答しました。

音もなくただずんでいた“暗黒の扉”をくぐり抜けると、そこには、雑多な色と雑多な音のある、馴染みある世界が当然のようにありました。

しかし、少年と少女が“純白の闇”へ至るまえに居た場所とは異なっていました。しつかりと整備された道が、いまは背後の石の壁から地平線の先まで真っ直ぐと続いているのです。

ふたりはそのことを、旅人に告げました。

食事の準備として火をおこしたりしていた旅人は一瞬、驚いたふうな顔をしてから、自分は“ここ”から入ったのだと述べます。最初に“暗黒の扉”をくぐった自分のほうに、どうやら出口が“寄せられた”らしい、と。

旅人は地図で位置を確認するからと、少年と少女に“故郷”的名を問いました。「それから」「と追加でもつひとつ問います。

「お茶と『コーヒー、どうちがいい?』

旅人は地図を見ながら、少年と少女が“故郷”から“この国”に訪れるなら田の前にある整備された道を歩んでくるはずだと述べました。“故郷”から“この国”へ至るには、未開の森を迂回する力タチで、途中にある国を経由してするのが、一般的な道のりだ、と。でなければ未開の森を強行することになつてしまふ、と。

少年はコーヒーを、少女はお茶を、それぞれ味わいつつ、自分たちは森を抜けて“ここ”に来たと告げました。

それを聞いた旅人は息をのみ、

「……本当に?」

慎重に確認します。

少年と少女は、特別さなど一切ないふうに首肯して応じました。

「その無謀さ無策さ、行動力と実行力、なにより運の強さは」

旅人は硬い黒糖パンをナイフで人数分に切り分け、その上に火であぶつてほどよくろけさせたチーズをのせて、

「もはや尊敬に値するよ」

言葉と共に、ふたりに差し出します。

少年と少女はそれを受け取り、一口。その一口で、まるで目が覚めたかのように、一口、三口と、黙々と食べます。

旅人も一口、食べてから、ふたりに「それで」と訊ねました。これからどうするのか、と。“故郷”に帰るなら、途中の国まで同行してもいいだろうか、と。一日もあれば到着できる距離だし、食料もいまの手持ちで足りるだらうし、と。

自分たちに“帰るところ”はない 小さな音声で、しかしハッキリと、少年と少女は述べました。

旅人は一瞬、責めるヒトの怒り滲む眼差しをしてから、

「……それは、“帰るところ”じゃなくて、“帰りたいところ”だ

落ち着きある音声で、“間違い”を気づかせるふうに言い、

「うう

「ま、どちらにせよ　　」

と、話を続けます。

「“この場”に居座つたところで、事態は好転したりしないと思うよ。残念ながら“そこにある国”は、“利益になる奇跡”は起こしても、“善意の奇跡”は起こさない。無利益には無関心だからね。それにそもそも国外での出来事に、関わらなければならぬ義務はない。だから国外で誰がなにをしようと、餓死しようが殺されようが、“そこにある国”に“それ”に関わらなければならぬ義務はない。自らに有益な、と判断されたら、もしかしたらなにか動きがあるのかもしれないけれどね」

少年と少女は、“わかっていること”を改めて指摘されたヒトのうんざりとした顔を浮かべました。それから信仰を持つヒトイわく“信仰を持たないヒトが陥る不幸な悩み”に直面したヒトの顔になつて、口を開きます。　　だとして自分たちに“なにが”できるといつのか、と。

「自分の歩く道を、自分の意志で選択できる。なにもないとこ、地道そのモノを拓くこともできる。“そこ”は道じゃないと指摘されても、“ここ”は私の道だと言い張ることができる。　やひつとすれば、やれることはいくらでもあると思つよ」

言つてから、旅人は「まあ」と繼ぎます。

「“その場で立ち止まつてなにもしない”といつこともまた、選べるけれどね。　　“なに”を選択するにしろ、自分で選択した“それ”に“価値／意味”を付ける努力、その“価値／意味”を最大化する努力は、誰にでもおこなえるよ」

だから少なくとも自分は、と旅人は述べます。

「世界を旅する、という自分で選んだ道を、自分の意志で脚を動かして歩んでいるんだ。いまさに、ね」

旅人の言葉を受けて、少年と少女は咀嚼して嚥下するように一度うつむいてから、どうして、と口を開きました。どうしてそこまで、まったくの他者である自分たちに気を遣つてくれるのか、と。

「ただの気まぐれ。見ちゃったのに、見て見ぬふりをしたら、翌朝の目覚めが悪くなりそうだから、なんてね」

旅人はおどけたふうに言ってから、

「ま、正直に告白すれば自分のためだよ、

悪びれたふうは一切なく、

「情けはヒトのためならず、巡り巡って自分のために、」

清々しくすらある態度と口調で告げます。

「自分で歩むと決めた“この道”的“価値／意味”を最大化するために、や」

「

10°

ん。
い
に
い
ん。

* * *

「兄さんつ、兄さんつてば！」

「……へ？ はつ！ ん？ どうした？」

「どうしたつて……、どうかしてるのは、さつきからずっと呼んでるのに、ぼおーっとしたまま固まってる兄さんのほうでしょっ！」

腰まである長い黒髪をおさげにした、ワンピース姿の若い女性が、語氣を強めて指摘しました。

「“今日”が“どうこう日”か、ちゃんとわかってるの？」「…

鋭い眼差しが、キツと“兄さん”のことを捉えています。

「もちろん、わかっているよ」

安楽椅子に腰を落ち着けていた、ジャケットにジーンズ姿の若い男性が、静かに応じました。

「わかつているからこそ、“旅人さん”のことを思い出していたんだ

感慨深そうに述べて、“そのこと”への共感を確認するよつて、

向けられていた鋭い眼差しをまっすぐ見やり返します。

「あら？ そうだったの？」

若い女性は眼差しから鋭さをすっかりなくして、

「でも、そうね」

と、“兄さん”と同様に感慨深そうに、

「あたしたちが“今日”という日を迎えるのは、“旅人さん”的お人好しな“気まぐれ”的おかげだものね」

言つて、心にある大切な記憶にそつと触れたヒトの温々した穏やかな表情を浮かべます。

「いま、こうして、ぼくたちが文筆家と絵師として“作品／意志”を世に送り出せるのは、歩きたいと思える“この道”を発見できたのは、あのとき“旅人さん”と出逢つたから。本当、“旅人さん”には感謝しても感謝し切れない」

若い男性が述べ、

「本当にそうね」

若い女性が同意しました。

そして、ふたりは、しばし“心にある大切な記憶”を胸の内で想い起こします。

とりあえず、という“てい”で一緒に訪れた“夢の国”と“故郷”との途中にある国で、それでも“故郷”に帰るつもりはないと言い張った自分たちに、“旅人さん”はわざわざ住み込みで働けて教育も受けられる旅館を見つけてくれた。そして旅人としての信赖関係を築く能を發揮して、どこの誰ともわからない自分たちが“そこ”で住んで働くよう取り計らってくれた。あとから聞いた話だと、旅館の女将さんには、“夢の国”を訪れるまえに“この国”に立ち寄つた“旅人さん”に“なにか”恩があるらしく。“よくわからない”自分たちを雇つてくれたのは、“旅人さん”に対する恩に由るところが大きいらしかった。

そして“旅人さん”的計算で居場所となつた旅館で、働き方と

共に叩き込まれた教育の過程で

ぼくは書いて表現することの楽しさを知つて、

あたしは描いて表現することの楽しさを知つた。

それから、自分たちで歩むと決めた“この道”的“価値／意味”を最大化するために、自分たちにおこなえる努力をした。旅館の仕事をこなして、勉強もして、それ以外の時間は、寝るのも忘れて書いて描いて書きまくった。苦しいこともあつたし、やめてしたいとも思うこともあつたけれど、最後の一線、ここでやめてしまつたら“悔しい”と、どうにも“納得できない”と、そう思えるようになつていたので、小休止をはさむことはあつても、歩む足が完全に停止してしまうことはなかつた。

歩みを進めてしばし経てから、いまの自分たちがいつどの程度なのかを知りくなつた。腕試しに 腕がどの程度か知るために、大手の新聞社が主催する文と絵のコンテストにそれぞれ挑んでみた。 結果は、ふたりともかすりもしなかつた。最終審査なんて程遠く、一次選考で落ちていた。

ぼくは、今までに味わつたことのない“悔しい”を懷いた。

あたしは、今までに味わつたことのない“納得できない”を懷いた。

だから、なにがなんでも一歩、また一歩を踏み出して、歩みを進めると決めた。

定期的に文と絵のコンテストに挑んで、自分たちがいまどの程度なのかも確認した。挑む回数が増えて二桁に至つたあたりから、一次選考が二次選考になり、二次選考が三次選考になり、ついには三次選考が最終選考になつた。

けれど最終選考の壁は高く。それでも挑み続けていたら、いつしか最終選考の“常連”と認識されるようになつっていた。

そして不意打ちのように、

いや、まったくの不意打ちで、

文と絵のコンテストを主催する新聞社のヒトから声がかかつた

「ぼくたちの“いま”を知つたら、 “旅人さん”はどうだらう?
」

若い男性が、純粹ある疑問を口にしました。自らの“いま”に対する“自信／誇り”のようなモノが、そこから薄つすらと感ぜられます。

「訊かれても、あたしは“旅人さん”じゃないからわからないわよ」若い女性はバツサリと応じてから、「もう一度」と言葉を継ぎます。

「“旅人さん”に会いたいわね。それで、あたしたちの“いま”を知つてもうの。 で、“旅人さん”に言うの」イタズラを思いついた子どもの笑みを浮かべて、口を開きます。

「あなたの“気まぐれ”のおかげで、あたしたちは“いつ”なれました。 つてね」

と言い終わった、次瞬。

外から聞こえてきた抗議するようなクラクションの音が、若い女性の述べたセリフの余韻をあつさりとかき消しました。

「あ、いけない。車を待たせていたの忘れてたわ だから兄さんを呼びに来たのに」

若い女性は“兄さん”が諸悪の根源であるかのように睨みつけて、
「ほら、早くつ
」
いまだ安楽椅子に尻を置いている“兄さん”の腕を取つて急かします。

「わかったわかった」

腕を引っ張られて安楽椅子から尻を浮上させた若い男性は、微苦笑を浮かべつつ、

「そんなに急がなくたって と、進言してみます。」

“夢の国”は逃げたりしないよ

「それはどうかしらね」

腕を引っ張りズンズン歩みを進めようとしていたそのヒトは、じつに愉快そうな笑みを浮かべて言います。

“夢の国”の“夢ノ商品”がいつたいどの程度なのか“極めて厳しく吟味してあげよう”という気が満々のあたしたちが行こうとしているんですもの、いつ逃げ出したって不思議じゃないわ

小話・其の八拾壹 〈困難に直面してもなお気づかない（仮題）〉（前書き）

【己の権利と責任に疎い者ほど自負自称し、他を責める】

小話・其の八拾壹 〈困難に直面してもなお気づかない〉（仮題）

『困難に直面してもなお気づかない』（仮題）』

悲鳴にも似た金切り音と、勢いを持つて地面を擦り引きずる音が、とくになにもなかつた脣下がりの平穏さを裂きました。

「ちよつとつ！ どこ見でんのよつ！」

それでもどうにか復元しようとする“脣下がりの平穏さ”を踏み潰すように、女性の憤怒する音声が突き抜けました。

「子どもがいるのよつ！ わかつてるのよつ！ ちよつとつ！」

そう主調するように、憤怒する女性は胸に赤子を抱いていました。

「……その…………すみません」

そよ風にすら吹き消されてしまふやうな声量の、まだ幼さを残す男性の音声が、そう述べました。

「…………その、考え方」としていて……すみません

弱々と詫びる男性は、地面に刻まれた真新しいブレーキ痕の延長線上にある自転車に跨っていました。赤子を抱いた女性の文字通り目と鼻の先で、停止しています。

「今日は、たまたま運良く大事にならなかつたけど。ねえ、本当にわかってるの？ 自分がどれだけのことをしたのか」

我が子を守るための容赦ない本性ある、鋭い睨みを男性に向か、女性は指摘します。

「…………はい…………すみません」

指摘と平謝りのやり取りをしばし繰り返し

地獄に差し伸べられた慈悲の“蜘蛛の糸”が、やれ取りこ、ふと切れ間が生じました。

もうここしかない、と確信して、自転車の男性は謝る言葉を口に

しながらペダルに置いた足に力を込めます。

ゆっくりと密やかに、しかし確実に、自転車はこの場から去るために動き出し　男性は謝る言葉を口にしながりゅうじゅうと去つて行きました。

「あ、ちょっと…」

赤子を抱いた女性は、去り行く背中にそういう言葉を投げました。言葉を投げつけられた背中はより速度を増して遠のいて行き、やがて見えなくなりました。

「なんなのよつ、もうつ」

女性は深い憤りを吐きながら、背中が見えなくなつたほうを睨みつけました。

「ちょっと、あなた、いったいなにを考えているの?」

またも怒る女性の声がしました。しかしそれは赤子を抱いた女性のモノではなく、なので彼女は憤りの尾を引いたまま、声が聞こえてきたほうへ訝る視線をやりました。

そこには、眉尻を吊り上げた、とてもわかりやすく怒つている初老の女性の姿がありました。

「あなたつ、いま自分が小さな子供もを抱いてこるとこつことをわかつてているの?」

初老の女性の怒りは、赤子を抱いた女性に向けられていきました。

「……わかっていますけど、それがなにか?」

いまのさつきであることに加え、怒りを向けられねばならない理由が知れず、赤子を抱いた女性は少しムツとして応じました。

その応えに、初老の女性はさらに眉尻を吊り上げて言います。

「じゃあどうして道の真ん中に突つ立っているの? 一いへうこの道が狭くて車の通りが少ないからって」

小話・其の八拾武くとれんじなふあつしょん(仮題)』(前書き)

【隣の庭のモノほびよくよく見えて、欲しくなる】

小話・其の八拾弐「とれんどなふあつしょん（仮題）」

『とれんどなふあつしょん（仮題）』

とある時代の、とある国を、ひとりの男が知るために訪れました。
「ここが平和ボケと称される　夢の国か」
ひとりの男はテイスティングするように“平和な”空気を吸い込み、

「我が祖国とここまで風味が異なるとは……」

感慨深げに、やわらかく吐き出します。

「我が祖国の空氣もこの風味になれるだらうか……」

この男の祖国は、去年の今頃、酷い戦争状態にありました。しかしそれはいまから数ヶ月前、勝者も敗者もなく息切れ的に終わり、現在は戦災からの復興とそれに伴うチャンスによくも悪くも湧いています。

「いや、”そう”するんだ。そのために“この国”を知りに訪れたのだから」

そして男は、“この国”的あらゆる最先端がある街へ足を運び

「そんな……これは、どうこいつ……」

そこに平然とある光景に、愕然としました。

兵士の身なりをしたヒトたちの姿が、そこいらじゅうにあったのです。

見えるところに武器を携行しているヒトの姿はありませんでしたが、男が懐いていた“平和ボケ”的像とは、まったく一致しません。

「あの、なにかお困りですか？」

想像と現実の違いに困惑して固まっている男に、ひとりのヒトが声をかけました。このひとりのヒトも、他のヒトと同様に兵士の身なりをしていました。

「あなた方は兵士なのですか、この國は敵いません、戦争放棄いたしました。」
　　が、しかしその礼儀正しく親切なヒトもまた兵士の身なりをしているので、「なぜ?」と困惑が深まってしまいます。
　　なので男は自分がいま直面していることについて素直に話し、聞いていました。

「あなたたちは兵士なのでですか？ “この国”は憲法で“戦争放棄／戦力不保持／交戦権否認”を定めているはずでは？」

兵士の身なりをした“この国”的ヒトは、最高の冗談を聞かされ
ニニギの御典禮の笑みを、アヌハハウヒヌハハゲハハゲハハゲ

「あなたのあつしゃるよう、元々　“わたしたち／わたしたちの祖国”

は“戦争放棄／戦力不保持／交戦権否認”をしています」と、応じます。

「ですから、わたしは兵士ではありません。他のヒトたちもそうです。二二二一のものは、媒体城ノ媒介城ノフイクショシの軍事

しか知らない、清き一般市民ですよ」

「では、なぜ、そのような身なりを?」

「武士の靈れいが、アシショシ?」

「ええ。ほり、つい最近まで“とある”

ええ、ほら、こし最近まで“どある国”か酷い戦争状態だったじゃないですか。テレビ番組も新聞も雑誌も、ずっとそのことをネタ

まあ、そのおかげで、戦場の映像や写真、兵士の姿を、目にすること機会が一つの間にか増えたんですよ。でも、ほら、やっぱりカッコいいじゃあないです、祖国のために戦う兵士の姿って。ボケと言われるくらいに平和なこの国ですから、みんなやつぱりそういう刺激を感じたりとかっこいい。まあ、戻つてから自分も少しの感じでこう

「…………」

そう話す兵士の身なりをしたヒトの背後では、薄汚れた鳩たちが地べたに散らばるファストフードの食べこぼしのパンくずをせつせ

とつこせんでござった。

小話・其の八拾参 ある意思のあるシール（仮題）』（前書き）

【ある意図の代理者は、前向きな変異因子を装つて突然に現れる】

小話・其の八拾参くある意思のあるシール（仮題）

《ある意思のあるシール（仮題）》

A国とB国の国境となつてている河に架かる唯一の橋の上に、大勢のヒトの姿がありました。彼ら彼女らの前には簡易的な舞台が組まれてあり、皆そちらへ期待する前向きな高揚感と共に意識を向けています。

舞台の、それぞれの国側には、それぞれの国旗が掲げてあります。

国旗の前には高級なスーツに身を包んだふたりの初老の男性の姿があり、大勢のヒトが向けてくる熱い眼差しに、微笑みを浮かべて応じています。ふたりは、A国とB国のそれぞれの、国の運営の最高責任者でした。

「本日は、両国の歴史に刻まれる、とても重要な日となるでしょう」A国の運営の最高責任者の男性が、舞台上を注視する大勢のヒトに向けて口を開きました。厳かな口調で、噛み締めるように、「そのこと」を表明します。

「互いに“近くで遠い国”であった我々の関係は――」

そこでA国の運営の最高責任者の男性は、B国の運営の最高責任者の男性のほうを向き、

「本日から変わるのです」

最高の笑顔で、握手を求める手を差し出しました。

「ええ、そうですね」

B国の運営の最高責任者の男性も最高の笑顔でその手を取り、応じます。

「――“近くで遠い国”であつたA国といつして握手している。本当に“素晴らしい”です」

その瞬間、“A国のヒトたちは”我が耳を疑いました。

A国 の運営の最高責任者の男性は当惑しつつも慎重さを忘れることがなく、

「いま、なんど?」

注意深い姿勢で、発言に關して訊き返しました。

「本当に“素晴らしい”です、と」

B国 の運営の最高責任者の男性は、空氣の性質がガラリと変わったことを敏感に察し、どうこうことかと訝りつつ、返しました。

「ふざけるなっ!」

舞台の下方、A国側から怒声が投げられました。ひとりの青年があ然とするヒトの人垣をかき分けて現れます。

青年は期待を裏切られたヒトの刃物じみた眼差しで“そちら”を見やりながら、素早い動きで止めようとする警備をかわし、舞台によじ登りました。そして指摘し抗議するために“そちら”へ歩を進め

パンツ、ヒーパーティー用のクラッカーが発破したときのような音が鳴りました。

転瞬。

B国 の要人護衛官は“個人防衛火器／短機関銃に類似した火器”を素早く取り出し、護衛対象者に向かつて歩を進める明らかに不審な青年に狙いをつけて構え、一切の躊躇いなく引き金を絞りました。

A国側の周辺警備をしていたA国 の軍隊の兵士たちは、突然の発砲から自国民を護るために、自国民に銃口を向けている“B国 の人物”に自動小銃の狙いを定め、一切の躊躇いなく引き金を絞り

A国とB国は河を挟んで隣り合っている近い国であるにも関わらず、個人单位ですら“交流／国交”をおこなつていませんでした。

* * *

古文書には、互いに友好国であつたという記述が残されています。

が、その記述から数行後には、戦争といつ言葉が記されており、それ以後、友という言葉が出てくることはありません。なによりこの古文書は、史実を記録した歴史書というより、神話に近い解釈のされたをしているモノなので正確さは保証されていません。そして当然のように、両国の専門家による検証もされていません。

ただひとつ確かなことは、今まで一度も古文書の内容について両国間で検証されたことがない。古文書が記されてから、まったく“交流／国交”がおこなわれていないということだけです。

神話のような古文書の時代から“交流／国交”がおこなわれていないA国とB国ですから当然、言葉が通じません。“交流／国交”がありませんから、あえて言語を翻訳する必要性が生じない感じなかつたのです。A国とB国も大多数のヒトは、よくわからない国のことより、自分の暮らしに関する事柄に神経を集中させていませんから致しかたありません。

しかしだからといって、未知なる“河の向こう側”に対し好奇心を刺激されたヒトが皆無であったというわけではありません。極々少数ではありますが、“河の向こう側”を知りうると思ひ立つたヒトはありました。が、その極々少数のヒトたちは、とても声が小さかったり、体力が続かなかつたりして、変化を生じさせるには至りませんでした。これまで。

それは突然変異の「ことく」ある日、ある時、突然に、声が大きく、体力のある、“河の向こう側”を知りうる働きかけるヒトが現れました。

その突然変異的なヒトは、とても運よく幸いなことに、変化を生じさせるのに必要なモノを「ことく」有していました。

ひとつ曰は、国の運営の最高責任者に提言することができる立場にあるヒトと親しい関係でした。相手の都合を考慮しつつ、食事を共にする機会を設け、そこで“河の向こう側”と“交流／国交”を持つことに関する考え方。それをすることによる“つまみ”について

て述べました。そして相手から、「検討する」以外の実効性のある返答を引っ張り出すことに成功しました。

ふたつ目は、“河の向こう側”と“交流／国交”を持つためのプロセスにおいて、もっとも高い壁となる言語に関する問題を解決するための考え方と手段でした。

突然変異的なヒトの姿は、A国でもB国でもなく、C国の高級ホテルの一室にありました。広い室内に派手さはなく、設えられた調度はどれも簡素ですが、それらすべて庶民が何年も汗水流さなければ入手できないうな超一級質の品々です。

そんな庶民の生活臭とは一切、無縁な場所で。

突然変異的なヒトの対面、ソファーに腰を落ち着けてノンカフェインの紅茶を味わっていたそのヒトは、

「なるほど、『そちら』の“考え”はよくわかりました。『こちら』にとって、とても“おいしい”お話であるということも

説明された“考え”に対して、商売人の最高の微笑みを浮かべることで応じました。

「“C要望するモノ”は、我がC国の技術力　その中にあつてもつとも優れている我が社の技術力をもちいれば、難なく製造できるでしょう」

C国は、A国、B国、双方と悪くない関係を有している大きな国でした。そして、世界でもっとも優れた科学技術を有している国でもありました。C国の科学技術の一端に触れた他の国の中では、「これは、じつは魔法なのでしょう?」と大真面目に確認するほどです。

「それにしても　」

C国のそのヒトは“そちら”に注意深い眼差しを向け、

「同一の筋から紹介されたA国とB国それぞれの方から、同じ“提案／考案”を受けるとは。まったく素晴らしい偶然です」

独り言ふうを装つて言葉を漏らしました。

それに対して

A国から訪れた突然変異的なヒトは、言葉ではなく微笑みを浮かべることで応じました。

B国から訪れた突然変異的なヒトは、言葉ではなく微笑みを浮かべることで応じました。

それから数ヶ月後

国に戻つて各方面との調整をおこなつていた突然変異的なヒトのもとに、J国から荷物が届きました。ヒトが入つても余裕がありそうな、大きな木箱でした。

バールのようなモノをもちいて開封すると、そこには緩衝材に護られた数多くの“それ”がありました。

突然変異的なヒトは速やかに、国の運営の最高責任者に提言できる立場にあるヒトと食事を共にする機会を設けることにしました。

そして会食のとき、突然変異的なヒトは持参した“それ”を相手に提示しました。

「ほひ、これが……」

提言できる立場にあるヒトは田の前に置かれた“豆のよつなモノ”を手に取り、吟味するふうに眺め、

「……我々の抱える言語に関する問題を解決する手段?」

真意を確認するように、相手の田の奥に眼差しを向けました。親しい関係でなかつたら、バカにするなど怒声を上げていそうな面持ちです。

それに対しても突然変異的なヒトは、懐から手帳を取り出して広げると、そこに書き込んであるモノを“わざといっしいぐらい”に睨みながら、

「＊＊＊＊＊」

と、口から音声を発しました。

「…………」

提言できるヒトは数拍、ポカンと半口を開けて固まつてから、

「……いまなんと？」

真意を確認するが、とく相手の目を見て、訊きました。口元には薄つすらと苦い笑みが浮かんであります。

突然変異的なヒトは愉快そうな表情をして、提言できるヒトの手にある“豆のようなモノ”を示し、耳栓を装着するようなしぐさをして見せました。

「“じれ”を耳につければわかる、と？」

提言できるヒトは八割が疑の半信半疑な表情を浮かべつつ、それでもいちおう試してはみます。好奇心と残り一割の信が、騙されたと思つてと、そつと肩に手を置いて促してくるのです。

「それで？」

耳につけたことを相手に見せ、先を求めました。

突然変異的なヒトはチラリとイタズラっぽい笑みを浮かべてから、

「＊＊＊＊＊」

と、先ほどとまったく同じ音声を発しました。

数瞬の間を置いてから、

『こんにちは』

抑揚のない音声が言いました。

しかしそれをこの場で聞いたのは、

「なんだつ？」

提言できるヒトの耳だけでした。不意のこと驚き困惑につつ、

「なんだつ？」

正しい答えを知つているに違いない対面の人物に、説明を要求します。

突然変異的なヒトはイタズラを成功させた子供ものような表情をして、話しました。“豆のようなモノ”が、じつは本国製の“言語を瞬時に翻訳してくれる装置”であると。

「なるほど、これはすごい。」といふことば、先ほどの“＊＊＊

＊＊”は、“こんにちは”といつ意味の相手国の言語だったのか

提言できるヒトは感嘆たる面持ちで、

“ ‘‘ いれ ’’ があれば、話し合いを滞りなく進められる。これはすこいつ。すごいことだつ。いま私たゞは、歴史書に必ず記載される出来事の当事者なのだつ。わかるか、このすゝむがつ？」

熱のある言葉を吐き、共感を求める眼差しを対面に向けました。

それに対し
突然変異的なヒトは、言葉ではなく微笑みを浮かべることで応じました。

そして順調に話は進み

「本日は、両国の歴史に刻まれる、とても重要な日となるでしょう」

間違いなく歴史書に記載される“その日”は、訪れました。

「互いに“近くて遠い国”であった我々の関係は」

歴史の証人たちと橋の上に集まつた人々の耳には、例外なくC

国製の“言語を瞬時に翻訳してくれる装置”がありました。

「本日から変わるのです」

A国の運営の最高責任者の男性は最高の笑顔で、述べました。握手を求める手を、差し出します。

「ええ、そうですね」

B国の運営の最高責任者の男性も最高の笑顔でその手を取り、応じます。

「“野蛮で低俗な国”であるA国といひして握手している。本当に“胸くそ悪い”です」

その瞬間、“言語を瞬時に翻訳してくれる装置”を介して聞こえてきた言葉に、“A国のヒトたちは”我が耳を疑いました。

A国の運営の最高責任者の男性は困惑しつつも慎重さを忘れることがなく、

「いま、なんど？」

注意深い姿勢で、発言に関して訊き返しました。

「本当に“胸くそ悪い”です、と」

B国の運営の最高責任者の男性は、空氣の性質がガラリと変わつ

たことを敏感に察し、どうこうとかと訝りつつ、返しました。

「ふざけるなっ！」

舞台の下方、A国側から怒声が投げられました。ひとりの青年があ然とするヒトの人垣をかき分けて現れます。

青年は期待を裏切られたヒトの刃物じみた眼差しで“そちら”を見やりながら、素早い動きで止めようとする警備をかわし、舞台上によじ登りました。そして指摘し抗議するために“そちら”へ歩を進め

歴史的な日を盛り上げるために、と急遽C国から贈られてきた大量のパーティ用のクラッカーが舞台裏に置いてありました。

その中のひとつが突然、パンツと発破しました。

転瞬。

B国の要人護衛官は“個人防衛火器／短機関銃に類似した火器”を素早く取り出し、護衛対象者に向かつて歩を進める明らかに不審な青年に狙いをつけて構え、一切の躊躇いなく引き金を絞りました。A国側の周辺警備をしていたA国の軍隊の兵士たちは、突然の発砲から自国民を護るために、自国民に銃口を向けている“B國の人々”に自動小銃の狙いを定め、一切の躊躇いなく引き金を絞り

* * *

突然変異的なヒトたちの姿は、C国の首都の官庁街の一角にある交差点に面した喫茶店のテラス席にありました。ひとりはブラックのコーヒーを、ひとりはミルクと砂糖たっぷりの紅茶を、味わい楽しんでいます。

「号外っ！ 『おーがいですっ！』

お国の動向をいち早く報じるためこの場に居を構えている新聞社のほうから、長方形の紙の束を抱えたヒトが慌ただしく飛び出して

きました。交差点にいたヒトたちの注目を一気に集めます。

「国交正常化の式典をおこなつていたA国とB国が、戦争状態に陥つて」

その緊迫した音声を聞きながら、突然変異的なヒトたちは手にあるカップで乾杯をするよつなしげをしました。

「あの、お客様」

喫茶店の店員が、突然変異的なヒトたちを呼びました。

「お電話です」

突然変異的なヒトたちはさして驚いたふうもなくそれに応じ、テラス席から電話の設置してある店の奥に移動します。ひとりが受話器を耳に当てるど、

「今日は、『ご苦労だつた』

まるで見ているかのようなタイミングのよせで、そう声がかかりました。

「キミたちのおかげで、我がC国の軍需産業は忙しくなる。国内の雇用問題は解消されていくだろつ。他人の不幸を利用した戦争バブルだと非難する者も少なからずいるだろうが、自分が美味しい飯を食べられるなら大半の者は黙することを選ぶだろうからその点は問題ない。 だが、ひとつだけ問題が残つている。この状況を生むために、C国製の“言語を瞬時に翻訳してくれる装置”に意図的な間違いを仕込んでおいたことや、その他の諸々の事情を知つてている者たちの存在なわけだが。なに、キミたちの手をわざらわせることはしないよ。解決策はもう実行している。だからキミたちは、しばし「コーヒーと紅茶を味わつてくれたまえ」

そこで通話は切れました。

喫茶店の外から悲鳴が聞こえました。

一台の乗用車がまつたく減速する気配なく一直線に、喫茶店に向かつてきました。

乗用車がテラス席を壊して店内に突っ込んでくると転瞬

大地が揺れ、衝撃が身体を突き抜けました。

いまさつきまで通常営業していた喫茶店があつた場所とその周囲には、大きな火柱と悲鳴がごちゃ混ぜになつてありました。

小説・其の八拾四『欲しいのは理想の（仮題）』（前書き）

【その関係が生ずる」とには拒否権がない】

小話・其の八拾四 『欲しいのは理想の（仮題）』

『欲しいのは理想の（仮題）』

とある時代の、とある国、とある街の、とある家庭のリビングに、テーブルを囲む複数のヒトの形をした影がありました。いまが夕食時ということもあり、テーブルの上には品田豊かな食事が並べられています。

「好き嫌いせず、ちゃんと食べるんだぞ」

テーブルの上座にある影が、下座にある影に向かつて、落ち着きある男性の音声で言いました。

「今日は“＊＊＊＊＊ちゃん”の誕生日だから、“＊＊＊＊＊ちゃん”的好きなモノしかないものねー、ちゃんと食べられるよねー」

柔らかな女性の音声が、下座にある影に向かつて微笑みかけるよう言いました。

そこには、至極ありふれた、とある一家の夕食の光景がありました。

が、それは、ドアを無遠慮に開け放つ音と、開け放たれたドアから闖入してきた人物によって一変してしまいます。

「な、なんなんだキミはっ！」

上座の影は突然の出来事に驚き戸惑いつつ、一家の長としての責務として前に進み出、闖入者と家族との間に立ちます。

闖入者は“愁いた／憂いた”眼差しで進み出てきた影を見やつてから、その背後にあるふたつの影に視線を移しました。ひとつは先ほどと同様の“愁いた／憂いた”眼差しで見やり、もうひとつの影に対しては、“＊＊＊＊＊ちゃん”と呼ばれていた影に対しては、憤怒と憎悪と嫌惡の混在する刃物じみた眼差しを向けています。その一点を注視して、闖入者は動きました。それを阻止しようとつかみかかってきた影を力ずくで投げ飛ばし、“＊＊＊＊＊ちゃん

”と呼ばれていた影に手を伸ばす。そうとしたところで、先ほど投げ飛ばした影に脇から体当たりされて体勢が崩れます。闖入者はすぐには体勢を立て直そうとしますが、脇腹に生じた違和感がそれをよしとせず。手をやるとヌメリとした触感があり、まさかと見やつた手には赤い液体が惜しみなく付着してありました。そんな、という意外な眼差しをそちらに向けると、そこには赤い液体を滴らせる果物ナイフを握った一家の長の影がありました。

一家の長の影は“家族を守るためにいたしかたなく、闖入者が動かなくなるまで果物ナイフをもちいた正当防衛を行使しました。

そして。

一家の長の影は“家族を殺した”罪で法により裁かれ、有罪となりました。

これが重大な間違いであることを確信している“唯一残された”家族たる影は、

「夫は、私と我が子を守るためにいたしかたなく」と、潔白を訴えました。

しかしそれがまともに相手にされることはありませんでした。

ただ、新聞や雑誌のキャッチーな見出しにはなりました。

それを見やつた不特定多数のヒトは、とりあえずの話のネタとして“このこと”に関して口を開きます。

「“自分の子ども”をナイフでめつた刺しにしたって」

「“自分の子ども”が想い描いた通りに育たなかつたからつて、ある日を境に“人形”を子どもに見立てていたっていう」

「本当の子どもは、親の想い描いたそれとは違う、自分の夢を実現してその報告に親を訪ねてあんなたらしい」

「“人形の子ども／理想／虚像”を守るために、“本当の子ども／

現実／実像”を正面から見ずに“排除／否定”してしまって

「

小話・其の八拾五へたられば（仮題）』（前書き）

【些細な違いが大きな違い】

小話・其の八拾五『たられば（仮題）』

『たられば（仮題）』

人生の九割九分は嫌な出来事であると、私は経験から思つてゐる。そして残りの微々たるとこで気まぐれ的に起つてゐる好意的な出来事によつて、“もしかしたら”といふ淡い期待を懷き、どうにかいまと繼續する。

なんて面倒くさい言い回しをしてみたところで、べつに現状が好転するわけでもないのに。無駄で無意味とわかつていてもやつてしまつのは、ヒトの性というやつか。

まあ、つまるところ、簡単に述べてしまえば、このところひずつと“ついてない”的だ。なにをやってもうまくいかない。それどころか、まったく身に覚えのないことで責められたり不評を受けたりする。

だから今日も私はまったく気持ちよくなく我が家に戻り、部屋の明かりを点ける気力もなく、リビングのソファーにダイブした。クッショングに顔を埋めて、心の底から深々とため息をひとつ吐き出す。クッショングは湿っぽい熱を帯びて、けれどすぐに冷たくなる。

しばしクッショングに顔を埋め、そのまま手探りでソファー前のテーブルに置いてあるテレビのリモコンを取り、テレビを点ける。数瞬の間を置いてから、今日のニュースを読み上げる抑揚のない音声が聞こえてきた。

そもそも関心がないので右から左に聞き流していたら、不意と“あるニュース”に気を引かれた。クッショングから顔を離して、テレビに意識を向ける。

氣を引かれた、と言い表すと、ともすれば私が冷静であるかのように受け取られるかもしれないが、実際のところは動搖すらしている。

そのニュースは、ある凄惨な事件に関するものだった。事件現場の映像や、容疑者に関するパーソナルな情報が、もり立てる効果音と共に繰り返し映しだされている。

私の気を引いたのは、しかし事件そのモノではなく、容疑者に関するパーソナルな情報だった。

生い立ちや境遇や夢やその他いろいろ

私のそれとまったく同じだったのだ。

ギクリともドキリともした。異なるところは“それ”だけだった。

テレビ画面の中に、明日の自分の“もしかしたら”的姿があつたのだ。

小話・其の八拾六『こだわり（仮題）』（前書き）

【そんないつもの】

小話・其の八拾六 『こだわり（仮題）』

『こだわり（仮題）』

「いつもそうだよね」

肩口で切り揃えられた黒髪をした女の子が、言いました。いつもは勝ち気な眼光を放っている目が、いまは呆れたふうにジト目です。そんな彼女のジト目の向く先で。

「んー。そだね」

あまりぱっとしない見てくれの男の子が、おざなりに応じました。

「…………」「…………」

女の子は、ちょっとイラッときちやつたときの微笑みを浮かべます。

しかし男の子は、それに気がつきません。

ふたりは対面する形でこたつに収まっているので、普通ならどんなに鈍くても相手の表情の変化くらいには気がつくものです。が、男の子には、気がつくことができない、それはそれはやんごとの理由がありました。

いま男の子は、みかんの実から白いアレを取り除くことに注力しているのです。

女の子はそんな彼を、不満混じりの目でじいと注視し

「*****がつ、*****つてるー！」

と、驚愕するヒトの顔をして、明後日の方向を指差しました。とても偶然なことに、男の子がみかんの白いアレを綺麗サッパリ取り除き終えたタイミングで。

「なにもないじゃないか……」

ついつい条件反射で明後日の方向を見やってしまった男の子が、

抗議の声を漏らしつつ視線を戻すと、

「……あ」

「まわつせりと処理を終えたみかんの実が、その姿を消しました。皮と白いアレだけが、不要とばかりに残されています。

「…………」

男の子は黙したまま、確信を持つてみかんの行方の心当たりへ視線をやり、

「…………」

もはや諦めたヒトの眼差しで、それでもこちあう非難しました。女の子は手にある綺麗サッパリしたみかんの実を半分にして、

「じゃあ、はんぶん」「

しょーがないなー」というふうにその半分を差し出し、けれど相手からの返答を待つことなく、残りの半分を一口で食します。

「…………はあ

と差し出された半分を受け取りつつ、ため息を吐く男の子、「みかんなり、まら、まだいっぱいあるよ?」

女の子は、お盆に山積みにされたみかんを示して言いました。

「また私のために剥け、つて?」

男の子はうるさりしたふうに返しました。

「そんなつもりはなかつたけれど、剥きたいなら、どうぞ? 食べる用意はできるから」

裏に剥けとこつ意が感ぜられる女の子の言葉に、

「はあ…………」

男の子は、こちあうの抗議の声をそれやかにあざとおもました。

「…………いつもそうだよね」

小話・其の八拾七へ説得力（仮題）へ（前書き）

【それ相応のそれが】

小話・其の八拾七へ説得力（仮題）』

『説得力（仮題）』

とある時代の、とある国、とある街に、とある大きな公園がありました。緑豊かな公園で、休日は親子連れやカップル、ご老体やストリートパフォーマーなどで賑わいます。

そんな公園の地図板の前で。

「んんー？」

ひとりの男性が、眉根を寄せて首を傾げていました。
「珍しく難しい顔をして、どうしたの？」

ひとりの女性が、見上げるようにして訊きました。首を傾げている男性と手をつないでいるので、訊く言葉に合わせてひょいひょいと軽く手を引きます。

「ん、んん。いや、まあ、大したことじゃがないんだけれど」

そう言って男性は、田の前にある地図板 の隣にある掲示板のある一点を指差します。

「これはなんなんだろ？、って思つて」

女性はその指の示す先を見やり、

「これって、この張り紙のこと？」
いちおう確認します。

「うん」

「むう……確かに、なんなんだろ？」

女性も、男性と同様に眉根を寄せて首を傾げます。
そんな首を傾げているふたりに、

「あの、どうかしましたか？」

ジャージ姿の青年が声をかけました。ジョギングをしていたらしく、頬は上気し、額には薄つすら汗が滲んでいます。

「自分、いつもこの公園を走っているので、道に迷っているのなら、

お役に立てると思いますが」

「あ、いえ、道は地図を見てわかつたんですけど……」

青年の好意にお礼を述べつつ、ふたりは首を傾げていた理由を説明しました。

それを聞いた青年もそちらを見やり、

「確かに……これは、なんなのだろう?」

ふたりと同様に首を傾げます。

「昨日ここを走ったときは、こんなモノなかつた……はず」

そんな首を傾げるふたりと青年に、

「どうかなさいましたかな?」

初老の男性が声をかけました。犬の散歩をしていたらしく、その足元には中型犬が大人しくしています。

ふたりと青年は、かくかくしかじかと首を傾げていた理由を説明しました。

それを聞いた初老の男性もそちらを見やり、

「ふむ……確かに、これはいったいなんなのだろうか?」

例にならうように、眉根を寄せて首を傾げます。

そんな彼らの首を傾げる光景は、公園を訪れている大多数のヒトの好奇心と目を惹き

大多数のヒトが、眉根を寄せて首を傾げることになりました。

時は経過し

ヒトの姿が減った夕暮れの公園。

昼間、多数のヒトの首を傾げさせた掲示板の前に、作業服を着た男性の姿がありました。不機嫌そうに田尻を釣り上げています。

「まったく、最近のヒトの頭の中はどうなっているんだ」

男性は多数のヒトの首を傾げさせた掲示板の張り紙を剥がしながら、そう口から漏らしました。そしてその張り紙を見やりながら、「ゴミはポイ捨てしないでっ! みんなの公園は、みんなでキレイに使いましょう」の言葉が理解できないのか、まったく

落胆したふうに、深々とため息を吐きます。

男性の手にある張り紙には、油性のマジックペンで、マジックがの
た打ち回っているような文字らしきモノが書かれてありました。

そんな文字らしきモノが書かれた張り紙が貼つてあった掲示板の
周囲には、数多くのヒトが群っていた証明のことく、多数の「ミミ」が
散らばっていました。

小説・其の八拾八へこじらせ（仮題）』（前書き）

【たまにはそれも】

小話：其の八拾八くじらせ（仮題）

『じがらせ』(仮題) ≪

ある時代の、ある国、ある町、ある商店街の魚屋の前で、

ひとりの老体が苦しそうに左腰をおさえながらもたえていました。

だといふに

道行くヒトも、魚屋の店主もお密も、助けようとする気配が一切ありません。昼食の買い物に訪れているヒトがあるので、ヒトが少ないというわけでもありません。

ヒトとヒトとの繋がりが希薄な悲しい世の中に
わけでは、けれどなく。
「のじ」さま、
といふ

「う、う、う」かひ、誰へもいぢつ

ご町内で、とても有名なのです。

封印をねし六百六十六番目の呪われた力が

歯七十にして思春期が特有のある病を」じぶせでいる」と云ふ。もう甲もうれば痛つ

「まったく、もう。バカをやつていないで」

魚屋での買い物を終えたおばあさんが、呪われた力と苦闘しているじいさまの頭をひつぱたきました。

はい 荷物 帰りますよ

買子たばかりのそれをじいさまの左手に押し付けるよ、お持たせ
なにごともなかつたかのようなすまし顔をして、家路への歩みを進
み始めてから、

「今日はいいのが入ったと言うので

じ、じこさまが好きな魚の名前を述べます。

「ねむりーーでかしたぞ魚屋つーー」

こまでの苦闘はござやひ。じこさまは喜色満面、魚屋の店主に向かつてお褒めの言葉を投げました。忙しなく、おばあさんの背を追います。

魚屋の店主は微苦笑を浮かべて、「びつむ」と心じました。

昼食も終わり

じこさまは好物を食べたあと、余韻に浸りながら、縁側に置いたロッキングチェアに腰を落とす。口向ぼっこしてこました。が、いつの間にか寝息をたてています。

「若くないんだから、こんなといいで寝たら、風邪を引かせて永眠することになっちゃうわよ」

じいちゃんの肩を軽く揺すって、おばあちゃんが言いました。

「これねヤツらの……寝か……」

夢の世界でなにをやらかしているのか、そんな寝言を漏らして、しかし起きる気配はありません。

「……まつたぐ」

おばあさんはあきれたふうに咳いてから、毛布を取りに行きます。そして。

持ってきた毛布をじこさまにかけると、久しづりにその顔を間近で見たおばあさん、ふと氣まぐれ的に乙女心をこじらせてしまひます。

眠れるじこさまのほっぺ

小話・其の八拾九へ“あちら側”と“こちら側”（仮題）へ（前書き）

【金魚の糞は金魚にしか興味がない】

小話・其の八拾九へ“あちら側”と“こちら側”（仮題）

《“あちら側”と“こちら側”（仮題）》

熱をおびたそよ風が流れ、砂塵が舞う。

そんな、うんざりする暑さの中

ひとりの旅人が、国境に到着しました。旅人は、頭に麦わらの帽子をかぶり、その下に耳と首の後ろを覆い隠すようにして白のタオルをはさんでいます。灰色の袖の長いシャツを着て、濃紺のジーンズをはき、足には黒のアサルトブーツがありました。背に、あまり大きさのない深緑色のリュックがあり、それを包み込むようにして黒のフード付きロングコートが、伸縮性のあるロープでぐるぐる巻きにされて留めています。それぞれどれも“使い込まれた味”といふ銘の汚さがありました。

ヒトの背丈よりもはるかに背の高いコンクリートブロックが、国境線上に沿つて“見えないとこ”から“見えなくなるとこ”まで連なつて“こちら側”と“あちら側”を形作っていました。

国境を警備する兵士は全員、最新式の武器装備で身を固めていました。すぐに撃てる状態の銃器を手に、彼らは隙のない鋭い眼差しで辺りを警戒しています。

道の両脇には装甲車が一両と戦車が一両、即応可能な状態で待機していました。装甲車の上部に据え付けてある機関銃の銃口と、戦車の砲口は、すべて国境の“あちら側”に狙いが向けられています。しばしば衝突を繰り返してきた“過去／経緯”を持つ“こちら側の国”と“あちら側の国”は、今現在とても“纖細な緊張関係／暫定的な平和状態”にあるのです。

「あんた、本気で“壁の向こう”へ行くつもりなのか？」

出入国管理詰め所で出国の手続きをする旅人に、ひとりの兵士が訊ねました。ガムをくちゅくちゅ噛みながら。けれど視線だけは周

囲に鋭くやりながら。

「ええ」

旅人は「ゴチャゴチャした書類にサインしながら答えました。

「今までに冗談で出国手続きをしたヒトがいたのなら、あるいはこれも、冗談かもせんけど」

それを聞いた兵士は、愉快そうに鼻で笑つてから、「べつに無理に引き止めるつもりはないが、これも仕事の一部なん

でな」

と、いかに“壁の向こう”が危険で、いかに“壁の向こうのヒト”が野蛮であるかを、睨むような視線を“壁の向こう”にやりながら語ります。

不必要に多い出国の手続きを終え、旅人はやつと出入国管理詰め所から出されました。その顔には、疲労の色が見えます。

そして。

旅人が“こちら側”と“あちら”との境界線を越えんとする一步を踏み出そうとしたとき、

「なあ、本当に行くのか？」

今まで噛んでいたガムを吐き捨てて兵士が、

「その線を越えたら、いまのオレ達には、目の前であんたが“壁の向こうのヤツ”に殺されそうになつても助けてやることができない」

旅人へ最後の確認と警告を、まるで親しい友を助けんとする者のような表情で告げました。

それを聞いた旅人は

「やあ、旅人さん。……なにやらお疲れのようだね」
かつぶくのいい中年の男が、同情するヒトのような苦笑いを浮かべて言いました。

「ええ、まあ」

旅人も苦笑いでそれに応えます。

「それで、と言つても、まあここにいる時点でわかりきつていることだが」

中年の男は、なにやら書類を取り出します。
いまさつきの“あちら側”と違い、とても話が早く、そのことに思わず旅人の顔に笑みが浮かびました。旅人は書類を受け取り、入国の手続きをおこないます。

先進的な機械類のあつた“あちら側”と比べて、“こちら側”的出入国管理詰め所は、どこか古めかしい印象がありました。冷房の効いた“あちら側”と違い、いまにも壊れそうな扇風機が必死に首を振っているから、そう見えるのかもしませんが。

「えつと……、手続きは“これだけ”ですか？」

書類に必要事項を記入し終えた旅人が、それを中年の出入国審査官の男に手渡しつつ訊きました。

「……ん？ こんなクソ暑いところに長居したいのかい？」

手渡された書類に目を通しつつ、出入国審査官の男は心の底から驚いているふうに言って、

「まあ、どうしても書きたいって言つなら、同じやつをまた書いてくれてもかまわないが」と真顔でさきほどと同じ書類を取り出し

「なんてな」

一転、人懐っこいからかうヒトの笑みを満面と浮かべます。

「壁の向こうでは、“こちら側がいかに危険であるか”を“環境音／背景音／BGM”に、無駄に多い出国手続きの書類と戦うはめになつたつてところだらつが、あまり真に受けないでくれよ?」

ぐだらない笑い話であるかのよつて、軽い口調で言つ出入国審査官の男に、

「その真偽は、入国してから自分の目で確かめてみようと思います」
旅人は“知ることが楽しみ”と語る微笑みを浮かべて、応えまし

た。

「ところで、旅人さん」

出入国審査官の男は、旅人が記入し終えた書類の“ある一点”を真剣な眼差しで見やりながら、

「旅人の祖国は――」

記入されている旅人の祖国の国名を真剣な口調で述べて、旅人の祖国を改めて確認するように訊ねました。

「そうですが……、なにか問題が？」

「旅人が入国することに関しては、なんら問題ないよ。ただ、深刻な問題に直面している我が祖国の、その問題を解決するために尽力してくれている方が、旅人と同郷だから、ついこの国名に反応してしまつてね」

「そうなんですか。同郷のヒトが同じでそのようなことに取り組んでいるとは、知りませんでした」

「という旅人の言葉に、

「そうなのかい？ あの方の取り組みは、我が祖国と旅人の祖国との関係においてとても評価されるべきことだから、すごく有名だと思つていたよ」

出入国審査官の男は、心の底から意外というふうな表情をします。「なにか公衆の注目を集められるような“問題／悲劇”が生じないと、個人の外国での取り組みを、あまり大々的に報じない国ですから、私の祖国は。もちろん、私が旅をしているから知るのが遅い、というのもありますが」

そして旅人は、

「できるなら、直接お会いして話をうかがつてみたいのです」

「冗談半分、真摯半分の口調で言いました。

ふたりの男が、紙巻タバコの紫煙をくゆらせながら談笑していました。

した。それぞれ、信用性は高いが旧式である自動小銃と拳銃を装備しています。

「やあ、旅人さん」

ひとりの男が、出入国管理詰め所から出てきた旅人に気づいて声をかけました。

手に持った紙片を見やつていた旅人は、声の聞こえたほうへ視線をやり、

「どうも、こんにちは」

と返事をしつつ、そこにあつた“あちら側”と違う光景に驚きを感じました。目に見える範囲内にある“武器／兵器”が、ふたりの男の装備しているモノしかなく。なにより、そのふたりの男の雰囲気が、まるで“継続的な平和／永続的な平穏”がある国の“それ”的ようだつたからです。

「どこから、我が祖国へ？」

男が問うてきたので、旅人は自らの祖国を教えました。それから、驚きを覚えたことも素直に述べました。

それを聞いた男は、

「それは、旅人さんと同郷の　あの方の取り組みのおかげですよ
人好きのする笑みを浮かべて言い、あとから来たもうひとりの男
に、

「なあ」

と同意を求めました。

もうひとりの男は、

「そうそう」

と吸つた紫煙を吐きながら同意を示します。

そして、少し前までこの場所にも数多くの“武器／兵器”が存在していましたことを教えてくれました。

「ああ、それから

と、自分たちは“国境警備官”であり“国境警備兵”ではないことを付け加えます。

「つまり、いまここに“軍事力”は存在していないということですか？」

旅人が訊きました。

「ご覧の通り」

国境警備官の男が、笑みを浮かべながら答えました。

「あまりいい言いかたではないですが

旅人は間を置いてから、述べました。

「“あちら側”的多くの銃口が向けられているときに国防を放棄してしまって、この国は大丈夫なんですか？」

「子どもたちが恨み恨まれ殺し合わずに生きることができる平和を実現させるために取り組む努力義務が、この現状を生み出した人たちにはある」　の方の言葉さ

感概深げに、もうひとりの国境警備官の男が言いました。

「……そうですか」

国境から“軍事力／軍事色”を廃したことだが、つまりはその“取り組む努力義務の一環ということなのだろう。　と、旅人は解釈しました。

「やあやあ、旅人さん」

ふたりの国境警備官の男に「「よい旅路を」と見送られ、紙片を見やりながら歩いていた旅人に、「道にでも迷ったのかい？」

いまにも崩壊しそうな音を発しながらゆっくりと近づいてきたボロボロの軽トラックから、そう声がかかりました。

「いまのところは迷わず進めている　という希望を胸に、一步一歩踏みしめながら歩いてます」

困っているヒトのような苦笑を浮かべながら、旅人は言いました。

「どこを目指してるんだい？」

運転席の窓から身を乗り出して、口ひげと筋肉質な胸部と腕部が

印象的な中年男性が訊きました。

「ここなんですが……」

と旅人は手にある紙片を見せました。

それを見た中年男性は、逡巡し苦悩しているヒトのような表情をして、

「希望を打ち砕いて申し訳ないが、旅人さん」

それから意を決したふうに旅人を見据え、きっぱりと述べます。

「進むべき方向が、真逆だよ」

さらに話を聞くと、目的の場所が車でも半日以上の時を要する“遠く”であることが判明しました。旅人は想定を酷く誤っていたことを知り、うなだれます。

そんな旅人を見かねて、

「明日でよかつたら……」

と、中年男性が車で送ることを申し出してくれました。

しかし旅人は、すぐにその“厚意／思いやり”に飛び付きはしませんでした。目的地まで“安値”だと言つて客を乗せ、目的地に到着したとたん「おつと」と言つてナイフをチラつかせながら「やっぱり“高値”だつた」と金品を騙し取るタクシーがあつたりするので、“うまい話”には慎重な判断をするよう肝に銘じているからです。

しばしの思考の末、 旅人は言いました。

「ありがとうございます。お願ひします」

希望を打ち砕かれてから数分後

旅人の姿は、軽トラックの助手席にありました。「そうと決まれば、明日まで家に泊まつたらいい。家族も、旅人さんの旅の話が聞けたら喜ぶだろうし」と中年男性が提案し、旅人がその言葉に甘えることにしたからです。

整備されていないガタガタの道を、ボロボロの軽トラックが飛ん

だり跳ねたりしながら進み行きます。

走行中の揺れが尋常ではなく、不用意に口を開くと舌を噛み切り
そうになるので、 そう注意を受けたので、旅人は黙して窓の外
眺めていました。車に備え付けられたモノではない、運転席と助
手席の間に置かれた“旧い電池式のラジカセ”から流れるノイズ雜
じりのラジオの音楽が、窓の外を流れる風景と素晴らしい絶妙さで
融和して、異国情緒を演出します。

当然のよう^に走行中の揺れに慣れて^{いる}中年男性が、ただ単に“そうしたくて”、一方的に話^しを始めました。彼は、自分はガラス細工師をして^{いる}と述べました。そしてガラス細工がこの国の代表的な土産品であることを、誇らしげに付け加えて言いました。そのままの流れで、彼はガラス細工について熱を込めて語り始めます。

旅人は興味深げにその話を聴きました。問うてみたいことがあつたりしましたが、言葉を発すると舌を噛み切り^{する}ようになるので口はつぐんでいました。ときおり言葉なく相づちを打つて、応じたりしました。

「仕上げた“作品／ガラス細工”を納品に行く場所が、旅さんの目的の場所の近くなんだよ」

「旅人の問いに、ガラス細工師の男性が答えました。
「そうだったんですね」

旅人は得心したふうに言いました。

ふたりの姿は、いまは転ヒテ、久の外はありません
は、エンジンを切つて停車しています。

砂塵から守るための背の高い塀に周りを囲まれた、レンガ造りの

「あとでその“作品／ガラス細工”を見せていただいても、いいですか。

「いいもなにも、はなつから見せる気満々だつたんだが

ガラス細工師の男性が、愉快そうな笑みを浮かべて応えました。

「おーかーえーり つ！」

家から飛び出てきた元気な声が、元気な勢いで、ガラス細工師の男性にぼすっと突撃しました。元気な声は、肩口までの黒髪をした女の子の姿をしていました。額の右の位置で、髪は輪ゴムで結ばれています。

「おおっ、元気なお姫様」

ガラス細工師の男性は幸せそうな顔をして、

「ただいま」

女の子の頭を優しく撫でました。

「むふー」

と嬉しそうに、女の子はガラス細工師の男性の腹部に頭をぐりぐりします。そして「はつー」と“そのこと”に気が付いて、「だあれ？ おとーさんのおともだち？」

好奇心が燐々と煌めく瞳を旅人に向けて、訊きました。ガラス細工師の男性が、「旅人さんだよ」と紹介します。旅人は地に片膝を着いて目線の高さを合わせてから、

「こんにちは」

と微笑みを浮かべて挨拶しました。

「こんにちはっ」

女の子は元気な声で元気よく挨拶して、

「たびびとしやんっ」

元気よく囁きました。

旅人とガラス細工師の男性は、和やかな気持ちになつて柔らかな表情を浮かべました。

そんな優しい雰囲気に、

「ううー」

女の子は顔を真っ赤にして、

「 つ

ついに耐え切れず、踵を反して家へ駆け戻つて行きました。

「元気で可愛い娘さんですね」

旅人が立ち上がりつつ言いました。

「どうう? 自慢の娘さ」

ガラス細工師の男性は誇らしげに胸を張り、そして、
「最近やつと“笑顔”を見せてくれるようになつたんだ」
どこか遠くを見やるように述べました。

「あら、お客さんかい?」

ガラス細工師の男性に招かれて玄関をくぐってきた旅人を見て、
老いた女性が訊きました。傷みある長い白髪を、後ろでひとつに束
ねています。

「旅人さんだよ、母さん」

ガラス細工師の男性が、旅人を諸々の事情も含めて紹介しました。
そして老いた女性のことを自分の母親であると、旅人に紹介します。
旅人は、“ガラス細工師の男性／息子さん”の“厚意／思いやり”
に対する感謝の意を述べつつ、

「突然お邪魔して、すみません」

いきなりやつてきたことを詫びました。

「あら、べつに詫びることなんてないのよ」

老いた女性は人好きのする笑みを浮かべて、

「 来るモノは拒まず。誰であれ客人を最高の“もてなし”で迎
えるのが、この国の誇るべき“伝統／風習／精神”なんだからね」
言つて、誇るように胸を張ります。そして、
「 そうとなれば、力を入れて夕食の準備しなくちゃ」
と腕まくりをして、台所のほうへ消えてゆきました。

「おお、お客さんかな?」

ガラス細工師の男性に案内されて入室してきた旅人を見て、老い

た男性が訊きました。頭に髪はなく、その代わりに立派な口髭をしていました。革製のひとり掛けソファーに腰を落ち着け、口には紙巻タバコをくわえています。

「旅人さんだよ、父さん」

ガラス細工師の男性が、旅人を諸々の事情も含めて紹介しました。そして老いた男性のことを自分の父親であると、旅人に紹介します。

「こんにちは、旅人さん」

老いた男性は、紙巻タバコをくわえたまま言いました。

「こんにちは」

旅人は挨拶をしてから、“ガラス細工師の男性／息子さん”的“厚意／思いやり”に対する感謝の意を述べました。

老いた男性は自分の子どもを誇るふつに笑みを浮かべてから、「吸うかい？」

と新たに取り出した紙巻タバコを、旅人に差し出します。

それに対して旅人は、

「ありがとうございます。ですが、普段吸わないでの、お気持ちだけいただきます」

きつぱり断りの意を述べました。国や地域によつては、旅人の祖国で禁止されている“麻薬／薬物”が規制なく扱われていたりするので、このような誘いを受けた場合はなるべく断るようにしているのです。場合によつては、例えば、ある山岳地帯では高山病の症状を和らげるための“薬／くすり”として、旅人の祖国で禁止されている“麻薬／薬物”が用いられたりします。もしこの山岳地域で高山病になつてしまつたら、それでもなるべく異なる解決方法を模索しますが、“それ”を用いる例外はあります。

「そうかい」

残念そうなふうも、気分を害したふうもなく、老いた男性は紙巻タバコを引っ込めました。そして、至つて自然な流れでありますとを裝つて、

「ところで旅人さん。火を持つていたりしないかな？」

存在を“主張／強調”するように、火の点いていない紙巻タバコを口先で上下に動かします。

「ありますよ」

旅人はジーンズのポケットから潰れて厚みがなくなつたマッチ箱を取り出して、言いました。

それを見て聞いた老いた男性は、

「おおっ、救世主が現れた」

と嬉々満面です。

旅人はマッチを擦つて火を点け、それを老いた男性の紙巻タバコに

「あーっ！ ダメだよおーっ！」

着火は、しかし元気な声に阻止されてしまいます。銀の円筒形のコップを載せた銀のトレイを持って現れた、女の子に。

「おじーちゃん、キンエンするつてやくそくしたでしょーーー！」

と女の子に責める口調で言われ、

「ん、うん……。そうだった……、そうだったね……」

しおれるように、老いた男性は紙巻タバコをしまいます。

「すまんね、旅人さん。一本、無駄にさせてしまって」

「いいえ」

ふたりのやりとりを柔らかな気持ちで見やつていた旅人は、

「この家の中の力関係という重要な事柄が知れたので、無駄になつていませんよ。むしろ、お得でした」

そう言って、そつとマッチの火を消しました。

「た・び・び・と・さ・んつ、お・ちゃ・・をつ、どーぞ」

噛まないよう慎重に言つて、女の子が旅人に銀の円筒形のコップを差し出しました。

「ありがとう」

そう言って旅人が受け取ると、

「どーいたしましてつ」

女の子は銀のトレイを抱きかかえて、「えへへ」とはにかみます。そして、その場にペタンとお尻を着けて座ります。

部屋には、老いた男性が座るソファーや椅子の類はなく。床には、極彩色の装飾の施された絨毯が敷かれてありました。この国や周辺諸国では、床に絨毯を敷いてその上で飲食をしたりするのが一般的な“習慣／風習”なのです。ですから、旅人も、ガラス細工師の男性も、女の子も、老いた男性以外の面々は絨毯の上に座っています。

「たびびとさんつ」

女の子がズイと身を乗り出し、

「たびびとさんのがんぐにのこととか、たびびとさんのたびのおはなしとか」

未知に対する好奇心で田を燐々と輝かせながら言いました。

「きかせてくださいやいつ」

「どうやら、女の子は気持ちが急ぐと嘘んでしまつみつです。

「……うう

またも嘘んでしまつたことに赤面していくつむく女の子に、和やかな気持ちをもらつて旅人は、

「じゃあ、まずは

と、話し始めました。

「さあ、遠慮なんてしないでガツツリ食べておくれよ」

食事前の祈りを終えてから、老いた女性が言いました。

絨毯の上には、それぞれ銀の器に盛り付けられた食べ物が置いてありました。この国や周辺諸国の中からしたら少し豪華な、旅人の祖国の基準からしたらやや質素な、品揃えです。

「……たびびとさんは“おいのり”しないの？」

女の子が、不思議そうな顔をして訊きました。この国や周辺諸国

では、宗教的な習慣から必ず食事前に祈りをするので、それをおこなわなかつた旅人の姿がその目には不思議に映つたのです。

しばしば同じふうに訊かれたり、あるいは無礼と受け取られて問い合わせられたりした経験のある旅人は、簡潔に自分の祖国での“祈り”について説明しました。“いただきます”という言葉が、この国や周辺諸国の“祈り”と似たようなモノである、と。

そして。

旅人は説明したことを実践して見せます。手を含わせて、皿をつむり、

「いただきます」

と言つてから、置いてある食べ物を手に取ります。口に運びます。味わいます。

「うん、とつても美味しい」

それを見た女の子は、面白いモノを見つけたふうな笑みを浮かべて、「いいー、たあー、だあー、きいー、まあー、すうー？」

旅人のマネをして言いました。

そして。

ガラス細工師の男性の“作品／ガラス細工”に対する熱い語りと共に、夜は過ぎ去り。

朝日が顔をのぞかせたばかりの、早朝。

玄関口まで出てくれた面々に、旅人はお礼の言葉と別れの言葉を告げました。

老いた女性に抱っこされている、まだ夢の中にいる女の子が、

「……たびびとさん、またねー」

ちょっとだけ夢から現実に意識を戻して、小さく手を振りまた夢の中へ。旅人もそれに応じて、微笑みを浮かべて手を振りました。

「よし、じゃあ行こうか」

改めてお礼の言葉を述べてから家から出てきた旅人に、玄関前で待っていたガラス細工師の男性が言いました。彼の側には、軽トラックがいつでも発進できようエンジンを噴かして停まっています。

「お世話になります」

と頭を下げる旅人に、

「いいつて」

ガラス細工師の男性は笑みを浮かべて応じ、軽トラックに乗り込みました。

「あら？ 見学のお客さんですか？」

ガラス細工の工房に到着し、旅人とガラス細工師の男性が軽トラックから降りると、そう声が掛けられました。

見やると、そこにはまだ若い女性の姿がありました。濃紺のジーンズ、白の長袖シャツを着て、布地の厚いエプロンをしています。肩口の辺りで切り揃えられた髪の、前髪は視界を確保するようにピンでしつかり留めてありました。

「旅人さんだよ」

ガラス細工師の男性が、旅人を諸々の事情も含めて紹介しました。そして若い女性のことをガラス細工師 の見習いであると、旅人に紹介します。

「よろしくっ！ 旅人さん！」

見習いガラス細工師の若い女性は、旅人の手を取つて元気すぎる握手と挨拶をしました。彼女はどうやら、悪くない厄介さを極々少々持ち合わせている快闊なヒトのようです。

「こちらこそ」

ブンブンと激しく上下に振るというダイナミックな握手を強制され、旅人は意図せずして身体をガクガク揺らしながら、

「よろしく」

目前にある元気さにやや気圧されつつ、応じました。

そんなふたりのやり取りを微笑みながら見ていたガラス細工師の男性は、「いっちの準備が終わるまで好きに見て回ってくれてかまわないから」と旅の方にポンと手を置いてに告げると、用事のあるほうへ足を向けてます。

旅人は手伝うと申し出ましたが、

「気持ちは嬉しいが、それならまず旅人さんにはここ見習いになつてもらわないとな」

受け入れてもらえたんでした。

「“家に帰るまでが遠足”ってやつですよっ！ 旅人さん！」
見習いガラス細工師の若い女性が、事情を説明するふうに言いました。それから間を置かずして「でっ！」と言葉を継ぎ、「旅人さん！ セつかくですから私が工房の案内を」
脅迫するがとき前のめりな勢いで、そう申し出ます。
「……是非、お願いします」
「はいっ！ お願いされましたっ！」

旅人は手にあるガラス細工のペンダントを見やりながら、「驚きました」

と、隣の座席、軽トラックのハンドルを握るガラス細工師の男性に言いました。

「ん？ 旅人は初めてだつたのかい？ ああいう工房を見るの？」

「いえ、初めてではありません。生まれ育った国にもありましたから。でも、だからこそ驚きました。火を扱うところに女性がいることに」

「ああ、旅人の国にもあるんだね。『それ』」

「……“にも”？」

「この国にあるんだ、そういう古くから続いているのが。だからあの娘を見習いとして工房に入れるときは、いろいろあつたよ」

ガラス細工師の男性は思い出を懐かしむ微苦笑を浮かべながら、言いました。

「そうするだけのモノを彼女は持っていた、と」

そんな旅人の言葉に、

「いま旅人さんが手に持つていてる“それ”、どう思つ?」

ガラス細工師の男性は問い合わせて応じます。

「……他に見たことのない独創的なモノだな、と」

「じゃあ、旅人さん。“それ”に値札が付いていたとしたら、旅人はお金を支払ってでも手に入れたいと思うかい?」

「…………思ひません。食料や消耗品、旅に必要なモノを優先します」

ガラス細工師の男性は、旅人の正直さに愉快そうな笑みを浮かべてから、

「あの娘に、あえて優遇するほど飛び抜けたところはないよ」

フロントガラスの向こう側に真摯な眼差しを向けて、述べます。
「でも、それは、あの娘のガラス細工をやりたいという意志を否定する理由にはならない。性別に関してもそうだ、本来は、ね。いままでは性別を理由に理不尽に意志を否定していたかもしれないけれど、いまは違う　というふうにしたいんだ。とても個人的な意向さ」

旅人は、工房を去るとき、見習いガラス細工師の若い女性がくれた彼女の作品を見やりながら、

「なるほど」と応じました。

人工物よりも乾いた土の色のほうが多くた窓の外の景色が、ガラリと一変しました。

レンガやコンクリートをもちいた建築物が等間隔に並んでおり、背の高い建築物も多々見られます。それらの建物の中へ電気を運ぶための電線が張られており、それを支える木製の電信柱が道なりに

等間隔で並んでありました。

道もしっかりと舗装されており、自転車やバイク、自動車が見られます。荷物や人物をのせたリアカーを引いている自転車やバイクもありました。交通量は自転車とバイクが多く、自動車はそれほど多くありません。とりあえず、渋滞につかまつてイライラしたり、車が揺れて舌を噛む心配はせずに済みそうです。

当然のように、建築物や舗装道路を利用するヒトたちの姿がありました。また、そんなヒトたちを相手に道端で商売をするヒトたちの姿もありました。野菜や果物、装飾品や腕時計、なにかの部品と思しきモノ、正規品である保証のない携帯電話やソフトウェアなどを売っています。高級そうな汚れた衣服を身につけたヒトや、質素な作りの清潔な衣服を身につけたヒトが、品物のよさをアピールしたり、品定めをしていたりします。

空が狭くなつたな、と旅人は懐きました。

旅人はここで見られるモノよりもはるかに背の高い建築物が密集して建ち並ぶ、いわゆる過密都市のこにより狭い空を知っていますが、“今まで”と“いま”との間に見える変化が極端だったのです、空が狭いことが当たり前のところのそれよりも強くそつかんぜたのです。

「ようこそ、我が祖国の首都へ」

ガラス細工師の男性が、誇らしげに言いました。

そして軽トラックはとくに問題もなく首都の中心部へと進み

「……ん？」

旅人は眉根を寄せました。

空が、とうとつに広くなつたのです。

大きな公園があるわけではありません。

道幅が広くなつたわけでもありません。

空が見たいと望んで整備された結果には到底、見えません。

倒壊寸前の建築物と破壊された建築物の瓦礫という光景が、軽トラックの窓の外にありました。

「ああ、これは」

旅人の様子に気がついたガラス細工師の男性が、努めて淡々と言います。

「“こちら側”と、“あちら側”的、現在に地続きの過去の一部だよ。互いに百数十発のロケット弾を撃ちあつたんだ」

「あちら側」に、こういう痕跡は見られませんでした

言つて、旅人は“あちら側”的光景を思い出し、「そうか……、だから」とひとつ得心しました。

「なにが、“そうか”で、“だから”なんだい？」

「一部の区画に集中して建築工事現場が多い印象を、“あちら側”で受けたので。てっきり区画整理や再開発をしているのものと考えていたのですが

「ああ、なるほど。ま、再開発であることには違いない。“あちら側”は超大国のひとつと仲がいいから、いろいろと早いようだ」

軽トラックが壊れそうな気配を漂わせながらも順調に道を進むと、またも窓の外の光景が一転しました。

空が狭くなり、人々の日常風景がそこに戻ります。

もしかしたら悪い白昼夢を見てしまったのかもしれない、と旅人は思つてみようとした。しかし意図せずして視界内に入つてきました軽トラックのサイドミラーには、妙なほど鮮明に広い空が映つてありました。

「着いたよ」

ガラス細工師の男性は軽トラックのある建築物の門の前で停め、「ところで」

門の向こう側にある頑強そうな建築物を見やりながら、

「旅人さんは、こんなところになんの用事があるんだい？」

疑問を口にしました。

旅人は、こちらの様子をうかがう門番らを見やりながら応じます。

「同郷のよしみでお話をつかがえるそつなので 」

旅人は持ち物など身なりをしつかりと確かめてから、ガラス細工師の男性にお礼を述べ、軽トラックから降りました。

「いって、こっちが好きでやつたことだから」

ガラス細工師の男性は照れたふうな微笑みを浮かべて言い、

「それじゃあ、旅人さん。またいつか機会があつたら

じやつ、と軽く片手を上げてから、軽トラックを発進させます。

旅人はその後姿を見送つてから、

「さて、と」

門番らのほうへ移動します。

門番らは皆、腰のベルトに拳銃の収まつたホルスターと警棒を留めていました。

「なにかお困りですか？」

門番のひとりが進み出てきて、旅人に気さくな口調で訊きました。さり気なく、警棒の柄の上に手をかけています。

他の門番も、じつにさり気なく、拳銃のグリップに手を置いています。

旅人は自らの両の手が相手からちゃんと見えるようにし、いらぬ誤解を与えぬよう身動きに配慮しつつ、訪れた理由を述べました。

身体検査を受けてやつと、旅人は建築物に入ることができました。荷物の一切は、例外なく預けることになりました。一時的に没収された、とも言えます。

旅人が通されたラウンジのソファーに腰を落ち着けると、その前に設置されてあるガラステーブルに湯気香るコーヒーが置かれました。

「ありがとうございます」

旅人はコーヒーを出してくれた案内人にお礼を言いつつ、それに口をつけます。

「こちらで少々お待ち下さい」

案内人は淡々とした口調でそう述べると一礼をし、足早に去つてしましました。

「いやー、お待たせして申し訳ない」

旅人が「コーヒーの八割ほどを胃に流し込んだあたりで、そう声がかかりました。

見やるとそこには、やや疲れた顔をしている痩身の男の姿がありました。派手さのない上質なスーツを着ています。

「いえ、こちらのほうこそ、お忙しいところ無理を聞いていただいて、ありがとうございます」

旅人は起立してから軽く頭を下げ、感謝の意を述べました。

いま旅人の前にいる痩身の男こそ、旅人が“こちら側”に入国する際に入国審査官の男が言っていた“この国の問題解決に尽力している個人”でした。“直接お会いして話を”という旅人の言葉を聞いた入国審査官の男が、個人的な内部の知り合いを通じて「実現できないものか」とかけ合つてくれたのです。ダメ元の試みでしたが、“同郷”ということがよいふうにきいたようです。

「いい気分転換になりますから」

痩身の男はそう言って、旅人の対面のソファーに腰を下ろしました。

旅人もそれにならいました。

それからふたりは故郷のことを懐かしむように語らい、旅人は自らの旅の話をしました。その流れから、ふたりの話はこの国のことになります。

旅人は、入国してから現在までの出来事を話しました。

痩身の男は、笑顔でそれに相づちを打つたりしました。

「忙しさを思い出させてしまうのですが」

旅人は、痩身の男がこの国のために尽力していることに関して訊きました。

痩身の男は、上機嫌に応じます。

いま“こちら側”と“あちら側”が“繊細な緊張関係／暫定的な平和状態”にあり、些細な刺激で再び戦争が始まってしまうのが現状である、と前置いてから、述べます。最近まで“こちら側”的国連に關わるヒトたちの中にも、やられるまえにやつてしまえといつ考えを持つていてるヒトが多くたこと。そんなヒトたちに、武力以外の方法で解決するべきだと説得して回ったこと。そして説得に成功して、いまは最後の調整をしていくこと。

“あちら側”は武力を含めた解決策を想定しているようでした。

「それもわかりやすいぐらいに」

旅人はそのまま見ただからこそ、率直に口にします。

「この国の運営に關わるヒトたちが、あなたの説得を受け入れるとは思えないのですが？」

「確かに、そうですね」

痩身の男はとくに反論することもなく相づちを打ち、「旅人さん、私は祖国を誇らしく思っています」と真摯な姿勢で述べました。

旅人はその意をどうにもくみ取り切れず、思考する間が生じます。「祖國に仲介役を務めてもらうのです」

痩身の男が、結果を確信しているような口調で述べました。

「それはもう決まっていることですか？」

「いえ、まだです。祖國の外交の運営に携わる信頼できる個人的な知り合いを通じて、政府に要請しているところです」

「……仲介役を断られたら、どうするんですか？」

という旅人の言葉に、痩身の男は愉快な冗談を聞いたヒトの微笑を浮かべて、

「それはありえない」とですよ、旅人さん」

そう断言します。

「まだ確約を得ていないのに、ですか？」

「ええ」

「なぜ？」

「それは私たちの祖国だからですよ、旅人さん」

痩身の男は前方だけを見ているヒトの共感を求める口調で、力強く述べます。

「戦争を“放棄／否定”し、平和に高い価値をおき、平和の継続と擁護に最大の努力を払う。私たちの祖国の最高法規である憲法は、そう定めている。そして“ここ”は、私たちの祖国の働きがあれば平和を築くことができる。高い確率で“改善できる／救える”状況がある。 政府が断るわけがない。断れるわけがない。そうでしょう、旅人さん」

「…………」

旅人は数拍の思考する間を置いてから、口を開きます。眼差しは、テーブルの上のすっかり冷めてしまった飲み残りのコーヒーにそそがれてあります。

「……確かに、そうですね。そうでした」

* * *

旅人が“こちら側”的國から出国して四ヶ月ほどが経過しました。出国してから山岳部の集落を訪ねたりし、現在は“こちら側”的國とは内海を隔てたところに位置する先進文明を持つ国に訪れていました。

この国は情報通信に関するインフラがしっかりと整備されてあるので、誰でも簡単に情報端末を通じて世界情勢を知ることが可能でした。

いま旅人は、旅のこれからに必要な情報を得るために、情報端末を使用することができる公共施設にいます。旅人の祖国もこの国と同等の先進文明を持っているので、なんら問題なく情報端末を操作し、情報を引き出します。

とりあえず旅人は、ここ四ヶ月以内の祖国に関するニュース記事

を読むことにしました。

やや流すように読んでいたら、ひとつのニュース記事に意識が留

まりました。

そこには、祖国の国の運営の最高責任者が、“あちら側”的の論づ
戦争を早期に終わらせるための“正義の戦い／戦争”に賛同を表明
したことが書かれてありました。正確には、祖国と同盟関係にある
超大国が“あちら側”を全面的に支持することを表明したので、そ
れに同調したことのようです。

関連記事には、祖国の政府の表明から数週間後に“正義の戦い／
戦争”が始まったことが記されていました。そして電撃作戦が成
功し、さしたる抵抗を受けることもなく、被害を最小限に七日ほど
で中央省庁や軍関連施設を制圧できました。“危険な思想と切り離
された政府”が誕生するまで、“あちら側”が“こちら側”を自ら
の一部として保護することなどが、すでに起つた事実として書か
れています。

記事には、よりわかりやすく伝えるための[写真]が添えられてあり
ました。

背景に見憶えのある、笑顔の子どもの写真が添えられてあります。

最新式の武装をした“あちら側”的の兵士にチヨコレートをもつて
笑顔を作る“こちら側”的の子どもの写真が、現場の事実であるか
のように添えられてありました。

小説・其の九拾『たいへつ（仮題）』（前書き）

【生きてこらぬのか、生かされていいるのか】

小話・其の九拾『たいへつ（仮題）』

『たいへつ（仮題）』

「…………はあ、…………退屈だ」

四畳半の部屋で大の字に寝そべり、“なにか”を幻視する天井の汚れを見やりながら、その男は“そう”を漏らしました。部屋の窓の脇の角にブラウン管の小型テレビ、その隣の壁際に電池式のラジカセ。最低限の情報受信媒体は存在してありましたが、どちらも黙しております。部屋は静かでした。しかし古くてボロい木造二階建てアパートの一階の真ん中の部屋なので、生活っぽさには事欠きません。テレビの音、異国っぽい音楽、ご機嫌な鼻歌、料理をする音、と、匂い。

そんな生活っぽさに包囲されてその男は、

「退屈だ……、はあ…………」

呼吸するように一定の間隔で、“そう”漏らします。しばらくしてから。

その男はのそりと身を起こし、

「…………弁当、買いに行くか」

手早く、外出の身支度を整えます。

退屈でも、食欲は損なわれないようです。

靴を履き、ドアを開けると、

「…………ん？」

外開きのドアは、しかしゴンツと“なにか”にぶつかってそれ以上、開きません。かろうじて頭部をのぞかせる程度は開いているので、そこから外廊下のほうを見やります。

ウサギの耳と尻尾の付いた薄桃色のカバーオールを着た小つさいおっさんが、体育座りしていました。

「…………なにを、しているんですか？」

その男は、じつに淡々と事実確認のために訊きました。

「キミが退屈だ退屈だとうるさいから、わたくしは不快の意を表明するために抗議の座り込みをしている」

ウサ耳の小っさいおつさんは、心地よい渋のある音声で応じました。揺るぎない意を宿す眼差しで、その男を睨み上ります。

退屈だ、と口にした憶えはあっても、抗議を受けるほどの大聲を出したつもりのないその男は、

「そうですか。それは、失礼しました」

じつに淡々と詫びました。

「うむ、許そう。素直に謝る者を責め続けるほど、わたくしも鬼ではない」

小っさいおつさんは、あっさりと詫びを受け入れました。「では、どこでもらいますか？ ドアが開けられないのです」

「うむ、わかった。どこか」

小っさいおつさんは大仰に背いてから、身を起こします。立ち上がりても、その男の腰ほどの身長ですが、ウサギの耳と尻尾の付いた薄桃色のカバーオールに包まれた身体は隠しきれないほどに筋骨隆々でした。

「ところでキミ、これからどう行く？」

小っさいおつさんは、ドアに鍵を掛けているその男の背中に問いかかけました。

「退屈でも腹は減るので、弁当を買いに」

「ほう、なるほど。そういえば、そういう頃合いか」

小っさいおつさんはひとり得心したふうに相づちを打つてから、「しばし待たれよ」

と言い残して、一部屋挟んだ先にある角部屋の中へ姿を消します。

小っさいおつさんは、その男と同じ階に住む「近所さんでした」。

位置関係的に、その男の漏らした言葉が、その耳に届くということはありません。しかし小っさいおつさんの「証言では、聞にえたことになっています。

なぜ？ という疑念を、その男は当然、懷きましたが、けれど深く考えようとはしませんでした。『近所付き合いに配慮して、といふわけではなく。ただ単に、関心が湧かないだけのようです。

「お待たせした。では、行こうか」

小つさこおつさんガ、財布を手に戻つて来ました。

その男はとくに意を述べることなく、近所のスーパーへ向けて一歩を踏み出します。

「わたくしは、『のり弁ちくわの天ぷら載せ』を食べようと思つ」道を歩きながら、小つさこおつさんが言つました。

「そうですか？」

その男は、進行方向に眼差しをやりながら応じました。

「キミは、なにを食す？」

「…………売つているモノの、どれかを」

「おい、キミ、あれが見えるか？ なんだあれは？」

近所のスーパーに到着して開口一番、小つさこおつさんが驚き興奮しているような音声で言つました。駐車場のほうを指差しています。

その男は示されたほうを見やり、

「…………とても大きなフリストビーのようなモノ、だと思います」と答えました。

駐車場には、大型トラック三台分ほどの大きさを持つた橢円形の“なにか”が、地面から少し浮いた位置で微動だせずに静止していました。

「うむ。そう言われると、確かにそのように見えるな あ、キミ、待たれよ」

いつの間にか入店してしたその男の背を追つて、小つさこおつさんも入店します。

「おい、キミ、あれが見えるか？ なんだあれは？」

小つさいおつさんが、またも驚き興奮しているよつた音声で言いました。弁当売場のほうを指差しています。

その男は示されたほうを見やり、

「…………“のり弁ちくわの天ぷら載せ”が残りひとつですよ」と、小つさいおつさんに知らせました。

「なにつ！ それはよろしくない。わたくしの“のり弁ちくわの天ぷら載せ”を、あのような珍妙奇妙な者たちに取られてなるものか

つ

息巻いて、小つさいおつさんは弁当売場に突貫します。

弁当売場には、弁当を物色している、形容し難い見てくれをしたからうじて知性あるだらつと推察できる生命体のよつた存在が複数ありました。

弁当を購入するのは困難そうだと判断したその男は、とくに執着する理由がないので、パン売り場へ向かうことにしました。そこでツナとタマゴのサンドイッチを手に取り、レジに向かう途中で飲料売り場に立ち寄つてお茶を追加し、会計を済ませます。

用事が済んだので、その男はスーパーから退店しました。

店を出た先にある駐車場に、先ほどまで弁当売場にあつた複数の形容し難い存在が見られました。その中に、まるで担がれるようにして、ウサギの耳と尻尾の付いた薄桃色のカバーオールを着たヒトの姿がありました。意識を失つているかのように脱力して、ピクリとも動きません。

複数の形容し難い存在は、駐車場に静止している“とても大きなフリスビーのようなモノ”のほうへ移動し 転瞬、“それ”に融けるように吸い込まれます。

そして“とても大きなフリスビーのようなモノ”は音もなく上昇し、またたく間に空の点となり、雲の向こう側へ消えてしましました。

その男は一部始終を目撃し、

「…………」

風船が空の向こう側へ消えたのを見たヒトのよつた無関心で、
帰路につきます。

塗装の剥げた錆だらけの外階段を上り、自室のドアの前へ。ポケットから鍵を取り出し、鍵穴に挿して回し、ノブに手をかけて回し、

「…………ん？」

その男は、ドアが開かないことを知りました。施錠を解いたつもりが、施錠してしまったようです。なので、改めて解きます。

ノブに手をかけ、回します。

今度は、ドアを開くことができました。

「…………ん？」

しかし、ドアを開いた向こう側に、いつもの四畳半を見るることはできませんでした。それどころか、部屋の存在そのものを確認することができません。

そこには、四畳半の部屋ではなく、ダンボールで作られたトンネルがありました。輸送などにもちいられる極普通のダンボール箱を展開したモノが無数に、ガムテープで貼りつなげられ、トンネルを形作っています。縦幅と横幅はドアのそれと同様で、奥行きはアパートの一室に作られたモノであるにも関わらず果てが視認できません。吸い込まれるような錯覚を覚える静かな暗闇が、じつとそこにあります。

その男は、いちおう部屋番号を見て、ここが自室か否かを確認しました。持っている鍵が使用できた時点で結果は出ていますが、その結果通り自室でした。

そこが自室である以上、いつまでも外廊下に立っている理由はないので、その男はなんの迷いもなく入室 トンネルに入りました。玄関から三歩、いつもなら四畳半の上の位置で、その男は立ち止まりました。トンネルの側面のほうを向き、ダンボールを貼りつな

いでいるガムテープの一部を剥がします。そうして露出した隙間に両の手を突っ込み、左右に引きちぎります。ダンボールがどんなに優れても所詮は紙ですから、難なくヒートが身を通せる大きさの穴があきました。

「…………ん？」

しかし、穴の向こう側に、いつもの四畳半を見ることができませんでした。それどころか、またも部屋の存在そのものを確認することができません。

そこには、まるでその男が“そこ”に穴を開けるのが前提であつたがごとく、静かな暗闇へと続くダンボールで作られたトンネルがありました。

その男はとりあえず新たなトンネルのほうに移り、先ほどと同じようにして側面に穴を開けてみました。結果も、先ほどと同じでした。

その男は、びっくりしたのかと思考を巡らせました。先にある静かな暗闇を眺めながら、思考を巡らせました。

「…………ん？」

静かな暗闇が迫つてくるような感覚に気がついたとき、その男は自身が歩を進めていたことを知りました。そして同時に、とても腹が減つていてることも認識しました。

その男はその場に腰を下ろして、持ち続けていたレジ袋からツナとタマゴのサンドイッチとお茶を取り出します。包みを剥がし、まずはツナサンドを食べ

「ほうほうほうほう、じつにじつに興味深い匂いがしたが、いつたいぜんたいどうこうわけだか、それはそれは、キミよ、生きるためかい？」

ようとしたところ、そんな音声が前方の静かな暗闇のほうからやつてきました。

それは、音声の発生源は、猫のような見てくれをしていました。身体の作りも大きさも一般的な成猫のそれと大差ありませんでした

が、体毛がサイケデリックな色をしてころねといわせ、じつに独特でした。

「……それ、とば、」のツナサンドを食べることですか？」

「つむつむつむつむ、こやこやこやいや、それはそれは、そういうと言語化することもできるし、そりでないとも言語化できる」

猫のような存在はけよこんと座り、その男のほうをじこと見やりながら述べました。よう正確には、その男の手にあるモノを注視しています。

「…………食べますか？　これ？」

「言つて、その男はツナサンドを差し出してみました。

「それはそれは、厚意か哀れみか施しか、いやいやいやいや、行動の理由がどうであれ、もらえるなひざ、遠慮なくもらうがね」

猫のような存在の背中がパッククリと縦に裂け、そこからドロドロとした形容し難いモノが質量云々を無視して伸びてきて、差し出されたツナサンドをのみ込みました。転瞬、掃除機の電源コードを本体に巻き戻すときのような素早い動作で、それは裂け目の中に消え、裂け目もふさがります。

「つむつむつむ、いやいやいやいや、これはこれは、じつにじつに、微妙だ」

「…………あの、」のは、こつたいたいどつこつといつなんでしうづか」

その男は、なにげなく訊いてみました。

「つむつむつむつむ、いやいやいやいや、キハト、『　』といは、といったいぜんたい、なんのことだい？」

「このダンボールで作られたトンネルのことです」

「ほつほつほつほつ、なるほどなるほど、キハトイヒテ、『　』せ、そうこうふうになつてゐるのかい」

猫のような存在は後ろ足で耳の後ろをかきながら、応じます。

「つむつむつむ、いやいやいや、それはそれは、つまりキミが、『そうである』ということだ」

言つて、猫のような存在は身を起こし、その男の脇を通つて行つ

てしまします。

その男は、猫のような存在の動きを田で追い、そしてその流れで背後を見やることになりました。

そこには、まるで最初からそうであつたかのよう、ダンボールで作られたトンネルがありませんでした。

頭上には青空が広がり、緑鮮やかな平原が地平の果てまで続いていました。

そして、その男の背後には、単線の錆びついたレールが地平の果てから続いていました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1986e/>

名も無き小話（掌編／短編集）

2011年11月23日13時50分発行